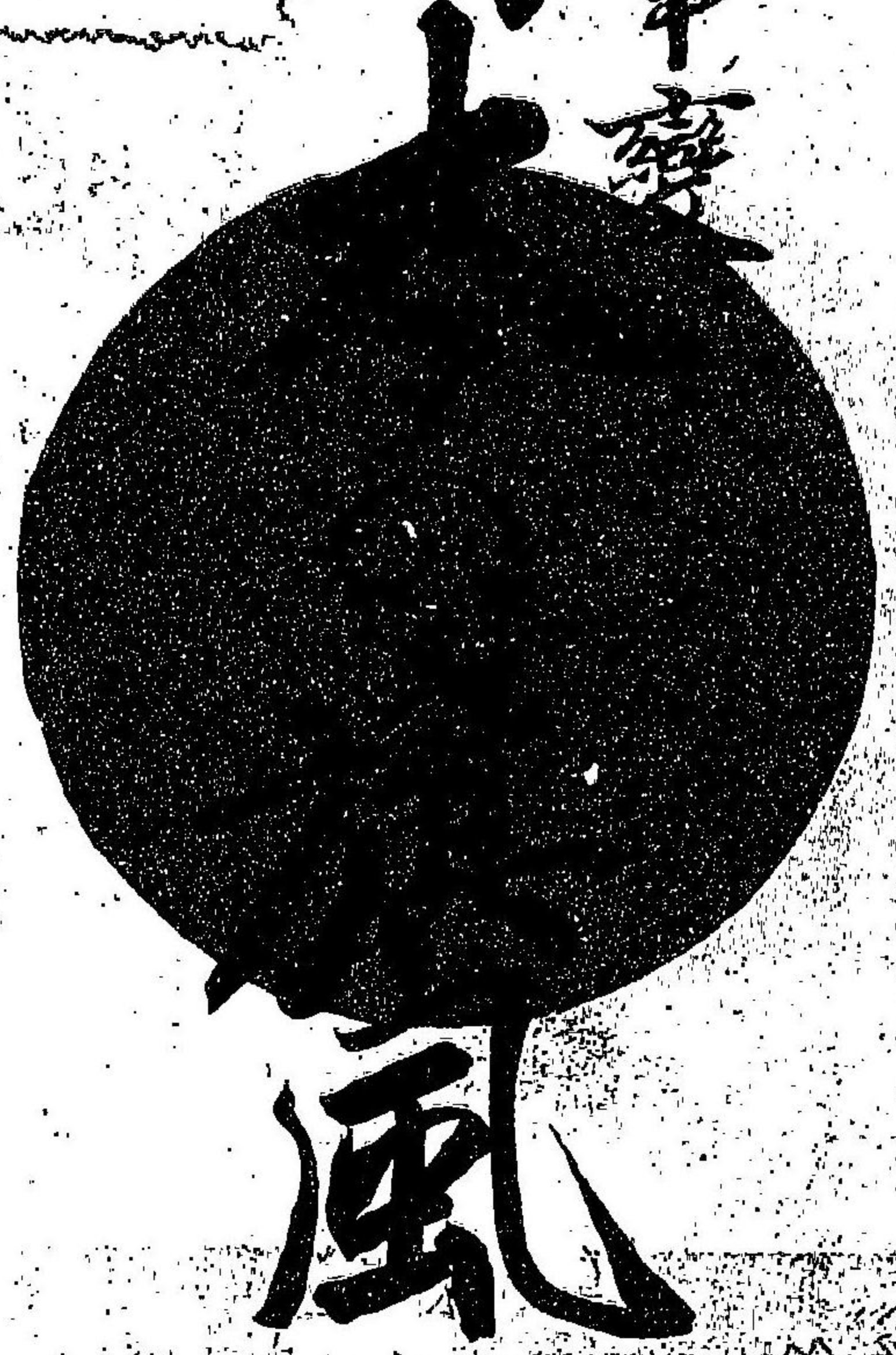


函	第 12 第
架	第 1 第
號	第 78 第

# 三

後軍講談師 森林 黒猿 講演



# 風

東京 田村書店發兌

巻の法去

002931-002-6

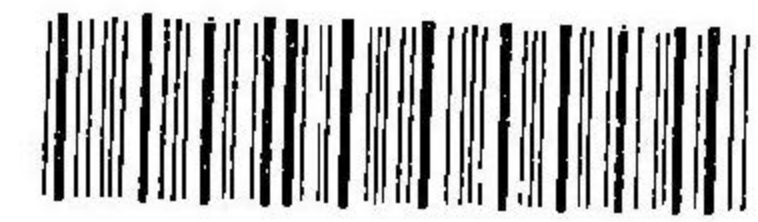
74-276

北清戦争日本の旗風

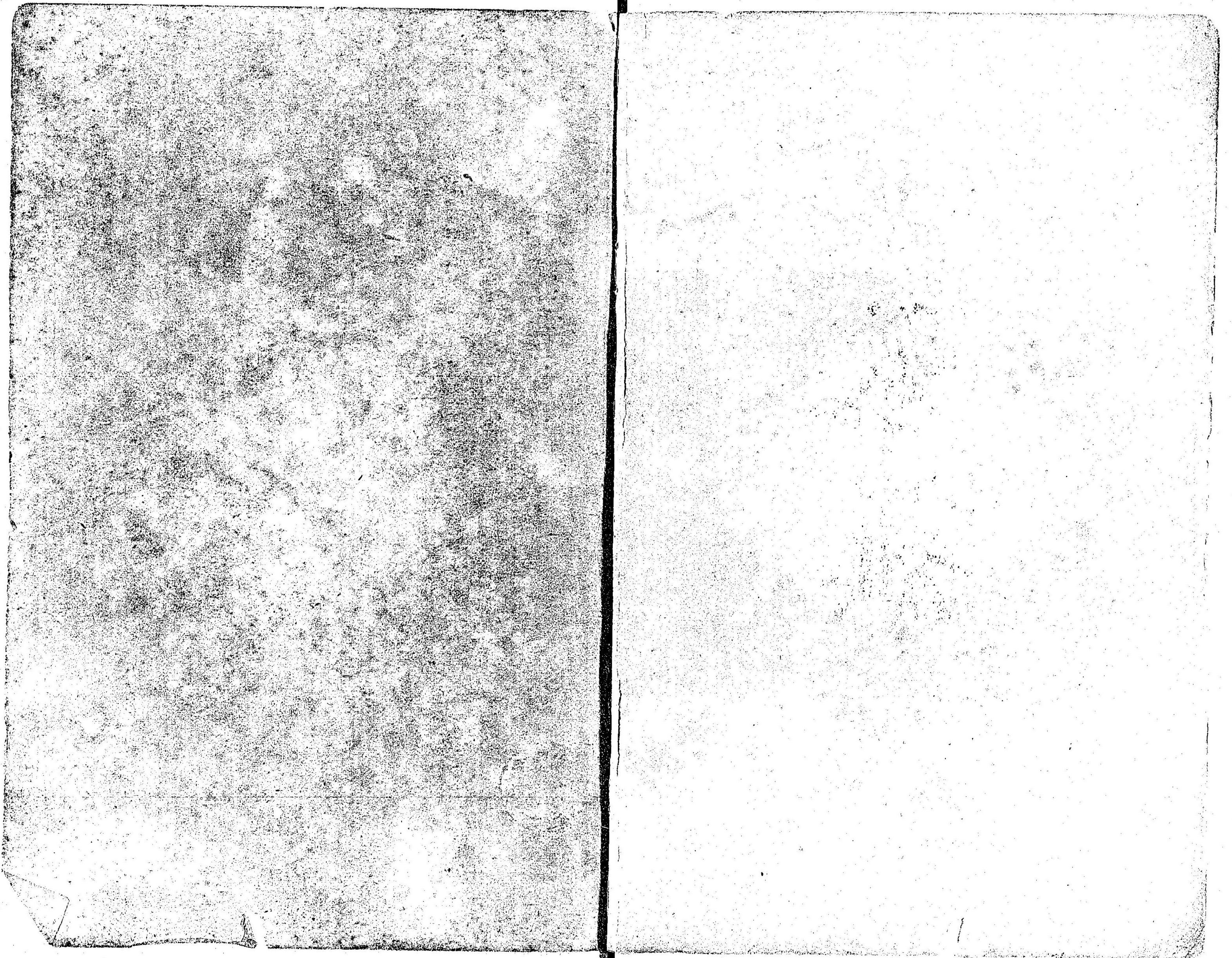
森林 黒猿 (天野節) / 著

M35-38

ACB-6506









城山富興  
紅兒慈





王猷海は日本旗風  
刊成を以て赤巻を  
況め石を直



日本之旗風に序す

庚子の夏、闇雲妖霧北清の天を蔽ひ、凄風慘雨燕京を覆がへし、白河の水爲めに赤く、直隸の野爲に青草無し。悲惨の光景、荒寥残破の跡、之を實際に睹、之を實地に踏んで、三寸の舌頭に寫し來りたるは森林黒猿なり。森林黒猿、本名は天野節、遠州森町の人、辨舌に長じ、兼て文筆あり。日夕稠人廣坐の前に講談する所のもの、更に之を筆に移して都新聞百萬の讀者に示す。其多能、其勤勉、蓋し尋常平凡の遊藝者流にあらざる也。其語る所は、皆自ら精査探討せる眞事實にして、浮華誇張の架空談にあらず。縱令一席の興談、一夕の逸話、消閑解頤の具に供せらるゝことありとするも、其實質は正に是れ正史の一資料、且つ國民の忠肝義膽を興奮せしむる良劑なり。試みに北清の野に於ける日本軍の成績を回想せよ。歐洲列強軍隊の間に立ちて、嶄然頭角を露はし、勇往無前、規律嚴正、眞に王者の師として、赫々たる光譽、世界を照したるは我日本軍にあらずや。曉に太沾の砲臺に先登し、澎湖灣頭の旭に映じたる日章旗は如何に鮮やか



なりしぞ。吁我れ城門と共に碎けんのみと、彈雨の下、泰然綿火薬に點火して、天津城の鐵扉を紛碎せる我工兵の決心は如何に壯烈なりしぞ。霹靂一聲、濛々たる爆烟の間より突貫して、北京の城門を踏越えたる我兵士の喊聲は如何に勇ましかりしぞ。寥寥數十の兵、僅々數千の彈丸、敢て危険なる王府の防備に當り、健闘力戰克く數月を支へたる我水兵及義勇兵の苦心は如何に悽慘なりしぞ。

此等日本軍の偉勳は、黑猿の口と筆とに依りて、一毫の遺憾無く、一縷の虚構無く、精確に記述せられたり。今ま之を冊子に編す。一度び此書を繙とくあらば、喊聲地に湧き、砲烟天に漲り、幾萬の軍隊、躍如として紙上に活動するの感あらん。講演者の刻苦茲に至りて驗ありと謂ふべし。

故に余は黑猿の其業に忠實なるを愛すると同時に、此書の世に益するの大なるを喜び、一言を記して序と爲す。

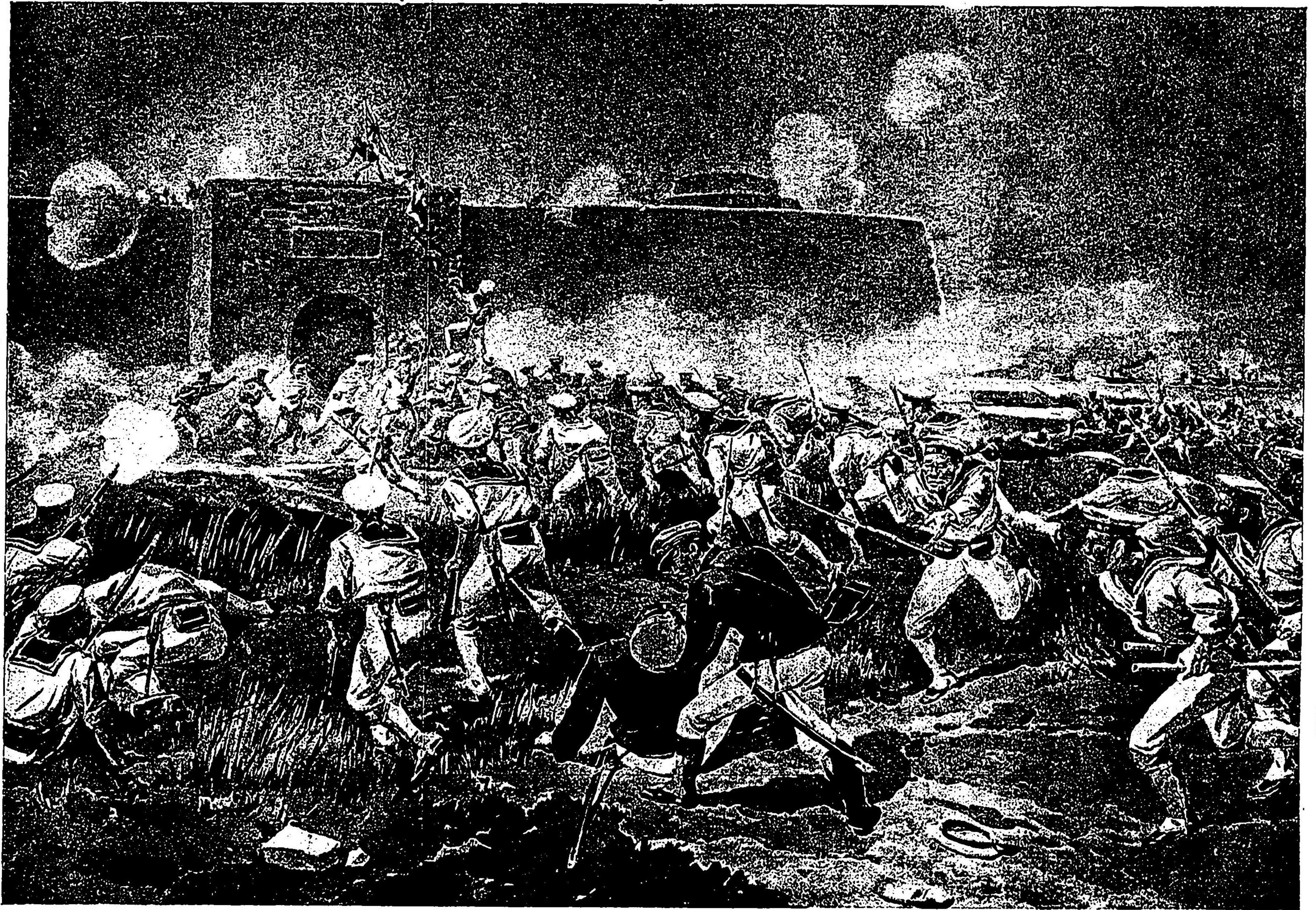
明治三十五年六月二十六日

於都新聞編輯局

宮・川 鐵次郎誌



(死戦の佐中部服) 圖るす領占撃突へ臺砲沽太隊戰陸本日 (登先の尉大石白)





# 目次

(一) 義和團清國に蜂起  
宣教師等専横の事……………一

(二) 林良茂支那婦人と結婚  
保定府停車場破壊の事……………六

(三) 各國公使會議  
我軍艦笠置太沽に向ふ事……………一〇

(四) 安藤大尉の北京到着  
日本義勇隊編成協議の事……………一五

(五) 依田伊三三支那人に姿を變じて  
團匪の中に入込む事……………二〇



杉山書記生殺害事

峯子夫人和歌を詠ずる事

(七)

聯合陸戦隊北京救援に赴く

露國水兵軍紀不正の事

(八)

團匪外兵に追撃されて難を柳樹に避く

聯合軍隊苦戦の事

(九)

救援軍鐵路を断たれて孤立となる

敵の馬隊始めて現るゝ事

(十)

西公使依田氏を天津に使ひせしむ

支那那宿屋の事

(十一)

石黒男爵の洒落

義和團匪美人を焼殺す事

(十二)

依田伊三三君

危難の事

(十三)

林良茂單身北京に還る

義和團良茂を疑ぐる事

(十四)

砲彈柳樹を折て決死の人を救ひ

團匪其名稱を説明する事

(十五)

馬子を欺いて馬乗北京に入る

崇文門外喧嘩の事

(十六)

支那教育の悪弊

公使夫人林夫妻を憐む事

(六)

杉山書記生殺害事

峯子夫人和歌を詠ずる事

(七)

聯合陸戦隊北京救援に赴く

露國水兵軍紀不正の事

(八)

團匪外兵に追撃されて難を柳樹に避く

聯合軍隊苦戦の事

(九)

救援軍鐵路を断たれて孤立となる

敵の馬隊始めて現るゝ事

(十)

西公使依田氏を天津に使ひせしむ

支那那宿屋の事

(十一)

石黒男爵の洒落

義和團匪美人を焼殺す事

(十二)

依田伊三三君

危難の事

(十三)

林良茂單身北京に還る

義和團良茂を疑ぐる事

(十四)

砲彈柳樹を折て決死の人を救ひ

團匪其名稱を説明する事

(十五)

馬子を欺いて馬乗北京に入る

崇文門外喧嘩の事

(十六)

支那教育の悪弊

公使夫人林夫妻を憐む事



(十七) 柴中佐の作戦計畫 八九

(十八) 親王府占領の事 八九

清國朝廷大會議 八九

(十九) 外國人排斥の勅命下る事 九九

天津國報館の起原 一〇四

(二十) 西村博氏と支那藝妓の事 一〇四

西村博氏義和團を説諭する事 一一二

(二十一) 島村大佐天津に到着す 一二七

領事夫人濱子の事 一二七

(二十二) 太沽沖列國艦長の大會議 一二七

(二十三) 露國大尉支那司令官と問答の事 一二三

各國陸戰隊太沽砲臺の攻撃 一二七

(二十四) 白石大尉其部下を勵ます事 一二七

服部中佐勇奮して名譽の戦死を遂げ 一二三

(二十五) 白石大尉先登の事 一二三

露人日英將校を欺いて停車場を專領す 一三八

(二十六) 服部中佐夫人の事 一三八

救援隊苦戦しつゝ、天津へ退く事 一四七

(二十七) 救援隊突貫して武庫を奪ふ 一四七

(二十八) スターイン大尉重傷を負ふ事 一五三



天津の籠城談……………一五八

(二十九)

清兵團匪に應援して砲撃を始め  
籠城者死を決する事……………一六三

(三十)

濱子夫人の決意  
青木中佐の強膽の事……………一六七

(三十一)

昔海軍大尉死に瀕して尙ほ號令す  
島村大佐海事思想の養成を説く事……………一七四

(三十二)

支那人延丁  
太沽へ使ひする事……………一八〇

(三十三)

獨逸婦人難を日本館に避けんとす  
小栗代議士死を決して辭世の事……………一八六

(三十四)

支那少女日本領事へ書を送る  
義俠理髮師の事……………一九三

(三十五)

牧野庫一郎氏の戦死  
籠城者糧食困難の事……………二〇〇

(三十六)

日本陸戦隊の勇戦奮闘  
武光少尉負傷の事……………二〇六

(三十七)

英國の少女少年  
親孝心の事……………二一四

(三十八)

シイモリア中將の隊  
聯合軍に救はれる事……………二二三

(三十九)

白石大尉天津へ聯絡を取る



義和團を生捕る事……………二二六

(四十) 總理衙門より引揚を請求す

獨逸公使殺害に遭ふ事……………二二三

(四十一)

日本政府の方針

外務大臣英公使に交渉の事……………二四三

(四十二)

石黒男爵 福島少將を評す

福島少將夫人貞操の事……………二四七

(四十三)

福島少將東京を出發す

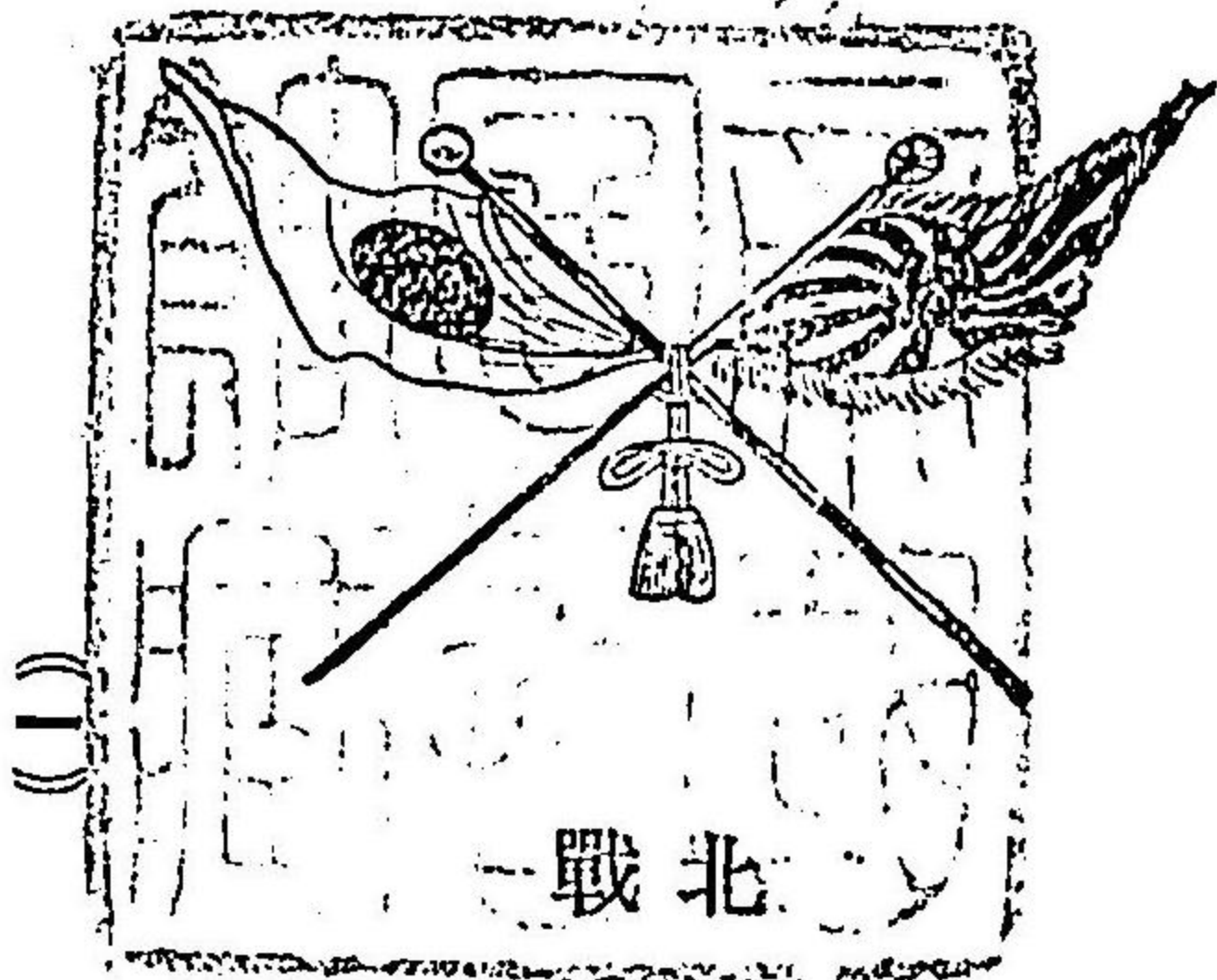
眞鍋將軍狂歌の事……………二五五

(四十四)

臨時派遣隊の乗出し

丁汝昌の愛妾大月仙の事……………二六〇

74 276 101



北清 戦 日 本 の 旗 風

從軍講談師 森 林 黒 猿

明治三十三年の夏、清國に義和團の事變が起りまして、各國は競ふて兵を出し、先づ太沽砲臺の占領となり、天津城下の激戦となり、遂には彼の老大帝國の都府たる北京城の陥落とまでなりましたが、其の出來事の狀況が奇なりしと、其の戦鬪の激烈なりし光景とは、共に古來多く其例を聞かざる所であり、故に黒猿は此の事變の始めより其の實狀を見聞して來て、成るべく實際を講演したいと思ひ立ちましたから、其筋に出願致しましたが、當時種々なる事情があつて、容易に許可になりません、そこで尙熱心に奔走いたしました幸ひにも陸軍少將佐藤正君と、石黒男爵との御盡力とに依つて、漸く赤十字社の弘濟丸に便乗の特許を得まして、是は寔に有難い事でありましたが、茲に私しの心配なのは、五人の家族を殘して往かなくてはなりません、私は一度渡清した以上は、何時歸りまするやら確とは分りませんし、後に殘す家族們的糊口は如何



にせんかど、それに甚だ憂慮しました、すると有難い事には日頃御愛顧を蒙りまする深川小名木川通の、大日本精製糖會社の取締役、鈴木藤三郎君を始め、幹事吉川長三郎君、小野徳太郎君、安間熊重君等以下、同會社の重立ちたるお人々より、一百圓の金を惠賜して下さりましたから、是を家族們的留守費用に充て、私しは安心して出發致しましたが、先づ宇品から大沽に航して、それより天津、北倉、揚村、通洲、北京と順次戦地を踏んで、親しく其の地理及び、人情風俗等に至るまで見聞し、且つ出征の將校兵士に就ては、戦況を詳細に聞質し、意外の好材料を得て歸國致しました、然るに都新聞の主筆、雲外先生宮川鐵次郎君が、是非其の講演を都新聞紙上に連載せよと、御懇望でありますから、拙書を顧みず、其命に従ふ事と致しました、が、表題を選びに當つて、宮川先生が日本の旗風を題して呉れたのです、此の題號の如何にも優美にして勇まじき爲に、私しの拙き講談が、十層倍も引立つて参りますし、今一つは、實の所此の講演七八回までは速記者に速記さして見たですが、甚だも私しの思ふ様に参りませんし、又た宮川先生も君は書ける様だから、書いて見ても如何だと云はれるので、私しも其氣になりましたが、扱筆を取つて見ると、慣れない事は仕方のないもので、私しも以前は静岡の漢學者、芹澤先生の塾に居て、些しは漢籍も教へて戴きましたが、今は耕舌を以て、營業とする事になりましたので、久しく茲に筆を執つた事がないから、文字を忘れて居る、假名が違ふ、假名が落ちる、イヤハヤ却々骨が折れる、それを助けて下さつたのは、都新聞社の麒麟先生渡邊七郎君であります、故に同君の御盡力も、十分に謝して置かなくてはなりません、それですから本稿二百回位より後は、私しも大いに慣れて樂になり、渡邊君の御厄介も些くなりしましたが、始めは随分迷惑を掛けました、故に此の日本の旗風は、中々黒猿如き者一人の力にて出来上つたものでなく、佐藤少將、石黒男爵、赤十字社、大日本精製糖會社のお人々、都新聞社、及び同社の宮川、渡邊二先生、以上のお人々の御盡力に

依つて、編成が出来たので、今一つは田村書房の主人が義侠心、大いに與かつて力あるです、奈何となるに、全體本編は日本橋の書肆から、出版する事に一度契約が成立つたのを、其の主人が本編の豫想外に長くなるに恐れ、遂に破談を申込み來つたので、宮川渡邊兩君も種々心配して呉れましたが、何れの書店も餘りの大部に困つて、出版仕様と云ふ店がなかつたので、それを田村書房の主人が、天性の義侠心より、折角人々が苦心の結果編成したものを、此儘にして、後世へ殘さないの、如何にも遺憾の至りだと云ふ所から、損をしても是を出版して、全國十二師團地に配布し、將校兵士の忠勇心を鼓舞したいと云つて、遂に今回出版する事になりましたので、切望、讀者諸賢は、以上盡力して下されたる諸君に免じて、私しの講演の拙きは御宥恕を賜ひ、御愛讀の程を願ひ申し上げます、今一つ願つて置くのは、此の講演極めて拙くは、世人の所謂見て來た様な嘘でなく、眞正の事實談にて、後世史を編む人の材料にも十分なるものと信じますから、それだけは御認めの上、御讀み願ひします、餘事が些と長くなりましたから、措いていよいよ本文にかゝりませうが、此の事變は今更言ふまでもなく義和團から起りました事ゆゑ先づ義和團といふ事を初めに一寸述べて置きますが、清國には古來種々の秘密結社があつて、哥老會、白蓮會、天地會、中友、英雄、義和團などと云ふ、是等が全國に蔓こつて居りまして、時機を見て皆事を起さうとする、其の中には滿州政府を覆へさんとする者もあるし、白蓮會の如きは外國人を殺し、耶蘇教を排斥せんとする頭迷者の寄宿であります、此の義和團は元白蓮教會の中に義和團教といふ一派があつて、是に大刀會、小刀會などの合した者で、即ち一の邪宗であります、彼等は固より頑固の奴が多いから口にも呪文を唱ふれば彈丸を身に受てもはじき返すとか、劍を受けても傷がつかないとかいふ様な事を云つて居る、又た拳棒といふのを練る者がある、是等のことは單略に申述べて置きました、早く面白い所へ移る事に致しませう、



斯の如く彼等が外國人を殺すとか、耶蘇教を排斥するとかいつて、亂暴を爲すのは、固より頑固愚昧にして世界の大勢を知らないものでありますけれども、又一ツは外國人が餘り専横にして支那人を恰て人間以外の取扱ひをするから夫を憤恨したので、現に膠州灣附近に居る耶蘇宣教師などは随分酷い事をして居ります、支那人と支那人との間に金銀の争ひとか、地面の争ひとか、起つて之を政府に訴へると、其の一方が若し耶蘇教の信徒であれば、宣教師は其方を庇つて、役所へ出掛けて行き、役人を嚇し附て、理が非ても其耶蘇信徒の方を勝たせ、信徒でない方を罪に陥すやうな事をする、又歐羅巴人と支那人と何か争ひが起ると、矢張り官に出て、「アノ支那人は誠に悪い奴だ、彼を貴官方は嚴刑に處して呉なければ困る」と云ひ、己れ等に逆らう者は役人に追つて嚴刑に行なはせる、役人も亦洋人に媚諂つて彼等が言ふが儘に其支那人を拷問し、甚はだしきは死に至らしめるといふ様な事があります、膠州灣附近に住んで居る宣教師の處へ或夜五六人の強盜が這入つて抜刀を突付け、サア金を出せと迫られて宣教師も大いに驚き「上ます〜」といつて、百弗許出してやり、強盜が去ると直に其地方の役所へ駈附けて「今私の所へ強盜が七名這入つて五百弗の金を取られた、全體も前方の不取締であるから、強盜などが横行するのだ、三日を期して彼の賊を捕へて私の取られた金の戻るやうにして呉れ、若し三日間に捕へる事が出来なければ、君方が其職務を怠つたのであるから、之を北京政府へ訴へて、君等が職務に勉勵しないことを公けにする」と云つて強迫したので、支那役人も驚いて「是は甚だ困つた事だ、三日間に賊を捕へるといつても、中々然う行く者ではない、宣教師も驚いて「是は甚だ困つた事だ、三日間に如何しても捕へて呉れ、夫では十日間……」「イヤ往かない、如何しても三日の間に捕縛して我輩の奪はれた金を取戻すやうにして貰ひたい、夫が出来なければ貴官方の落度を北京政府へ訴へる」役人等も職務を怠つた事を訴へられては大變だから濫々承知をしたが、併し警察制度が日本の如

く整備して居ないから、三日の間に此の強盜を捕へるといふ事は逆も出来ないものであります、茲で一吋支那警察のことを演べておきますが……總て支那の政事の腐敗して居ることは分つて居る、就中此の警察制度などの不整頓といふものは驚くべきで、天津のやうな大都會でも、巡查が賄賂を取ることなどは何とも思はん、現に私しの驚ろいたのは三四日天津に滞在をして彼方此方見物し、歸りに土産の筆を買はうと北門外に行くと、アノ邊は中々賑やかでありませう、そこで私が巡查に向つて筆墨を賣る家は何れにあるやと問ふて見ると北門外に在りと答へた、其處へ行つて筆一本若干だといふと、一個十錢と書いてある、四十本勘定をして是で二圓にまけるといつて、一圓の銀貨を二ツ出した處が、不可々々といつて如何してもまけない、是は一吋と見た處が十本一圓の價值が無い筆で、豫て私しが或る人に聞くに、買物に行つた時に、外國人と見て馬鹿に高いことを言つたら、巡查を呼んで十錢でも二十錢でも賄賂をやれ、ヌルと巡查が叱り付けてまけさせると云はれて居りましたから、巡查は居ないかと思つて表を見ると、幸ひ二三圓先に立つて居た、支那の巡查は全然が人足見たやうで、妙な笠を冠つて淺黄の服を着て胸の處に巡捕と染抜いてある、竹の先に總を附た物を持つて立つて居るのだが、羽振の好い日本人が通るとヒヨイとお辭儀をする、そこで私が手招きをするつて来てから、十錢の錢を出したら流石に直には取らんで、四邊をキヨロ〜見廻して、周章しく引奪つて口の中へ入れて了つた、それから筆屋へ連れて手真似をして二圓出して四十本筆を取らうとすると、不可々々といつてまけないのを、巡查が何か分らん事をいつて、引奪つて筆を私しに渡し、早く行け〜といふからドン〜還つて了つた、そんな有様であるから、況して膠州灣りては警察などは有るのか無いのか分らんやうなもので、却々三日の間に賊を捕へるなどいふ事が出来るものでない、そこで罪人か何だか分らん者を七人捕まへてそれへ死刑の宣告をいたして街へ引出し、諸人の見物して居る前て慘酷なる死罪に行



つた、夫を宣教師等が笑ひながら、寫眞に撮取つて其の寫眞を本國に送り、支那の野蠻は斯の如くである  
 新聞へ出した、己れ等が無理無體に迫つて爾ういふ慘酷の事をなさしめて置いて、それを歐羅巴の新聞に出  
 して支那の野蠻を笑ふといふは實に甚だしい譯で、少しく氣概のある支那人が憤激して居るのも無理はない、  
 故に一口に義和團匪といふと如何にも亂暴の黨のやうであります、中には財産家もあるし、學者もあるし、  
 其の多數は頑固愚昧の徒だが、重立つた者の中には中々思慮ある者もあるやうであります、されば先づ日本  
 でいふと、維新前の攘夷黨が外國人を斬つたり、家を焼いたりしたやうなもので、それが段々に蔓つて來て  
 外國人を殺し、鐵道を破壊し、甚だしき亂暴をいたすので、心ある者は早く是を撲滅して了はなければなら  
 んといふ事を書を上つりなどしたけれども、政府は其儘に拾置中、遑々北京近くへ義和團が這入つて來る、  
 外國人等は大いに心配をしたが、我が日本の西公使も痛く氣遣はれまして、公使館附の武官柴中佐と御相談  
 の上、一つ義和團の様子を探らして見やうといふので、豫て公使館で使つて居ります清國人取締をして居  
 る林良茂氏を呼ばれました、

(二)

林氏は當年四十二才にいたして富山縣の人、如何しても一見支那人としか見えな、支那言葉を目く使ひま  
 して、天窓でも衣類でも靴でも支那人の通り、而已ならず妻君は支那人でありまして、彩雲といつて當年三  
 十四に相成ります、一寸妻君にも會ひましたが、可成りの美人で、愛嬌のある婦人、二人の中に十才になる  
 小供衆があります、貴所方は何日御夫婦になりましたと聞くと、『今を距る事十三年前、私しが丁度二十二  
 の時、林さんが三十で、縁あつて夫婦になりました』と妻君がいふ位でございますから、如何しても彼の

土地の風に化して、全然て支那人のやうでございます、公使は之を呼びましたので、『エー御用でございます  
 すか』西『モツと此方へ進め、少し秘密の用であるから』林『へエ』西『お前は丁年未満から此の支那へ來て居つ  
 て、いふまでもなく能く支那の事情に通じ、殊に此の國の婦人を妻女として居て、髪から委まで支那風にな  
 つて居る故、誰も日本人と思ふ者はないから、そこでお前を見込んで此大任を授けるのぢや、此頃お前も聞  
 知つて居るであらうが、義和團の徒が頻りに亂暴をして、外國人を殺したり、鐵道を破壊したりして、退々  
 此の北京へも這入つて來る様子であるが、如何も未だ確かの事が分らないゆえ、是から保定近所へ行つて能  
 く様子を探つて來て貰ひたい、是は將來の事を考へると中々容易ならん事だから、其の心算で確乎やつて呉  
 れ、お前より外に此の事を吩咐ける人がないから見込んで頼むのだ』林『ハイ、不肖の私に斯る大任をお授  
 け下さつたのは、林良茂に取つて此上もない名譽でございます、私力の及ぶ限りは行つて見まする心得  
 でございます』柴中佐も傍から、『今公使の言れる通り、是は中々輕からん任務で、慙ういふ大任を公使か  
 ら直接に授かつたのは實に君の名譽で、此事たる國家の爲であるから充分に盡すが可い』林『有難う存じます  
 では是から直に出掛ることいたします、保定までは汽車で參れば數時間で往かれます、家へ還らずに是か  
 ら直に出掛ませう』西『ウム直に出掛る、夫は結構だが家へ歸つて支度位して行つても遅くはない、種々用も  
 あるだらうから』林『イエ、一刻も早く致すが宜しうございます、ナニ此儘で、ハイ宜しう申します』と甲斐  
 なくしき言葉に西公使も柴中佐も誠に感心いたされました、それから公使館の裏手へ參りまして護身の短銃  
 を構へ、爾して汽車に乗りましたが、此處から保定までは日本の里程三十餘里ばかりの處、此の林氏の乗つ  
 た汽車が保定停車場に着いたしたのは、五月二十日の午前十一時頃でありました、然るに此の汽車が着く途  
 端にピーツといふ一聲の汽笛と共にドン／＼／＼出て行つた汽車がある、是は北京の方へ行つたんであ



りせず、すると停車場がガヤ／＼ガヤ／＼騒がしいので、林氏は不審に思ひ、ハテ何だらうと汽車から降りて見ると、近在の百姓らしき者が数十名何かガヤ／＼騒いで居る、何を言つて居るのかと近寄つて見ると「全體汽車などは西洋から来たものだ、人民の爲にはならぬで、政府の奴等の爲にはかりなつて、下々の者に害を興へる、こんな物は無へが可い」と慥う言つて騒いで居る。林氏「オイ／＼」○「ハイ」○「前方は何か此近在の百姓か」○「ハア、私等は此の近在の百姓でござえます。何を騒ぐ。何を騒ぐたつて旦那聞いてくれさつせへ、どうも残念で堪らぬへ、私等が三十五人連で北京へ行く汽車が十一時に出るといふから、切符を買つて、それから汽車に乗らうとする、チウ間に合ねへといつて汽車が出て了つた、間に合ねへ位なら切符を賣られへが宜い、仕方がねへから此の次の汽車へ乗らうと言つたら、此の切符は次の汽車には用ひられぬい、此の汽車に限るのだと慥ういふで、そんなら錢を返して呉れといふとそれも不可ねへ、貴様達が愚圖／＼して居るから間に合ねへのだとサ、百姓だと思つて馬鹿にされたのが残念で堪らぬへ」○「ウム、それはどうも氣の毒だ、併しそんな法はない譯だ。情願旦那掛合つて錢を取つてお呉んなせへ」と云ふから林氏も氣の毒に思ひ、林氏「それでは私が掛合つてやらう」と夫から停車場の役人に掛合ふと、「彼奴等が愚圖愚圖して居るから往けな、お前さんが餘計な事をいふには及ばん」と列ね附けつちまつた、さア、百姓は益々ツイ／＼言つて騒いで居る處へ、向ふより朝子に赤い布片を付けて赤い帶を締め、腰へもチヨツとした布片を付けて手に何か棒片の様な物を持つて、それへやつて来ましたから、ア、是は義和團だと思ひ、隅の方へ寄つて様子を見て居ると、百姓等は是に氣が付き「ヤア義和團が来た／＼、彼箇は頭分だ」と言つて居る中に其處へ這入つて參つた義和團は百姓們に向ひ「コレ／＼貴様達は何を騒ぐ、何か又停車場の役人が悪い事でもしたか、無理の事でも言つたか」○「お前さん方は義和團様でございませうが、まア聞いて呉れさつ

せへ、是々斯々でムいませう」○「ウムそれは甚だ宜しくない、全體鐵道といふものは何の爲めに設けたものであつて、交通運搬の便利を宜くして國民に利益を興へる爲に設けたのだ、此の鐵道を設けるが爲には莫大の費用が掛る、抑々此の費用は何處から出たかといふと皆な汝等國民の頭から出て居る、然るに役人等は只々己等の利益のみを計つて人民の利益は少しも顧みない、實に憎むべき至である、就中今日の如きは汝等が發車時刻に間に合はんと知りつゝ切符を賣つて置いて、爾して夫へ乗せないで代價を返せといへば返さん、是は實に何とも言ひやうのない、不埒と言うか、不都合と言うか、言語同斷、依つて我等は汝等に一の策を教へるから此方へ來い、一ツの計畧を教へてやる。○それは有難う存じます、義和團様が何か計畧を教へて下さるといふから行つて見やう」とツイ／＼付いて来る、是全く林君が目撃された通りを私に向つて語られたのでございませうから事實談に相違ございませぬ、爾ての事に義和團は停車場から三四丁先の畑中へ連れて来て三十何名の百姓をズツと夫へ列べて置いて「汝等に一ツの名策を教へる、其名策たるや、切符代を返せといつて今一度請求をして見る、それで返さん時は停車場にある處の物品を何なりとも手當り次第に取つて、爾してそれを切符の代にするのだ、全體汝等が餘り弱いに依つて役人共の侮りを受る、勇を奮つて行れ、手當り次第に物品を奪ひ取れ、それが一番の名策だ。○成程義和團様が名策を教へて下さつた、併し御道理の仰せてございませうが、如何も私等三十人ばかりでは人數が足りませぬから、逆も思ひ切つた事は出来ませぬ」○「それなれば我々が義和團の人數を以て加勢してやる、當保定府に數百人我が團徒がある、其の中に我輩の指揮する者が數十人あるから、我輩の號令次第如何様事でも勵らくのだ、さア汝等勇を奮つてやれ義和團の人數が加勢をしてやるぞ」と言ふ其の中に、ツイ／＼いつて義和團徒が數十名やつて參りました、此の義和團と百姓と合同をしたから堪らない、其の中に他の義和團の兵も來り、大凡二百名内外の人數で暴



れ出したから、物品を奪ひ取る處が、始めから叩き毀しになつて忽ちの間に此の停車場を打ち毀して了つた、林良茂氏は此有様を見て、モウ亂暴を始めたなと思ひましたから、取つて返して此の事を公使に告げました、公使も爾てあらうと點頭されましたが、モウ捨て置れませんか、直ぐに英吉利の公使館へ行つて英吉利公使に此の有様を告げて『倘し此の儘にして置いたならば、如何様な事に立至るやも知れん、是は至急に總理衙門に交渉をして各國の公使館を保護させると同時に太沽沖に碇泊する軍艦へも是を急報して、北京に水兵を入れさせるがよからうと、本職は思ふです』英公使是を聞いて『西さんの言ふ處御道理であります、私も此の頃市内に出て小兒の戯むれなどを見ると七八歳から十二三歳の小兒が義和團の眞似をして居る、朝や腰に赤い布片を附けて、外國人を殺害するとか耶蘇信徒を殺すといふやうな事を言つて居る、小兒といふものは至つて無邪氣の者で彼等は必らず世間に評判の高い事や、或は人望のある英雄、都て名高い人の眞似をするものであるが、小兒が義和團の耶蘇教徒を害するといふやうな眞似をするは、甚はだ油斷がならんと思つて居りました處、果して其の通り、早速に是は各國公使に協議して其の準備をしませう』とそれから忽ち各國公使館へ通じ、英公使館へ各國の公使を集めて協議をいたしました、其の協議で決しましたから總理衙門に向ひ、書面を以て其の事を交渉すると衙門の返事に『成程一應は御尤もであるが、我清國の事は清國自ら處分して外國人をも充分に保護いたしますから、各國兵の上陸をする事は許す事が出来ん』といふ返事でございます。

(三)

公使等は此の回答を見まして『ハ、ハ、ハ、相變らず偉大の事を言つて居るやうでありますな』許し難いとは如

何も不禮です、實に剛慢な返事だ、是は一つ手強くやつてやらうてはありませんか、貴國の設すと許さるは今論すべき場合でない、我々は自分の國の兵を以て自分の國の者を保護するのであるから、敢て總理衙門を煩はすに及ばんと、手強くやつた方が可からうと思ひます『是はお説の通り十分手強くやつた方が可いす』と何れも賛成をいたしましたから、再び總理衙門に向つて申し送つた處が、今度は『午後六時まで如何か待つて呉れ、それまでに慥かなお答へをいたす』といふ挨拶でしたが、問もなく交民巷といふ彼の外國公使館のある所へ兵を出して、一寸各公使館を保護するやうに見せた、それから尙度々此方から催促をいたした處が、午後五時に至つて兵を入れるといふ事を承諾いたしました、そこで太沽沖に居ります軍艦にも此事を言ひ送りましたが、是より先に各國公使は夫々本國政府へ電報を發して軍艦を早く廻して貰ひたい、陸戦隊を北京へ入れて貰ひたいと請求をしたから、我が政府は直ちに横須賀に居ります軍艦笠置へ清國行の命を傳へましたけれども、笠置はまだ三十日には太沽へは着きません、三十日に太沽に居りました軍艦は英吉利が二艘、露西亞が六艘、佛蘭西が二艘、米國が一艘、獨逸が一艘、伊太利が一艘、日本の軍艦は只一艘で、砲艦愛宕艦が白河の河中に碇泊して居たに於てありました、そこで各國軍艦が評議の上で兵を上げて北京へ入れる事に極つた、依つて塘沽の停車場から兵を送るといふ事になりました處が、鐵道局に於て直隸總督の命がないから特別に汽車を發する事は出来ないといつて、如何しても發しません、それでは仕方がないから白河を遡らうといふ事に相成りましたが、日本兵は僅か二十三名しか出す事が出来ない、愛宕艦は船が小さうございまして、兵が多く乗つて居りせん所から、僅かに二十三名の兵を上陸させまして、是は海軍大尉原胤雄君が指揮いたす處、愛宕艦の艦長は竹内中佐でございます、英から七十五名、米が六十名大砲二門、伊太利が四十二人、佛蘭西が七十五人、露西亞が七十五人、是だけ上つて三十日に天津へ着いたしまし



た、白河を引張つて上るのでありますから、僅か天津まで十三四里でございますが、恐ろしく手間を取りまして、漸やく天津へ着いて、一旦各領事館へ入り、それから汽車を出させやうとした處が、天津の鐵道局でも中々汽車を出さなかつたが、漸くの事で午後四時に汽車を發し、直ちに北京へ乗込みました、尤も他國に於ては上陸兵も多く、又た跡からズン／＼送りましたから、天津へも兵を殘す事が出来たが、日本に於ては兵が少なうに依て天津へ殘す事が出来ません、笠置艦が太沽へ着いたなれば其の兵を上げて天津へ置くといふ事にして、此の二十三名は殘らず北京へ向ひました、既に此時義和團はコソ／＼北京へ這入る者もございまして、まだ公使館を攻撃するなどいふ事はなかつた様でございます、スルと六月四日になつて漸やく笠置艦は大沽沖へ着いたしました、艦長は永峯大佐、副艦長は山下中佐、それに海軍中佐森義太郎君が乗込んで居られました、此の森中佐は清國公使館附の武官で、いまして日本へ歸つて居りましたが、事變の出来た事を聞いて急に笠置艦に乗つて行かれたもので、六月三十日の午後六時横須賀を發して四日に太沽沖へ着いたしました、處が生憎に海が甚く荒れて居りまして容易に上陸が出来ません、然るに一艘の小蒸汽に乗つて笠置艦の方へ向つて頻りに進行して来る者がありましたから、笠置の甲板にある人々は何かと思つて見て居ると、天津の領事館君であります、丸茂書記官を連れてやつて参りましたが、船が小さいのに非常に荒れて居りましたから、何れも甚く眩つて居る様子、其の中に段々／＼と船は近附いて参りましたけれども、笠置艦は大きな軍艦で、一方は小さな蒸汽でございますから、容易に其の側へ來て乗り移る事が出来ぬ、其の上に動搖甚だしいので船の中に立つて居られない有様でございましたが、それを漸々の事で引揚げて互ひに無事を祝し、『此の度海軍大臣の命に依つて全速力でやつて來ました處が、生憎此通り海が荒れて居りまして、思つたよりは時間が掛りましたが、如何です、天津北京の様子は』といつて第一に艦長永

峰大佐が尋ねました、『どうもそれは御苦勞でありました、我々も海上の事を願ふる心配いたした、モウ北京へは義和團が入り込みました、併し未だ公使館を攻撃する様な事も無いやうでございますが、各國も追々兵を入れるやうでありますから、兎に角少しも早く我が國も兵を入れたいと思ひました、成程、兵を入れるには一時も早くせんければなりません、陸揚の準備も出来て居りますけれども、何しろ此の浪では兵を上るといふ事は逆も出来ず、多分明朝になつたらば揚げられるだらうと思ひますから、明朝まで一ツ猶豫して貰はんければなりません、残念ではあるけれども仕方がない』と言つて其の夜は鄭領事も丸茂書記官も笠置艦へ泊り、種々相談をして見ると、各國の兵は平均五十人位づつ、北京に這入つて居るから、日本にても五十人位も出して宜しからう、己に先に愛宕艦の陸戦隊二十三名這入つてゐるから、モウ二十五人送る事にして、天津へも一個小隊ばかりを置かなければなるまいといふ事に極つた、翌五日の朝愈々上陸いたしました、尤も五日の朝は浪も穏かになり、その夕方に天津へ着致しました、スルと天津と北京の間に汽車が大分破損いたしましたして不通となつたといふ事、汽車が通じなかつては陸戦隊を率ゐて北京へ行く事が出来ない、陸を歩行しなければならぬといふ時に森中佐が、『陸を歩行するなれば歩行する準備といふものが必要、それで海軍の兵は常に軍艦の中に起臥して居るゆゑ陸行には不馴で、天津北京の間三十里内外の道を歩行するといふは容易の事でない、殊に北京は夫程までに危急に陥つたとも思はれんから、一兩日しなれば汽車が通ずるかも知れぬに依つて、兎に角様子を探つた上の事に可からう』といふので、成程是が陸兵なれば直ぐに送つて了ふ處であるが、海軍であるから歩く事に馴れませぬゆゑ、據處なく天津へ留まりました、處が如何も日本とは違つて不便でございますから、義和團匪が何處に居るやら、汽車が何の位壞れて居るのやら少しも譯が分らない、茲に九日まで空しくいたして居りました、



スルと九日の夕方英國の領事から廻文が来た、尤も日本ばかりではございませぬ、各國領事へズツと廻文をいたして、至急に御協議をしたいから佛蘭西の領事館へ領事及び専任の將校に集つて呉れるやうにといふ觸、一體此の佛蘭西の領事館といふは、常領事が一番古参者であるから此處へ集る事になつたので、それから日本では鄭領事と森中佐とが行き、各國の領事又は専任將校も追々集まりまして茲に協議を開きました、時に英米の兩領事が口を開いて『今夜諸君の御足勞を願つたのは餘の儀ではございませぬが、北京駐在の我々英米兩公使から今日憊ういふ電報が参りました、北京に居るだけの兵では足りな、一日も早く兵を送つて呉れるやうにといふ事、故に我々は此の天津にあるだけの兵を送る考へてありまするが、諸君は是に御同意あつて各々其の天津にある處の兵をお送りになりますか、如何ですか』といふ尋ね、スルと露西亞の領事が『それは北京の大切なる事は各國とも同じ事でありまするから一日も早く兵を送りたいですが、鐵道が既に破壊されて居るとなれば、汽車に依つて兵を送るといふ事は進も出來ないのであります、成程御道理であるが、我等の思ふには鐵道の破壊といふものは些細の事で往けないといふ事はあるまいと思ふ』といふと佛蘭西の領事が『イヤ自分の聞く處では揚村までは何事も無いが、揚村から先が頗る破壊の箇所が多くして容易に進む事が出來んといふ事です、英領『イヤそんな事は決してありません』と茲に議論紛々として決しない、スルと日本の鄭領事が『それなれば如何です諸君、行く者は行くとして止まる者は止まるとしたら直しようございませう』英米の領事は是を聞いて『是は御道理の説で、我々は既に兵を送る事に決しました』此の時露西亞、佛蘭西、獨逸の三領事は只黙然として居つたといふ事であり、此時英吉利の領事が『日本は如何でござるか』といふ問に應じて森中佐が『日本は無論往きませう、我が日兵は至つて少數ではありまするが、今日の場合、當地に安然として留まつて居る處ではないと考へます』米國の領事は手を拍

つて大きに喜んで『それでは日英米の兵を送るには先づ汽車の準備をさせなければならぬ、早速直隸總督にいふてやりませう』と佛の領事館から直隸總督衙門へ電話が架つて居りまするから、そこで電話を掛けて、是々の理由で日本、英吉利、亞米利加の三國が北京へ兵を送るから汽車の準備をして呉れ、明日は未明に停車場へ兵を出すと云つて遣ると、只今總督が居られぬから即答が出來ませんといふ返事『困つた譯ではありまするが、それでは斯うしませう、今度は電話でなく書面を持たしてやつて、然うして返事を催促しやう』といふので三國の領事から總督裕祿へ宛て、至急一列車だけ用意するや否や返事を待つといふ意味の書面を贈つた、併し是は無理な注文で、進も破壊して居ては今から鐵道を修理しても翌朝までに出來上るといふ事は叶はたい筈、若し承諾をすれば餘り大した故障はないものといつて、其の夜は各々領事館へ歸つて寝る事になつたが、唯一人として、直隸總督より是を受合ふといふ返事は來まい、無論斷つて來るだらうと思つて居ました所が、豊岡らんや、其の夜の十一時頃に明日午前六時に汽車の準備をいたすから在るだけの兵を連れて停車場へ来て下さいといふ返事が参りました、扱は何事もなかつたかと各々意外の事に喜びましたが、海軍中佐森君に於ては宇佐川少尉以下笠置艦の陸戦隊五十二名と共に六時三十分停車場へ出掛けて其の支度をいたして居ると、丁度英吉利の中將シーモアが太沽沖に碇泊する各國軍艦の陸戦隊を率ゐ、九日の夜上陸をして、塘沽から特別列車を仕立て天津へ参りました、茲て森中佐も中將に面會をいたし、大いに協議する處あつて愈々北京の地へ乗込むの事話に相成ります、

(四)

茲に北京の状況を少しく演べて置ませう、さて義和團匪の勢ひが日々に猖獗となりました時に、清國政府



の中に之を助くる人があると云ふ事を耶蘇宣教師が一番先に探り知つたをうです。團匪の事は宣教師が一番明るいと申すもの、實は自分達の身に彼の義和團徒が害を加へるから、心を入れて油断なく探つた結果で、ムいます。清國に長らく居つた佛國の宣教師にフワイデー、カビエルと云ふ人があり、耶蘇教信徒が此人に向つて申すには「此度の義和團徒は、爾ら輕々しくお見做しになると不可せん、如何も政府と彼等との間に、中々深い關係がある様です、是は油断して居ると如何様大なき事變になるかも知れせん」と忠告します。カビエル氏が「ナニそんな馬鹿な事はあるまい、如何に支那政府が愚かな人達の寄合でも、眞逆義和團匪と合體はしまし」と言つて用ひなかつた云ふ事です、其時は用ひなかつたが、其後段々探つて見ると、成程教民の忠告の如く、團匪と朝廷の人々と内々通じて居ることが、いろ／＼の材料から推測して分つて来たのであります、そこで我日本公使の西徳次郎閣下も宣教師より此等の事を聞かれて、頗る御心配をなされました、其中に五月の末になると、益々世間が騒がしく、諸所の停車場を破壊するなど云ふ噂が喧ましくなりましたから、各國公使は皆本國政府へ電報を以て兵を送らん事を請求し、又太清沖に破泊する軍艦へは早く陸戦隊を組織して北京に來る様にと促がしました、茲に於て白河に破泊中の我軍艦愛宕の艦長竹内中佐は原大尉に命じ、二十三名の陸戦隊を率ゐて各國兵と共に北京に入れたことは前にも述べてあります、さて又北京公使館附の武官で公使の軍事顧問と云ふ大任務を帯びて居らるゝ砲兵中佐柴五郎君は、朝陽門と東直門との中間に在る六條と稱する舊公使館、即ち榎本子爵などが公使で居られた時の公使館を、公使館附武官の居所と定めまして、大尉守田利遠君と共に此處に居られました、文學士服部宇之吉君、それから西本願寺の坊さんで奇僧の名ある川上貞信師、狩野直喜君なども此處に居られます、時は恰ど六月四日の午前でしたが、柴中佐と守田大尉と種々目下の形勢に就て相談して居らるゝ所へ、取次のボーイが來て一

葉の名刺を出し、唯今斯ういふお人が御出でお目に懸りたいと被仰ります、柴中佐が見ると陸軍歩兵大尉安藤辰五郎君の名刺ですから「ヤア守田君安藤大尉が着いたよ、爾ですか、過日の書面に依つて來るとは分つて居ましたが、意外に早く着きましたな……オ、此方へ案内せよ」安藤大尉はボーイに案内されて這入つて参りました、「イヤ如何も久し振ぢやツたヨ、中佐殿も御壯健で結構で……守田君御無事で御目出たう、誠に久々でした、君の來られると云ふ事は御書面分つて居つたが、仁川へ寄られるといふ事であつたから、未だぢやらうと、思つて居たのぢや、實は吾輩大ひに感じた所があつて、前年から支那語を學んで居たが、如何も實地に應用して見なくては不可んから、それを家屋を賣つて、妻子は親戚へ預けて置いて態々やつて來た……自費で來たです、それは御奮發ぢやわ、國家の爲め充分に勉勵してくれ玉へ、然し君、聞かれたであらうが、此國も日々何だか騒々しくなつて來たから……折角支那語研究の爲めに來られた君に却つて實地戰術を研究して貰はなくてはならぬかも知れん、吾輩も爾ら思つて居る、本國に居る頃から義和團の名稱位は聞て居たが、此國へ來て見ると意外に事變が大きうなつて來をツたやうぢやな、若し萬一の事あれば、固より陛下に捧げた身ぢやから好んで死すさ、アハハハ、」守田「イヤ相變らず快活ぢやね……アハハハ、」柴中佐も共に三人笑つて語られたが、此の安藤大尉の一語が豫言となりましたのは實にお痛はしい事で、私には安藤大尉には本年四月の末、爾も大尉が渡清されます數日前に、牛込加賀町の佐藤鬼將軍のお邸で、お目に懸つた事があります、其の節大尉より承はつた事に随分面白、奇談もあり、又たお手づから書して私に下さつた書附などもありますが、是は戦死の所で演べるとに致しませう、是より前に柴中佐は豫て好く懐けて居る支那人に言ひ合せて義和團徒の様子を探りに出してありました、頗て其者が歸つて申しますには「義和團徒が段々北京へ入り込んで参ります、それから天津と北京の間の鐵道は



餘程破壊されたさうです、彼等は外國人を残らず打殺して耶蘇教徒を追拂ふなど、言つて居るさうです」中佐は是を聞いても支那人の居る中は笑を含んで居られました、彼が立去つた跡で、守田、安藤の兩大尉を呼んで此の事を語られ、  
 『爾ういふ状況であるといつ何時公使館へ團匪が押寄せないとも限れぬ、若し爾ういふ事になると僅々二十有餘名の水兵では不足ぢや』  
 『左様で……逆も彼箇だけでは足りませんな』  
 『是は好まぬ事ぢやが止むを得ぬ、居留民の隊を組んで義勇隊といふ様なものを編成しなくてはなるまい』  
 『自分はまだ此の土地に着いたばかりで、少しも事情が分らんですが、如何な人物が居りますか、凡そ何人位居りますか』  
 『さうぢやね……殆んど四十名許りも居るね……人物かね、人物は中々蒙い奴が居る、文學士も居れば坊主も居る、寫眞師も在れば植木屋床屋の様な者も在る、それは日本人ぢやから軍事教育は無くともイヨ／＼といふ時は必ず一方の防禦はする……中には軍事教育のある奴も居る』  
 『中佐殿、それにしても若し義勇隊を組織すれば之を指揮する人物が必要でありますな……即ち義勇隊長が』  
 『勿論……ぢやア一ツ安藤大尉に引受けて貰はうぢやないか……君は自費で支那語研究を目的として来た人ぢやから、吾輩から命ずると云ふ事は出来んが、君が國家に盡すの義務的てな』  
 『最も望む所でありませう……尊君と守田君は公使館に責任がありますから……若し義勇隊組織と云ふ事になれば不肖ながら自分が指揮の任に當りませう』  
 『公使に建議して見やう、無論公使は賛成せらるゝぢやらう』と嘯して居る所へドカ／＼這入つて来た人は服部宇之吉君、川上貞信君、狩野直喜君の三人であります。『中佐殿、大變になりましたぜ』  
 『守田君、モウ愚圖々々して居られんぜ』と頗る周章て居るから守田大尉が如何したか、泡を喰つては不可ん、君等は平生大言壯語を吐くが、失敬ながら軍事教育がないから事變が起ると直に狼狽して不可ん、確乎して居て呉んければ困る』  
 『イヤ我々は決して狼狽はせぬです、我々は意見を述べて中佐殿に御同意を求めん爲め急いで返つて来たです』  
 『フム如何いふ御意見か』  
 『それは外でもありませんが、事變は益々迫つて来て、義和團は御承知でもありませんが、追々北京へ這入つて来ます、唯に義和團匪ばかりならば可いですが或は官兵の中の頑固な奴や、又た市中無頼の徒が如何なる暴行をなすやも計り難いです、我が公使館は兵が不足だらうと思ふです、我々は軍事の経験はないが出来るだけ防禦助力をしたいと思ひます』  
 『即ち義勇隊を編成して貴官方の力になりたいといふ考へてあります』  
 『ム、流石は君方ぢや……實は今守田安藤の兩大尉と其の事を相談して居つたぢや……君達の方から進んで行らうと云ふのは流石に日本人ぢや……公使も喜ばるゝぢやらう』  
 『茲で柴中佐も非常に喜ばれました、それから直に公使館に行つて公使に建議すると西公使のお喜びは一通りでありませぬ、中佐は川上、服部、狩野の三君を公使館に遣り、自分が日々六條から公使館へ通つて公使と書策をして居ります、然し未だ此時は表向き義勇隊を組織した譯ではなく、公使と中佐と重立たる人々として内決して、其他の人々にも相談して居られたので、安藤大尉は此頃から公使館へ詰めて居たが、守田大尉は未だ六條に居たさうであります、然るに此頃誰云ふとなく黄村邊にて義和團と官兵と戦争をした、官兵が破れたと云ふやうな噂が立て参りました、西公使は其の實否を探りたいと云ふお考へがありませぬから、通譯官鄭永邦君に計られたのであります、鄭君は天津の領事鄭君の御舎弟でまだ若いお人私しは公使館で度々お目に懸つて種々聞いたこともありますが、中々活潑なお人です、鄭君は公使のお考へを聞いて、  
 『成程御尤もな御考へであります、林良茂が居りますれば彼をお遣りになると宜しう御座います、中島君を送つて往つて未だ歸りませぬから、エ、斯うと誰が宜しう御座いますか……ア三井の依田が宜しからうと思ひます……依田猪三三君が……』  
 『成程、依田、彼の男なら支那語は林良茂の様には行かんが、大膽な奴ぢやから可からう』とそれから直に三井物産會社の留學生依田猪三三君を呼ばれまして偵察を

餘程破壊されたさうです、彼等は外國人を残らず打殺して耶蘇教徒を追拂ふなど、言つて居るさうです」中佐は是を聞いても支那人の居る中は笑を含んで居られました、彼が立去つた跡で、守田、安藤の兩大尉を呼んで此の事を語られ、  
 『爾ういふ状況であるといつ何時公使館へ團匪が押寄せないとも限れぬ、若し爾ういふ事になると僅々二十有餘名の水兵では不足ぢや』  
 『左様で……逆も彼箇だけでは足りませんな』  
 『是は好まぬ事ぢやが止むを得ぬ、居留民の隊を組んで義勇隊といふ様なものを編成しなくてはなるまい』  
 『自分はまだ此の土地に着いたばかりで、少しも事情が分らんですが、如何な人物が居りますか、凡そ何人位居りますか』  
 『さうぢやね……殆んど四十名許りも居るね……人物かね、人物は中々蒙い奴が居る、文學士も居れば坊主も居る、寫眞師も在れば植木屋床屋の様な者も在る、それは日本人ぢやから軍事教育は無くともイヨ／＼といふ時は必ず一方の防禦はする……中には軍事教育のある奴も居る』  
 『中佐殿、それにしても若し義勇隊を組織すれば之を指揮する人物が必要でありますな……即ち義勇隊長が』  
 『勿論……ぢやア一ツ安藤大尉に引受けて貰はうぢやないか……君は自費で支那語研究を目的として来た人ぢやから、吾輩から命ずると云ふ事は出来んが、君が國家に盡すの義務的てな』  
 『最も望む所でありませう……尊君と守田君は公使館に責任がありますから……若し義勇隊組織と云ふ事になれば不肖ながら自分が指揮の任に當りませう』  
 『公使に建議して見やう、無論公使は賛成せらるゝぢやらう』と嘯して居る所へドカ／＼這入つて来た人は服部宇之吉君、川上貞信君、狩野直喜君の三人であります。『中佐殿、大變になりましたぜ』  
 『守田君、モウ愚圖々々して居られんぜ』と頗る周章て居るから守田大尉が如何したか、泡を喰つては不可ん、君等は平生大言壯語を吐くが、失敬ながら軍事教育がないから事變が起ると直に狼狽して不可ん、確乎して居て呉んければ困る』  
 『イヤ我々は決して狼狽はせぬです、我々は意見を述べて中佐殿に御同意を求めん爲め急いで返つて来たです』  
 『フム如何いふ御意見か』  
 『それは外でもありませんが、事變は益々迫つて来て、義和團は御承知でもありませんが、追々北京へ這入つて来ます、唯に義和團匪ばかりならば可いですが或は官兵の中の頑固な奴や、又た市中無頼の徒が如何なる暴行をなすやも計り難いです、我が公使館は兵が不足だらうと思ふです、我々は軍事の経験はないが出来るだけ防禦助力をしたいと思ひます』  
 『即ち義勇隊を編成して貴官方の力になりたいといふ考へてあります』  
 『ム、流石は君方ぢや……實は今守田安藤の兩大尉と其の事を相談して居つたぢや……君達の方から進んで行らうと云ふのは流石に日本人ぢや……公使も喜ばるゝぢやらう』  
 『茲で柴中佐も非常に喜ばれました、それから直に公使館に行つて公使に建議すると西公使のお喜びは一通りでありませぬ、中佐は川上、服部、狩野の三君を公使館に遣り、自分が日々六條から公使館へ通つて公使と書策をして居ります、然し未だ此時は表向き義勇隊を組織した譯ではなく、公使と中佐と重立たる人々として内決して、其他の人々にも相談して居られたので、安藤大尉は此頃から公使館へ詰めて居たが、守田大尉は未だ六條に居たさうであります、然るに此頃誰云ふとなく黄村邊にて義和團と官兵と戦争をした、官兵が破れたと云ふやうな噂が立て参りました、西公使は其の實否を探りたいと云ふお考へがありませぬから、通譯官鄭永邦君に計られたのであります、鄭君は天津の領事鄭君の御舎弟でまだ若いお人私しは公使館で度々お目に懸つて種々聞いたこともありますが、中々活潑なお人です、鄭君は公使のお考へを聞いて、  
 『成程御尤もな御考へであります、林良茂が居りますれば彼をお遣りになると宜しう御座います、中島君を送つて往つて未だ歸りませぬから、エ、斯うと誰が宜しう御座いますか……ア三井の依田が宜しからうと思ひます……依田猪三三君が……』  
 『成程、依田、彼の男なら支那語は林良茂の様には行かんが、大膽な奴ぢやから可からう』とそれから直に三井物産會社の留學生依田猪三三君を呼ばれまして偵察を



お命じになりますと依田君は非常に喜ばれまして「宜しう御座います、自分は支那語は林の様に巧には出来ませんが、髪も服も此の通り支那風にして居りますから大丈夫で、それに前は何處の人だと問はれますと、私は四川省重慶府の者だと答へて居りますから、言語が少し位の違つて居つても分りません、又た場合に依つて噂の眞似をしますから「アハハハ、夫は甘い事をやるね」と言つて西公使も笑はれたやうてあります、依田猪三二君は大膽にして、且つ機智に富んで居らるゝ人ですから、是は至極適任でござりました、

(五)

依田猪三二氏は、西公使の命を受けて、北京を立出て、黄村をさして参りましたが、此邊の人民は依田氏の姿を見て「オイ、前は何處の人だ」と尋ねます、土民の眼から見たら、幾等依田氏が好く化けて居ても、それは何處かに異なるところがあるから知れるのであります、依田氏は平氣な顔をして「己か、己は四川省重慶府の者だ」土民は訝しげな顔をして「ナニ、四川省重慶府の人だと、ハテナ、己は前年北京で、長らく四川省の人と交際したが、前とは言葉がちがふやうだ、前年の音の調子は、南清國の人のやうだ」と云はれて依田氏胸にヤクリと徹へたが、故意と「アハハハ、」と高く笑ひ「吾輩の音の調子は違ふ筈だ、幼少の時から多く外國へ行つて居た故、自然と調子が異ふやうになつたのだ、即ち外國音になつたのだ」と思ふ口から出た事云ふとも、知らぬ土民は正直だ「ハア夫では前年は長く外國に居たのか、外國は何處に居たか」依田「先づ日本、それから英國、佛國、獨逸、露國、亞米利加、其他地球上吾輩の足跡の至らざる所なし」土民「イヤそれでは、大人は世界各國の語に通じて居るかね」依田「ム、八ヶ國の語に通じて居る

それゆゑ自然と音の調子が異ふのだ」と大法螺を吹立てると、土民の中より六十位の老爺が進み出て「では大人は語博士だ、私の弟は長く天津に居て、日本人とも交際して居て、少しは日本語も出来るが、大人も日本語は出来るだらう」依田「勿論、最も好く話す、日本語は……いろはにほへとちりぬるをわかよたれそつねならむらゐのおくやまけふこえてあさきゆめみしゑひもせす……此の四十八文字から成り立つて居る」土人等はこれを聞いて、急に依田君を尊敬し出した「ヤア博識、大人大人」とワイ、云つて敬ひます中に「大人、英語は何から成立つて居るね」と問はれて依田君は困つた、依田君は英語も佛語も知らないのだ、けれども中々スマシタものだ「英語か、英語は……アイウエオから成立つて居る」博識々々、佛語は「佛語か、佛語はアカサタナハマヤラワから成り立つて居る」博識々々、露語は「露語か、露語はウクスチヌムエルウからだ、獨語は、子、丑、寅、卯、辰、巳から成立つて居る、如何だ、語學博士だらう」と云つて傲然と氣取て居たやうだ、土民は皆愚勝な奴ばかりだから、マンマと欺かれて了ひました、依田君は濟したりと思ひ「僕は實は北京に店を出して居て、此邊へ粗布を買いに来たのだが、如何だ賣る家があるかぬ」此邊には粗布を織る者はない、モウ些し南方へ往くとある」依田「是から南方へ往つたら、義和團と白旗兵と戦ふたと云ふ噂だから危険だらう」ナニそんなことは無い、北京では其様な噂があるかね、それは嘘々、南苑へ行つて御覽、白旗と義和團とは親しくして居る」依田「フム、爾か、では南苑の中に義和團が居るかね……粗布を買ふことが出来なければ、切めて南苑でも見て返りたいが、容易に遣入れまい」ナニ、門衛の兵に些し錢を遣れば入れる」依田君之れを聞いて成る程をうてあろうと大いに喜び、南苑に往つて門衛兵に若干の錢を興へると、直に入れて呉れました、南苑は中々廣い所三里四方位あつて、中には離宮の様なものもあり、妄りに平民の這入れる所ではありません、依田君は錢のお蔭で這入つて向ふの樹木の茂



つた所を見ると義和團と清兵と一所になつて居たが、義和團は依田君を見て『コレ、貴様は何者だ』と咎めました、依田君は抜からぬ顔で、『酒川省重慶の者でありますが、尊大人方の御様子を拜見に参りました如何も盛んなものですか、外國の洋鬼等馬んぞ之に敵する事が出来ませう、中國の威は尊軍方の力に依つて大いに揚りませう』と、洋鬼を盛殺して、中國の威を四海に輝すは我が義和團である、『如何さま爾でありませう、拳法を練る所を拜見したいものですなア』此處で練習して居るから拜見致せ』といふので依田君は其場に參つて是を見ると随分妙な事をするので、腹を抱へて笑ふ様な事があるさうです、彼れ義和團の親分株は皆自ら大師兄とか二師兄とか云ふ名目で拳法を教へて居る、彼等の言草を聞くに、『我が拳法は初め學ぶ者、三日の間目眩んで物を視る能はず、四日にして目正に開き、五六日にして稍や拳法を覚え、七八日には拳法已に成りて兵器を畏れず、十日には刀劍は勿論矢石も短銃も弾き返すべし、半年練習せば三十三サンチメートルの大々の砲彈と雖も、身を避けて決して中らず』と恐ろしい吹聴だ、是を聞いた依田君は心中に『乃公より餘ッ程法螺が大きいわい』と可笑く思つて居ます義和拳匪が簡様な法螺を吹立るのも亦た已むを得ざる譯であつて第一始めは獨手で走つた土匪であるから、完備した銃砲彈藥がない、所謂三國時代の合戦と同じことで、瘦馬に跨り、青龍刀を振廻すのでムいすから、兵器の整つた外國兵に抵敵して勝を取れる道理がないことは如何様愚人でも知つて居る故、此の拳法説を擔ぎ出して、是を覺れば大砲の彈でも中らぬなど吹立て、愚民を惑はして引入れたるものと思はれます、愚味極まる支那人等は皆是を信じて拳法を練り、西太后でさへ一時は宮中へ義和團の大師兄を招いて、宮女にまで練習せしめたと云ふ事です、此の拳法は我が日本の柔術同然なもので、それを教へる所を是と餘程妙ださうであります、先づ習ふ奴を集めて置いて地上へ輪を書いて其中へ入れ、三度程辭儀をさせ、眼を閉いで直立させて其の側らに大師兄

とか二師兄とか云ふ教師が行つて呪文を唱へる、其の呪文は一定しては居りません、神が仙人の名を呼んで其呼ばれた神なり仙人なり助けてくれると云ふさうです、何しろ頻りに呪ふと、習ふ奴が倒れる、一度倒れた者が起上ると其時は、ハヤ半分夢中になつて居る、それから拳法を教へる、随分長くやるさうですが、此の時はモウ全然夢中になつて漸でも田でも構はず駆廻つて拳を練る、之を見た人に聞きました、馬鹿々々しいと云ふこととあります、然し彼等は信じて居るですから、一心不乱になつて練る、自分の心の中に信心が固まれば、火の中でも水の中でも弾でも劍でも恐れぬと云ふさうです、故に北京公使館を攻める時、義和團は恐るゝ色なく先に立つて進んで来たから、我軍の一齊射撃に遇つて負傷者や死人が澤山出来たのです、それに可笑しくも亦た氣の毒な事には一人の負傷團匪が、外の者に助けられて連れ行れながら二師兄に向ひ、『尊君は義和團になつて拳法を練れば、劍でも斬れらず、彈丸も中らぬと云つたが、私を欺いたのだ』と云つてツイ泣いたたら、二師兄と稱する頭分が、『爾は信心が足りないから神仙が助けぬのだ、己を見る、數日前から彈丸雨中を奔走するも一發も中らないではないか』と云ふ言語の未だ終らざる中に、スドンと来た一發で、其の頭分も股を打れ『ア、痛い、己も未だ信心が足りなかつたか』と云つて矢張り泣いたさうだこんな嘲は誠に馬鹿くしい様だが、決して私の作り事ではありませぬ、皆北京で聞きました事實談でムいませぬ、皆て依田君は義和團徒と官兵の機子を見るに、相親んで居て、中々戦争をするなど云ふ事はありませぬ、早く歸つて此事を公使に復命しようとなんと南苑を立去りまして元の村に返ると老人が、『如何だい、見たかね、義和團を』と、見た、見たが中々五千人なんて居ない、『お前は何處を見たの』『義和團を見た』『唯だ藥王廟を見たばかりでは解らない、苑内を殘らず見なさい』『殘らず見たいが、日暮前に北京へ這入らなくては、門を閉られると困る、是から馬車を雇つて急いで返らなくてはならぬ、馬車はあるか、ね、



有るなら雇って貰ひたい』それなら雇ってやるから、其の馬車に乗って今一度城内を廻って歸れば可い、馬車なればモウ一度見て行つても遅くはない、錢次第で乗った儘城内へ這入れるよ』老人は親切に馬車を頼んで呉れまゝしたので依田君は大きに悦んで、ソノ馬丁に向つて『貴様の云ふ丈け馬車賃は遣るが、城内を一廻り廻つて北京の城門の閉らない中に返ることが出来るか』馬丁『出来ませぬ、引受けませぬ、それに南苑の門衛とは懸念だから、錢さへ遣れば乗った儘に這入れます』そこで再び馬車にて南苑に行き、門衛に銀貨一個を遣つて乗廻し見ると、義和團の屯する所が五ツもムいまして、兵營には白旗兵が控へて居ます、依田君は馬丁に向つて『義和團の食糧は何處から送る』と尋ねますと、馬丁『此村の金持が出します、此村は皆義和團徒ですから』と答へましたから、依田氏考へますと此村は到つて貧乏だから中々数千の團徒に糧食武器を給するだけの資力があらう筈はない、是は何でも支那政府が彼等に内通し居つて、兵糧を送るに相違ない、ソノ證據には官兵と團徒が水魚の様に仲好くして居るのを見ても分ると思ひましたから頼りに馬車を急がせて返つて見ますと、ハヤ城門はピタリと閉つて這入る事が出来ませぬ、馬丁『ヤア旦那、モウ門が閉めてあります』『それだから貴様に彼程急げと云ふたではないか、貴様門を閉る前に必ず行けますと引受けて置いて、不埒の奴ぢや、賃錢は遣らないぞ』馬丁『だつて旦那、何時もより早く閉たのだから仕方がありません、其代り私が門外のお宿を周旋しますから、馬車賃は約定通り下さいな』『アハ相當な宿を周旋しろ、汚ない家では不可んぞ』總て北清の宿屋は穢なくつて不便です、尤も天津には上等の宿屋があり、領事館の向のアヌラルハウスなどは立派なものです、北京の城外の宿屋と云つてはモウお話にならん位の、それで宿屋は唯だ寢る所を貸すばかりでムいまして、食物は別に買ふなり、又は自分で拵へて喰べるなりして一夜を明すのです日本人は旅へ出て宿に泊ると一の樂みとする人もありますが、總じて北清地方の宿屋は穢ないのと不自由

なのが持前でムいませぬから、支那人は昔から旅憂など、申して旅に出ることを一つの憂きものといたして居ります位で、依田君は馬丁に吩咐して一軒の宿を借りると其家の老人が『客人心配しなさんな、今夜の夜半になると門が開くから、其時に這入れば好い』依田君は不思議だ、城門は夕方閉めて其の鍵は警視總監が預つて居るから、翌朝にならなくては開けやうはない筈だが……『所が此頃は毎夜々半に門を開けて義和團を入れるから開けるよ』『フォーム、それでは毎夜義和團を入れるか』『入れる、今夜などは餘程澤山入れるだろう』此處で愈々政府が團匪と通じて居るとが明白になりました、頓て其夜の夜半少し過ぎに老人は依田君を起すから目を覺して見ると、門を開けて團徒を入れる兵最中です。

(六)

依田君は此の機會を脱しては城内に入るべき時がないと思つたから、物然と寢床を飛び出して亭主が肝を潰した顔を見残し、急いで戶外へ立出でまして、ドン／＼入込む義和團徒の間に交り、難なく城内へ這入つて公使館に駈付けた時は六月八日の夜明少々前です、公使の起きるのを待つて此事を詳しく復命に及びましたから、西公使は直に英の公使館に参りまして、以上の事柄を晰した上に、英公使の意見を尋ねますと、『私も種々探つて見ると、全く政府と團匪と通じて居るに違ひないです、兎に角成可く早く兵を増して城内へ入れる様太清の軍艦へも、天津の領事へも言ひ送つて、此地は此地で充分に防禦準備をしなくてはなりません』と言つて即刻各國公使と武官を集めて會議を開きました、日本からは西公使と柴中佐とが出席しますと、英公使は一同に向ひ、『諸君はお聞及びもありませんが、我々の敵は獨り義和團ばかりにあらず、政府も暗に義和團を助けて我々外國人を討んとする舉動は明かに見えて來たのです、しますると現在



の兵のみにては逆も足りぬと思ひますから、大沽沖に在る各國軍艦よりは至急に陸戦隊を組織して北京に入る機にしたいです、然し途中の鐵道は破壊の個處があると云ふから日数が多少かゝるだらうと思ふですが左すれば先づ現在の兵を以て、差當り防禦の準備をしないでなかりません、此事に就て諸賢の御意見を充分に述べて戴きたいです、英公使の言はるゝ如く、兎に角防禦の準備が肝要であります、就ては水兵のみにては此廣い公民邑(各國公使館のある街)を逆も防禦すると云ふとは出来ません各國居留民を以て各國の義勇隊を組織し、是を一つに纏めて一人の指揮官の下に働くと云ふ事にしたら宜しからうと思ふ、何國の義勇隊を問はず一つに固まり、水兵と別々になつて一指揮官の命令に従つて働くと云ふことにしたら可からうと思ふですが、柴中佐之を聞いて進み出でられ「義勇隊編成と云ふ事は至極好いお説で、實は我が日本公使館でも己に前日から其の意がありまして専ら準備をしつゝある位であります、然し唯今佛公使のお説に依りますと、義勇隊は水兵と別になり、何れの國を問はず一つに纏まつて、一人の指揮官の命令下に働いたが宜しからうと云ふことでありましたが、それも至極結構な御論ではありまするが、我が日本は他國と違つて至つて陸戦隊の兵が少いので、御覽の如く我公使館は随分防禦線が廣いのに、僅か二十有餘名の義兵では逆も充分に防禦をすることは出来ません、故に他は知らず、日本は義勇隊と陸戦隊と一緒に防衛することにしたと思ふですが」と佛公使の説を駁しますと英米公使等は之を賛成いたし、茲に於て愈々各國義勇隊組織の事が決定しましたが、日本の義勇隊には如何なる人々が居ると云ふと、文學士あり、工學士あり、新聞記者あり、僧徒も居れば寫眞師植木屋なども在り、降つて理髮師に至るまで總隊合して三十餘名、然し始めの中は公使館に武器が充分に御座りませんので、是等の人々は支那鎗を買入れたりなどして防禦の準備をして居ますが、此時に當り義和團は益々北京から北京の附近に集つて参りまして、白日公然街上を横行して揚

言して申しまするに「我々は第一に北京に在る外國人を殺し、耶蘇教徒を害し、それから海岸に居る外人は幾らず海の中へ叩き込んで仕舞ふのだ」と這麼大言を吐いて愚民を驚かして居ましたが、時は六月九日の事で、永定門外で義和團匪と董福祥の兵と一ツになつて群衆に向ひ「我々は今度洋鬼を殺す心算だ、爾も應殺しにするのだ」と頻りに大法螺を吹いて居る所へ此頃地方から上京した揚と云ふ陸軍士官が、從卒唯一人を連れて通り掛り、是れを聞いて立腹いたし「コレ、貴様等は何を云ふか、そんな鹿馬な事を申して愚民を惑はすとは不埒な奴輩ぢや、汝等良民も此奴等の言を聞いて決して騒いでばならんぞヨ、皆な彼等の言ふ事は嘘ぢや、支那と外國とは極めて平和である、決して我が朝廷に左様な事は無い」と云ふと、義和團徒等大に怒り「此の軍人は失敬極まる奴ぢや、洋鬼の犬だ、ソレ打殺して仕舞へ」と大勢ワイ、寄つて群つて揚と云ふ軍人を馬から引摺下し、折角立派に着飾つて居つた官服を寸断し、引裂き、官帽を破る者もあれば劍の鞘や棍棒でメチャクに擲る者もあり、半死半生にした上で、義和團が祭つてある神様の祭壇の前にズル、と引摺つて行き、此の洋鬼の犬は如何致しますと御圍を引くと「左様な不忠な奴は殺して仕舞へ」と云ふ御託宣でありましたので、揚武官は氣の毒にも慘酷な殺され方をして、其の首は義和團匪が軍神の血祭りとなつたといふ事ですサ、サテ十日になると英國の海軍中將シーモアが、各國聯合の陸戦隊を率ゐて北京に着すると云ふ報知がありましたので、之を停車場に迎へなくてはなりません、然し各國とも公使館から外へ出るの如何にも危険であるし、それに城壁の外から馬家堡の停車場に掛けて、一面に清兵が守備して居る、義和團も所々に居るから、各國の人々別々に迎ひに行くのは危険であると云ふので、其夜各公使は會議を例の如く英公使館に開き、英公使が「如何も別々に迎ひに行くは些と危険に思ふから、各國聯合して迎へたら如何でせう、今朝天津を出發すると云ふ報知ですから、平日ならば今日午前に着かなくてはならぬ



が、鐵道を修理しつゝ進行して来るので、時日を要する譯だが、爾しもう明日は必ず来ると思ふ、午前に着くだらうと思ふです。西公使が可いのでせう、明日午前六時を期して、各國の迎へる人は南御金橋に集つて、彼處から一所になつて行く事にしたら可からうと思ひます」と賛成されたので評議は茲に一決したが、それから西公使は我が公使館へお歸りになり、杉山書記生鄭通譯官が水兵六名を率ゐて迎へに行く事になりました、仍て翌十一日の午前六時前に鄭杉山の兩氏は水兵と共に橋の上に参りますと、英米佛獨露埃伊の各國の人々も追々に集つて参りまして、六七十名の人數となりました、それから馬家堡の停車場に行つて暫く待つて居たが、如何した事やら救援軍の影だに見えませんが、人々は待ち草臥れ、  
 『來るならモウ來そうなものですな』  
 『私しの考がへは鐵路が餘程破壊されて居るので中々容易に進行が出来ないのだらうと思ひますな』  
 『爾かも知れませんが、如何です、晝飯の用意をしないで來ましたから、今少し待つて見て、來なかつたら一度返つて又た出直そうではムリませんか』  
 『ムン其方がよいです』と色々話して居らると、何處からか石を投げたものがあつて、英國水兵の小鬘に當つて少し負傷しました、何處から投げたのだらうと云つて、段々探ると董福祥の部下の兵が爲た仕業に違ひない、此邊一而に董の兵が天幕を張つて陣取つて居ます、中には酷く腹を立て、厳しく談判しようと思ふ者もありましたが、恚いふ場合に却つて藪を突いて蛇を出す様なことがあつては不可から、何事も援軍の來る迄は勘忍して穩かにした方が宜しからうと一先づ歸ることに成り、各國迎ひの人々一所になつて互に警戒して引易げると、董の兵數百名一度に咄と笑つたり、圓の聲を揚たりして冷嘲かしたさうであります、馳つて午後になつて又迎ひに出す事になりましたが西公使は中川軍醫と鄭通譯官とに出迎へて呉れと言いますと、鄭君が「如何も私は今日の状況を見ては、僅かの人數で出るのは危険だと思ひます」と言つて斷らるゝと、中川軍醫も矢張り同様に斷はらるゝ、石井書記官も始めから可

厭がつて居られたさうです、ソコで西公使は杉山書記生をお呼びになつて此事を語られまして、  
 『誰も彼も可厭がつて困る、兎に角英の海軍中將シ・モアと云へば、英國海軍の中にも有名な人である、其人が自ら聯合軍を率ゐて我々を救援のため來ると云ふのに、他國は知らず、我が日本から一人として迎ひに出ないと言つても如何にも行届かぬやうに思はれては日本人の面目を汚す、止むなくんば本官が自ら行かう』と言われました、  
 『言葉聞いて杉山君は元來極めて正直なる人でございますから、閣下が自ら出になるには及びません、では私が参ります、此の危険の場合に閣下をお出し申すと云ふとは、勿論護衛兵は附けませうが、危険です、私が参ります』  
 『勿論公使が自分で行くと被仰つても、それは他の人々がお出し申す様な事はありません、又た公使も眞箇に行き氣で言われたのか、將た他に思ふ所あつて故らに斯く被仰たのか知りませんが、杉山君は公使を止めて自ら行かんと思ふ決心し其場を出るや直に支那人のボーイに命じて馬車を引出さしめ、是に乗つて一人の護衛水兵をも連れず、馬を馳せて公使館を出られたのは、是ぞ杉山君が命數の盡きる所で、誠に痛はしい事でございました、後で西公使が聞かれて、  
 『アハモウ杉山は行つたのか、水兵を連れて行つたか』  
 『い、え、ボーイを連れていけてムリです』  
 『それは危険ぢや、行くと思つても爾ら直には行くまいと思ふた、情願無事て呉れればよいが』と被仰つたさうです、杉山君は怒り生中五人や七人の兵を連れて行くより却つて一人で行つた方が書を免れるであらう、兵を率ゐて行つて、彼們を激しては不可と云ふ所から、一人行かれたのだらうと思はれます、一體公使館に備附の馬車が四臺ありまして、其中の一番大きな馬車に杉山氏が乗つて出られました、併し馬車と云つても、日本の華族方や高等官の乗る馬車とは大なる違ひで、荷車の様な臺へ蒲鋒形の蔽ひが掛つて居ます、馬は一頭で牽くので、二人乗ると一人は奥へ乗つて、一人は前に横に乗つて、馬丁を並んで窮屈な思ひをしなくてはなりません、大體一



人しか乗って居ません、北京には人力車と云ふのがあるか知らんが、私共は一輛も見ません、天津には人力車も澤山ありました、北京では上流の人は皆輿へ乗つて八人位で昇ります、杉山氏は其の不體裁なる馬車に乗って出られましたが、己に永定門の外まで来ると、董福祥の兵が「コレ、誰だ何用あつて、外へ出る」と咎めました、支那兵に咎められて杉山さんは是は困つたと思はれたが、モウ決心をされて居るから泰然と落着き拂つて「我等は日本の公使館員である」「では日本の公使か」「イヤ日本公使館の書記生だ」「汝書記の分際として、何故こんな大官の乗る様な立派な馬車に乗つて出たか、不埒至極の奴ぢや、彼等の眼には立派な馬車と見えるであらませう、杉山さんは笑ひながら「それはお前達が餘計な世話ぢや」「エ、無禮なことを云ふな」と大勢がバラ／＼と寄つて群つて杉山君を手取り足取り馬車から曳摺卸しました「コレ暫く待て、汝等は我に何の怨があつて斯の如き事を爲るか」「汝は北京を逃出さうとする卑怯者ぢやから、懲しめの爲に誅戮するのぢや」「怪しからんことを申すな、汝等では断が分らん、我を汝等の隊長の前に連れ行け、我れ董福祥に逢つて明かに辨解する」「黙れツ、汝等如きものが大將軍に直々に辨解するなどは無禮極まる奴ぢや」とがや／＼罵つて居る所へ甘肅軍の士官一人が出來り「其奴は速かに斬殺して軍神の血祭りにせい、爾して門外に曝して、北京を逃出さうとした奴ぢやから、其罪に依て斯の如くすると萬人の目に示すが可い」「然らば汝等如何あつても我を殺すか、此期に及んで助けて呉れとは言ん、日本人の死に様を見よ」と流石は日本帝國の大丈夫、兩眼を閉ぢて少しも怯むべない、彼等暴兵等は此の杉山氏をズル／＼曳摺つて行つてとふ／＼無禮極まる殺し様をしました、此時杉山氏に従つて参りました公使館のボイは逃げ戻つて此事を告げました所から、さア公使館は大騒ぎでムいします、そこで西公使は直ちに總理衙門と言つて日本の外務省のやうな役所かあります、それへ掛合つて杉山書記生の生死を確め、速かに暴徒を

捕へることを嚴談に及びました、此日守田大尉は未だ六條の舊公使館、即ち公使館附武官の住宅に居られますると、夕方の事ですが、日頃沈着なる柴中佐が忙だしく駈込んで参りました「守田大尉、イヨ／＼事が起つた、直ちに公使館へ引揚げよう」「如何したですか」「杉山書記生が殺害された、正確に殺られた、イヤ義和團ぢやない、官兵ぢや、爾も董福祥の兵ぢや」「守田」「それは愈々官兵も公然敵對して來ましたな、では引揚げませう」と言つてソ／＼に仕度をして、御兩人も引揚げて仕舞ひました、安藤大尉はモウ兩三日前から公使館の方へ行つて居られましたが、此の夜英國公使館に於きまして、各國公使が會議を開くことになりましたから、西公使も無論御出席になります、其の御出席に夫人峰子に向はれました「己は是より會議に出掛けるが、ソノ會議の模様は依つては死を決して籠城するかも知れない、いよ／＼爾と決した以上は、婦人と雖も男兒と共に敵を防ぐ位の心にならんければならぬ、若し又た防戦の策盡きて死するときは決して卑怯の舉動なきやうに、今から心算が肝要だぞ」「斯く言れますと峰子夫人は莞爾と笑ひになつて「阿郎、妾は不束な女ではありまするが、萬一の時には阿郎のお手を藉りませんでも美事に自害をする覺悟でムいますから、それは御安心を願ひます」と言れたさうですが、流石は公使夫人です、黒猿は九月二日の夜、天津領事館に於て岡澤中將閣下と、西公使夫人とに拙き講談をお聞きに入れ、講談終つて後、其の席上で二三の籠城談を公使夫人及び其のお附の方から拜聴致して居りますから追々講演しますが、公使夫人峰子は明治元年のお生れて、本年三十三の厄年であります、公使へ御縁附に相成りましてからは淑徳の譽れ高く、又た平生文藻にも富まれまして、お詠みになられた和歌は大分おありなさるさうでムいます、今其の二三を承はつた儘演へます

時鳥



枉宇たしかならねと思ひ寝の夢の浮橋なきわたる哉

盛

こゆるぎの磯立ちならす乙女子のすしの袖をとふ螢かな

夏 月

ふくるまでひとり涼みておつる哉軒のしのぶの露の月影

夫人が御怜愍にあらせられます事此の和歌を伺ひましても分ります、西公使は夫人の健氣なるお言葉に安心されて、急いで英國公使館に出出になると、各國の公使が残りず御出席になつて居られます、英公使マクドナルド氏(陸軍武官から出になつた方)は籠城説を唱へられて申さるゝに「私は今回の事變を以て義和團の暴行とのみ思つて居つた所が、長く清國に在つて此國の事情に精通する米國宣教師が私に向つて言ふには今般の事變は實に義和團徒の所爲のみではなく、清廷の内にも必ずや彼に與するものあらんとした事でしたが、私は最初深く心にも止めて置きませんでした。然るに今日々木人杉山氏の殺害せらるゝに至り、愈々官兵と義和團徒が相通じて居ると云ふ事を確め得た、そこで今我々一同が當地を引揚やうとしても、寡勢で危険ではあり、殊に足手纏ひの婦女子などもあり、徒らに彼等暴兵匪徒の爲めに屍を道路に曝し、各自其國の耻を取るは如何にも遺憾です、就ては我々飽までも籠城の決心をして各國援軍の來るを待つに若かずと思ひますが、諸君の御意見は如何でせう」西公使のお説には吾輩も同意します、假令數萬の暴兵寄せ來るとも各々決死の男を奮つて之を防ぎましたらば半ヶ月位の防禦は出來得るだらうと信じます、順て其中には援軍が到着するに相違ないません、既に我が公使館よりは天津へ屢々密使を差立て、早く援兵の來る様に申し遣はしましたが、方々も又た御同様であらうと存じます」西公使が此の言葉を發されましたのも我が

公使館に在る諸氏の勇氣あるが爲てういまして、實は公使が諸氏の決心を代表して言れたものだそうて、スルど各公使は残らず此の説に賛成をいたしまして、茲に愈々籠城と決しました、

(七)

前回までは北京の状況を少々演じて置きましたがお今より又たシーモア中將の率ゆる救援軍の方を演べてそれから、太活の砲臺乗取り、天津北京の籠城實談に取掛る事に致しませう、北京公使館附の武官海軍中佐森義太郎君は、一昨年九月から北京の公使館に居られました、其の前は太田大尉(八十馬)と共に芝罘に軍事視察のため、暫く滞在されたさうです、黒猿森中佐に此のお話を伺ひました時に「尊官は清國の軍事を視察する爲めに芝罘に御滞在なされたですか」と問ひましたら、森中佐は「否、爾うぢやない、歐洲列國が清國に對する動靜を視察する爲め、併し是は委しく話せぬ、曰く言ひ難しぢや、アハ、ハ、ハ、」とお笑ひになつた事があります、中佐には本年の四月廿五日に北京を出立して、五月七日に東京に著かれ、翌日參謀本部に出頭して清國當時の事情と、他に上申する所があつて、それから月末まで東京に居られたです、すると五月廿八日に清國公使西德二閣下、及び天津の領事から、義和團徒日々に猖獗し、各國皆陸隊を組織して天津北京に入れるゆゑ、我國も白河に碇泊の愛宕より兵を北京に入れさせたり、尙ほ本國より至急送兵しなれよ」と云ふ電報が参りました、森中佐が北京を出發する時、已に義和團徒の噂はあつたが、未だ爾ら急に事變が起るとは思はなかつたので、凡て今回の事變は、清國に居る人達にも寐耳に水と云ふ様に俄然事が起つたと申します、是は探偵が届かなかつたので、彼等の準備して居るのが知れなかつたせう、茲に於て我當局者は種々御評議の上、先づ差當り横須賀軍港に居る笠倉艦を太活へ派遣することになつた、森中



佐も海軍大臣よりの命に依つて、此の笠置へ乗て北京に歸ることになりました、尤も中佐は西公使の軍事顧問ですから憚らうといふ時には無論急いで公使の許に行つて畫策する所なくてはなりません、それで五月三十日横須賀に到り、軍艦に乗込むや否や、同日午後六時出帆して、六月四日清國太沽へ着きました、それから上陸の事やら天津へ着した迄の事は數回前に演べてありますから、此所では省いて申し上げませんが、四日は浪が荒くて上陸が出来ないから五日の朝塘沽の停車場前に上陸し、汽車にて天津に着きました、此時は已に天津北京の鐵道が義和團の爲めに破壊されて北京へ進む事が出来ないので、九日まで空しく天津に日を送りました、頓て十日の朝になると、英國のシーモア中將が一千餘の兵を率ゐて天津の停車場へ着し、是から北京へ救援に行くと言ふから、森中佐は宇佐川少尉以下等置の陸戰隊五十三名を率ゐて、停車場に出入りになり、折しも上等待合所に休息して居るシーモア中將に面會しました中將は年齢五十二三、マツマリ肥た赭色顔で、金光燦爛と輝きます軍服を着し、椅子に身を凭せかけて、左右に參謀副官を従へ、莞爾に笑を合せて居らるゝ所は、威あつて猛からず、イカサマ海軍を以て世に轟く英の海軍中將、天晴れ三軍の將帥と見えます森中佐はシーモア中將へ丁寧な禮をなし、自分には日本海軍中佐、北京公使館附の武官森義太郎でありませぬ、先頃公使の命に依つて本國に歸つて居りましたが、今回の事變につき更に本國政府の命を帯びて北京へ赴くのであります』と英語で申さると、中將は莞爾と笑はれ、『アー爾ですか、それは御苦勞であります、我輩はシーモアで、尊官の事は今我が領事から聞きましたが、當地に在る領事中、佛や露獨が鐵道破壊の爲め北京進軍に不同意であるに、尊官は日本が兵數の最も少ひにも抱らず、御同意下すつたさうで、流石は日本武官、私し感心しました』イヤ閣下が御自身にお越になれば彼の義和團の如きは閣下のお名を聞けばかりて風を望て消え走るてムいませう、又各國公使を始め、北京に在る人々は如何位喜ぶか知れ

ません、此の言葉は中佐が外國將官に語ふ様だが、爾であります、先方がお世辭が甘いから中佐も出來るだけのお世辭を言つて見たのださうです、『お言葉で痛み入ります、我輩は太沽沖に居りましたが、北京が日に日に危殆に迫ると云ふから、各國艦長と評議の上、自分に千餘の兵を率ゐて北京救援の爲め赴くことになつたです、尊官は何日天津へ來られましたか』ハイ自分等は五日に天津へ着いて見ますと、モウ天津北京の間は鐵道が破壊して、交通が杜たれたと云ふので、二三日を経たら又た通ずるぢやらうと總督衙門でも云ますから昨日まで空しく日を送つて居たのであります、それで昨夜になつて北京から至急に兵を入れ、ぬと云ふ人もあれ、議論紛々として決しなかつたのであります、結局行くものは行くとし、止まるものは止ると云ふことになつたのであります、『其事は領事から委しく聞きましたが、それで鐵道を修理しつゝ進むのですから、枕木や軌路の如きも持つては來ました、吾輩の乗る列車に一番澤山積んでありますから、吾輩は先へ行きます、尊官は此處にある材料(直隸總督から準備して置いた軌路用の枕木)を乗せて跡から來て貰ひたいです、『承知しました、宜しうムります』と斷をして居る所へ、魯佛獨の指揮官も各々兵を率ゐて來り、皆共に同行を申し込みますから、シーモア中將は之を許しました、サテ六月十日の午前十時半に第一列車即ちシーモア將軍の乗られた汽車は進行を始めました、第二列車即ち森中佐等を載せました列車は十一時に出發し、北倉を過ぐる折弗と窓から見ると轟士成の兵一千内外が天幕を張つて野外に露營して居るのであります日本の水兵が見まして『如何だい、大分居るぢやないか、一、二、三、ムン天幕の数が幾個も續いて居るせは大方義和團を防ぐ爲めに此所に屯集して居るのだらう』爾うだ支那兵も廿七八年の役に日本に負けて目が覺めた見え、中々好くなつたなア』など言つて何の氣もなく通り過ぎました



が、此の轟の兵隊のために自分達が酷い目に遇ふとは夢にも知りませんから全く義和團に備へて居るものばかり誰しも思つて居たです、揚州を通る時も二千ばかりの支那兵が露營して居るのを見つ、零時二十分揚村まで来るとシーモア中將の乗つたる第一列車は止つて居ます、森中佐は第二列車も止めて置いて、車から降りて中將の所へ参り、「如何です、破壊して居りますか」「ム、此先の橋が少し毀れて居る、然し澤山では無いから今修繕させて居る、直に出来るにやらう」此の揚村の停車場と申すは揚村の市街から數町も天津の方へ寄つた南の方にムいますので、停車場から少し行くと、白河に鐵道橋が架つて居て、瀋陽は是を東から西へ渡つて爾して揚村の西を通つて北京方向へ進むので、揚村の市街は白河を中央にして其兩岸にムいます、中々繁華な所です、そこで森中佐は「ア、左様ですか、自分の方も手傳はせるとに致しまして、オイ、コラ、皆行つて手助けせよ、成るべく早く作らんければならぬから早くせよ」と號令を下しました、それから日本は勿論各國の水兵が力を合せて拵へますと、三時間計りて修理が終りました、ソコア一同を載せて半里ばかり進むと復た破壊されて居る、是も直して進むと又た十町程来て毀れて居ます、尤も餘計ではない、僅かばかりだから直に修理が出来、併しモウ日暮にもなつて居し、夜中に進むは危険だといふので、其夜は天津から十二里斗り行た所で列車を止め、車營と云ふことになつたシーモア中將は各國の指揮官を集めて評議を開きました「諸君、未だ半にも到らずして、斯くの如く甚だしき破壊を見る機では、首尾能く北京に達するや何だか分りません、誠に困たものであります」スルと魯國指揮官チャヤン中佐が、私の考へには此の有様では北京の方面へ進めば進む程、必ず破壊が甚だしからうと思ふ、是は寧ろ今夜天津へ引返して、船行の準備をして、明日船で通州まで白河を逆上るやうにした方が得策かと思ふです、森中佐は之を聞くと奮然として進み出て「自分は是まで進んで引返すと云ふは如何にも殘念でなりませ

ん、此の状況で推量するに北京は時々刻々危きに迫るものと思はれるので、片時も早く北京へ達して、各國公使及び其居留民を救ふのが吾々救援軍の義務です、今夜天津に引返して、更に船の準備をして行たなら、北京に達するは六七日を費します、今日の場合、斯る悠長などはしておられんぢやありませんか」と反對しました、一體天津から北京迄行には道は幾個もあるが、何れよりするも先づ卅一二里位の、白河の岸に沿いて行くと、河が曲つて居るので五里位の遠い、其代り道が宜しい、又た白河を溯上るには挽船であつて、一艘の舟に舟子五六人宛使はなくてはならぬ、それで緩々挽くから早く五日も費らねば通州へ着かね、遅ければ六七日も費る、通州から北京へ五里、是は歩行しなくてはならぬ、それゆゑ森中佐が天津へ引返して船で行くと云ふ様な悠長とはして居られぬと云つたのです、魯の中佐と佛の指揮官が顔を合せて「日本人は身丈も短いが、氣も亦た短い」と微聲で冷笑しつつ云つた森中佐も是を聞かれてムツとしたが、那慶事を咎めて居る場合でないから、聞かぬ假態をして居られたさうです、すると英國のミチエール少佐、此の人はシーモア中將の參謀ですが、列席者一同に向ひ「北京救援は一刻も早くせんければならぬことは、日本指揮官の御説の通りであります、併し是から先鐵道の破壊は何程あるか測り知れぬものを無暗に進むと云ふことは勿論出来ぬので、兎に角今夜は此所に車營して、明天早朝に偵察隊を出し、模様を探りながら進める所まで進んで見たら如何でせう」と云つて中將の顔を見た「ム、それが可からう」と此説に決定して、瀋陽中に寝ることになつた、無論列車の周圍に歩哨を配置して、警戒は充分足りなくして居る、唯困るのは蚊が多くて寝られない、中將は汽車の中に蚊帳を釣つて寝て居る、其の參謀官も矢張爾だ、森中佐は心の中に「英國の軍人は贅澤だ」と思つて居ますと蚊の爲めに攻め立てられてなかく寝附かれませんか、起きて汽車から出て日本水兵の歩哨の立つて居る所へ行つて見ると、流石は日本の兵士だ、チャンと任務に



就て見張をして居ます。『如何ぢや、各國の歩哨も皆怠りなく任務に就て居るか』「ハイ、露西亞の歩哨は随分亂暴であります。ブランデーか何かで酔ッ拂つて鼻唄を誦して居ました。『怪しからん奴ぢやなア』今は静かになりましたが、少し前には此所まで鼻唄が能く聞へました。『何處に居つた』彼所に居りましたが、居なくなりましたな、暗くつて能く分りませんが、遊びにでも行きはしませんかな。『哨兵が遊びに行く』と云ふことがあるものか。『併し居らんやうぢやなア』中佐はそれから徐々とお歩きになつて来て御覽になると、呆れたのは此の露國兵だ、歩哨と云ふ大切な任務を帯びて居ながら、爾も銃を投り出して地上へ大の字形になつてグーグー寐入つて居る、其の傍らにブランデーの空罎が轉がッてある、森中佐も餘りの事に暫く無言で見て居られました、露兵は憊う云ふことが度々ある、嘗て御慰問使の岡澤中將閣下が天津から白河を廻る途中、馬頭と云ふ所の岸に船を着けて、同所の守備隊へ立寄られた時、河岸に日本の歩哨兵が居た、恰と黒猿も中將の一行に加はつて立寄りましたから其處へ參つてその兵士に種々話をして、弗と見ると傍らに唐蜀黍の莖で造つた小家が在つて、其前に一挺の銃がある、是は如何したのですと云つて聞いたら『露兵の歩哨が居たが、今銃を置いて何處へ遊びに行つたので露國兵は實に亂暴です』と答へました、露の軍規の正しからざることは呆れたもので、森中佐も呆れて見て居ると、向ふから微聲で話をしながら来る者が三人ある、中佐は唐蜀黍の蔭に這入つて隠れて居なると、來たのは佛蘭西の兵隊三人、何處から盗んで來たか一羽の鶏をギョギョ啼かせて手に持つて居る、サテは大方此の近邊の百姓家に居た奴を奪つて來たに違ひないと思つて、日本の指揮官が見て居るとは知らず、彼等は其の鶏を絞め殺して直に一人は毛を抜き始めた、一人は火を焚く仕度をする處へ、向ふから佛蘭西の少尉が一人やつて來た、森中佐は心の中に彼三人は的切叱られるだらうと思つて居ると少尉は彼等の傍らへツカ〜と近付いて『何だ、それは…』

何をして居るのだ』「ハイ、唯今鶏を奪つて來ました、焼きますから少尉殿、お喰ひなさいまし』「ム、それは旨い事をした、感心〜、恰ど腹が空いてる所だからピフテキの即席料理とは有難い、己には其の股を焼けて喰せて呉れ』と言つて髭だらけの口へ這張つてムシヤ〜喰つて居ます森中佐は是等の様子を見て、『ア、呆れたものぢや、文明國だなど、誇つても、此の軍隊の規律の正しくない處を見ては、軍規は吾が日本の方が餘程嚴肅であると、獨り心中に我が帝國軍隊の規律正しくして、秋毫も犯す所なきを喜ひつゝ、歩を返して汽車の中へ戻つたが、其夜はガツカリ草臥れて居なると、蚊軍の攻撃するをも苦にせず、クツスリ熟睡をしました』

(八)

翌十一日にはシーモア中將が自ら命を下してミツチエ中尉を指揮官といたし、是に英兵五十名を率ゐしめ、線路偵察として前進させ、他は止まつて其報告を待て居ました、頓て暫くいたして、前方に當り銃聲がバラ〜と豆を煎る様に聞えて來た、シーモア中將は屹と行手を打眺め、『ム、敵と衝突したな、ソレ行けッ』と大喝一聲前進の命を下した、汽車は豫じめ準備をして居たから命令の下るや否や、汽笛一聲ド〜と進行し始めた、前方からは二人の兵士が息を喘つて駈けて來る、副官は是を見て、『閣下、報告が來ました』中將『ム、汽車を止め』直に進行を止めた兵士二人は中將の乗つた列車の前に參つて先づ例の如く姿勢を正し、禮をしまして、『報告致します、偵察隊は約三哩ばかり前進しますと、右方より數百の團匪襲來し偵察隊は應戦中でありませす…終り』「ム、承知した…銃聲は益々烈しいな何位かの距離ぢや此銃聲では極めて近いナ』「ハイ極めて近うムります、モウ直ぐ其處です』「ム、早く乗れッ』と二人の



兵を載せるや否や再び汽車を進行させ、間もなく近付いて見ると今や火水になつて應戦最中だ、敵は義和團匪ばかりであつて銃を持つて居る者は至つて少ない、併し七八百の團匪の敵に對して、偵察隊は僅かに五十名に過ぎないのだから、一生懸命に應戦してもなか／＼の苦戦だ、指揮官の中尉を始め、兵士等一同、皆士手或は楊柳の蔭に躲れて防いで居る、總指揮官のシーモア中將は是を見るより汽車の中から「一斉射撃」と號令を下した、各國指揮官も續いて「一斉射撃、チーター」の號令を殆ど同時に發したから、全隊の兵士瀟車の窓から筒先揃へてボン／＼ペラ／＼雨霜の如くに打出した、敵の團匪は見る／＼中にパタ／＼と將士倒しに倒れた、其の中に汽車も進行を止めたから、軍隊はバラ／＼と飛降りて一層烈しく打出した、スルと團匪は堪へかねて逃始めた、先刻から敵の爲に苦められた偵察隊五十名は得たりと突入り、指揮官の中尉を始め一同疾風の如くに追蹙けた、中尉は大音揚げ「應殺しにせい、／＼、残らず撃ち取つて了へッ」と號令を掛け、無二無三に追ひ着めた、さア恠なつて來るとモソ絶體絶命に逃げ後れた三十人ばかりの義和團徒は皆楊柳の木へスル／＼と攀ぢ登つて、何か頻りに呪文を唱へ出した生命が危なくなつたから、楊柳の木に登つて呪文を唱へるとは随分馬鹿／＼しい癖だか、彼等の頑冥無智なる所を見ると又た氣の毒なもので是は黒猿の拵へ事ではない、北京公使館の左手の森中佐の居らるゝ所中佐から直接に聞いたので、高津代議士も、押川方義君も此の嘶しを聞かれて皆覺えず失笑されたことがある、彼等團匪は呪文を唱ふれば彈丸も身體に中らないと信じて居るのです時に英吉利の中尉は是を見て「ヤア馬鹿な奴等ぢや、打て／＼」と號令する、ボン／＼打ツ、と皆的中して楊柳の上からパタリ／＼と落ちます、英兵の中には最前の仇討だと言つて楊柳の真下へ行つても尻の方から突かうとすると、彼等は最後座を一發プ、是には英國兵も避易した、瞬間に生残りの義和團三十餘名、盡く殺されて了ひました、コノ戦ひに與かつたのはシーモア中將の乗つ

たる第一列車と、森中佐等載せた第二列車だけであつたが此時又た三四の列車が追着いて來たが、是には露佛と英兵も乗つて居るので、忽ち無数が殖えて來て左の通りになりました

英吉利九百五十人(シーモア中將)

露西亞三百五十人(チャキン中佐)

獨逸四百五十人(マオンペン大佐)

佛蘭西百五十八人(某中佐)

米國百人(マツカラ大佐)

日本五十三人(森中佐)

伊太利四十人(カラブリア大尉)

奧二十五人(某少尉)

合して二千零五十五人、此人數でもつて十二日十三日と進んだが、鐵道の破壊は進むに随つて益々破壊して居て半道隔位に修理しなくてはならぬから、實に困つたのであります、人夫は多分に連れ來ず、水兵力を添へて修復するが、何分素人であるから抄取らぬ、併しまア如何か慥か修理しつ、十四日には郎坊より少し先まで進んだ、此時第二列車、即ち森中佐等の乗つたる汽車が機關へ水を入れなくつてはならないが、困つたことには唧筒を毀して仕舞つた、此所まで來ると幸ひに井戸があつたから、釣瓶を探して汲入れよとすると釣瓶がない、士民は皆逃げて了つて空家になつて居て、道具は持つて逃げたと見えて、家の中には何にも無い、稍との事で桶を一つ見付出して、是に麻繩を着けて釣瓶といたし、又大きな瓶があつたからそれへ水を汲入れました、森中佐が「さア皆總掛りて行れ／＼、コレ／＼何を遊んで居る、全員殘らずやれ」中



佐殿、總掛りと被仰つても水を運ぶ桶が爾うはありません」森「それでは貴様の持て来た飯を喰ふ茶碗で運べ」そこで一人はドン／＼瓶へ汲込む、他は皆飯を喰べる茶碗、或は湯呑を持ッて来て居るからそれで運ぶ、六月の中旬には北清は幾んど日本の土用位ゐる暑さだから、兵は咽喉が渴いて堪らない、運んで来た水を少く／＼飲むと「森」コラ／＼、何故それを飲むか、飲んで居ては掛取らない……水を呑む事は一切禁するぞ……コラ貴様は何を茫然立ッて居る」兵は茶碗を落して毀して了ひました」森「仕方ない奴ぢやなア……口へ合て運べ、呑んでは不可んぞ」と云つて森中佐の指揮なさるのも中々骨が折れます、こんな工合で全員總掛りで行つたが、五噸の水を汲入れるに六時間も掛つたさうです、稍この事で汲み了らんとする頃合に、千米突(九丁)ばかり前方に出してある歩哨兵が慌たしく駆け来て「報告致します、義和團匪が數百名前から襲ひ来ります」敵が襲来したとの報告に森中佐はスワと立ち揚り「ム、好し……氣を付け……」と號令を掛け、直に兵を列車の前に配備して待つ間程なく義和團と記したる旗數流を押立て、鎗刀青龍刀を打振り／＼鬨を作つて押寄せた、各國指揮官は言合はされども皆等しく十分引寄せ置いて將基倒しにするの目算であるから、「来た／＼／＼、打つには未だ早いぞ、未だ／＼／＼、早い／＼」と暫くヂツとして居たが頓て時分は好しと距離を測り「チー、チー、打てッ」といふ號令は各指揮官の口より殆ど同時に出了、疾しや遅しと連べかけてボン／＼／＼一齊打出したが前團匪と違つて今日のは中々逃げ出さない、彼等は一齊に「ウツアツ」と鬨を揚げて武器を舞はし、無二無三に打寄せて来る、中には銃を打ちつゝ進んで来る奴もある、其中に一人の大男頭に赤い頭巾を戴き、胸に同じ前掛を着け、足にも赤の印を附けたるが、青龍刀を振かぶり伊太利兵を目懸けて眞一文字に突進して来た、伊國兵はソリヤこそと銃先を列べて狙ひ打たんとする一刹那、彼は早くも手元へ飛込み、ヤツと一聲青龍刀を風車の如くに振廻し、忽ち一人の伊兵を斬殺

し尙ほ一人を薙ぎ倒した、ソノ勢ひ暴れたる虎の如くてあるから伊國兵は已に敗走なさんとしたるとき露國のチヤキン中佐が見て「彼奴を早く狙撃せ……」と號令した、スルト彼は之を氣取つたのか、今度は露の中佐の方へ向つて突進して来たから、中佐は見苦しくも十歩ばかり退出して楊の木の下に身を隠し、只だチヨイ／＼と天窓ばかり出して「打てッ／＼」と號令して居る、隊長の身の上と露兵は飛退りながら一齋に打出した彈は彼の身に當つたものと見え、五間ばかり先の所で一度バタリと倒れたが、又起き上つて三間ばかりの所まで進んで来てどう／＼打倒れた、此奴の倒れたのを見て敵は始めて退出したが、後で其の死骸を見ると、頭から腰に至るまで四ツの彈傷があつたさうです、是も森中佐から聞いた話で決して作り事では無いと、獨逸のフォンベン大佐が此の死體を見て「是程勇氣膽力がありながら……惜いものぢや」と言ッて嘆じたまさうです、サテ水も汲込み一同休息して居る所へ、シーモア中將の許から森中佐へ傳令が来ました、其傳令が、森中佐に向つていふには「中佐殿、唯今落岱に殘してある我が守備隊が團匪のために襲はれて、頗る苦戦最中ぢやと云ふ報告が参りました、司令官は中佐殿の乗車を落岱に還して我兵を援はれたしとの事であり、尤も司令官閣下も同乗せらるゝさうです」好し、承知した……サア落岱に殘した英の守備隊の團匪に圍まれて、頗る難儀して居るといふから、救ひに行くのぢや……汽車を還すのぢや……早くせー」と命令を下しまして、急に其準備をして居る所へ、シーモア中將も参りまして此の列車に乗り、直に進行を始めました、楮又落岱にゐる五十名の英兵は何で殘したかと云ふと、折角修理して進んで来た鐵道を團匪の爲に又た破壊されては困るし、其の後方即ち天津方面の連絡を絶たれぬ様にする爲め此處に殘したのであるそれが敵に襲はれて爾も苦戦しつゝあると云ふのだから、皆心配して汽車は無論全速力で引返したので、此の列車には英兵百五十、佛兵百、露五十、日本五十二、合して三百餘名の兵が乗つて居りました、頓て落



岱に近附いて見ると、守備に残した英の兵は大なる家の中に立籠つて必死と防戦して居る、七八百の團匪は其の家を二重三重に押取圍んで攻撃して居たが、敵は小勢と侮つて緩々と落着きはらひ、英兵の中に一人此家を扱出して聯合軍に報告した者があつた事も、又た援軍が来た事も一向御存知ないから、最早此家の中に居る數十洋鬼兵は袋の鼠、籠の鳥、煮て喰ふと焼て喰ふと我々の勝手だと言ねばかりに遊み半分は攻撃して居たのです、所へ俄然一輛の列車疾風の如くに走り來つて、中には數百の聯合軍が乗つて居たから、彼等の驚き方と狼狽は一ト通りでないで、シイモア中將は汽車の中から一齊射撃の號令を下した、各國指揮官も續いて一齊射撃の號令を下すと、ボン／＼バラ／＼弾は雨霰と飛んで行つた彼等は益々周章へて逃げ様とするもモウ贅だ、近くに居た奴等は將其倒しにバタ／＼と打倒れた、其の中に列車は止まり、各々先を争ふて降るが早いのが「膝姿、一齊射撃チーター」の號令で、片膝つひてボン／＼打たせる、彼等はハヤ堪り兼ねたと見えて一生懸命に逃げ出したが、二百餘の死傷を投つた儘で逃げたのであります

(九)

義和團が逃げ出したから、今まで圍まれて居た英兵はカツと一息、籠つて居た家の中から出て來て大きに喜んで、其の隊長はシイモア中將始め各國の指揮官に丁寧に禮を述べると、シイモア中將は「如何ぢや死傷は何人ばかりある」「隊長ハイツ官が一人(少尉)に卒一名重傷を負ひました、其他は無事でムリです、煉瓦壁の堅固なる家の中に於て防いで居りましたから、戦闘の長い割合に負傷が少なうムいしました、それに彼等の中に銃を持つて居る者が至つて少いからであります」「ではもう二十五名増加して野砲一門置いて行かう」と英兵二十五名を増し大砲一門残して又た郎坊へ引返しました、サテ郎坊へ着くや直ちに指揮官會議を

開き、シイモア中將は一同に向つて「予は一日か二日間にて北京へ達する事が出来るだらうと思つて居たから、糧食の準備も充分にはせず、又た彈薬も亦澤山に持て來なかつたのである、併し此の状況では北京に達するには幾日の子を費すやら、豫じめ圖り難いか、サテ如何したら宜しからうか、諸君が意見のある所を充分に述べて戴きたいです」「中佐自分の考へては、寧ろ瀝車を捨て、陸上を歩行するに若かずと思ひますが」「陸上を行くと幾日間要りませう」「一晝夜ならば必ず北京に達します」と云ふと露國のチャギン中佐が「イヤ一晝夜位で到底北京に達することは出来ません吾輩も此道は一度歩行して知つて居る、熟知いたして居る、道路が實に悪くて、若し雨でも降ると恰ど湖海の如くになつて幾日間要る事やら先が知れぬです、晴天が続いても四日間には必ず要る日本人はいざ知れず、歩行と云ふことに不慣な歐羅巴人では、一日や二日の間では進も達しられないものでないです、それで四日要つて首尾よく北京に達するも、城門を這入るのが中々容易なことではない、北京城門は頗る堅固ぢやから、若し之を閉めて入れない様な事になると、進退に谷まるです、兎に角一週間の間は要ると見積つて宜しからうと思ふんで、柴中佐に反對した、そこで一同皆首を垂れて考へて居られたが、稍あつてシイモア中將が「デハ一週間に北京に達すると見做して、糧食は何日間だけありますな」「それは調べさせましたら、各國平均して三日間だけあります」「ハア平均して三日間分、では足りない、憊うしよう、陸を行くと決定して、糧食と彈薬を一週間分天津に取りに遣らう、取り寄せて、爾して陸を歩行することにしよう」「それが宜しうムいます」と愈々糧食取寄せと決定し、其夜一列車を天津へ送ることに相成りましたが汽罐用の水が欠乏したから、又た水を汲入れるので、其夜は遣れない、十五日の朝になつて稍と出發させた、で此の列車が糧食を積んで戻つて來るのを待つて居ると、午後四時になつて、返つて來た「ヤア來ました」「ム、來た、では充分



糧食彈藥を持ッて来たであらう。皆歩行の仕度ぢや」と號令して、各自に其の準備をして居る所へ列車は來着し、乗つて居た英の中尉が悄然としてシーモア中將の前へやつて参り「閣下、残念でありました」「如何したか」中尉「天津へ達することが出来ません」「ナニ天津に行かれぬ」中尉「ハイ残念です、揚村以南の鐵路は大いに破壊されて了ひました、如何かして行きたいと思ひましたが、如何しても、ハイ誠に残念です、一夕所や二夕所ではありません、破壊の箇所が、且つ閣下義和團匪はかりの所爲ではありません、羅士成の軍隊が匪徒と合體して居ります、且つ閣下義和團匪ばかりたす、破壊したです」と復命したから流石のシーモア中將も是を聞かれた時には「フム」と云つて眉を顰めて居られました、「それは事態容易でない、官兵と匪徒を相通じて居るだらうとの説は天津で領事から聞いたが、併し眞逆にソノ様な事もあるまいと思つて居た、愈々彼等力を合して抵抗する様では我々も亦た是に應ずるの策を立てなければならぬ兎に角會議をして見やう」と直さま各國の指揮官を集めて此事を嘶し「我々は天津出發以來に數日を經たが、行路未だ半である、而して當地から北京に達するまでの鐵路は破壊の箇所益々多い様子持來つた軌道枕木等は最早や少數となつて、進も此の鐵道を修理しつゝ北京に達すると云ふことは一日や二日では出来得べき事でない、且つ天津を出發して以來、北京の状況は少しも分らず、諸君も大きに北京の安危を氣づかつて居るぢやらう、依つて私が思ふには、一先づ翻つて後に戻り、楊村と天津の間の鐵道破壊を修理し後方の聯絡を附けて糧食彈藥を充分に取寄せ、然る上此地より汽車を降り、陸路通州を経て北京に入るの方針を取つては如何ぢやらうと思ふのですが、諸君の御意見は」といふと森中佐は直らに進み出で「閣下の御説も一理ありまするが、併し楊村天津の鐵路破壊を修理して後方の聯絡を全するには是又一日や二日にては逆も出来得べきことではありません、我々の任務は北京公使館及

ひ其の居留民を救ふに在るので、他に決して我々の目的は無いのです、然らば今日の場合、後方は拾置いて宜しく一意専心北京に進み入るべき方針を取らなくてはなりませんと思ふです、己に行路の半まで來りながら、假令糧食が不足にもせよ、此の二千の大兵を有して空しく天津に引返し、それが爲め萬一北京に在る列國公使をして敵の慘殺する所と爲らしめば、我々は上 陛下に對し奉り、下國民に對し河の面目あつて見ゆる事が出来ませう、閣下願くは後方を顧みず、一直線に前進する事に決せられたいですと」森海軍中佐は滿腔の熱血をそそぎ、口角泡を飛ばして最も激烈に論じられたさうです、スルト流石に英の東洋艦隊司令長官シーモア將軍だけあつて、始終微笑を含んで聽いて居りましたが、頓て「森中佐の言ふ、所至極道理である軍人たるもの、其精神でなくてはならぬ、尊官は誠に好武官ぢや、が吾輩も引返すと云ふのでは、ない、先に言ふ如く敵は義和團匪ばかりにあらずして、官兵も匪徒と力を合せて列國に抵抗すると云ふ様なことがあつて見れば最早や清國政府が敵である、即ち清朝と戦ふのであるから、其の心算で行らんければならぬ、故に十分後方に聯絡を附けて置いて、而して後進させれば、我々は敵と敵の中間に狹まれ、孤立となつて進退に谷まり、徒らに犬死する様な事になるかも知れない、此邊の事情をよく考へて下さい」といふと、各國指揮官も舉つて中將の説を賛成いたし、トウ／＼森中佐の御意見が容れられませんでした、そこで中將は又た一同に向い「斯く決したる以上は一刻も早く楊村に引返して、鐵道修復に従事せなければならぬ、依て第一列車及び第四列車は楊村に還つて修理に従事し、第二及び第三列車は郎坊と楊村の間を往復して、敵の暴行を防ぐやうに」と命じ、シーモア中將は直に楊村に向つて引返ししました、そこで第二と第三の列車は楊村と郎坊の間を往來し、義和團や清兵が破壊すると困るから怠りなく警戒して居ります、スルト六月十八日の午前十一時少し過の事でありましたが、森中佐は露獨英の兵と共に力を協せ、第三列車へ汽罐水の



補給をいたそうと思ひまして、頻りに水を汲入れて居りました所へ、歩哨と申して見張に出してある兵がバク／＼と駈けて参り「報告致します、前面より騎兵約三百ばかり襲来します」と報告した歩哨の報告を聞いて獨逸の指揮官ウーストス大佐が「可し……森中佐、私は清國の事情は能く知らんが、義和團徒に騎兵があまりますか」「イヤ彼等に騎兵はありませぬ、官兵に違ひなひです」「ドス、アハ彌々以て清國政府が敵ぢやな……宣し」と直に命令を下して、英兵を汽車の右側に、日本兵と露兵を其左側に備へさせ、獨逸二箇小隊ばかり獨逸の大尉之を率ひて前進致します、森中佐は獨逸の腕前を實際に見るのは今日が嚆矢ですから、部下の兵に向ひ「貴様等好く、獨逸の戦鬪を見て居れ、乃公が思ふには、露や佛に比べると獨逸の方が必ず優つてゐる所がある」少尉「爾でせうか」と言つて見て居ると、其中にハヤ獨逸は敵の騎兵と隔たること約五百米突、即ち四丁半の所に至るや、獨逸官は「散れッ」と號令を下したり、是は兵が一ツ所に集つて居ては多く撃たれるから散兵と申してバラ／＼散らかつて應戦するのです、兵士は士官の「打てッ」と云ふ號令に一齊に打出した、敵の騎兵も皆馬から飛び降りて、暫時應戦致しましたるが、獨逸の銃先鋭くして敵し難くや思ひけん、皆馬に乗つて逃げ出した、其逃方が餘程滑稽なやうです、森中佐のお話し「曲馬を見るやうだ」と被仰つた、何で曲馬を見るやうだ」と云ふと彼等は馬に乗つて三四十間逃ると又た一齊に飛下りて、バラ／＼打出して、又た飛乗つては逃げ三四十間行くと又た降りてポン／＼バラ／＼打出しては、飛び乗て逃る其の早きこと連も日本騎兵の及ぶ所でないやうです、見て居る兵士等は皆「バラ／＼」と笑ひ「ヤア全然曲馬じや／＼」「ム、如何にも馬戯ぢや／＼、戦争と曲馬を一所に見る様なものだ」と嘯して、面白がつて居たやうです、此時又前方の森の中から三百許りの義和團匪を先頭といたして、數百の官兵其後に續きソロ／＼と現はれた、彼等は何時も團匪を先に立て、其後から進むやうです、匪徒等は銃砲も呪文を唱ふ

れば身の中らぬと思つて迷信して居るゆへ、恐るゝ氣色なく真先に進んで中々好く戦ひ、容易に退かぬが、例も清兵が潰れ走つてから團匪は止むを得ず逃出すやうです、サテ英と獨逸の兵が此の方面へ向つて射撃して居ると、又た左方からも七八百の敵兵が進み來つたから、魯と日本の兵が之に當りました、森中佐は其の中央に突立つて見て居ると、敵の陣中に立派な旗が翻つて居る、其の旗は赤地に「軍」と云ふ字を金で繡刺した方旗であります、少尉「軍旗が出て來たな……甘肅軍ぢや」少尉「中佐殿、軍旗の甘肅軍とは如何なる兵であります」「北京の南門を守備して居る有名なる軍旗ぢや爾も將官ぢや、董が自ら出て來たに違ひない……サア是迄は義和團匪の如き烏合の暴徒との戦争ぢやツたが、今からは官兵との戦ひぢやぞ、確乎やれッ」「中佐殿、生意氣に突撃して來ますな」「ム、流石は董軍ぢや、生意氣ぢやな」敵は好い面の皮で強いと生意氣ぢやと云はれます「充分に引寄せ打て、未だ／＼」と頻りに號令を掛けて防戦して居られます

(十)

シイモア中將の率ゐる北京救援軍か、斯の如く困難の境に陥入つて、義和團と官兵とに挾撃にされ、進退窮つて居るとは、在北京の公使始め一人として知る人はありませんから、皆々モウ救援軍が着きやうなものだ、首を延べ、足を翹て待つて居ました、或日の事西公使が「シイモアの率ゐる陸戦隊が十日の午前に天津を出たことは確かであるから、遅くも昨夜は着くだらうと思ふたが、今朝になつても未だ來られんのは如何いふ譯ぢやらうの」石井「左様でありますな、今日は十二日ですからモウ着かなくてはなりません……それとも鐵道の破壊が甚だしくて、進も修理しつゝ進むと云ふことが出來るので、船が白河を溯り



つゝ居るか、或は陸行して来るのではありませぬかなア中佐「自分の考では途中國匪の爲に障害されて居るのではないかと思つてすが」公使「或はさうかも知れん」「團匪ばかりなら撃破して来ませうが若し官兵が團匪と合して救援軍を喰止めると云ふ様なことがあつたなら、首尾よへ達せられるや否や、豫め分らんですなア、それに海兵は陸隊に掛けると如何しても歩兵の様には行かんですから」公使「爾ぢや……と」言つて暫らく公使は黙考して居られましたが良あつて「ム、爾だ、あの依田を呼んでくれ……」依田をと吩咐られた間もさく依田伊三三君が来まして「何か御用でムりますか」「君を又た煩はさなくてはならぬ……まア其處へ掛ければエー」依田「ハイ如何なる事でも此際ですから自分に出来るだけのことは屹と致します、生命のあらん限りは誓つてやります」公使「君の事ぢやからそれはモウ必ず仕遂げるに違ひない、此方も亦た君を見込んで此の任務を授けるのぢや……外でもないが是から一ツ天津へ下つて貰ひたいぢや」依田「ハイ」「天津に行つて領事其他の人々に此の情状を詳細に報告するに先だつて、一時も早く兵を北京へ送るやうにするぢや、君も知る如くシーモアの率ゆる救援軍が十日に天津を出で、破壊した鐵道を修理しつゝ進むと云つて来て居るからモウ疾くに着かなくてはならぬのに未だ着かない、途中から引返したのか、又は途中で敵と戦ひつゝあるかと、少しも分らん電信も最早や一兩日前から不通になつて見ると君を煩すより外に仕方がない、情願行つて呉れ」「宜しうムります自分も行けるか何だか分りませんが……心には誓つて任務を果す心算であります中佐「或は途中でシーモアの率ゆる救援軍に出遇ふかも知れん、」公使「爾ぢや……出遇つたら一所に又た引返し来て可い」石井「君の事ぢやから扱目はあるまいが、併し餘程危険ぢやから……萬事注意して行き玉へ……全體林良茂が居れば彼人を遣るぢやが、折悪く中島君を送つて太沽へ行た切り未だ返らんものぢやから、多分彼人も天津に居るぢやから」公使「林が天津に居たらば、ソノ妻子は愈々といふ場合に公使館へ連れて来て

置くから、心配するなと傳言してくれ」此の西公使のお情深き言葉に一同感涙を流しました、依田氏は公使始め人々に暇を告げて公使館を立出てましたのは、實に今年六月十二日の正午ですが、玄關先で鄭通譯官に向つて「君、僕は恐らく今度は無事に天津へ達することは出来まいと思ふよ」「クレども君、何とかして無事に達して早く兵を送る様にして呉れなくては、公使始め我々が困るよ」依田「イヤそれは達する……達するが……無事に達することは出来まいと云ふのだ、途中で何か事がある様な気がするよ」言つてアハハ、と笑つたさうです、随分快活な人です、其日の午後六時過に馬頭と云ふ所まで来て船を雇つて置て、其夜は馬頭の宿屋に泊りました……北清地方の宿屋の穢いことは數回前にも演べて置きました、又一寸述べるとに致しませう、黒猿が馬頭に着いた時に宿屋だと云ふのを見ましたが成程旅愁などは唐人の寢言だと思つて居たのは誤りで、北清地方は旅愁旅憂と云ふのも無理はない唐人もマンザラ嘘は吐かないと思つて、支那の旅館には大抵長屋門の如きものが在つて、門を這入ると中央に方形の廣い庭があり、一方には十五六疋の馬を繋ぐに足るだけの厩があつて、他の一方には六疊敷位の小部屋を建連ねた長家があります、それから正面、即ち眞直に突當つた所に上等のお客を泊める正廳があるが、十二疊敷位の間で、其の三分の一位は臥床になつて居る、即ち立派な寢臺があるのだ、他の部分は土間で、方形の支那テーブルと支那椅子二三脚を置く、元來支那人は塵敷の掃險に注意しない性質で、潔癖家は皆無の國と見えて椅子も卓子も臥床も壁も天井も塵埃だらけで、壁の上には悪詩などが落書きされ其所邊一面に糞や汗などが灑した跡などが、又た種油に汚れた所もあつて、宛然て我が國の空家の様です、こんな工合だから此處に泊つた旅行者は、行き暮れて山間の辻堂に一夜の夢を結んだ古の武者修行者も宜しくです、是れは黒猿が實際に出會した宿屋ばかりではなく、大抵の旅宿屋は皆爾ださうですが此家に泊り込むと或る意味に於ては又た随分面白



味があります、それで支那には古から南船北馬と云ふ言葉がある南清には揚子江の長流や運河の水運、其他の大湖が所々に在って、何れに参つても船に乗る者が多い、北清は是と反對で馬に騎つて曠原平野を乗り廻すが常だ、即ち驢馬騾馬を使用する事が多いこんな工合で南清は船を多く用ひ、北清は馬を餘計に使ふから南船北馬と云ふのださうです、日本人が旅行記文に南船北馬の文字を用ゆるのは少し間違つて居はせぬかと思ふ……それですから、北清の此の旅店には一方に厩を設け、旅客が着くと客の世話をするよりは先づ馬の始末をするのを第一とする鞍を卸す、草料を切り、豆を洗ふ、水を汲む、丁稚も小僧も主人も番頭も都て皆馬の爲に奔走する、已に馬を以て第一の御客様として馬の宿せしむること多きが故に、正廳前面の廣庭には馬糞がコンモリと堆かく積まれて、此所彼所には馬の糞が散亂して居て、其の臭きこと殆んど堪へ難き程である、次に便所だ、大抵の宿屋には厩と正廳の間なる庭の隅に、唐蜀黍の莖で圍のをつけた所がある勿論屋根もなければ戸も無い、是が支那人の厩で其中は一面の土間で、壺も桶も無い、毎日掃除して排泄物の取片付をして、跡へ灰を撒いて置くから、臭氣は我國の便所の様に甚しく無いのです、昔は漢の劉邦、即ち高祖は、鴻門の會に厩から逃出したとしてあるが、我國の雪隠ならば窓を破るか壁を毀すか鬼に角容易のことではないが、劉邦の逃出した厩も矢張り此類の構造であつたらうと思ふ、して見れば劉邦が雪隠から逃出したと云ふのも何も不思議なこととは思はれます、それで凡て支那の宿屋には浴室が無い、旅行者が浴しようと思へば、盥へ湯を買つて……錢を出して買うのです、ソノ湯を買つて手足を洗ふ位で満足しなくてはならないま宿屋の講釋は是位にして本文へ掛らう、サテ依田伊三三君は馬頭の宿店に泊り込んで食事を済まし、疲れたから臥床に横になつて居ると主人が入り來つて「へー、お客様が疲れてムいなしよう、誠に申し兼ねました、唯今三人お客様がお出になりましてムいします、如何か合宿を願ひたいのでム

います、宜しい、吾輩は一人で淋しいから、合宿結構」と承知すると主人は喜んで「多謝」(有難い)と言つて立去つた、間もなく三人の旅人が這入つて來て依田君に挨拶をして、それから椅子に凭つて食事をした、中に四十位な男が依田君に向かつて「求你的喜愛(御交際を願ひます)」と言ふから依田君も「情願を交際を願ひたい」と挨拶をしました、「君は何處から何方へ御出です」「北京から天津へ行くです」「ハア、それは北京から來たのですか北京は如何ですか、随分騒がしからうね」「ムン大騒動だ、洋鬼等は(外國人の事)未だ殺されはしないかね」「今朝出立する時までは未だ殺されはしないようだったが、君方は何處から來たのです」「私等は揚村の者です、天津は如何だつた矢張り騒がしいかね、北京にはモウ義和團が入込て來たが、天津も入込んだかね」「天津も大騒動だ、今度は洋鬼等も塵殺しになつて了らうらうよ」「好い氣味だ、洋鬼等は一人も残らず殺して了つて、我が大清帝國に洋鬼の影だに止めない様にしたものだ」と依田君は前回に述べたる如く、辯髪支那服で無論言論は支那人の通りに行つて居るから彼等も日本人とは心附かない「如何が、爾うしたいものだ」「揚村邊まで洋鬼兵が通つて來た爾も澤山來たぞ云ふ噂だが、眞實か」「來た、十日に英吉利、佛蘭西、露西亞、日本などの兵隊が汽車で一萬以上(支那人は事を大仰に云ふ癖がある)揚村まで進んで來た、ヌルト義和團が揚村の鐵橋を毀して置いたから、彼奴等は直ぐ通過が出来なくて面白かつた、併し枕木やレールを準備して來たと見え、二三時間に修繕をして進行したが、その先は所々毀してあるから迎も北京まで進むことは出来なくて、今頃は落俗邊りに止まつて餘程困つて居るらしい、それに今日は如何だか知らぬが昨日は義和團に攻められて、洋鬼兵が澤山に殺されたさうだ、今日邊りは塵殺しになつたかも知れぬ、好い氣味だなア」「フム、それは愉快ぢや」と故らに平氣な顔をして居られます



依田君が思ひまするに彼等の云ふことは素より當てにはならんが併し又たまんざら嘘ではない、シーモア、中將の率ある北京救援軍が、途中でもつて苦戦しつつある事は明かである、併し今頃は何處に居るやら分らぬ、果して彼等の云ふ如く落後或は郎坊邊まで進んで居るものならば、北京行路の半を已に越えて居るから縦合は陸行してなりとも兩三日中には必らず北京に達するであらう、それとも亦た大多數の義和團匪に襲はれて、天津に引返しはせぬかなど、心の中で頻りに考へて居る中に、表の方が俄かに騒がしくなつて來ました、宿の主人は慌たしく駆込んで「モシ、御客様方、イヤハヤ騒がしい事になりました、義和團が當町へ、這入つて來ましたぜ」  
 「ナニ義和團が」と一時はキョツとしたが悟られてはならんと思ひ「何も驚くこととはない、外國人や耶蘇教徒は殺すか知らんが、我々を殺害する筈が無いから安心して居なさい」  
 「それは私共までに害を加へ様はありますまいが、今此の先に耶蘇教の信徒三四軒あります、其の家へ亂入して、家を叩き壊すやら物品を引奪るやら、揚句の果には家内中の男女を殘らず縛りつけて河岸の方へ引摺つて行きました、多分殺して仕舞ふでせう」  
 「ア、爾か、皆見に行くか」  
 「物好きな人達はワイ、喋いて見物に行きます」  
 「ア、僕も行く見よう、其方の三君は如何ですな」  
 「行きませう、君が行くなら同道しませう」と言ふので、それから三人に依田君と亭主と都合五人連て出掛けると、土人はワイ、嘸し立て、皆見に行きます、只見ると白河に沿ふたる原野數ヶ所に烽火を煙ひて、千數百人の團匪が陣を張つて居る「滅洋興清義和團」と大書した大旗小旗を夜風に翻翻とひるがへし、青龍刀偃月刀を樹並べたるその有様、宛然で三國誌の繪にある黃巾の賊を實際に見る様だ、て彼等は引捕へて來た耶蘇教信徒を柳の樹に縛り揚げ、

大師兄とか稱する頭立つた匪徒が、何か言渡して居たが、頓て部下に命じて白河の岸に連行し、老若男女二十餘名を殘らず斬殺して河の中へ投込んで仕舞ふ、斯くして置いて頭分は突と立揚つて見物して居る支那人等に向ひ、汝等を見て如何なる感覺を起すか、彼の邪教徒等は我大清國皇帝陛下の土地に住し、此の清國の粟を食ひながら、西教、爾も邪教を信するとは不埒至極、抑も我が清國には汝等も知る如く、古昔聖賢の立て玉ひたる儒教と云ふ立派な教へがある、然るに之を信せずして、却て洋鬼の奉ずる邪宗を信じ、洋鬼の犬と爲つて我が大清帝國を滅せんとすはる實に憎むべき極である故に我徒は先づ彼等邪教徒を廢殺したいたし、洋鬼を悉く國外に放逐して、以て大清國の滅亡を防ぐのである、汝等志あるもの、宜しく軍資軍糧を獻ぜよなど、大法螺を吹立て居ると、頑愚なる土人は聲を揚げて「ハオ、(好々)トウシヤア、(多謝)」  
 叫び出た依田君も呆れ返つて居る所へ、二人の義和團匪は年齡十八九の最も奇麗な婦人を引捕へて参りました、此處で一才餘事を演べて濟ませんが私しが清國へ渡る少し前に、半込揚場町の石黒軍醫總監閣下のお邸へ伺ひまして「情願清國にお出張になつてあらつしやる軍醫方へ添書して戴きたい」と願ひましたら閣下は快く承諾して呉れましたが、其節閣下が「俺は藝人は嫌ひだ、何故ならば日本藝人は風が悪い、女藝人はお屏を賣る事を専門にし、男藝人も男地獄一點張だ中にはまた博奕を七分營業にして居る奴もある……如何ぢや、お前なども男地獄商賣をやるか」と被仰るから黒猿も思はず吹き出しましたが「いえ、私は博奕も知りません、男地獄などはやりたくても御覽の通りの醜男子でございまして武骨者ですから、迎も買人はありません、又た賣る了前もありません」と申しましたら、閣下はお笑ひになつて「爾……餘り女に好かれそうな顔色でもないなア……然し己の様に痘痕の無い所が未だ取得があるアハ、ハ、ハ、ヤ、邪魔事は



如何でも可いが前支那へ行つても、唯戦況を見聞するばかりでは不可ないよ。人情風俗と云ふ事によく眼を注いで観察をして来るのが肝腎だ其中にも支那婦人の状態を細かに調べて来て、講演をしまさい。如何も従來の軍談は唯だ徒らに大言壯語を放つて、イヤ何萬の敵を破るとか、何千の兵を撃殺したとか云ふやうなことはかり多くつて、優美な所がなくて不可、女が無くては社會が成立んと云ふことを思つて、ソノ心算で材料を拵へて置いて」と懇切に被仰つて下さいました、石黒總監閣下は私が申さつとも、一度閣下にお目に懸つた人は御存知でもいませう、至つて洒落な方です、御身分は堂々たる日本帝國の軍醫總監、而も正四位勳二等功三級男爵たる貴族であらせられながら、我々如き微々たる一藝人が参上しても、決して高ぶらないで話になりませう、眞に磊落な方です、眞に磊落な方です、黒猿は同閣下の御説諭に従つて、支那へ行つてから、戦況ばかりでなく人情風俗、最も婦人の状態に心を注いで見ました、天津では藝妓買ひにも連れて行つて貰つた、地淫も買つて見た、大家の奥さんや令嬢の様子も見せて貰つたり、通譯官に聞いたりしたから、比較的婦人の状態は知り得た心算です、是等のお断しは追々に申し立てることに致します。長々餘蘆なことを演べて忍入ますが、是から本文に掛ります、サテ義和團匪が捕へた来た婦人は、年齡十八九にして中流社會の令嬢らしい品のある娘、其の奇麗な事と言つたら見てさへソツとする位、若し支那流に之を賞めたなら、艶色牡丹を欺き、嬌容海棠を壓すとも言ひませうが、又た曲阜馬琴流に形容すれば「香ひとばる、初花に六夜ふ月をかけたるごとし」とても書くでせう、ムルト義和團の中で大師兄とも云ふべき頭分は是を見まして「コレ、其の婦人は何者ぢや」「ハイ是は我々の最も憎くしと思ふ耶蘇教徒の娘であります如何せ殺すべき婦人ではあります、餘り美しい女ですから大師兄のお眼にかけて、それから後にしようと思つて連れて参りました、頭分、ム、ソウか此處へ連れて来い」と命じたから二人の團匪は情け用捨も荒々しく、

絶入るばかりに泣き悲しむ此の可憐の一女子を、悪鬼羅刹の如き頭分の前に曳き据えますと、頭は尻を下げてデロくと顔を眺め「ハオニヤン、(好娘々々)と伝きながら、恍惚として鰐の様な口から涎をダラと滴らして見て居たが、頓て猫撫聲をして「好娘、お前はこんな佳い容色を持ちながら、何故耶蘇の様な邪教を信するのぢや、察する所お前をして國を害する邪宗を信仰せしめたのは、其の罪畢竟父母に在るので、決してお前の罪でないといふ事は、我が義和教の神仙明かに是を知る、だからお前が今邪宗を脱して我が義和門教で這入るならば、我等は我が信仰する神仙に告げてお前を十分に保護するぞ、如何だ、改宗しては、我々們はお前に對してなかく親切だぞ」と形に似合ない優しい聲を出して、親切らしく言ひ聞けますと、娘は無言のままに暫らく泣いて居りましたが、稍おつて頭を擡げ「妾は神に仕ゆる清浄な身です、御前達の様な暴徒とは言葉を交すも汚らわしいと思ふくらゐ、此の穢らわしい世に存命へて居るよりは、一時も早く天國に到つて安樂の身になりたいから、情願殺して下さい」と姿の媚いにも似ず、キツパリと言ひ放つて兩の臉を開き愛らしい紅唇をしめて、最早決心したものと見え、一滴の涙も翻さずに彼等悪鬼の又に罹るのを待つて居ます、此の可憐なる女子の意中を察すれば、天性義侠心に富める依田伊三三君はなかくヂツとしては居られず、如何かなして助けてやりたいと獨り心を苦めたが、如何も致し方がありません

(十三)

此の有様を遠くから見物して居る支那人は種々に噂をして居る。「好い氣味だ、耶蘇教などを信仰するから彼等酷い目に逢ふのだ」「爾だとも、寧ろその事に廻り殺しにすれば好いな」「コレ可哀想なことを云ふなヨ、己ア不憚で仕方がない泣かないで眼を瞑つて、アノ可愛らしい口を締めて殺されるのを待つて居るから



尙の事いぢらしいなやないか 『殺さないで己に呉れれば可いなア』など、口々に言つて居る、義和團徒はその娘をさまぐくに口説きました、宛然と生人形の様に兩眼をヒタリと塞いで、モウ一言も口を聞きません、頭目は之を見て大いに怒り『憎い女奴、我々を暴徒などと罵り、穢ららしい此世にあらんより安樂淨土へ行きたいなど、吐きくさつて居る、我が神仙に對しても此の女郎は助ける譯には行かん、ソレ胸斬にして丁へ』と命じました、是を聞いて見て居た支那人が『胸斬にするなら俺ア下の方を欲しい』と言つた奴があるさうです、助平な野郎で……スルと一人の義和團徒が頭目に向つて『大師兄、胸斬位めては刑罰が輕過ぎます、寧ろアノ樹に縛り着けて焼殺すのも一興ではありませんか』と、爾ぢや……天國へ行きたいなど言つたから、天國だか地獄だか思ひ知らせてやれ、線香の火で焼く』と號令したから堪らない、見る大勢の團匪が寄つて群つて、ソノ娘を縛つた榎の樹に吊し揚げた 『大師兄、何處から焼始めませう』 貴様は頭を焼く……貴公は手を焼く 『私は……』 『汝は胸を焼く、股間は肝心な所ぢやから己が焼くツ』 怪しからん大師兄です、恠い講演をする者諸君は黒猿の造り事だらうと思はるゝ人もありませうが、決して私しの拵へ事ではない、義和團匪が耶蘇教民の婦女子を捕へて、線光の火で焼殺したと云ふことは渡清した人が皆知て居ることだ、北京でも東四牌樓で三人の娘を焼殺したことがある、彼等は頑固黨に馬鹿鎧金をした奴で、道理に暗いから、こんな慘酷なことをして何とも思はないのです、サテ依田伊三二君は、支那婦人の義和團匪に焼殺されるのを見て、不憚に思つたが仕方がありませんから、旅宿に返つて寝て了ひましたが此の様子では天津とても如何いふ状況だか分らぬに依つて、一時も早く天津に着きたいと思ひました、此夜の騒動の爲めに雇つて置いた船人は逃げて了つて分りませんから、止むを得ず翌朝旅宿を立出てまして、慈と白河の右岸、河沿の細道を歩いて一里ばかり下りますと、幸ひに船がありましたから雇

ひ入れて乗る事は乗つたが、折悪く逆ひ風で、船が思ふ様に進みません、そこで此の十三日の夜は河西務と南蔡村の間なる白河の岸に船を着けさせて、船中に一泊致しました、翌る十四日の明方、未だ薄暗い中を目を覺して見ると、船頭は未だゴクゴクと鼻をかいて寝て居りますから、依田君大音に『爾と（お前）と起しますと、船頭は稍やく眼を覺して『何だ、客人、未だ暗くて不可ま……船は未だ出せませう』 船を出さなくても可い、今日も風が逆で矢張り船では日が要るから、己はもう此所から上陸して歩行する……さア船賃は天津迄の分を遣るぞ』 船人等は非常に驚んで 『それは有難い、船賃さへ呉れば歩かうと飛ばうと其方の勝手だ……併し客人、朝飯がまだ出来ない』 依田『イヤ腹は減らない、南蔡村へ行つて喰ふから可い、顔を洗ふ水を呉れツ』 そこで船人は白河の濁水を明礬で澄ましたのを桶に汲んで持つて来た、此の白河の濁水は實に甚い泥水で、恰ど東京の大川筋の雨餘りの様だ、色が眞黄で泥半分水半分と言つても可い、それで此邊は井戸が無いから土人は此の泥水を桶や瓶に汲み込んで明礬で澄まして飲む、又は雨水を瓶に貯へて之を用ひる者もある、併しそれは中等以上の人がするので、最下等の土人は此の見るも胸悪くなる様な泥水をガブ／＼飲んで居る、北清地方下等の土人は實に人間とは思えない、其中にも此白河の船頭等は最も甚だしいので、第一朝起きて顔を洗はないで、飯を喰ふ、其の上流の方で大便をして居ると、其の真中で平氣に水を汲んで喰んで居る『貴様、穢くないか』と聞くと『腹の中から出るものが穢ない譯がない』と凭う答へる、大便の仕方などは随分甚いが、是は餘り尾陋だから止ませう、彼等は穢いことも知らないが、耻も亦た知らぬ、白河を遡る時は帆柱の先へ綱を付けて四五人で此の綱を引張つて、所謂曳船で登るのだ彼等も朝の中は衣類を着て居るが、晝中暑くなつて来ると丸裸體になる、それで帽帯も着けないで大々的〇〇をブラリ然として爾も外國人の前で……それで帖として耻ない何と諸君、呆れ返つたものではありません



か、是は北清地方の實狀を見た儘に述べるので、支那と云ふ國が如何なる國であるかと云ふことを研究なさるお人には少しは參考にもなることだらうと思ひます、曩は九月十七日に高津代議士と共に北京を出立して歸國の途に就きました、其夜は通洲に一泊いたし、翌十八日馬頭と云ふ所まで参つた時に、白河の右の河岸に一寸船を着けた、すると隣の船の船頭が一人来て、腹を押へて頻りに何か云ふ、其舉動を察すると、腹が痛むから藥を呉れろと云ふ様に思はるので、寶丹を少し遣つたら、『多謝々々』とお禮を言つて大層喜んで立去つた、ソノ跡へ今度は老人の船頭が来て、足を出し顔を熱めて何か云ふ、見ると足蹠の所に血が出て傷になつて居る、眞逆に寶丹も附けられない『如何したら可からう』と言ふと、高津代議士が袂を取出して『君、是を付けて遣り玉へ』と云ふより、其の袂を付けて上を紙で縛つてやつた、すると又一人来て眼を開いて頻りに藥を請求する、多分私門を醫者と思つたに違ひない、彼の眼は眞紅になつて居る『高津さん貴君目薬はお持ちになりませんか』と聞いたら『僕も持たない……ソナチ眼は袂を挿込んで居る』高津さんへ『眞逆支那人の眼だつて袂でも癒るまへと言つて笑つたことがあります……サテ依田君は船を去つて白河の右岸、矢張り河に沿ふたる細道を急いで進みますと、忽ち右手に當つてズドーンッパラッパラッパアッ云ふ賊の聲と銃聲が聞えますから、依田氏は心の中に『ア、戦争をやつて居るわい、シーモア中将の率ゐる援軍が義和團徒や官兵と戦つて居るのに違ひない、是は彌々事變は大きくなつた一時も早く天津に着いて北京を救ふの策を講ぜんければならぬ』と益々足を速めて進みました、頓て午前十時過ぎ、楊村の少し北方まで参りました時、背後からオオイ〜と呼ぶ者がある、弗と振り返つて見ると、義和團徒二人と普通の支那人一人が飛ぶが如くに追いつて参りました、伊三三君心中にはハツと驚くと雖も心に決する所があるから何氣なき體で『何か私に用事があるのか』と問うた『用があるから呼んだのだ……全體汝は何處の者だ 何所

へ往くッ』四川省重慶の者で、北京に店を出して居るが、今回天津の親類へ用事が出来て往くのだ』恠ッ答ふると、義和團でない方の支那人が、依田君の傍へ來り顔をツクツツ眺めて『お前嘘を云ふな、お前は日本の假鬼だ』作田君胸にギツツリ驚いたが、素知らぬ顔『串談を言ひなさんナ、私が假鬼なものか』支『イヤ假鬼だ……而もお前は天津の三井の者だ』と星を刺されて流石の伊三三氏は困つたが、素より大膽なる人、殊に豫め覺悟して來て居ましたから、先づアハ、と笑つて見せた『馬鹿なことを云ふ人だ……エ、貴君方、義和團の大人、この男の云ふ事は嘘であります、此男は嘘吐きで馬鹿であります、此奴の云ふことは決して信用出来ません』支『イヤ汝が嘘吐きだ……コレ眞實なことを云へ偽りを云ふと斬つて了ふぞ、』依『是は怪しからん事を被仰る、貴君方義和團は仁義の民だと言つて居らるゝてはありませんか、夫に此の馬鹿者の虚言を信じて、罪のない僕を斬るなどは、それが義和團の仁義ですか……大聖孔子の教えにそんな仁義はありません』支『おのれッ、失敬なことを云ふ奴じや、日本人に違ひない……ソレツッ斬れ』ツといふを遅しと前に進んで居た團匪が劍の柄に手を掛けたから、依田君最早や是までなりと決心して、彼が柄へ手を掛けんとする一刹那、兩の拳に力を込め、彼が咽喉を目掛けてウーンと突くと、彼はアツと言つて倒れた、作田君はソノ隙に一目散に逃げ出すと、義和團徒は『おのれッ、日本の假鬼奴、逃げようとしても逃すべさか』とドン〜追ッ追ッ追ッ来て来る、依田君は一生懸命に逃げたもの、彼の方が背も高く足も速いから、忽ちにして追ひ着かれた、彼はズイと狼背を伸して後背から依田君の襟首を無手と捉へ様とする、伊三三君、疾くも身を窘めると彼はヨロ〜ツト跟いたから、透さずドンと突くと、どたりツと倒れた、起上らうとする所を右の足でドンと喉を蹴て置いて、又たもや一目散に逃げ出した(依田君は少し柔術が出来た)幾んど一里ばかりは夢中で逃げたがもう目が眩んで、何だか譯が分らないで、往來の側にある墓地へ這入つて、土



饅頭の間に倒れて了りました、稍あつて我に復り「オ、こんな所に倒れて居る場合でない、斯る危難を通れば天祐にあらざして何ぞやダ、一分間たりとも速かに天津に着して、北京の危殆を救ふことを計畫せんが、ソロ／＼起上つて亦もや冠に任せて急ぎました、願て北倉附近へ参つた時は、餘程足を痛めました、堪へ堪へて進みました、南倉を経て丁字沽それから、西沽に着いた頃は殆んど倒れんとする程の苦惱なれども、我れと我が心を勵まして、とふ／＼其夜の九時過に天津の三井洋行に着しましたが、人々は依田君を見て「マア如何して来た」と言ひ合はした様に聞ふた位でさうです、そこで依田君は簡單に事情を述べて食事を済まし、それから人力車を雇つて殆んど半里ばかりある領事館へ参り、郎領事や青木中佐に會ふて北京の情況と公使の傳言とを語り告げました、郎領事、島村大佐、青木中佐、山下中佐等の方々は依田君の話に由て北京の情況を知る事を得ましたが、併し今の場合は如何とも仕方がないです大佐「シテ見ると、君は十二日に北京を立つたのぢやア、フム、では今頃シモニア中將の率ゆる聯合軍は、モア餘程近附いたぢやろう、或は北京に入ることを得たるも知れぬ、私が今朝船から上陸して、白河の岸を歩いて來ますと右手の方に當つて、遙かに銃聲が聞えましたから、多分未だ途中に戦ひつゝ居るでムいませう、大佐「フシ、では爾ぢやろう、何しろ御善勞じやつた、休息せ」

十三

青木中佐が「アノ君、林良茂が居るから北京の情況を委しく話してやつて呉れ大層心配して居つたから」  
 「ハイ、私も公使閣下から御傳言を頼まれて参りました」  
 「マハ此所へ呼んで云へ、オイ使丁、林良茂を呼べ、直々來る様に」  
 「林さんは今も湯に入つて居ますから、出たら直に參る様に云ひませう、青木「ウウ好し」と言つて復た依田君に向ひ「君も北京では中々働いたろうが、林も天津では随分盡力して居るヨ」  
 「ア、左様でムいませう、西公使閣下の言れすにも、林は本月一日に中島書記官の歸國するのを送つて大沽に行たが、未だ還つて來ない、多分天津までは引返したが、鐵道破壊のため來ることが出來んで、領事館に居るじやろうと思ふ、若しくは領事に頼まれて偵察に盡力して居るかも知れんと慙う被仰いました」  
 「爾ぢや、彼は中島書記官を船まで送つて置いて三日に此處へ返つて來て、四日は種々用事を足して五日に北京へ返らうとすると、モウ義和團のために鐵道を破壊されて了まつたから、それで空しく今日まで居たのぢや、勿論君も知つて居る如く、北京天津間の鐵道は時々暴徒の爲に破壊される事があるが、それは直ちに復た修理が出來て通ずる様になるから、矢張り爾ぢやろうと思つて居たのぢや、すると六日七日頃から義和團がポツ／＼天津へも這入つて來たから、それで林に命じて城内に入つて彼等義和團の内情を探らせたとぢや、能く偵察して來た、ム、天津で義和團と官兵と通じて居ると云ふことを探り得たのは全く林ぢや」ト話して居らるゝ所へ、林良茂氏は湯から上つて急いで衣類を着て、此の室へ這入つて参りましたが、如何見ても此人は純然たる支那人としか思はれません、それも其の替で、素と富山縣人であるが、十六の時に獨逸人に從つて支那へ渡り、本年四十二になるまで彼地に住居いたし、殊に清國の掃人を妻君として、十歳になる子まで在る位です、日本語よりは清國語の方が餘程旨いくらの、それで髪から衣類まで支那人の通りにして居るから、誰が眼にも無論支那人としか見えませぬ」  
 「何か御用ださうですが、丁度お湯に這入つて居りましたから、遅くなりまして……」  
 「ム、依田が來たから、北京の状況を聞け」  
 「ア、爾てすか」と言ひつゝ、依田君の方を見て「ヤア、依田君、能くマア無事に……」  
 「君も無事で結構ぢや……」

茂を呼べ、直々來る様に」  
 「林さんは今も湯に入つて居ますから、出たら直に參る様に云ひませう、青木「ウウ好し」と言つて復た依田君に向ひ「君も北京では中々働いたろうが、林も天津では随分盡力して居るヨ」  
 「ア、左様でムいませう、西公使閣下の言れすにも、林は本月一日に中島書記官の歸國するのを送つて大沽に行たが、未だ還つて來ない、多分天津までは引返したが、鐵道破壊のため來ることが出來んで、領事館に居るじやろうと思ふ、若しくは領事に頼まれて偵察に盡力して居るかも知れんと慙う被仰いました」  
 「爾ぢや、彼は中島書記官を船まで送つて置いて三日に此處へ返つて來て、四日は種々用事を足して五日に北京へ返らうとすると、モウ義和團のために鐵道を破壊されて了まつたから、それで空しく今日まで居たのぢや、勿論君も知つて居る如く、北京天津間の鐵道は時々暴徒の爲に破壊される事があるが、それは直ちに復た修理が出來て通ずる様になるから、矢張り爾ぢやろうと思つて居たのぢや、すると六日七日頃から義和團がポツ／＼天津へも這入つて來たから、それで林に命じて城内に入つて彼等義和團の内情を探らせたとぢや、能く偵察して來た、ム、天津で義和團と官兵と通じて居ると云ふことを探り得たのは全く林ぢや」ト話して居らるゝ所へ、林良茂氏は湯から上つて急いで衣類を着て、此の室へ這入つて参りましたが、如何見ても此人は純然たる支那人としか思はれません、それも其の替で、素と富山縣人であるが、十六の時に獨逸人に從つて支那へ渡り、本年四十二になるまで彼地に住居いたし、殊に清國の掃人を妻君として、十歳になる子まで在る位です、日本語よりは清國語の方が餘程旨いくらの、それで髪から衣類まで支那人の通りにして居るから、誰が眼にも無論支那人としか見えませぬ」  
 「何か御用ださうですが、丁度お湯に這入つて居りましたから、遅くなりまして……」  
 「ム、依田が來たから、北京の状況を聞け」  
 「ア、爾てすか」と言ひつゝ、依田君の方を見て「ヤア、依田君、能くマア無事に……」  
 「君も無事で結構ぢや……」



君の妻子も恙ないから安心し玉へ」林「爾かね、有難う、公使閣下を始め皆さんも無事だろね」依「爾ぢや、皆無事とは云へぬ、君、杉山書記生は殺れたよ、林「エッ、如何して……何時……」依「君は慥々云々と大畧を物語り、併せて公使の傳言を語りますと、林君は只だ「へエ」と云って暫時に呆れて居りましたが、稍あつて奮然決心したるもの如く「それでは私は慥して居られませぬ、直に是からお暇を頂いて北京に戻ります」郵領事「お前、北京に返ると云ふた所が、鐵道は毀れて居るし、徒歩して行くのは危険ぢや、モウ少し天津に居った方が好いだらう……お前の顔は支那人が知つて居る、根が日本人ぢやと云ふことは、北京近邊の清人が皆知つて居るから危ない、今お前が北京に戻らうとするのは火の中へ飛び込むようなものぢや」林「ハイ、私の身を思召して下さる段は誠に有難ういいますが、洪恩を受けて居りまする公使閣下や、其他の方の安危に關するは一大事變……それを私が知りつ……ハイ慥して此所には居られませぬ、私は日頃他人から林は支那化して居る、殆んど三十年も支那に住し、清人を妻として、其の腹に兒を産ました程ぢやから、彼は已に外形ばかりぢやない、心まで支那人になつて居るなど、陰で悪く言われて居ります……ですから今北京の安危を知りつ、私が戻らなかつたら、それこそ何の言れるか知れませぬ……ハイ、是非返ります危険は固より確悟でムいます」と林氏の決心は確乎として動かし様もあから、領事始め並居るも人達も、流石は日本人だと感心しました、中にも青木砲兵中佐は、嚮に北京公使館附の武官として、長らく北京に居られまして、彼の精神を能く知つて居るから、一層其情を察しました、青木「それは貴様道理ぢや、且つ妻子の事も心に懸るであらうし……何ぢやらう、支那の婦人でも我女房にして見れば其の情は同じ事ぢやらうナア」林「それは尊官其情に決して異つたことはムいませぬ、勿論私は十六の時故國を出ましたから、日本婦人の情は能く知りませんが、私の考へには日本の婦人よりも此國の女の方が、男子に對する愛情は、却つて

濃かてあらうと思ひます」郵領事「何頃夫婦になつたのぢや」林「爾も十三年前でムいます、私が三十歳、思妻が廿一の時でムいます」郵領事「此國の婦人は全體外國人を嫌ふ風習があるのに、能くお前の妻になつたのう」林「私も不思議に思ふ位でムいます、私に金でもあれば、それに眼を落れて爲つたのかとも思ふですが、其頃には尤て無財産でありましたし、それなのに女房になりたいと云ふから、爲たのです……或る晩私は愚妻に聞いたことがあります、お前は外國人の私を何て良人に持つ心になつたのだと申しましたら、女房が只だ何處もなく惚々する處があると斯う申しますので……イヤ誠に失禮……」青木「惚けるな、此奴……アツハツハ、林「申談は措いて、私は如何しても行きます」と言つて其席を去り、領事館の裏手にある長家へ行つて仕度に掛りました依田伊三三君は今一度忠告して止めようと思つて来て見ますと、林氏は毛布の隅へ少し古びた白布を一尺ばかり縫ひつけて、それへ何か書て居る能く見ると

崇文門外。花市路南。

東 興 號

林 全 勝

としてあります、依「君何だ、妙なことを書いたぢやないか、何で那處事を書いたのだ」林「是は僕の謀略で、若し義和團徒が僕を怪しんで、日本人だと認めた時は、是を以て彼等を欺くのだ」依「ナール程、君の計策解めたり、僕は今一度君に思ひ止るよう忠告しようと思つたが、夫程に決心し、斯くまでに計畫したのを見ては、モウ止めまい……林君別れた一杯飲まう」林「須らく飲むべし、併し君は疲れて居るだらう」依「疲れは非常だ、だから君と飲んで僕は寝る、君は寝ることも、飲み明して出立するとも君の勝手にし玉へ」ト是から二人は魚が無いから鶏卵と海苔を肴にして飲み始めた、依「僕は今青木中佐から聞いたが、君は天津の城内に這入つて義和團の内情を偵察したさうだが、如何な様子だつたね、君」林「如何せ、君、馬鹿々々



しいサ、僕は郵領事と青木中佐に頼まれて、東門から這入って人民に聞くと、義和團の頭目が直隸總督の衙門に出入すると云ふから、不審に思ひながら、總督衙門の前まで行って見ると、役人が二人門前に立って居る、其處へ向つて行くから義和團の頭目だらう、十人ばかり匪徒を従へて、遣つて来た、他の團匪は皆例の赤い布切を着て居るが、其の頭目ばかりは背後の髪を散らして、金色の冠を戴いて、身に黄色の袍を着けて居る、勿論輿に乗つて、他の團匪は前後に扈衛して来た、ヌルト二人の役人は恭しく禮をした、其の頭目は軽く答禮して衙門に這入つたから、僕が役人に聞くと、張老師だ云ふ、彼れは恁いふ事を言つて居るさうだ、身を隠すの術があるから、紫竹林の居留地でも外人の目に入らぬ様に隨意に遊歩することが出来る、夜は空樓と言つて空中の機關がある、それへ宿すと雖も人能く見ることなしなど、稱して居るさうだ、なんと君、馬鹿々々しいではないか、直隸總督の裕祿は眞逆に其様事は信じないが、西太后からの命だから、其の妄を知りつゝ、團匪の頭目を待遇するのだらう、依、フム、實に清人の馬鹿さ加減は話にならない、僕も西公使の命に依つて、南苑へ行つて、義和團の内幕を偵察して呆れ返つた、シテ見ると天津で團匪と政府と相通じて居ることを偵察し得たのは君で、北京で是を探り得たのはマア日本人では僕だなア……ア、酔つた、マア好い、今夜は語り明さうとやないか、君も疲れて居らうが、復と慙して飲むことが出来るか、前途を想へば、僕は生命を保つと云ふことは殆んど覺束ないなア、僕も亦然りぢや、……けれど君、生は寄なり死は歸なりぢやからなア、……君、モツと飲み玉へ、君に勤む一杯の酒、良宵須らく當に談ずべしか、ム、風月未だ寝ぬる能はず酔ひ來つて空山、に坐せば、天地即ち衾枕か、アハ、ハ、ハ、アア時に依田君、杉山さんの死骸は如何したい、引取つたかい、それが、君、残念ぢや、是に就ては話がある、君マア聴てくれ、少し僕の自慢話になるやうで濟まんが、僕は杉山君の死骸を如何か探し出して葬らうと思つて、非常

に苦勞をしたよ杉山君の殺されたのは十一日であつて、ボクが逃げ返つて此事を告げたから、公使が僕に向つて模様を能く見て來て呉れると云ふので、僕は直に出かけた、最も危服を着て、宛然で支那の乞食の様な風装をして、永定門外へ行つた……君も知る如く、門を出ると右手に小さな橋がある、彼所に澤山チヤンが集つて騒いで居るから、側へ行つて見ると血が流れて居る、そこで僕が「如何した」と云つて聞くと、一人の奴が「今假鬼が殺された」と答へた「其の假鬼は如何な奴だ」と尋ねた、又一人の奴が「日本の二番目の公使の假鬼だ」と云ふ、「死骸は如何した」と聞いたら「其の穴に埋めてある」と云ふから、フト横手を見ると、君、幅が一尺五寸、長さが四尺斗りの穴があるのさ、僕惟ふに人を埋めたなら、土が盛り上つて高くなつて居なくてはならない、「人を埋めた穴にしては餘り小さい」と云つたら、一人の老人奴が「二朝子(日本人の事)は矮小から此の位るな穴で澤山だ」と恚う悪口を云ひやがる、腹が立ツたが、僕は恚とアハ、ハ、と空笑ひをして居た、又考へるに或は杉山君の死骸を折り曲げて土を被せたのかも知れん、少し掘つて見たいと思つたのさ、……すると君、其中に夕方近くに、北京周圍の大門を閉る時刻に近いて來て、群集して居た奴原が一人去り二人去り、漸く残り少なくなつたから「オイ如何だ、一ツ金儲けがあるが、相談に乗らないか」と恚う言つたら金儲けと聞いては奴等も堪らない「何だ、甚だしい事だ、是非乗せて呉れ」と僕の傍へ寄つて來た、そこで僕は恚と微聲になつて「金儲けと云ふのは外でもない、其處の埋めた二朝子を掘出して、鉢に着いて居る物品を残らず分捕しやうぢやないか、埋めて置くのは馬鹿くしい」と云つたら彼等も素より其氣であつたを見て「好々」と吐かして、掘りにかゝつた所へ、城内の方から馬隊が十騎ばかり駆つて來て「コラ、爾等何をして居るか……何故其邊を掘る」と叱りつけて打つて打ちやうな劍幕だから、皆驚いて逃げ去つた、僕も亦少し退いて向うを見ると、大勢騒いで居るから、其方へ近付いて行く、皆



董福祥の部下なる甘肅兵で、何かツイ／＼言ッてゐる、僕は側へ蹲んで大便をする振をして、聽いてゐたら一人の奴が「董將軍閣下が自ら兵を率ゐて、義和團徒を先頭に使つて擧退するのだから、外國兵なんか何萬來ようと北京へ這入れるものか」と言ッてゐる、そこで僕は始めて董福祥が自ら出て行ッて、シーモア中將の率ゐる聯合軍を天津北京の間で、喰止めて居るなど云ふことを知り得た、それでは容易にシーモアの救援隊は北京へ這入れないと思ッて居ると、又一人の奴が「モッ來さなものである、日本公使が」と言ッた、其側に居た奴が「日本公使が自身に來るかね」と聞くと「ム、來る、屹度自身に來る、それで書記の死骸を一度彼の穴へ埋めて、又掘出して此家の中へ入れたのだ、爾して衙門へ死體が彼處にあると届けたから衙門から日本公使館へ其趣きを云ッて遣ッたのだ、だから衙門の役人が届いて公使が自身に死體受取に來る所を殺して仕舞ふのだ」と憎々しい事を喋り居る僕も是を聞いてはモウ躊躇して居られない、公使が自ら來る様な事は無いが必ず誰か來るに違ひない、其人は此奴等の爲に殺されて了ふ、是は早く歸つて止めなくてはならないと思つたから、急いで馳せ還つて見ると、果して總理衙門から杉山君の死體を現場へ引渡すに依つて、受取りに人を出して呉れと云ふて來て、それで鄭君が受取に行く事になつて棺を拵へて居る所だから、僕は事情を断して止めた、公使もそれでは止せと云れて鄭君を止め、衙門の方へ死骸を送り届けて呉れと云ッて遣つた様だ、それから其翌十二日、僕は公使の命を受けて北京を出て來たのである」と依田君は長々と物語られたが、元來此のお方はなかく談話上手であるのに、林氏は夜の更けるのを忘れて面白く話して居ました、林「君も随分盡力されたネ、杉山さんは正直な良い人であつたに、氣の毒なことをしたなア」と言ッて覺えず涙を流しました、併し杉山さんばかりぢやアない、昨日は人の身今日は我身と云ふやうな事になるかも知れぬ、イヤそんな女々しい話はやめて今一杯飲んで寝やう」とそれから、又

一本飲んで二人は寝ましたが、四時少し前に林君は起きて仕度をなし、他の人は寢て居るから、依田君にのみ暇を告げて、天津領事館を立出ました、依田君は領事館の門前まで送り出して「デ、林君、随分氣を注けて、ア、君も御自愛專一」と手を握り合せて別れました、是は明治三十三年六月十四日の夜の明方の事であり、それより林良茂氏は道を急いで、其日の午後五時過に双樹と云ふ村まで來ると、道端に義和團の負傷者が七八人寝かしてゐる、林君は之を見てシーモア中將の率ゐる聯合軍と戦つて傷られたのだな」と思ひながら、半丁ばかり進むと義和團匪が居た、爾も百人ばかり居る、林君も心の中には薄氣味悪く思ひながら、表面は何氣なき體を装ふて行き過ぎんとすると、團匪の中の頭立ツた奴が見附けてツカ／＼と参り「コラ待てツ」と呼び留た、林君はハツと思つたが、豫て覺悟だ、今更ら驚く事はないと決心し、徐かに振返つて、態を笑ひを含みながら「お呼になつたのは私ですか」「ム、爾ぢや、貴様ぢや、何御用でムいします、貴様は何處の者ぢや」「私は北京の者でムいしますが、此頃天津へ行ッて今還りてムいます」「ナニ北京の者だ、何だか怪しい奴ぢや」と林君の顔をつつく／＼見る、林君も彼れ團匪の顔を越と見揚る様にしてニコ／＼笑ッて居た、貴様、北京で何渡世をする者だ、營業は何だ」「ハイ私は米屋でムいます、ハイ、それで天津へ米を買ひに参りました處が、騒ぎで以て、商業が出来ませんで、買はずに空しく還る途中でムいます、旅費ばかり澤山かゝつて商法は出來ず、をまげに尊大人、汽車が通じなくなつたので、此の暑の中を北京まで步行して還らなくてはなりませんので、こんな鹿馬々々しい事は有りません、へへ、餘まり馬鹿げて居て、自分で可笑しくなつて來ます」「如何も此奴怪しいなア」「ム、何だか一癖ありそらな奴だ、荷物を檢めて見玉へ、同、爾だ、ユラ貴様の荷物を檢める、持ッてる物品を殘らず出せ」「ア、十分にも檢めを願ひます、全體尊大人方は何でそんなに私をお疑ひになりますか……私に何か怪し



い事でもありませんか……それとも私しを耶蘇教徒とも思召すのでありますか……私しは耶蘇教徒などは大嫌ひでござりますよ、決して決して耶蘇教徒ではありませぬ」貴様を我等が怪しむのは耶蘇教徒と疑ふのではない、貴様は如何も二帽子らしい……即ち日本人らしいのだ」林「……アハハハハ、私を尊大人方が二帽子だと思召しての事ですか、イヤハヤ意外なるお疑ひを蒙つたものです、何でそんなお疑ひを生じたてしやう、ハテ分りませぬ……ア、分つた、北京には辨髪をして清服を着し、一見中国人の如く装ふてゐる日本人を屢々見受ることがありますが……ア、それで尊大人方も私しを中國の服装をなした二帽子だと疑う下さい、爾するも其のお疑ひを晴らすに足る好い證據物がござります」林「ナニ、日本人でない、中華の民だと云ふ證據が有るツ……ム、何處にある、那箇が其の證據ぢや」林「ソレ其の毛布を廣げて……其の隅の所を見て下さい、此所を……其の白い切の縫ひつけてある所に、私の住所と家號姓名が書いてあります、爾も夫は此の春私がこの毛布を東西牌樓で買つた時に家へ持つて来て、直に印につけたのであります、アハハハ、是が何よりの證據で」林「何だ、崇文門外、花市路南、東興號、林全勝か」林「ハエ、左様で……其の崇文門外、而も門から二丁程、南方の花市路南と云ふ街の東興號が私の家號で、林が姓で、全勝が勿論名で……ハイ米商でござります、ハイ」林「ア……」と考へてゐる 林「如何です、お疑ひが晴れましたか、晴ましてしませう」林「イヤ晴れぬ」林「それは又た何故です」貴様は豫め我々義徒に捕へらるゝと覺悟して、夫で、憚らぬものを拵へて來たらしい」林「イヤハヤ是は又飛んだお邪推で……其の様に疑ひを掛けられては困りますな其の縫付けてある白布の古び加減と云ひ、字が昨今書いたものでないと云ふのは一目御覽になれば分りになりそうもので……」林「黙れ、此奴、殊更に古い布を縫ひつけて置きながら空々しい事をいふ、さア財

布を出せ、財布を」林「ハイ……」 林「財布を出せ」是には林君も大きに困つた、何故なれば財布の中に日本銀貨が八十錢ばかりある、

(十四)

財布を見せると言われて林君も甚だ困りましたが、躊躇すれば却つて疑惑を重るばかりですから「さア、何でも持つてるものは残らず御検め下さい」と故更に笑ひながら財布を出して渡しました義和團匪は引奪るやうに取揚げて、其の財布の紐を解いて中を極めて見ると、日本銀貨がコロコロと出たから堪らない、林「ヤ、此嘘吐き奴さア是は何だ、此の日本銀貨を持つて居る上は貴様が何様に嘘を吐いても最う遁れられない、何でも二帽子に違ひない」支那人は何て日本人を二帽子と云ふかと聞いて見たら、彼等は西洋人の事を大帽子といふ、是は洋人が皆な大きな帽子を被るからだ、日本人も西洋人に次ぐ大形の帽子を被るので、夫で二帽子といふのださうだが、實に彼等は妙な事を云ふものです、林君は二帽子だ日本人だと云はれて、いよゝゝ笑ひに紛らし 林「アハハハ、是は尊大人方に似合ぬことを被仰る、私が日本銀貨を持つて居るので、二帽子だ日本人だと被仰るなら天津に居る日本商人と取引をする中國の商人は皆日本人だと見なさなければなりません、天津に居る日本人と交際する商人は、皆是を持つて居ます……ドレ私は忙しい體だから、是で御免を蒙る」と突と起揚つて行かうとする、義和團の頭分が「二帽子に違ひない、捕へろ〜ツ」と號令した、すると其聲の下から五六人の團匪が駈出して林君の行手に立塞がり、大手をひろげて通させじとする良茂君は此所ぞ一生懸命の場合であるから、右手の方に遁れんとすれば、彼等は「遁すべきか」とバラバラと後から追蹙て來て、前後左右に組付くを、突のけ蹴飛して逃んとしたが、衆寡勝つべきの道理なく、



遂に彼等の爲に捕へられ、両手を脊後に廻されて、側の青柳の樹に堅く縛り付けられて了つて、彼等團匪は良茂君を縛して置いて、一ツ所に集つて何か頻りに相談をして居るやうだが林君には少しも聴かない。林良茂君は縛られて居ながら、獨りツツと考へました「ア、我身ながら愚かであつた、島村大佐領事青木中佐を始めとして、領事館に居た人々は皆此の身の北京行を危ぶんで止めて呉れた、中にも依田君の如きは數々忠告して呉れた、其の懇切なる忠告に背き、此身が長らく支那に居て清語を能くするを頼みとし、爾も誇顔に縫いつけた、毛布の隅の白布に、書きし米屋の屋號をもて、彼等を欺むく隨畧と、圖りし策も粗糲ひ、彼等頭愚の團匪にさへ、曉り得られしのみならず、頭隠して尻かくさぬ大和心に支那鎧金、禿けて露はる日本銀、財布の紐は解かれてもとくによしなき疑ひに、身は繋がる、青柳の、糸より細き我が運命、ア、此期に及んで何をか云はん、此の災厄に遇ひたるは我智の鈍きためにして、自ら招きて陥りし此境界を奈何にせん、人を怨みず天をも咎めず、自業自得と諦めなんと、列べますと、妙な馬琴調が出来上りませんが、流石に日本魂のある林良茂君の事てムいしますから我は最早從容として死なざるべからず、姿形は清人なれど、我が魂は日本人なり、我が願ふところは縱令彼等のために慘殺さるゝも、莞然と笑を含みて死したきなり、彼等をして日本人の死状の潔よかりしを語り傳へしめたきなり、今や我をして心を苦ましむるもの只この最後の状のみ」と決心しました、嗚呼人たる者は誰しも生死の境に立てば、皆生を希ふて之が爲に心を苦しむるのである、然るに林氏の如きは已に此の境遇を通り越えて、今や生を思ふと云ふことは毫末も心頭になく、唯死と云ふことを決して、而して此の死の状に心を苦めて居る、眞に氣の毒にも又憫むべき次第ではムいせんか、斯く潔く決心はしましたが、人情として可愛い妻子のことは忘れられませぬ、此身は此處に死して黄泉の客と爲るも、是は命數と諦められもするが、北京に残る妻や兒は奈何にして此世を過すであらう、我身が團匪の無残なる刃に罹つて死したりとは、神ならぬ身の知るよしもないから、只だ徒らに待ち焦れて幾年月を歎き暮すであらう、死する此身の悲みよりは取残された妻子の苦み、ア、思へば不憫である

と憤りに猛き大丈夫も恩愛の情制し難く、漣なす涙にかき暮れて居りましたが己にして又思へらく、是も宿世の悪報と悟れば佛説、迷へば煩惱、有無を離れて自然に任せば生死、禍福は皆是れ天命だ」と長らく支那に居た人だけあつて、天命を信じ、死に臨んで動ぜざる所は幾分か支那化して居るのである、凡て支那人は災厄に遇ふても天命と思ふから他の國の人よりも諦めの好い所がある、蓋し孔夫子の所謂天命が支那人の腦裡に深く浸み込んで居るゆゑであらう、林君の事を各通譯官等は「彼は支那化して居る」と云ふて居る、スルト忽ち近くに當つてズドン、バリくと凄じい響がする、是は紛れもない大砲小銃の音だから、林君は覺えず立揚つて「ヤ救援軍が来た」と叫んだ、團匪等も殆んど同時に突立ち揚つて「洋鬼兵だ」と騒ぎ出した、所へ一人の團匪が銃聲砲聲の間へた方向から、宙を飛んでバタ／＼と駈來り、頭目の前に立留つた、彼は息を吐く間もあらず「二師兄、大師兄の命令です、直に來り援けんことを願ひます」  
「ム〇宜しい、サア行け、駈民で行け」と號令した、此時砲聲銃聲は益々甚だしく、今は最早や遠き響きではなく、轟然として耳を聳く砲聲となつた、此時一人の團匪は林君の縛られて居る方を睨むやうに見て頭目に向ひ、彼の捕虜を如何致します、彼が日本銀貨を携へて居るのは何より争はれない證據で確かに二朝子です」  
「ム〇殺して了へ」と命ずるを速しや遅しと青龍刀を揮り揚げて、林君の首を斬落さんとする一刹那、ズドンと飛び來つた砲彈、是ぞ正しくシーモア中將の率ゐる北京救援軍から打出したものに違ひない、此時は六月十五日の午後五時過であるから、救援隊は己に天津との連絡を断たれて、義和團と清兵とに披み墜たれてゐる最中です、ソノ砲彈は凄まじい響きをして義和團匪の眞正中に落下して、バリツ／＼と破烈



したから堪らない、二名は身體微塵になつて蹴し飛んで了ひ、三名は大傷を負つてドツと斃れた、彼等が一度にヒィと叫んだ聲は物凄じい様だ、此一撃に團匪は驚いて八方へバラバラと散亂したが、續いて飛來つた一弾は不思議にも林君の撃がれて居る柳の中段に當つて、ボツキと折れて二十間計り先の畑中に落ちて、パツと土煙を揚げた此時林君は自分も確かに殺られたと思つてハツと驚いたが、能く見ると、両手を縛られて柳の樹に懸がれてゐる、其の撃目が切斷されたが、双手は未だ縛られた儘である「ヤ、天祐だッ」と思はず叫んで起揚るや否や、足に任せて一目散に北をさして駈出したが、途中で自然と其の繩が弛んでペラリト解けて了つた、頓て駈て約そ二里ばかり全然夢中で駈けたが、日はトツプリ暮れたから、左手の唐蜀黍畑の繁つた中へ這入つて、パツタリ倒れたなりに一時は正體もなかつたが稍あつて我に返り林君「ア、天祐だ、天祐だ、依田君と云ひ吾輩と云ひ、天祐にあらざして何ぞやだ、實に日本人は天が助くる、併し此の有様では、シーモア中將の率ゆる救援隊は容易に北京へ達する事を得まい、……ム、爾だ、僕は一時も早く北京へ行つて……」と獨語を言つて、身を起さんとしたる時、後の方からガヤ／＼話し聲がして、車の音が聞えるから林君はハツと思つて又た身を伏せた、スルと女の聲もして三四人來た様であるから、能く見ると女を車に載せて男が挽いて行くのである、林君も安心して道へ出て「お前門は何處へ行くのだ」と言つて聞いたら、男が「私等は義和團が村へ這入つて來て亂暴するから、遠くの親類へ逃げて行くのだ」と答へた「義和團は耶蘇教徒にはかり亂暴を加へると聞いたが、爾でないと思える、私等の隣りの嫁さんなどは強姦をされるかね」「私等の村へ來た義和團は大亂暴をやらかして、仕方がない、私の隣りの嫁さんなどは強姦をされた、夫て亭主に申譯がないと言つて首を縊つて死んで了つた、……ム、それは可哀想な事をした、嫁さんなら未だ若かつたらう」「若いとも、十九だよ、爾すると其の亭主は嫁さんに惚れて居たものだから、

大變、力を落して其の死骸を抱いて白河へ飛び込んで、是も死んで了つた」林君は「無理はないよ、美しい女だつたから……私なども女房を姦されると不可ないから、それで此通り車に乗せて遠くの親類へ逃げるのだ、私の女房もなか／＼別嬪だぞ、見て呉れさつしやい、……コレ青柳や、顔を御覽に入れろ」馬鹿な奴もあればあるもので、自分の女房の自慢をして、其顔を見せるとは愚も亦た甚だしいと思ひながら、林君が見ると、なアにそんな美女ではなく、普通の容貌だつたそうだが、林君が黒猿に此の嘶をする時に、ツノ節見た女よりは俺の女房の方が餘程好いと云つて僕の前に惚けて話されたが怪しからん譯である、そこで黒猿は林君に慇懃云つてやつた、貴様は私の前で無遠慮に惚けなさるが昔し唐の白樂天が、人生れて婦人の身と作ること勿れ、百年の苦樂他人に依ると言つたことがある、黒猿は尊君の前で、人生れて講釋師の身と作ること勿れ、數百里外の外國に渡つて苦み多く樂み無く、但夫他人の惚けを聞ても言はなくてはならぬ、如何です」と言つたら林君は「イヤ失敬々々、怒し玉へ」と言つて笑つて居ました、さて林君は彼等と同道しながら、だん／＼團匪の事を聞いて見ると、眞實の義和團は耶蘇教徒を殺すばかりで、他には害を加へはしないが、無賴漢が此騒ぎを幸ひに、團匪の中へ交つて、暴行を恣にするに良家の子女などを辱しめたそうでありませう頼て一里ばかり行くと、彼等は横道へ切れて這入つたから、又林君が獨りて道を急いで一里餘りも來ると、村落があつて一軒の宿屋が発見つたから、それへ這入つて、一人旅だが一泊させて呉れないか」と云々と主人が、さア／＼泊りなさい」併し奥には義和團の方が四五人居るから、貴客は其の長家へ寢て下さい」義和團と聞いて又かとドツキリしたが、悟られまいと思つて「爾か、義和團のお人々が居らるか、それは結構だ、義和團徒に泊つて貰つたのはお前の家の名譽だ、己は何處でも好い、休めさへすれば」主は「ては其處へお休みなさい」と云つて右手の一室を貸して呉れたから、林君は先づ湯を買つて身體を洗



ひながら、奥の様子を見ると、成程義和團匪が四人居る、彼等は頻りに何か話しつつ、在るから、林君はキツと思案を定め、大膽にも其前へツカ／＼と進んで行つて先づ恭しく禮をすると、團匪も亦た禮を返した、林君は莞爾笑ひながら、貴團が我が清國に盡さるゝ御誠意は、我々平民の敬服する所でありませう、何卒倍々奮つて國家の爲め御盡忠を願ひます』

「ム、貴様は中々事理の分つた男じや、我々を見て禮をなすとは感心である」

「ハイ私は貴君方が國に盡す志を敬するのでありますが……如何でせう、貴團の力を以てすれば諸外國の洋鬼等を残らず逐ひ攘ふことが出来ませうか」

「出来る、それはモウ必ず行る、我が義團の綱領は、西教排斥と云て耶蘇教を退けて了ふのと、洋人驅逐と云つて洋鬼等を追攘ふのが目的である」

「それは誠に好い企畫デ……朝廷は貴君方の爲す所を定めて御賛美あらせられませう」

「勿論御稱賛おらせらるゝ、己に本月一日には、我團の大頭目張老師が西太后に謁するの榮を得、又太后は宣女とする奉法を習はしむる位ひである、實に我が團の名譽じや、林君も是を聞いて呆れ返つたが、顔には少しも見せないで、彼等に信服した假態をして……」

「全體此の義和團と云ふ名稱は、如何いふ所から命名になつたものでございませうな」

「是は中々深い意味のあることで、無學な奴には分らぬ、併し貴様は能く質問した、一ツ説明して聞かそう、謹んで承はれ、だが、貴様は易を讀んだ事があるか」

「ハイ讀みました」

「では解るな、易の文言傳の開卷第一に『元は善の長なり、亨は嘉の會なり、利は義の和なり、貞は事の幹なり』と書いてあるだらう……さア夫だ、義和團の義和の文字は……元亨利貞の利の字の解釋から割出して、我が義和團の始祖愛世先師が附けられた名稱だぞ、如何だ解つたか」

「ヘーニアアる程、解りました」

「夫から今一步進めて解釋して、見ると、性中制裁の理である、心其の制を得、事その宜しきを得て尊と卑の分を嚴かにし、人の心皆順に居ることなしの理である、オホソ」

「是には林君も爾々呆れた彼等の爲す所を見れば、人の資を奪ひ、上下の分

(十五)

も滅茶苦茶で、九て泥棒と同然であるから、是を右の名目に比ぶれば、誰やらの所謂大ひにホコトんだ、林君は尙ほ質問して云ふに『義和の二字は分りましたが、團と云ふのは如何いふ譯でございませう』

「團か、是は何でもない、郷團自衛の意味から團の字を用ゐたのだ」

「此所で黒猫が一寸辨じて置きますが、支那の内地には、日本の憲兵や巡査の如く、人民の安寧を保護する機關がないのです、そこで村郷の者が相團結して、自ら衛ると云ふことがある、是を郷團自衛といふ、夫ですから名義上から云へば、誠に良い團結だ、兎角世の中には名義は立派で、其實を見れば是と正反對のものが幾箇もあります、其中にも支那人は古來文字を弄んだ國であるから、書く事や文字上に云ふことは中々立派なものである、例へばほとゝぎすの事を郭公とか蜀魂とか不知歸とか名を付けて、悦んで居るやうなもので……であるから竹槍旗の一擧に等しきもので、名目は義和團など中々凝つたものであります」

彼等は林君を少しも怪しまない前の團匪は林君を日本人と悟つて捕へた程であるのに、此の團匪等に限つて些つとも疑らないのは、如何にも道理に合ふ様に思ひなされる看客もありませうが、是は全く林君の方から進んで話をしかけたから、彼等の心中に十分信用したものでありませうし、又林君が云ふには、前の團匪の中には北京で僕の顔を見知つた奴が居たに違ひないとの事でありましたすると此時俄に表の方が騒がしくなつて参りまして、一人の團匪が慌だしく駆込んで来て、四人の居る正廳の入口に立つて禮をいたし『二師兄殿、只今博大師兄がお越しでございます』

「爾か、宜しと」

「云つて四人とも椅子を放れて出迎ひをする、林君も此の室を出て右手の長家に這入つて居ると、間もなく博大師兄と稱する頭目が、前の四人を先に立て



八九人の手下を背後に従へて徐々と門を這入って参りまして、正廳の正面の椅子に悠然と倚り靠ります。順を正して十數名の團匪が居並びます、其時博大師兄は前の四名に向ひ「先づ諸君喜んで呉れ、西太后も皇帝も、我が義和團の國家に忠勇なるを御賞賛せられ、いよく我團徒を以て朝廷の兵と同様に見做し玉ひ、共に力を合せて大いに外人を撻伐せよとの上諭である夫て朝廷は尙ほ本日在天津の直隸總督裕祿閣下に上諭を下し、練軍三千を太沽砲臺附近に送つて、嚴に防備をなさしめ、且つ白河口に水雷を敷設して外人を一名たりとも上陸せしめない様にせよとの事である、如何ぞや諸君、愉快ではないか」二師兄は至極愉快であります、夫で大師兄は是から何れへ向つても越しになりませんか」大師兄「吾輩は是から北京に進み来らんとする聯合外國軍隊を討伐に行く、張老師も明天は来らるゝであらう、何しろ愉快ぢや、祝宴を開かう」と言つて是から彼等は大いに酒宴を張り、圖部六に酩酊して彼等が得意の詩などを吟じて居ります。林君は温飽を買つて食べ、寝ながらつづく、と考へたが「彼等の言葉に依つて見ると、清國政府は列國を相手に戦ふことに決したようである、太沽の砲臺を嚴しく守備して、白河口へ水雷をかけられては、列國兵容易に上陸は出来まい、途中にあるシーモア中將の率ゆる救援隊は、清兵と義和團のために挾撃にされて進退谷まり、北京天津に在る外國人は袋の鼠籠の鳥同様、ハテ困つたものである」と獨り心を苦めつゝ、身體非常に疲れ居るから、いつとなくウトウトと眠つて了ひましたが、大變に騒がしいので、フト目を覺して見ると、義和團等は己に朝飯を食べて了つて出て行く所である林君も起きて顔を洗ひ、喫飯して此の宿屋を立出たのは未だ薄暗い頃であります、サテ只管道を急いで進みますると、早いもので午後二時頃には、北京から四里餘りの南方まで来りました、スルト畑を耕して居る此邊の百姓が「マア火事だ」と云つて居る、林君歩を止めて、前方を見ると、北京の方向に當つて黒煙空に渦巻いて立て居ります「是は正しく北京だ、ハテナ

交民巷ではないか知ら、公使館でありはせぬか」と頻りに心配しながら、益々歩みを早めますと、北京の方から二人或は三人位づゝ此方をさして来る支那人がある、彼等は皆顔色が變つて汗をボタ／＼滴らして居ります「火事は北京かネ」「北京だ、外國公使館のある所だ」「フム、交民巷か」と云つたが、此時の林君の聲は確かに願へて居たに違ひない「爾も義和團が火を放けたのだ、モウ今頃は外國人は塵殺しになつたに違ひない」「そ、爾か、それは、好い氣味だ、ハア……」と笑ひに紛らして驚きを隠しました。「お前さんは何處へ行きなされるネ」「己は北京へ行く」「北京へ行くツ……今北京へ行くのは火の中へ飛び込む様なものだ、それは止めにしなさい」「己達は北京だけども、皆逃げて遠くの親類へ行くのだ、今北京へ行くのは殺されに行くやうなものだ、止めなさい」と云つて皆止めたさうです、林君も其の親切に感じたから「有難う、けれども私は如何しても行かなくてはならぬことがある」と云つてドン／＼道を急いで参りますと、後でチャン等は大きな聲で「變人だ」と云ふ奴もあれば中には「彼の人は餘程惚れた女でもあつて、未練が残つてるから後髪を引かれたのだらう」「イヤ可愛い妻子でも北京に居るのだらう」など、口々に噂をして居たさうです、林君はそれから約一里ばかり来ますと、行手から二十位めにならうかとも思ふ馬子が一頭の馬を牽いて此方へ参ります、之を見て「オイ、お前、北京まで己を乗せて行つて呉れないか、賞錢は澤山遣るから急いで行つて呉れないか」馬子は林君の顔をつつく見えて「今頃北京へ行くのは焼殺されに行くやうなものだ、アノ煙を見なさい大火事だぜ」「夫は今北京の方から来た人に聞いて知つて居るけれども、火事は交民巷だらう己の家は崇文門から一里(六丁)も此方だ、その家まで行かなくても、永定門を這入つて少し行つた所で宜しい、是非乗せて行つてくれ、馬子は暫く考かへて居たが「賞錢は幾個呉れるね」「お前の呉れと云ふだけ遣る」馬子「ぢやア五兩呉れたら乗せて行かう」「ナニ五兩随分高し賞錢だ」







た、馬子は漸く起き上って、此の畜生……ヤイ馬泥棒だ」と聲を限りに呼びながら、一生懸命に追駈けて参る。林君も捉まっては、大變だから、必死となつて馬に鞭うち、崇文門を駈抜けて、約一丁半ばかりも来ると、交民巷の方へ曲らうとする角に大きな質屋があつて、私しなどの行つた時は焼跡ばかりでモウ形なしてしまいました。其の質屋の前まで来て馬を止め、ヒラリと飛下りると質屋の番頭が是を見まして「ア、林君さん無事か。僕は無事だが公使館は……全使のお身の上公使夫人其他の人々は異状はないかね」

「杉山さんの外は皆さん御無事だ」「ア、有難い……僕の妻子は『奥さんも子供衆も別條ないから心配なさるな』そうか、先づ安心した、番頭さん、金を五兩……貸してお呉れ、今日直ぐ返すから『五兩ばかりお前さん何になさる』今馬子に遣るのだ、後から馬子が追駈けて来るから」と云つてる中に馬子が息喘き切つて駈付けて参り「此の馬泥棒奴と」怒鳴り立て、矢庭に林君に打つて蹴うとするが「コレ待て……決して己は悪氣でやつたのではない、さア五兩遣る、其の蒲口にある分はお前を蹴つた賃錢に遣る」蹴り賃といふのは是が嚙矢だ、慾といふものは恐ろしいもので閻魔の様な馬子の顔は急に地藏様に化けて了つた「ヤアそいつは有難い、こんな馬泥坊なら毎日でも好い」

「毎日こんな事があつて堪るものか、アハハハハ、馬子は多謝」と云つて馬を牽いて行つて了ふ、林君は其の足で直に公使館へ駈附けて参りますと、支那の所に鄭通譯官が居られて「ア、林君……能くまア無事で戻つて来たぬ」「ハイ、公使始め尊大の方皆無事と承はつて安堵しました併し杉山さんは誠に氣の毒でございましたなア」「サウ、杉山君には誠に氣の毒であつたが、如何も仕方がない、君は天津を何日に出了、依田は如何した無事に天津へ着いたかな」「依田君も無事に着きました、私しは依田君から杉山さんの遭難、其他北京の状況を聞いて昨朝未明に天津の領事館を出立して来ました」

「ナニ昨朝未明に立つて来た馬鹿に早かつたなア、途中は如何だつた、別に危険も無かつたか」「イヤ頗る危険でした、私は一度義和團のために捕へられました、天祐で逃れて来ましたので、夫等のお話も致しますが、兎にあれ公使閣下にお目に懸つた上で」「ム、爾じや」と鄭君が西公使へ林君の無事に歸つた事を申し上げますと、其の喜びは一通りてなく「直に是へ」と被仰つて良茂君をお呼びになりました

(十六)

西公使は林君が恙なく戻つて来たのを見て大層に喜ばれました「無事で好つたのう」「ハイ有難う存じます、閣下にも御夫人にも御恙なくて何よりでございます」と云つて是から天津の状況を語らうとする、公使は「まア待てツ……貴様、妻子の所へ寄つて来たか」「はいまだ参りません、妻子は私事で公使館の方が肝腎でございますから、先づ閣下にお目通をして天津の状況を申上げて置いて爾して後で妻子を……」と林君の言葉が未だ終らぬ中に公使はハタと膝を拍つて「ム、流石に日本人じや、公事を先にして私事を後にするとは感心じや、お前の事を支那化して居るなどと云ふ人があるが……ム、彼言は違うて居る、姿形は支那人じやが、魂は天晴れ日本人ぢや」「有難うございます」「アは先づ妻子を呼びに遣れツ……オイエラ林良茂の妻子を呼びやつて呉れい」と西公使は御親切にも直ぐ迎ひにお遣りになります、林良茂君は有難涙に咽んで、暫しは言葉も出でませんでした、稍あつて氣を取直し、是から天津の状況を委しく物語りました、西公使は始終を聴かれて居たが「ム、爾か、では天津も居留地に籠城せんければなるまい、それにつけてもシーモア中將の率ゆる聯合救援隊は如何したのかな」「閣下、シーモア中將の率ゆる救援隊は最早頼みにはなりません、爾れは何故かと云へば、私しの想像では途中で義和團と官兵の爲に攻撃されて、頗る



苦戦しつゝ居るものに違ひないです、夫のみならず、清國政府は確かに一昨日あたり、在天津の直隸總督裕祿に命じ、太沽へ練軍を送りて其防備を嚴にし、白河口へ水雷を布設して、外國軍隊の上陸を妨ぐる準備を専ら爲して居ると思われます」と義和團匪の話を聞いた事など落なく物語りましたから、公使も是を聞かれ「シテ見ればシーモアの率ゆる援軍も當にならぬ、又太沽砲臺の防備を嚴にする所を以て見れば、清國政府は列國を相手としていよく戦ふ心算じやなと」云つて暫く兩眼を閉て考へて居られました、稍あつて莞爾と笑はれ「イヤ今更何も考ふる事もなかつた、龍城は豫ての覺悟ぢやつたア、……、林御苦勞ぢやつた、休息せい、嘸疲れたらう」と被仰て奥に入られます、林君は直に其室を立出てまして、公使館の裏手へ參つて休息して居る所へ、間もなく妻の彩雲と兒の愛子「是は名です、ソノ所以を聞いて見ますと、林君の兄さんが日本に居る、其兄さんが愛子と命けると云つてやつたから、それで憐れう云ふ名を附けたのだらうです」其の後から妻の母も來ます、彩雲は林君を見るより嬉しいの嬉しくないのつて、突然駈寄つて其膝に取り纏り「阿郎、能くまア御無事に戻つて下さりました、わ……妻はモウ阿郎、黄泉の人と思つて居ました」と云つてワツとはかりに泣出しました、ヌルと愛子も「お父ちゃん、己アね、お母ちゃんとお父ちゃん、お父さん、お父ちゃんも泣いてるぜ……已らまで悲しくならア」と未だ頭是なき子心にも、親子夫婦の愛情は、自然に出づる言の葉に、結ぶ涙の玉霰、雪や氷と隔つれど、熔れば同じ谷川の、水より深き心根は、唐も日本も一樣に、皆生れ得し常性の固より異譯は無いません、憐れう云ふ事を演へると生意氣に小説家を真似る様に思し召す方もありませうが、決してどうてない、黒猿を御負下さるお方は已に席上にて御存

知の如く、愁ひの所を感ふ演るのが黒猿の流儀ですから、席上で演るとほりに講演して置きます……、聖人の格言に、性は相近し習は相遠しと云ふてある、同じ天地の間に棲息する人類だもの、支那人だとして日本人だとして違ひのあるべき譯はない、今此の講談の林君夫婦親子が愛情を御覽になれば解ります、然るに今日日本人は高尚だ、開化人だ、支那人は野蠻だ、野蠻だと言ふのは何が故であるか、皆是れ教育の然らしむる所でありませぬ、黒猿はチヨイ／＼生意氣な事を申し上げて済ませませんが、渡滯の前に石黒忠惠男爵や、佐藤少將閣下が「支那の中等社會の教育の風を見て來いよ、能く見て來いよ」と被仰て、中にも石黒男爵は繰返して「表面ばかりでは不可ぬぞ、裏面を心に觀て來い、眼に見るばかりでなく心に觀てなア」と懇切に被仰て下さりましたから、私は教育の事も氣をつけたのであります、第一北京に小學校がない、否有つても我國の舊幕時代の寺小屋に等しきものである、中流以下の者は眼に一丁字のない奴が多いのです、黒猿は北京を出立する少し前に瑠璃廠と云ふ町へ北京の地圖を買に行き、随分立派な書肆へ這入つて「要北京地理圖」と書いて出したら、三人ばかり居た番頭が少しも解らない、主人が出て來て稍やく解つた位である、瑠璃廠の南紙店と云つては中々立派なる本屋である、其店の番頭が此位な文字の解らないとは馬鹿／＼しくてお咄にならん、尤も書肆の番頭が暗這屋ではあるまいが、私の行つた店の番頭は三人とも此通りの無學であつた、他の人の行つた家にも是に類した事が幾等も多かつたをうです、概して支那人の中等以下は無學無教育と云つて宜しからうと思ふ、未だ未だ夫れより呆れたのは天津の巡査だ「寶筆墨家那處哉」と書いて出したら少しも解らなかつた、人民保護の警察吏が憐れ無學では、如何して戸籍調べをするだらうと云つて、或る支那通の人に聞いて見たら其人が笑つて云ふに「なアに君、戸籍調べなどあるものか、彼等は何にも知らない、唯知つてるのは賄賂を取る事ばかりだ」といふから、僕もオヤ／＼と采れて開た口の塞がらぬこと、



天津城南門の破口の如しき、併し是等は小さい呆れた、最も一ツ大々の呆れがある、夫は何かと云ふと、まア諸君聞ても、呉ッねへ、五ツか六ツの小供の玩弄物だ、吾國なれば男の兒は銀紙張りの洋剣か、黄色い筋の這入ッて居る帽子を被ッて、己は佐藤大佐だぞと威張ると、手前が佐藤大佐なら己は野津大將だぞと互に負けぬ氣になつて、肩を怒らし腕を張つて遊んで居る、誠に傍から見ても無邪氣で愛らしいものである、然るに支那の小兒の遊ぶ所を見ると、彩色のしてある書を持つて、何か言葉は解らないが、ワイ／＼云つて遊んで居る、傍へ行つてよく／＼其書を見たら四ツ五ツの小兒が博奕をして居る所の書であつた、僕の如き無氣力無精神無學無識なる一蕪人でも、是を見ては嗚呼と歎息せざるを得ない譯です、是でモウ諄く申し演べずとも、清國の衰弱は教育の悪さが爲であると云ふ事は充分お解りになるだらうと思ひます何と諸君、人の親たるもの其の子供の教育が一番肝要ではありませんか、……林良茂君の家は間もなく義和團の爲に焚かれて、丸焼になつて了ひました、流石の林君も妻君に向つて愚痴を云ふも無理はありません、林、ア、詰らない事をしたなア、己も十六歳の時から此國へ渡つて、縁あつてお前と夫婦になり、己は公使館のボーイ長を務め、傍ら通譯をして稼ぐし、お前は内職に日本から来た人門を下宿させて、夫婦共稼ぎで働く中に、ア、愛子が出来たので、己もお前も勇氣がついて、益々儉約をして稼いだから、家も地面も自分の所有になり、八年前からは貯金を始めて、まア稍どの事三千圓以上の財産が出来たので、是からは彼の愛子に充分學問を仕込んで出世をさせよう、只そればかりを娛んで居た甲斐もなく、今度の災難で折角貯めた身代を滅茶々ににして了つたとは、眞箇に情けない譯さ、なア彩雲」と云へば妻君も涙ぐみ、「眞箇に腹が立つて口惜しくツて考へると、堪らなくなつて来るはねへ、何だつて此國の人達は斯様にまア譯が解らないんだらう、だから私が早く日本へ運へて行ッて下さいつて度々阿郎に云ふのに、未だ早い／＼と言つて連れて行ッて下さ

らないもんだから、こんな災難に遇つて了つたんですよ」林「己も日本へ歸つて暮さうと思つて、中島書記官殿にも其の事を話したら、大層賛成して下さつて、書記官殿が麻布邊に家を見附けて買ッて置いてやるからと親切に被仰つて下さつて位だ、だから本年一杯此の騒ぎが起らなければ、日本へ歸つて暢氣に東京で暮して居るのだ、イヤそんな愚痴を云ふのは男らしくない、それどころか是から如何いふ大騒動になるかも知れない、お前も確乎して居なさい」と云つて居る所へ大迫半熊君が来て、「林君、今公使夫人が君に妻君と小供を連れて来る様にと被仰つたぜ」林「爾ですか、それは御苦勞様です、彩雲、有難いてはなにか、公使御夫人がお前と愛子を連れて来いと被仰つてお寄越しになつた、まア仕度をしろ」阿郎、仕度と云つて丸焼になつたから着のみ着の儘で」林「ム、成程さうだ、仕方がない、夫てお免を戴ッて行け」と林君は妻子を連れて参りますと、公使夫人峯子の方は過日ならお病氣であらせられたが、今日は少しも心快いので起きて居られます、林君は妻子を背後に扣へさせて、室の入口で恭しく禮を致しますと、峯子夫人は至つてお氣のさくいお方でムいますから、夫人「さア此方へお這入りなさい、決して遠慮なさる事はありません」と被仰つて林君親子三人を一室へお入れになりましたが峯子は林君に向ひまして「今聞きました、大層林さんはお苦勞なされたさうですね、併しまア御無事に歸つて来られたのはお仕合でムいました」林「ハイ有難う存じます、さんが御心配なすつたでせう……お哀想にねへ、」林「ハイ……此女も大變に心配致しまして、モウ私は此世の人でないと思つて覺悟したさうでムいます」峰子「爾でせうとも、女は苦勞性のものですから餘計に心配します、可哀想にねへ、聞けば丸焼にもなりなすつたさうですね」林「ハイ數十年の丹精を……なアに是も所謂災難で……ハイ私が丁度四十二の厄年でムいますから厄摺ひを……アハアハハ……夫ゆゑ私し始め著のみ



着の儘で、こんな姿をして、誠に失禮でございまして」「皇子如何しまして、此の中で身装などに構って居られますものか、實は其の事にて一寸聞きましたから、お呼立て申したのですよ」と云ひつゝ、傍らに居た女中に目配をすると、女中は心得て夫へ風呂敷包を取り出しました。「是は妾の着古したお粗末な衣裳だが、是ても間に合せに繕して、奥さんに着せて上げて下さい、爾して是は嫌の矢張着古したが、是も繕せば未だ着られるから、兒們衆に併し仕立が違ふからお可笑いでせうね、オホ、ハ、ハ」と一襲の召物を下されました。ソノ親切に林良茂君は有難涙に暮れ「コレ奥様も、勿體なうございます……コレ彩雲、奥様が和女と愛子に憫然ぢやと被仰つて、お召物を……有難いではないか、コレよくお禮を申し上げる」と鼻を酸らせますと彩雲も悲けなさが身に溢れて「彩雲、ありがたう、多謝々々」と支那語と日本語と半分づつしてお禮を申します所は中々愛嬌ものであります、彩雲は林君に向つて微聲で何か答へ云ひますが、峰子夫人にはお分りが無いません、スルト林君が笑ひながら「林、コレ、此妻が申しますには奥様にお召物を頂戴して、誠に難有いから、今日から髪も日本風に結つて見たいから、私に丸髷に結つて呉れと申します、エ、ハ、ハ、ハ、可愛い奴で……怪しからん譯で、是だもの、黒猿の前なうては惚ける筈です、峰子夫人も呆れたが、御身分柄笑はれもしませんから、爾ですか、オア無邪氣で好いことね」と被仰つて笑を含んだおめでると「ですから奥さま、帯なしては如何やら可笑しうございますで、お帯の古と一本……エ、ハ、ハ、ハ、惚けた上に帯まで強請るとは林君も中々虫が好いと云ふのか、但し大膽なのか、將又圓迂くしいと云ふのか、皇子夫人こそお氣の毒です、アハ、ハ、ハ、此邊は全く林君と大迫君が北京公使館の裏手の長家で、私しへ語られた噂しを其通りに講演いたしますので、少しも飾りはございませぬ、サテ其日林君は辯髪を断切つて日本人の如くになると、愛子も「お父ちゃん、私のも切つてお呉れ」と云つて父は辯髪を切らせて「己アモリ、チャンくじやアな

(十七)

いぞ、日本人だぞ」と喜んで飛廻り、公使館内に居るボーイや支那大工を見ると「ヤア、チャンく坊主」と云つて石などを投るとは随分臆白な小供ですが、面白ぢやないませぬか、林君のお嘲しは此處で止めて置きまして、是から北京龍城を少々申し上げる、それから太活の砲臺乗取り、天津の龍城、續いて福島少將の乗出し、天津城の總攻撃といふ順序を以て演ずることに致しませう、

六月十二三日頃の事を少々申し演べて置かなくてはなりません、此時に當り、北京に如何なる種類の日本人が居られたかと云ふに、先づ公使始め書記官、通譯官、外交官補、其他の公使館員は勿論のこと、武官には柴砲兵中佐、安藤守田兩陸軍歩兵大尉、原海軍大尉、夫に従ふ水兵諸氏此外に文學士あり、法學士あり、工學士も居れば新聞記者も居る、植木屋寫眞屋理髮師に至るまで凡て六十名ばかりであります、此のお人達が公使館と其筋向ふの筑紫洋行と、公使館の横手にある森海軍中佐の留守宅へ這入つて居られるのであります、最も杉山書記生の殺害される前までは、柴中佐や守田大尉は六條の舊公使館跡に居られたが、杉山君の難に遭はれた日よりいよいよ危険だと云ふので、日本人は残らず一ツ所へ集つたのであります、夫て杉山君の殺害された十一日の夜、英國公使館へ集つたる諸國公使が豫じめ龍城と決定したことは前に委しく演じてありますが、いよいよ龍城と決したる以上は、總指揮官がなくてはなりません、そこで英公使マクドナルド氏を以て各國總指揮官に推したのであります、是は英公使が先遣と云ひ、且つ軍事に經驗のあるお人ゆゑに爾したのださうです、て各國公使館は各々其の人員を以て守ると云ふ事に決し、我が日本は勿論柴中佐を以て指揮官としました、十二日午前中佐は守田安藤原の三大尉を呼びました「サテ三君、いよいよ龍城に決



したから、君方も其の覺悟で確乎行ッて貰はんければならぬ、君方も見らるゝ如く我公使館は地形を云ひ、家作り構造と云ひ、守るに難く攻むるに易いのである、殊に僅々二十有餘名の水兵に、義勇隊諸士を合して六十名に足らざる少數の人員であるのに、敵は何程来るや、如何なる武器を以て攻撃するや未だ豫め知る事は出来ないものである、故に此處を守ッて援兵の来るまで能く防ぎ得ると云ふ事は極めて難い事である、是れ即ち公使も吾輩も三大尉に重きを置く所以と云ふ、假令各國公使館共に力盡きて、残らず戦死するに至るも、我日本が各國より先へ敗られては、末代迄も日本帝國の耻辱を殘さなくてはならんから」と悲壯淋漓と述べられました、大尉我々も勿論戦事の覺悟は日頃からしてあります、決して日本帝國の耻辱になる様な事は爲さん心算でおりますが、大尉中佐殿の御指揮に従つて充分に我々の本分を盡す心得ております、原大尉に我々ばかりでなく、兵士等も皆勇み立ッて居りますから、ハイ何卒配備の御指揮を願ひます」と斯の如く三大尉が口を揃へて云はれたので、柴中佐のお喜びは一通りではありません、凡て隊長の身となる、部下の勇氣が狙撃しては居らぬか如何ぢやかと夫が第一の御心配をさうでありました、三君の言葉を聞いて吾輩も大いに心強い、アハ安藤君は義勇隊を率ゐて表面守備の任に當ッて貰はう、守田原兩大尉は裏門方面を、我輩は其の中間に在る、大尉承知しました、夫に就ては中佐殿も云はれます如く、我が公使館の守り難いと云ふのは、背後に肅親王府が在ッて、若し敵が先んじて此の親王府に據ッて以て我を攻撃したならば、それこそ我が公使館は云ふに及ばず、佛も英も其他の公使館も、迎も持堪ゆることは難いのであります、故に如何しても戦術上此の親王府が我が守備線内に入れると云ふ事にせんければなるまいと思ふて、安藤守田君の御意見は至極宜しいと思ふて、夫で自分の考へには、親王府は勿論、公使館近傍の家宅を一應搜索するのも亦必要と思ふので、若し暴徒が是に據つて潜伏して居ると、我に取ッては頗る不利

益ぢやらうと考へて居る、是非一ツ此の搜索をやつて置きたいと思ふて、柴中佐は兩大尉の建議を聞いて例の如く茫然に笑ッて居られたが、兩君の言はるゝ所は至極肯綮である、我輩も無論此の親王府を我が守備線内に入れたいと思ふのぢや、併し唯憂ふる所は、親王府が頗る廣くして我が少數の兵を以ては到底守り難いと云ふ此の一事が、如何も吾輩の、大尉中佐殿、是は御道理なる御憂慮であります、併し自分の考へには、假令少數と雖も親王府は守れない事があるまいと思ふて、否な是非此所は守らんければならぬと思ふて、此所を捨て、敵に委する位なら、始めから防禦と云ふことを断然思ひ切ッて、止めた方が宜しいと自分は考へて居る、と守田大尉は熱心に説かれると、安藤大尉も原大尉も是に賛成しましたから、柴中佐も大いに喜ばれたのであります、中佐は始めより此の親王府を是非とも我が防禦線内に入れたいと云ふ御意見であるが、併し少數の日本兵と日本義勇隊のみにて、是を守ると云ふことは餘程の難事であるし、外國兵は固より當にはならぬので、夫で頗る御心配なされて、先づ三大尉の意見は甚だであるかと試みられたのであります、然るに三大尉が口を揃へて賛成さるゝのみならず、守田大尉の如きは最も熱心に此の説を唱へられたので柴中佐も大いに感じて、此の四武官の御心中には豫め親王府占領と決したのであります、そこで黒猿は、戦術上の講釋と云ふと甚だ生意氣になりますから、唯北京で武官方に伺つた事を、即ち如何なる故に此の親王府を占領して味方の防禦線内へ入れなくてはならぬと云ふ事を演説して、若し敵が先んじて此の親王府の邸内へ入込み、邸内の小山や壁内の建物の屋根から激しく打出さうものなら、夫こそ日本佛蘭西は申すに及ばず、英露と雖も滅茶々にされて了ふのであります、是に引替へて若し親王府を占領して味方の防禦線に入れるに於ては、親王府の煉瓦の壁は其厚さ一尺五六寸から二尺近くのものもあつて、防ぐに易く破るに堅いので、夫で邸内の堅牢なる建物は數十棟もあるから、假令は第一防禦線を破られても、



第二で防ぎ、第二を破らるれば第三で防ぐと云ふ様にして日を送つて居れば、其中には救援隊が来るだろうと云ふ頼みもあるが、若し始めから各自其國の公使館へ退いて之を守らうとしたなら、迎も長く持ち堪ゆる事が出来ないのて、夫て柴中佐を始め、三大尉が是非とも親王府を占領すると云ふ事に内々決議したのであらうてあります、サテ柴中佐は御自分の御意見と三大尉の建議と符合した事を西公使の前に演べて、是非とも親王府を占領せなければなりません」と云ふと、公使も此説を大いに賛成されたので、そこで中佐は英公使へ交渉すると、英は最も同意を表したるばかりでなく、英公使自ら出懸けて来て、共に占領に行くこと云ふので、西公使も「ア、自分も参らう」と云つて愈々日英兩公使が行く事になりました、尤も向ふが何しろ親王家の事ですから、普通の人の邸を占領するとは違ひます、夫て兩公使自ら行かるとありませう、是に従ふ人々には日本から柴中佐、守田大尉、水兵七名、鄭通譯官、服部文學士、英國からは大尉一名、通譯官一名、水兵二十名であります、此の人数で以て肅親王府の表門から正々堂々と這入つて行きましたから、王府の人々は驚いて周章狼狽する様子でありました、柴中佐は斯くも見や、鄭通譯官に命じて大聲に呼ばしめて云ふに「我々英日兩國人は決して亂暴なる事は致さぬゆゑ、お騒がせあるな、日英兩公使が親王殿下に是非を調を賜はりたき次第があつて來つたのである、唯此の旨を殿下へお取次ありたい、決して亂暴なることはせぬ、御安心あつて鎮まり玉へ」と、斯く云つて制すると、漸やく人々が安堵して鎮まつたのであります、暫くして親王の御家臣が知られて來意を問ひますから、英の通譯官が進み出て、日英兩國公使は、列國公使を代表して親王殿下に調したく上邸致しましたから、是非とも調を賜はりたいたいと左様殿下へ御取次を願ひたい」と述べると、家臣は「承知しました」と言つて奥に這入りましたが、稍あつて他の家臣が出來り「お通り下さい……併し公使と通譯官だけで他の方は是にも控へ下さい」と云ふから柴中佐が「勿論通譯官は公使に

従はなくてはならぬですが、自分は公使の軍事顧問であるから、其傍らを離るゝと云ふ事は出来ぬてあります」家臣「御道理で」といふと、守田大尉が進み出て「通譯官と軍事顧問官が公使閣下の傍らを離るゝ事の出来ぬと云ふは勿論であるが、自分も公使護衛の任務であつて見れば、無論其傍らに居なければ任務は盡す事が出来ぬです」家臣「至極御道理で」今度は服部文學士が進み出て「僕も兵使閣下の御傍を離るゝ事の出来ぬ大任務を帯びて居るですから是非とも附添はんければならぬです」家臣「貴方は甚だしい大任務を帯びて居らるゝ御方です」と一本切込まれて服部君も少し困つた「僕ですか……は、僕は……公使の小使たり……オホ、ア、苦しい」家臣「至極御道理」何が御道理だか分らない家臣は奥に入りましたが、良わつて他の家臣が出來り「夫ては兩三名の從者は宜しいから通り下さい、多勢はお断り申す」と云ふので、四五名づつを從へて這入りました、日本からは柴中佐に守田大尉、鄭通譯官に文學士兼假の小使服部宇之吉君であり、水兵は園田兵曹之を指揮して支那とも云ふべき所に整列して控へて居る、英も矢張り四人從へ、他は外に控へて居ります、親王の御家臣は日英兩公使を應接の間ども云ふべき最も美麗なる一室へ案内しまして「是に暫時お控へを願ひます」と云つて立去りました、此の室は十二疊敷位な所で、下は黄色の煉瓦を以て石疊の如くになり室の中央に紫壇の大きやかなる卓子と同じ紫壇の椅子、正面に一脚、此方に二脚を据へ、天井は矢張黄色にいたして、眼も眩くばかりに美しく、其他置物花瓶等流石に親王家の應接室と思はれたり、兩公使は此間に控へ、柴中佐以下は次の間に椅子に凭つて控へて居りますが、待間が退屈ゆゑ日本人は日本人同士英人は英人同士で互ひにヒソヒソと話を居る、鄭通譯官は服部宇之吉君に向つて「如何だ服部君、先刻君が親王の臣に向つて、僕は公使の小使たりと答へた時は、餘程苦しかつたらうのウ」鄭「アに苦しいものか、當意即妙サ」鄭「アハ君が公使の小使たりオホ」と云つて、夫からア、苦しいと云つた



のは如何したんだ」服「あれか、あれは予君僕の喉へ痰が引かしたから、そこでオカン、ア、苦しいと云つたのさ、アハハハ、イヤ夫は爾と流石に親王府だけあつて、美々しいものだなア」服「夫は君、美しいさ、往來を歩いて下等社會が大小使の垂流しには恐れ入るが翻つて憐いふ貴族の邸内に這入つて見ると、又日本の及ばない所がある、流石に大帝國の皇族の住居だ」服「ム、美だ……ヤ、君、美と云へば此の邸内の美人は澤山居るだろうなア」服「それは君、多く居るさ」服「君は見た事があるか」服「僕は此前公使に従つて二度ばかり来たことがある、一度は見なかつたが二度目に一寸見た」服「見た、フム、如何様だつた」服「オイ、君、そんなに前へ乗出して来られては困るよ、ソラ見玉へ、餘り君が押すものだから、朱を入れてある朱管を引繰返した」服「フム、爾か、卓子の上にあつた朱管を引繰返したか、だが君美人の話しては、朱管を引繰返すも無理はないさ」服「何故」服「何故つて昔から美人朱管(城)を傾けると云ふからよ」服「アハハハ、それでも洒落か」などいふ小聲で處れて居る處へ、家臣を先に徐々とお出ましになられたのは肅親王殿下であります、肅親王殿下の御齡起は四十二三で、頬のこけた、お顔色は青白くして何處となく御陰氣の方ださうてあります、黄色のお衣装で、頭に帽を戴いて、勿論お尻へ帽を頂く者はないが……支那では帽子を取るのを却て失禮としてある、貴人高位の前で冠を取つて天窓を露はすと云ふ事は此上もない無禮の様に云つて居ます、餘事は措置して、日英兩公使は立ッて禮をする、親王殿下も答禮をなさいました、時に英公使は進んで左の如き意味を述べられたさうであります、殿下、外臣我々が本日敢て殿下に謁を乞ひ奉りしは、餘の義でなく、豫て殿下も知ろし召す如く、義和團等は過日より北京城内に入來つて、或は教民を殺戮し、或は教會堂を燒な拂ひ其の暴行日一日と甚だしく、我々外人たるもの日夜心を客んずるの暇なく、且つ仄かに聞く所に依りますれば、團匪等交民巷附近の家屋に潜伏して以て時機を待ち、夜中不意を襲うて列國人を屠殺

にするの計畫ある由、我々は彼等鳥合の團匪、假令幾千幾萬來ると雖も敢て恐るゝものにあらず、然れども亦た豫め事の用意はしなくてはなりません、故に我々は此の交民巷附近の家屋を搜索するの必要が起つたのであります、勿論殿下は聰明聖智にましますゆゑ、彼等團匪の如き暴徒を御邸内へ引入れ玉ふ様な事は萬あるまじきと我々は信じて居りますが、又外人の中には未だ殿下の御賢明なるを知らず、或は疑ふものなきにしもあらず、故に夫等の人々に疑惑を晴らせせんため、誠に恐れ入つたる次第なれども邸内を一應搜索致したまゆゑ、此儀を枉げて御許容あらせられたる存するのであります」と流石は英公使、初めから占領と言はず、何處までも敬意を表して、斯の如く演べ立てた所は大英國の外交家だけあります、親王殿下は御兩眼を閉ぢて暫らくお考へあらせられたが、稍あつて吐息をつき玉ひ「道理なる事である、予も義和團を邸内に潜ませたりと外人に疑はるゝは心苦しいから、残る限なく搜索されよ」と仰せられて、又兩の險を閉ぢられました、西公使は親王の御心中を推量り參らすれば、誠に御痛はしく思ひまして「早速の御許容にて我々は喜ばしく存じます、殿下は義和團徒を如何なる者と思し召されますか」「義和團は昔より我國にありたる一種の邪宗である、予は固より彼が如き邪宗は信ぜぬ」と仰せらるゝ様子、如何も虚言とは思へなかつたさうです、ですから此の肅親王の事は北京に居る人々も開化人とは云へないが、そう頑固な方ではないと云つて居ります、黒嶺が凭ら親王さまの事を賞め奉つたり、又鄭重なる言葉を遣ふと、彼奴支那最負だなどと思召す方がなきにしもあらず、だが是は爾でない、假令今敵國と雖も堂々たる東洋の大帝國、ソノ帝室の御血族たる親王さまの事を講演するのだから、我々如き微賤の者は、最も言語を謹んで述べなくてはなりません、サテ日英兩公使は首尾よく親王の許可を得ましてから、是から手分をいたし、數十棟の建物の中を殘る所なく搜索したが、怪しき者は一人も居りません、嘗て親王の御邸ばかりでなく、其



の近邊の家屋まで取調べると雖も敵は居ないから、一同是だけは心を安んじまして、夫で親王府は此時よりモウ占領して了つたのであります、故に我水兵の人々は此の親王府を守るとして、義勇隊の人達は多く公使館の方に居らるゝ事でありますが、唯心細いのは武器、即ち銃剣に乏しい事でもいりました、小寺「おい、大道君」何だ小寺君、何ぞ用か……おい人を呼んで置いて黙って居るのは失敬ぢやないか……如何したんだ、小寺「別に用はないが、餘り退窟だから呼んで見たのさ、もう君、シーモア中將の率ゆる救援隊が来るうなものだなア」大道「爾さ、柴中佐の言ふには途中義和團の爲に障害されて、天津に引返したらうとの事だ」小寺「爾かな、果して柴中佐が言はるゝ如く、天津へ引返したとすれば、随分心細い譯だなア、我々の只管頼みとして居るのは救援隊ばかりだからなア」大道「爾さけれども愚痴を翻した所が仕方がない、まアこんな時は心を大きく持つて、チャンの所謂天命に任ずるのぢやなア……君、一ツ謎を掛けやう、恠いふ時には陰氣になつては不可ない、成るべく陽氣になるべしだ……エーとシーモア中將の救援隊と掛けて何と解くツ」小寺「爾さなア……、救援隊と掛けてか、救援隊とかいけて……ム、解つた東海道の並木と解く、心はマツばかりさ、アハハ、」大道「イヤ眞箇にまつばかりだ、シーモア中將が二千の聯合軍を率ゐて、十日の朝天津を出たと云ふのに、義和團に障害されて来られぬ所を見ると、シーモアがシニモーツヤ（死に亡者）になつたかも知れぬぜ、アハハハハ、」小寺「お互にこんな暢氣な事を云つて居るが、武器の乏しいには困るよ」大道「さうさ、こんな急拵への支那槍では、恠して歩哨に立つて居る分には差支へはないが、スワと云ふ時に役に立ぬからなア、是れ義勇隊の大道半熊君と小寺梅吉君とが、公使館の表門の所に、歩哨と云つて見張の番をしながら話して居るのであります所へ向ふから英吉利の少佐が従率一人を連れて此方へ向つて進んで参ります、大道「おい小寺君、英の將校が来たよ、我が公使館へ来た様だが、君敬禮の仕様を

知つてるか」小寺「僕は知らない」大道「知らないでは困る、間違つた事をやつて、笑われても痛に障るからな」小寺「左様さ」と云つて無暗には出来ぬ、必ず少佐には少佐に對する、大尉には大尉に對する禮式があるだらうからな」大道「爾だらうと思ふ、困つたなア、モウ来た、」小寺「眼を睨つて如何する」大道「何でも可いから早く眼を閉ぢ玉へ」小寺「梅吉君も妙だと思つたが、火急の場合だから、大道君の云ふが儘に兩の臉をヒタリと閉ぢて突立つて居りますよ」大道「おい小寺君、眼を睨つたばかりでは不可ない」小寺「では甚麽すれば好いのだ」大道「斯をかき玉へ、斯を」小寺「斯を……」大道「……、ッラ可いか」大道「モツと大きく……、夫では低い」小寺「モツと大きく……、驚いたなア、グ、如何だ、是では」大道「夫では餘り大き過ぎる、先のと今の中間ぐらゐの所だ」小寺「難かしいなア、グ、」籠城なんかすべきものではない、グ、」モウ僕は孫子の代まで籠城はさせないよ、グ、」大道「楠正成は大きな斯をかいたらうなア、グ、」大道「おい、眼つて居ながら獨言を云ふ奴があるか」小寺「僕は眼つて居るのか」大道「何を云つてるか、問もなく英國佐官は来て見て驚いた、是は驚く筈です、歩哨と云つて見張をして居る者が、爾も二人まで高斯で眼つて居るとは、如何に軍事教育を受けた事のない俄出來の義勇隊とは云ひ、餘りの事と呆れて、暫時は見えて居ましたスルと大道君が兩眼を閉ぢて斯をかい居ながら、英の將校が立止つて居る様だから、何をして居るかと思つて窓と片目を開いて見た、思ひは同じ小寺君も同じく片目を開けたから、英の少佐はイヨ、驚いた「おい、日本人は片目づゝ眼つて居るか知らん、アハ……」と笑つて行つたさうです翌六月十三日となると義和團は追々城内へ入來り先づ手始めに崇文門の傍らにある耶穌教民の家を焼き、教民信徒を殺し、北に進んで東四牌樓附近の各所に火を放つてドシ、焼立てるなど、其の慘状目も當られない、遂には舊日本公使館、即ち前々日まで柴中佐守田大尉等



の居ました所まで焼いて了ひました、恰どソノ日の午後二時頃でしたが、偵察に出してあつた杉幾太郎君の奴僕等は申すまでもなく、支那人を杉君が雇つて使つて居たのですから、其の男を探りに出したのですが、夫が歸つて申すには、先刻義和團徒は廿七八の素敵な別嬪を捕へて東四牌樓で焼殺して了ひました」

「何で焼殺したのだ、其の女は耶蘇教民か」

「いゝえ、爾ではないです、何でも五六日前から其の女が手に玻璃瓶を持ちまして、其の瓶の中に血の色をした汁を盛つて、ソノ汁を歩きながら家の壁や牀へ飛ぶかけて居たさうです、人が是を見附けてお前さんは何をなさると尋ねると、妾は義和團徒である、神仙の仰せ付て恠して歩くのだ、此血液を飛ぶかけられた家は、數日の中に家内残らず病死するか又は家が焼けると云つて居たさうです、夫を義和團が聞きつけて、彼の妖女、妄りに我義和團の名を冒すとは不埒の至りだと云つて、今朝其の女を捕へて焼殺しましたのでういす」

「貴様、其の焼殺す所を見たか」

「見ました、直ぐ傍で見て居ました」

「甚だ様であつた、苦しんだらうなア」

「エ、それはモウ非常に苦しみました、義和團の頭目が、此の女我が義和團の名を侵して、多くの人を感す不埒な奴ぢや、焼殺せつと云ふ下知の下より、團徒等が手取足取りして高い木の上に吊し、石油をそそぎかけて置いて、爾して線香の火で……御承知の通り、我國の線香は松明のやうにポツポツと燃えますから夫で焼くと石油が沃けてあるから堪まりません、顔を焼く、手を焼く、足を焼く、女はヒュー／＼苦しむ其中に、縛つてある繩が焼切れて女はバツタリ下へ落ちると、體へ火のついた儘で逃げやうとする、そこを義和團匪が鎗で突殺したのですが、イヤ如何も實に可哀想でした」

「残忍極まる奴等ぢや、浮薄不人情なる此國の人間でも、夫を見ては可哀想と云ふ感じが起つたらう」

「夫は起りますとも、可哀想と云ふ感じも起りましたが、夫より私はモウ一ツ面白い好考へが起つたです」

「如何様考へが起つた」

「此所、急に木戸塙を拵へて、一人前一兩づつて見せたら、忽ち二

(十八)

三千兩の金が儲かる」

「馬鹿……夫だから支那人は困る、直ぐ利慾上の事を考へる、仕方のない奴等ぢや」と云つて笑つたさうです、婦人を義和團匪が焼殺すといふ事は前にもあつて、重複に涉るやうだが、事實だから一寸演べて置きまして、サテいよく是から太活袍臺乗取と云ふ最も壯快なる事實談に取掛る事に致しますが、併し其前に支那朝廷の内幕を少少演べて置きます

此の日の午後になつて、西太后の命を傳ふる爲め派洲派洲へ行つた剛毅が歸つて来て、西太后に復命して云ふには「派、派の二洲は陛下の命を承けて人心傾かに勃興致しました、我が清國人は素より外人の我國を欺き凌ぎ、我が國土を占め優し、人民を蹂躪して我が財物を掠め、其兇横日一日と甚だしきを憤り、怒みは結び重なつて人々皆外國人を殺戮し、仇を報せんと欲す、故に同日期せしめて來り集るもの數十萬人を下らさず、下は五尺の童子に至るまで亦能く干戈を執つて以て外人を屠らんとす、是れ天の我が中國を助けて、彼れ外人を撻伐するの時至れるなり、陛下の命する所に従ひて、一たび詔を下し玉は、二十餘省四百餘州の民人、不日にして立ん、然らば何ぞ彼れの兇熾を翦り、國の威を張るに難きことがありませう、陛下速かに御決斷あらんことを願ひます」と言葉巧みに奏上をいたしました、此の剛毅と云ふ人は中々辯舌達者にして、西太后にも端郡王にもお氣に入りてあつたさうです、西太后は其性至つて御發明でおらせらるゝと雖も、宮廷奥深き處にははしまして、世界の大事に通じ玉はず、又義和團匪の真相を御存じなきゆゑ、唯だ滿州派の大敵が云ふ所、滿州派大官の奏する事を聞き召して是を信じ玉ひ、義和團を眞誠の忠義なるものと思召し、朝廷一たび勅を降さば、四百餘州の民人皆干戈を提げて立ん、朝野心を一にし力を戮せて以て外國人に抗



せば、遂には彼等を國外に退けて、旅順港を回復し、威海衛再び我手に歸すべし、膠州灣大連灣の如きは、自ら外人の影を留めざるに至らんと斯く健氣にも思召し立せ玉ひたるものでありませう、唯、痛しきは清國皇帝陛下でありませう、黒嶽は北京に於て西公使始め、公使館のお人々に、支那朝廷の内幕や、西太后と皇帝との御間柄の事などを種々委しく伺つた事もありませうから、追々演べる事に致しますが、皇上は全く開明の御思想に富んであらせられても、西太后と滿洲派大官のために妨げられ、其御敬慮を貫き玉ふこと能はず、一時は御幽閉の難にさへ遇はせられた位であつて今回の事變も全く皇帝陛下の思召より出たる事でないとうであります、西太后には剛毅の復命を聞き玉ひ、端玉を始め滿洲派大臣を密かに宮中へ召して秘密會議を開かせられ、此の夜十時過ぎる頃まで何事が頻りに御評議せられたるものでありませう、翌十四日早朝より滿人の王公貴族、漢人の大官をも残らず集め、皇帝も臨御なし玉ひて、所謂御前の御會議を開かせられ、先づ西太后は一同に向ひ玉ひ、「諸外國は是まで我が國を威嚇して頗る窮迫せしめたるに依り、最早や堪へ忍ぶことなり難し、此上は世界に對し、死を決して此國の體面を起す處置をせんければ相成らず、滿人等は已に舉つて斃るゝまで力を盡すの決心をなせり、是れ朝廷に忠義なると、國を愛するの志から出たもので、眞に嘉する所である、一同も亦た其心得にて國家と共に斃るゝ覺悟して外國人にあたるべし」と仰せられると、滿人派は豫て内々決して居るゆゑ、皆茫然に笑を含みて居るのみであるが、漢人派は互に顔を見合せて嘆息を吐くのみであります、此時漢人にして曩に露國公使を勤めたる事ありて、外國人とは交際も廣く、清國政府の中では開化人とも云ふべき許景澄が進み出で、「太后の仰せには候へども、這は實に容易ならざる儀ゆゑ、篤と御評議の上、御裁決あらせられたく候、滿人派の方々國家の爲に斃るゝまで力を盡すの決心と宣へども應は滿人の

みに限らず、苟くも此國の粟を食するもの、誰が國と共に斃るゝの決心なきものあらん、況んや身廟堂に立つて、皇上の御信任を辱うす、吾々、國家と云ふことは未だ嘗て刈那の間も心頭を離れたることなし、朝廷と國家と思へばこそ、斯く御諫めも奉るなれば、臣等が微衷の程をも賢察おらせ玉ひて、滿人派のみの御裁決は一應取消しの上、滿漢兩派の大會議にて充分利害得失を討究せられ、其上にて御決定あらまほしく候」と憚る色なく演べ立てますと、此を聞て頑固派中の頑固なる剛毅は堪り兼ねたか満面に怒を含んで、ズイと進み出で、「貴下の言は徹頭徹尾無禮なり、太后皇上已に外人排斥と決し玉ひ、端玉始め吾々に至るまで、國家を賂して之を贊助し奉らんと決心せり、今に及んで貴下等の如き無氣力無節操の一派が、僅かに口舌を以て反對なすも怎で兩上(皇帝西太后)の御聖慮を酬へし奉る事のあるべきや、此上に尙ほ無益の言語を費やして徒らに反對なせば、即ち是れ違勅罪であるぞ」と許景澄等の漢人派をハツタと睨めつけたる其の勢ひ、虎の猛り狂ふに異ならず、流石の許景澄も唯だ黙して何の言葉もなかりしは、眞に氣の毒の至りてあります、讀者諸君の中には、私が清國朝廷の内幕だの評議などを講演しますと、黒嶽の奴め例の扇で嘘を叩き出すなど疑りなさる方もありませうが、是は決して私しが想像的で演べ立てるのではありません、眞實に北京滯在中或る確かなる筋から聞き出した事實を講談的に仕組んで申演べるのでありますから、其のお心得でも覽を願ひたいのであります、サテ此時西太后は再び御座を進め玉ひ、「卿等の中には外人を怖るゝの餘り、卑屈なる言語を吐く者ある様なれど、應は大なる心得違ひなり、彼れ外人は悍力を恃みとし、詐謀に仗つて我國を奪掠せんとし、我れは天理に憑り仁心を恃みとす、故に神祇感格、人々の忠憤古へより未だ嘗て見ざる所、今苟且の安きを圖つて、羞を萬古に貽さんよりは、此機に乗じて大ひに撻伐を張り、雌雄を一決するに若かず、卿等夫れ旗を勉めよ」と意氣奮然として、頗る決する所あるもの、如くに仰せられたので、滿



人派の主戦論者は皆顔色得々然として、漢人派を蔑視するの有様であります。時に漢人胡京堂なるもの進み出で、太后飽までも戦はんと決し玉は、臣等争てか是に背き奉るべき、然はあれども今直ちに世界列國を敵に引受くるは策の得たるものにあらずして、自ら決裂を招ぐに至るべく候、等しく是外國と雖も米英露佛日獨の諸國自から其の利害を異にし、彼が我に對するの動作も各々違ふ所あれば、我が彼に施すの手段も亦た自然其の揆を一にすべからざるものあり、願くは兩陛下、聖明の慮慮を以て、其利害得失を看破し、先づ與みし易きものを撰んで是に當り、機に臨み變に應じ露と結んで英を討ち、密かに日本と約しては露を討たしめるなど、或は合し、或は離れ、神算鬼神、彼等をして其の爲す所を謀る能はざらしめ、然る後一舉大打撃を與へば、以て中國の威を張るべく、以て滅洋興清の偉業を全ふすべし、希はくは兩陛下是を震衷に斷じ玉へ」と辯舌水の流るゝ如く、理非明白に述べたのであります。スルト是に聊か氣を得て清人中の開化人那桐が進み出て「胡京堂の言葉は臣が意見と符合せり、今世界列國を引受けて戦ふは、自ら國を滅ぼすなり、宜しく敵を撰ばば戦ふべく、且つ各國公使は厚く保護して暴行を加へざる様論告あらせらるゝことを然るべく候」と演べたので、茲に稍やく議論が二派に別れ、暫時は互に烈しく論じ合ひましたが、結局北京へ向つて進み來る列國軍を城外で喰止めて、城内へは一兵たりとも入れざるべからずと決し、(是はシーモアの率ゆる軍のこと) 端那玉は西太后に向ひ「許景澄は外國人にも交際廣きゆゑ胡京堂と共に城外に出し、聯合軍を諭して城内へ入れぬやう取計らはしむること然るべく」と奏した所から、太后は實にもとつて許、胡二人に右の如く命ぜられました。是端玉が己に反對する彼等をば、外人の手を借りて討たせんとす謀計なりなどと言ひ觸らす輩もあつたさうです、何しろ二人は悄然として座を退きました、ソノ跡で尙ほ種々御評議の上、左の如き意味に決せられたとの事でありす。

一 直隸總督裕祿に命じ、北洋練軍二千を太沽に送り、守備を最も嚴にして、外國兵の上陸を防ぐこと  
 二 白河口に水雷を敷設すること  
 三 天津塘沽間の鐵道を破壊すること

以上の如き意味の上諭を天津に在る直隸總督裕祿の許へ早馬を以て、勿論電信鐵道が破壊して居るからのことでありませうが、二名の侍從官の如き者が上諭を携へて、十四日の午後北京を出立し、馬を駈つて十五日の午前に天津の北城門外なる直隸總督衙門に着いたのであります。此一片の上諭が即ち太沽砲臺に血河屍山の大活劇を演じ出す近因になつたので、サテ總督裕祿は此の上諭を見て、心中に驚きながらも、止むを得ず、重立ちたる人々を招きて會議を開きました、其集めたる人々は海關道臺黃建堯、天津知府、天津道臺等、凡て有力者七八人でありすが、座定まりても誰れ一人口を開くものなく座中は全然で啞の集會の如き光景だ、此邊は黒猿が天津領事館で西村博君からも聞き、其他確かなる人から聞出した事ですから實説です、、、、、稍やくにして海關道臺黃建堯が口を開いたが、「總督の御意見は如何です」と尋ねたさうです裕祿は吐息をつき「奈何ぞ此の如き事の成るべきや」と云つたさうで、他は一言も云はなかつたさうです、流石に直隸總督は外願人とも交際廣く、随つて知識も幾分か開けて居た人と見えます、此人は昨年五十四歳で、北倉の戦ひ破るゝや鴉片を呑んで自殺したさうですが、支那人としてはまア正直な方で、賄賂も餘り取らない人ださうです、西村君の話には海關道臺の黃建堯は中々狡猾な男だから、己一人で賄賂を占めて裕祿には充かひ扶持を喰せて置いた様だと云つて、笑つて黒猿に話された事があります、凡て支那の役人は賄賂を取るを以て當然の事の様に思つて居る、其處へ行くと我が日本では大臣であらうが、議員であらうが、收賄の事でもあつて、夫が露顯しようものなら、夫れこそ國民は舉つて之を惡み、遂に其地位を保てぬばかり



てなく、社會へ顔出しの出来ないやうにまでなるとは眞に好い氣味であります、餘事を申し演べて相濟みません、裕祿は迎も今日外人排斥など云ふ事は云ふべくして行ふべからざる事とは知りながらも、朝廷の思召であつて見れば致方がありませんから、直に其趣きを太沽確臺へ申し送り、其の準備に掛つたのであります、是が早くも日本の新聞記者西村博君へ知れて来たとは、實に奇妙不思議にして、面白き事情もあればあるものであります、

(十九)

此所で一寸天津の新聞、國聞報館の成立から其の経歴を申演べるの必要が起つて来ます、此の新聞社は今回の事件に大關係がありますから、其の思召で御覽を願ひます、凡て清國は南方は開けて居るが、北清は未開であります、北京天津に明治三十年まで新聞と云ふものがなかつたので、清國の存志者は大いに之を慨歎しました、ソコで北洋大學校長王修植、水師學堂長嚴復陶大均などが謀つて一の新聞社を設立し、政治文物、凡て社會百般の事業の大改良をしなくてはならぬと云ふ事を頻りに論評したのであります、スルト露國の領事此の新聞を買取りたいと申込んで来たさうですが、中々賣らなかつたのである、併し露國と清國とは、其當時種々の關係があつて、頗る親密であつた夫は、諸君も御承知の如く、露國が主働者となつて、獨佛是に同盟し、長く我々日本人の忘るべからざる遼東半島を日本の手より還附させ、露國は我々日本人をして切齒扼腕血の涙を流させたる代りに一時は支那人をして頗る露國の恩義に感ぜしめたてであります、故に露帝の戴冠式には李鴻章を特派したくらゐだ、露は其の返禮としてウフトムスキー侯をして北京に到らしめ、皇帝と西太后とに奉呈したる物品は一百萬兩以上のものであつて、中にも太后に贈りたる髪飾りの如きは、金剛

石にて一見眩目せしむべき程の物であつたといふ事です、そののみならず、朝廷の官吏へ贈りし物品は實に夥だしく、遂に西太后は謁見式を行ふたさうですが、是れ古へより清國には其例の無かつたことで、是を以て見るも其の當時露清の交親が如何に密なりしかを知るに足るです、此間に於て銀行鐵道局の開業式を舉行し、多くの清國官吏紳商を招待して、露の爲に奔走したる官吏は、其の長官に依頼して夫々昇任をさせるなど、總て清國官民の歡心を買はん事に勉めて振目がなかつたから、一時は露西亞の呼聲高く、清國官民の重立ちたるものは、露西亞熱に浮されたる如く、非常の人氣であつて、學生まで露語を研究する者が日々に増加するの模様であつたのです、サア斯の如き事情であつて見れば、天津の新聞社も露の請求を全然退けるといふことも爲し得なかつたので、殊に清國は露國より借財もあり夫等の爲にや、遂に露の機關新聞となつて、不本意ながら露人の命ずるところに從がつて筆の方針を狂げて居たのであります、然るに此年の秋、端なくも起つた獨逸宣教師の殺害事變、からいたして、遂に獨逸軍艦を派遣して膠州灣を占領し、談判の末九十九年間借入れると云ふ事に決するや、露も亦透さず切り入つて、旅順港を借り入れて仕舞たのである、皆に旅順借入ばかりでなく、滿州を奪はんとするの野心が次第に露れて来たので、そこで吞氣なる支那人も始めて心附き、露國を怨む様になつて来たのです、サア憚ると如何に支那人と雖も、流石は新聞記者である、露國の請求を退けて決して露人の差圖通りには書かない、却つて露國を攻撃して、彼等は我清國を分割せんとするものである、寧ろ遼東半島を日本に譲り、日清同盟して以て東洋の保全を圖るに若かりしとまで論じ、露國の卑劣手段を頻りに論難評撃し始めたので、露の天津領事は大に驚き、北京へ出掛けて行つて、北京駐在の露公使と協議の上、公使は總理衙門と云つて、我國なれば外務省とも云ふべき役所に到り、大臣に面して「天津新聞は不都合なり、彼をあの儘に發刊させ置きなば、露清兩國の親交を破るゆゑ、是非



ども禁止ありたし』と嚴談に及ましたることを衙門にては種々評議の上、在天津の直隸總督に命じて發刊禁止の命を下したのであります。スルト此の新聞の主筆をして居た楊某と云ふ清人は中々の氣慨家であつて、此事の如何にも憤慨に堪へられないので、種々勘考の上、夜中密かに天津の我が日本領事館に忍んで来て、領事に面會を要めましたので、領事は豫て相知つて居る交情ですから、早速に會ひますると、楊は涙を流して、新聞廢刊の命の下りし不法を詳細に語り、『今此の新聞を廢刊するは暗夜に一點の燈火を消されたるも同然なり、北清の才智は我が此の新聞に依つて開發されつゝありしに、今は俄然此の不法極まる命令の下りしは、是れ畢竟彼の露國が我國民をして益々暗愚に陥らしめ、己れ呑噬の慾を恣まゝにせんがため、我が政府に迫つて斯の如き非理無道なる令を出さしめたるなり、嗚呼我が清國は世界無比の大領土を有し、民衆の多き亦他國に冠たり而して今や國威地に墜ち、國權日々に萎靡して、領土亦た將に危うからんとす、貴國は是れ同文同種の國にして、且つ日本人は由來義に富めり、閣下願くば我國人の不幸を憫み玉へ』と或は慨き、或は憤ほり、又は潸然として涙にかきくれながら訴ふる其の有様に、領事始め傍らに在る人々も實に氣の毒の念を起したのであります。『夫は貴君方の御心中、お察し申す、併し榮枯盛衰は世の習ひであるから、清國とて何時までも他國の侮蔑を受けては居ますまい、必ずや早晚かは時を得て今日の耻を雪ぐ事もありませう、堪忍して時期の來るをお待ちあること宜しからん』と慰さめてやると、楊は唯だ『有難う』と云つて頭を垂れて暫く考へて居たさうですが、稍あつて『如何か日本の力に依つて、此の新聞を維持して行くことは出來ますまいか、先にも云ふ如く此の新聞を廢刊して仕舞つては、北清地方の人民は文明に導びく指南車を破毀されて了ふのであるから、益々野蠻の暗黒界に陥つて、北清の民衆は世界の大勢を知る事が出來ませぬ、情願尊大人方日本人の義侠心を以て同文同種の我が清國人を憫み玉ひて、御盡力の程を願はしう存じ上げま

す』と熱心に頼み込むので、領事も困つたが、然し彼が意中を察すれば、氣の毒にもあり、又感ずべき所もあるゆゑ『何れ篤と評議の上、御返事をしませう』と云つて一先づ還しました歸つた跡で協議すると、西村博君が『僕は一と引受けてやつて見たいと思ふ、此の北清地方に一ツの新聞もないと云ふは、一方から云へば北清人民の爲に救ふべき事であるし、又た一方から考へて見れば、營業として將來大いに見込がある、是非一ツ日本人の手で引受けてやつて見たい』と如何にも熱心に云ふから、領事始め『君が夫程熱心なら奮つてやるべし、及ばずながら吾々も盡力しよう』といふので種々相談の上、西村君は一旦日本に還り、此の計書を有志家に語りしに、心ある人々は衆つて之を賛成なし呉れたるゆゑ、意外に早く金を整ひ、三十年の最も押詰つてから再び渡清して、遂に此新聞を買取り、日本人西村博君の名義で發行し始めたのである、是即ち有名なる清國天津の國報館と云つて日本領事館と梁園門との中央にある二階作りの中々立派なる新聞社であります。サテ斯くの如く日本人の名義にしたから、如何なる事を書き出して、清國政府は何も云ふ事は出來ないので、政府部内の頑固黨や、民間にても守舊派義和團の如きは、最も此の新聞社を憎み嫌つたさうであります。是に引かへ荷くも開明の志ある人々は此新聞を頗る喜んで、内内投書する人もあり、日に／＼盛大になつて來たのである、そこで或る開明派の官吏は内々此新聞紙を光緒皇帝の御覽に供し奉つた所が、皇上も大いに喜ばせ玉ひて、西太后や頑固派大臣には内密にて日々に取寄せ、お覽あらせられたさうである、そうして見ると清國皇帝を幾分か開明主義に導き奉つたのは、全く此日本人西村博君の發刊したる新聞紙が、與つて力ある事と思はれますので……サント諸君、新聞の記事が社會人類を感化する功効も亦た大なるものでは無いませんか、然るに間もなく清國に起つた彼の政變事件と云つたら、諸君も其當時の新聞紙上にお存知でありませうが、清國皇帝が開明の方針を取り玉ひて、康有爲等一派の開化黨を擧げ用



ひ、守舊派大臣を退けて政體の大改革を圖らんとし玉ひしも、事難詰して其のお目的を貫き玉はざるのみならず、御痛はしくも幽閉のお身とならせられ、康有爲は遠く日本に亡命して、其一派の人々或は誅せられ、或は他國に流寓し、茲に全く開明黨の失敗に歸し、西太后再び垂簾の政を爲し玉ひて、端郡王の子溥儀を以て皇太子に立て、端王始め頑固派の人々にて政府を組織したれば、清國政府は悲しくも大頑冥派の寄合所と爲り、遂に官吏だけでは新聞を讀む事さへ禁するに至りました。併し是等は彼の秦王が書を焚きたるにも劣りて、愚も亦た甚だしき政略だけに、毫も其の功はないのである。官吏中にも志あるものは此政策を笑つて、内々に新聞を見るもの多く、民間には勿論日々に賣高が増して來たのであります。然るに一旦天津知府の許から國開報館主西村博君に宛て、一封の書面が來た、開いて見ると「お足勞ながら御相談があるゆゑ、一寸來て貰ひたい」と云ふ意味の手紙であります。西村博君は尙能く見ると知府の官邸から出たのではなく、東京で云へば恰ど芝の紅葉館とも云ふべき上流社會の行く料理屋から寄越したのである。西村君はと心に曉つたが、素知らぬ顔で、直ぐ腕車を走らして知府の待つて居る彼の料理屋に参りますと、早速に奥の座席へ通しました。此時己に日は暮れて間毎に燈火を點じ、並をも欺くばかりです。天津知府は上座に在つて、其の傍らに歌妓(藝妓)三名、少しく下座に屬官二名と歌妓二名にて、今や酒宴方に酣てあります(勿論椅子卓子にて、歌妓も矢張り椅子にて樂器を奏しますが、随分美人があります)知府は西村博君の來たのを見て、傍らの歌妓に何やら目配すると、彼等は早くも夫と察し、媚々とした腰附で博君の側へ進み寄り、満面に愛嬌を含んで「旦那、知府さまがお待兼ねてしまいましたわ」と何國も藝妓となれば同じ事、例の甘つたるい猫撫聲をして、鼻下長先生を驚かす其情に變りはないと、西村博君先生心に面白く思ひながら、二人の藝妓に手を取られて知府の前へ至り、丁寧に禮をすると、知府も亦た答禮をいたしました。先生、突然

にお招き申して甚だ失禮でした、屈駕不勝感激』と出有難しと挨拶するので、西村君も「お招きに預つて感激に堪へず」と答へました。知府は盃を取つて「要奉奴一盃」慮外しますと言つて西村君に進めるから、西村君も「敬領」「頂戴します」と云つて承けた。スルト知府は歌妓に向つて樂器を奏せよと命じました。支那藝妓の樂器には三絃子と云つて日本の三味線に似たるものあり、胡琴は胡弓の如きもの、琵琶、笛、小鼓、雲羅など、歌妓は各自に是等の物を取つて調子を合せ、聲張り揚げて謡ひながら弾き鳴らす光景、日本人の眼には随分異様に觀せられて、最も興あることとあります。稍や二十分計りも謡ひ弾きすると、一度皆手を休め口を揃へて「お喧ましう」と云つたやうな事を申します。知府は「アハハハ」と笑つて西村君に盃をさし、「先生、一向にお召しませんな、お口に適ひますまいが、情願澤山に召上つて」西村君も「イヤモウ決して遠慮はしません、充分に頂きます」知府「コレ和女們は西村先生をお敬愛いたせ、お國の美人のお酌でないから、召上れませんでせう」西村君「イヤ御言葉で痛み入ります、中々美しいのがお揃ひで、日本婦人は逆も及びませせん」と西村君は支那語を巧みにやりますので、藝妓等にも能く解りますから、年増藝妓が「アラ日本の旦那は世辭が上手だ事よ」若い藝妓が「姐さん日本のお方は活潑な中に何處かお優しい所があつて、妾い好だわナンカンと云れて西村君もまんざら悪い心地でもなかつたさうです。是はハヤ如何も、西村先生奢らなくてはならんね、アハハ、」西村君「……時に知府公、今夜自分をお招きになりました御用は」知府「サ、外でもないが、少し君に内談があつて、如何ぢやぬ、西村君、君の新聞を……彼物を吾輩に賣つて貰ひたいものぢやが」西村君「エー、國開報館を賣れ、買ひたいと被仰るんですか……夫は亦た何故て……」知府「彼の新聞の爲に實に吾々は少なからぬ迷惑をして居るぢや、君等が餘り種々な事を書立てるので北京の總理衙門からは度々苦情を言つて來るし、總督も困つて居らる、廢刊して呉れいと言つた所が、夫は君等も承諾



はしまい、だから買取りたいと云ふのぢや」西村「夫は甚だ其意を得ませぬと言葉であります、種々な事を書きたるから悪いと云れますが、素より新聞記者と云ふ職業は、社會百般の出来事を書立てし之を世人に知らしめるのみならず、上は朝廷の事より、下は婢僕を食の所行に至るまで、其の善行は是を賞し、悪行は筆誅を加へて之を懲らして天地間ありと有らぬものを論評して、社會の耳目となり、明鏡となり、木鐸となつて國家の改良進歩を圖るのが、我々新聞事業に従ふもの、職責です、是等の事は今改めて云ふまでもなく、誰しも知る道理、況んや知府公閣下に於てをやらず、夫に種々な事を書き立て悪いとは、尊官はお戯れに左様な事を被仰るのでせう」知府「イヤ決して戯れてはいけません、夫は貴君の云はるゝ所が至極道理ではあるが、知らるゝ如く我清國は人智が未だ開けず、文字を知るものと雖も道理に至つて暗いのである、夫れ君方がア、云ふ過激なる議論を書立ると、爲めに煽動されて、中には心得違ひを仕出來すものがなきにしもあらずだ、現に畏れ入たことだが、我が皇帝陛下が康有爲の如き一書生を用いて舊來の大臣を退け、大變革を行はんとし玉いしも、其原因は、矢張り怒りて新聞なども御覽になつて、外國のことを知ろし召た爲て、イヤ之は甚だ失敬なる言語で恐入たことぢやが、マアサ爾う立つたやうな譯である、だから西太后も頻りに此の新聞のことを御心配なされて總理衙門に命じ度々直隸總督の所へ廢刊させよと云つて寄越されるので總督も大いに困つたが眞逆に日本人の發行して居る新聞社に向つて廢刊せよと命令的に吩咐することも出來ぬから夫て小官をして貴官に御相談をさせるのである、如何か西村先生、此の情を賢察あつて此の儀を承諾して頂きたい

……コレ西村君にお酌をせんか、何をボンヤリして居る、氣が利かん、歌妓共ぢや、ア、西村先生に見惚れて居つたのぢやな、イヤ是は已が察しがなつた、アハ……」など、頻りに世辭を使つて、只管頼む其の心中を察すれば、憫むべき次第であります、西村君は此處で充分論じて、新聞の社會に必要な事と、

新聞報館の爲に北清の人智が進みつゝある事など説てやろうと思つたが、亦た考へて見ると、此の頑愚なる知府に説ても無益である、夫よりは今夜は程よく切り揚げて置き、他日直隸總督補祿に面して充分に説付けて呉れんと思案をいたし、莞爾と笑を含んで「尊官の言葉承つて其の情を察し申せば、御道理至極であります、併し僕一個の了簡て返事も出來ず、且つ篤と勘考の上ならはは何とも云へぬ事ですから、何れ他日御返事を致しませう」御道理である、如何か能く御考への上、無理にも承諾して貰はなくてはならぬから、さア情願大益で一ツ「イヤモウ澤山に頂戴しました、餘り夜更けの中にお暇を」知府「アア宜しいではありませんか、今夜は當亭へ泊つて行つても」と云ひつゝ、藝妓に目配せすると、美人は西村君の膝に取籠りて「旦那、可いではありませんか、お泊り遊ばしても、ヨウ旦那、是非今夜は……それとも奥様がお待ちをらつしやいますか」など、甘つたれて引留る所は日本の娼妓よりも其の情甚だしいのである、此所を讀み玉ふ諸君は、黒猿は野暮的な男である、藝妓の口調はモツと粹で淡泊して居る、是では全然密淫賣の口の所方だ、思ふに黒猿は密淫賣ばかり買つて居て、藝者買ひをした事のない奴と見える、イヤハヤ惘然な奴である、己が一晩買ひに連れて行つてやらうなど、云ふ義侠心のある大賢人が出て下されば難有いイヤ是は妄らない事を述べて相濟みませんが、天津あたりの藝妓は全く客に對するの情が清く濃かなやうである、僕などの天津を立つて歸る頃、日本の藝妓二人朝鮮の仁川に居たのが廻つて來た、其の名前は忘れたが、一人は二十三で中々の美形、他の一妓は廿七八で容貌は少し劣るが、英語もテヨツと出來て、客の取扱ひが甘いさうだ、夫て一夜の揚代が三十兩と云ふから日本の金で三十五六圓になるだらう、日本の軍人は月給が少いから貧乏で、そんな高い藝妓を招く勢ひはないが、英米露獨の將校は有福であるから、珍らしがつて毎夜争つて呼んだやうである、或る米國の士官が「日本藝妓淡泊して居て宜しう、清國藝妓情深い、最



も宜しうと云つたそうですが、此の最も宜しいと云ふ語を能く味はつて見れば、清國歌妓の長所は何れにあるかと云ふ事がお解りになるであらう。

(二十)

西村君は知府や藝妓の引留る袖を拂つて樓外へ立出て、車を急がして還りましたが、其夜は其儘に打臥し、翌朝昨夜の事情を安藤君に物語ると安藤氏も大笑ひをして「清國官吏の馬鹿氣で居るのは今に始めぬ事だが、其中にも此の社會に必要な新聞を無くして丁ふ事は愚も亦た甚だしいね」西村「爾さ、余り馬鹿氣で居て腹も立てない、併し君、清國ばかりを笑へないぜ、日本も今から數十年前に逆つて觀たら如何だね、口に政治を論ぜんとすれば集會條例と云ふ究極極まつた物があつたし、筆力に依て之を訴へんとすれば、發行停止と云ふ可厭なあひがあつたし、随分馬鹿氣で居つたぢやないか」安藤「そうさ、彼の當時の事を想ふと、恰かも夢の様な」など、話して居る所へ、支那人の受附が這入つて参りました「先生方、今梁園門へ貼出がある、爾も本社に關した事を記して、貼出してあるそうです、西村「なに、本社に關したことが... フム」安藤「僕が見て來ませう」と安藤君は直ちに梁園門へ駈附けて見ると、成程大きな唐紙に書て掲げてある、多くの支那人はハイ／＼云つて見て居ります安藤君は其の掲げてある文を見ると國開報の事がさんざん悪く書いてあつて其の終りに「國開報は邪説を唱へて衆民を惑はすものである、速かに廢刊せざれば我が義和團は天に代つて其館を燒き、其記者を誅戮すべし」と云つた様な意味の文字があつて、爾も義和團匪等の所爲である、安藤君も是は容易ならざることと思つて急ぎ返つて來ると、新聞社へも亦た一封の投書が來て、是も矢張り義和團の名義で同じ様な事が書いてある、そこで西村君安藤君を始め社の重立つたる人々が

集つて評議をしたが、西村君は一同に向つて「彼等團匪は頑愚であるから、我々に暴行を加へ、本社に放火すやも圖られない、依つて本日から各々武器を携帶し、夜中は決して外出をせぬ事とし、又夜は交代して社の内外を巡視する事にしたい」と發議したので一同是に賛成し、其の夜から警戒を最も嚴重にしたのであります、其後も度々梁園門の傍らへ貼出したり、又た投書が來たりするので、支那人の職工などは怖れて社へ來なくなる、一時非常に困つたそうですが、西村君安藤君等は屈せず益々奮つて事業に従ひ、職工の中で物の道理の解る様な男を呼んで「お前達は決して逃るな、此の新聞事業は我々が利益を目的として行つて居るのではない、東洋全體の爲め、北清の人智開發を目的に發行して居るのぢや、汝等苟くも國家と云ふことを思はし我々と共に盡力せよ」と云ひ聞せると職工の中にも中々感心な人物があつて「ハイ私共は倒れるまで行きます、先生方のお蔭で此の新聞が日々に盛んになつて來て私共の様な愚味な人間にも、新聞社に置いて貰つたために、道々物の道理も解る様になり、又た生活にも差支へなくして居ました其の御恩は忘れません、今慙う云ふ場合に己さへ安全なれば、社は如何でも構はんと云つて逃げ出す様な奴は、人たるもの、道を知らないのです、私共は死ぬまでも社の爲に盡します」と涙を流して申します、其の精神は天晴れ教育ある日本人にも劣らぬのである、西村君も大ひに感心して益々彼等を勵ましてやつて居りますと、昨年五月二十六七日頃の事ださうで、二名の義和團徒が夜中密に尋ねて來て、館主が主筆に會ひたいと云ふから、應接所へ通して置いて、西村君が夫へ出て面會すると、彼等は丁寧な挨拶をなし、一人は蕭雲麟と名乗り、他の一人は文某と名乗つたさうです、蕭は先づ口を開いて云ふに、我々は裏りに貴社を惡み、又た貴君方を排斥せんとするものではありませんが、如何か我々義和團の精神のある所を察して戴きたい、貴君方は我義和團を目して、直ちに匪徒である暴民であると視做さるゝ様であるが、夫ては餘り可哀想でありま



す、中には單に動亂を好むもの、即ち貴君方の所謂匪徒もないとは限りませんが、我々は眞に愛國愛國の情  
 禁と難く、團體を結んで清國の爲に盡さんとするのである、先づ情を以てお推察下さい、膠州灣は些少の間  
 違よりして獨人に割かれ、旅順港は何の理由もなくして露人に侵略せられ、敵勢愈々熾にして國力日々に縮  
 る、我々清國の民としては憤慨情は加へ、加之熱心外國宣教師の振舞を見るに口に仁愛を唱ふと雖も、  
 行ひ是に伴はず、傲慢無禮の沙汰極めて多く、彼等は慈愛の神を頼むより寧ろ自國の強を頼み、我々清國人  
 を視る事犬の如く、豚の如くである、さア、思ふて茲に至れば……先生お察し下さい』と云つて彼は落涙  
 數行、或は清國の不幸を歎じ、或は洋人の傲慢無禮を憤り、其の言ふ所固より頑愚にして、二十世紀内交  
 通の今日に當り、尚ほ壞夷鎖港を夢みつゝ居るものやうでありますが、併し其の情を察しやれば、憎むよ  
 り寧ろ憐むべきものであります、西村君も氣の毒になつたから『失敬ながら君等が二十世紀の今日外國人  
 を打撃ふの、港を鎖すの云ふ事を、眞實腹から出たとすれば、それこそ文明の敵にして、甚だ宜しくない  
 のみならず、云ふべくして迎も行ふべからざる事だが、併し又君等の心情を察すれば、彼等洋人が妄りに  
 清人を侮蔑し、清國人を以て己等より數等劣れる者と臆断して、傲慢無禮の沙汰に出づる夫を憤慨すると云  
 ふは亦尤な理由で、一寸の虫にも五分の魂とかいふ日本の謔もある位だから……けれども君等が唯一概  
 に外國宣教師を不仁な者と思ふは間違つて居る、中には天使の如きもの神の如きものもあり、眞誠に基督の  
 心を以て心とするものも無いではない、又外國人だとして敢て皆を弱肉強食の主義を抱くものばかりではな  
 い、道は天地に通ずるゆゑ、孔子聖賢の學、却つて彼國に實行せらるゝものも多々ある、孔子の學、基督の  
 教、佛道も我が日本帝國の神道も途を異にして歸を一にするものである』と教へ諭しました、尤もソノ議論  
 は黒猿の講演する如き味ひのないものではなく、モツと高尚なる學説を交へ最も丁寧に懇切に説諭したので

あります、彼等も餘程感化したと見えて、暫く頭を垂れて居たが稍あつて『先生、双方の利益でありま  
 すから、少し筆法を變へて我が義和團の攻撃を緩め、洋人の跋扈を駭して戴きたいです』『双方の利益と  
 は何の事です』『サ、夫れは其實我義和團の中に貴社を火せんとするものあつて、昨夜の如きは其の準備まで  
 して、己に實行せんとしたのを我々が稍やく止めた位であります、何で我が止めたかと云ふと、貴社が會  
 て我義和團の事を論評した時、彼等の中には愛國慷慨の徒多かるべし云々との文字を見た事があります、故  
 に我々は國聞報は一概に我が義和團を排斥せんとするものに非ずと信じて居るので、此儀は我が口から義和團  
 一同に代て御禮を申上げて置きます、それ故情願爾後彼の御精神を以て論評を願ひたいのである、爾すれ  
 ば決して貴社へ對して暴行を加へざる様な事はあります、即ち是れ双方の爲と思ひます』と述べた、西  
 村君は始終微笑を含んで聽いて居たが、彼等の言葉の終るを待ちて徐ろに口を開き『君等の言は固より徹  
 頭徹尾感心する事は出来ないけれども、亦た全然排斥もしない、失敬ながら君等は新聞記者の天職を解する  
 事が出来ないと思へる、苟くも世に木鐸たるべき新聞記者は、各自主義定見と云ふものが在る、人の頼みに  
 應じて筆鋒を曲げる様なそんな記者なら、眞正の記者とは云へぬ、過日の新聞紙上に君等の事を評して、中  
 には愛國慷慨の輩もあると云つたのは、彼等は我輩大いに見る所あつて爾く書いたのだ、決して君等を怖れ  
 て諂つたのではない、我日本も今より數十年前、即ち徳川の末に、恰ど君等の如き鎖港攘夷の過激論を唱へ  
 て、所在に外國人を殺傷した輩があつた、彼等の中には頑愚にして世界の大勢に通ぜず、唯一圖に外國人を  
 見る事禽獸の如くに思つたものもあつたし、又た無賴の浪人輩が世の亂に乗じて暴行を恣まふにしたのもあ  
 つたが、併し眞正に勤王愛國の赤心より外人の跋扈を憤つて、攘夷論を唱へたものも澤山あつたのである、  
 現に今朝廷から爵位を授かつて貴族に列して居る人達の中にも、其の當時は少壯血氣の勇に驅られて、異人



館を焼いたり、洋人を殺傷した人もある、薩長二藩の如きは幕府を倒して王政復古の大業を建てたる我國屈指の大藩であつて、其の藩中活潑達論の名士も數多あつたが、夫てすら一度は英米蘭佛等の諸外國と戦端を啓いて、其の結局多額の償金を拂つた位である、君等が今攘夷論を唱ふるのには、日本國人が幕府の末に抱いて居た様な思想を持って居るのである、乃ち吾輩が君等の中に眞誠の愛國者なきにわらずと評した所以は、サア茲にありだ……併し我國は幸ひに疾く世界の大勢を看破して鎖港攘夷の守舊主義を捨て、開港進歩の文明主義を採つたから、今日の如き開明國となつたのだ、貴下等も赤心から朝廷と國家を思はば、能く大勢の赴く所を察し、清國前途の爲に堪忍して、以て、長へに其の富強を圖られよ、今洋人の跋扈を憤つて無謀にも是に抗敵するは、實に其の功なきのみならず、遂には國家をして四分五裂、此大帝國の滅亡を招ぐに至らん、般艦は遠からず、數十年前英佛聯合軍の北京城下に攻入りしに在り、予は眞實に此の清帝國の爲に一言す、君等篤と考慮し玉へ、若し君等にして愚生の忠言を入れ、一時の勇を抑へて堪忍に堪忍を爲し、氣長く國の富強を圖らば、君等の團體は實に東洋の元氣なり、清國の實なりと、或は諭し、或は罵罵し、痛切に論ずる所ありました、實に西村君の説方は周到綿密にして、黒猿如きもの、講演では連も演べ盡せないのであります、故に彼等も大いに感じた見え、暫し黙然として吐息をついて居りましたが、稍あつて、御親切なる御説諭、誠に承けなく存じます、先生の御高意は我々決して忘れません」と云つて暇を告げて立去たさうであります、此事を露國の領事館の人々が聞出して、ヤレ日本人は暗に義和團に通じて居るの、ヤレ義和團の中に日本人が居ると言觸らしたさうです、此の國聞報と云ふ新聞は、先にも演べる如く、已に露國の手に落とすとするものと、日本人が買取つて日本の名義で發刊するのだから、一ツは其の遺恨にも由りませう、サテ六月の六七日となるや、義和團は退々天津へ入來りまして、天津城と居留地との間に

本部を設け、隊を組んで相往來なし、十二三日頃に至つては清國政府と彼等と通じて居る事が略ぼ知れて來ましたから、各國人は少しも油断を致しませぬが、此時我日本居留民が大いに心を強めましたのは何かと云ふと、夫れは須摩艦の陸戦隊が一箇中隊天津へ着された事である

《三十一》

此所で少々須摩艦の陸戦隊が天津へ着するまでのお話をいたして置かなくてはならぬ必要が有りますから、是を一二席辨じまして、夫から西村博君が、北京より直隸總督の許へ外國人拒絶の上諭の下りしを探知する事情より、大沽砲臺の乗取に掛る事に致しますが、此回の北清事件は事變の關係からいたして自然話が八方へ廣がつて、來ますので、甚だお讀みづらいでせうが、甚摩も止むを得ませぬ譯で……サテ是より前に須摩艦は、南清警備のために派遣されて、六月初旬には澎湖島に碇泊して居ると、急に太沽へ廻航せよと命ぜられたので、六月七日の午後一時に澎湖島を發し、極度の速力を以て太沽を指して進行するのであるが、艦長は島村海軍大佐でムいます、大佐は今や其の居室に在つて北清地方の地圖を見ながら、頻りに何か考へて居らるゝのは、云ふまでもなく作戦計畫に只管心を推かるゝものでありませう、折しも此の艦長室へ這入つて參つたは菅太尉「艦長殿、海上が穩かて何よりでムいます」「ム、結構ぢや、併し海は穩かても、陸地は頗る騒がしい様ぢやな」「左様ださうで、モウ戦鬪は始まつて居るですな」「多分始まつて居るぢやらう、命令には單に太沽へ廻航せよとあるばかりで、詳しい事は解らぬが、何れ他の軍艦も行くてあらうし、又た陸戦隊を上なくてはなるまいと思ふから、豫じめ兵士等にも訓令して置くが宜しからう」「ハイ承知しました、大沽沖は遠淺ぢやと聞いて居りますから、上陸が困難ぢやらうと思ひますが」「勿論……」



サア是ぢや、此の圖を見られい、軍艦の碇泊する所は此の沖で、白河口まで八哩(四里足らず)もあるのぢや、夫て其の途中に淺い所があつて、干潮の時には小舟と雖も通へなくなる、上陸は頗る困難であるから、是等の事を兵士に豫め知らしめて置く方が可からう」と島村大佐は勇猛なりと雖も、亦た用意周到、些細な事でも苟くもせぬ方であるから、種々なる事を豫じめ御訓令になつたのであります、水兵諸君は是が爲め勇み立って喜んで居りますると船は益々進んで、十一日の正午無事に清國太沽沖へ着いたしました、此時太沽沖に碇泊して居た各國軍艦運送船は未だ澤山はありませんで、日本は笠置艦唯一艘である、島村大佐は取敢へず笠置の艦長永峰大佐にお會ひになる、先づ互に御挨拶を済まして後、島村大佐は莞爾に笑を含まれつゝ「如何です、天津北京の状況は」と尋ねになりました「頗る危殆に迫つて来た様です、吾輩は四日に此所へ着いて、五日は副艦長が森中佐と共に一個中隊だけ率めて上陸しましたが、天津北京間の鐵道破壊の爲め、數日間天津へ止つて居つたです、ヌルと一昨夜になつて、英國のシーモア中将が陸戦隊を率ゐ、北京へ救援に赴く目的で上陸して、昨十日の未明に汽車に乗じて天津へ行つたです、夫て我軍隊は副艦長の山下が天津へ止まつて、森中佐が宇佐川少尉に一個小隊だけ率ゐさせて、シーモア中将と共に北京へ進んだやうですが、首尾能く北京へ達せしや否やは未だ分らんです、天津からは後の船の着き次第に兵を送つて呉れいと云つて来て居るです」島村「ハア、では山下中佐が天津に居るですな……宜しい、吾輩天津へ行きませう、此所は貴官が居らるゝから」と是から兩大佐は種々御評議の上、翌十二日に島村大佐は菅大尉に一個中隊を率ゐさせし、須摩艦の指揮は副艦長に命じて置いて、御自分は御上陸になりました、此の太沽沖上陸の光景は委しく演ずると、随分滑稽な面白い話があります、夫は福島少將上陸の所で充分講演致します……島村大佐は十二日午後無事に天津へ着いたから郵領事青木陸軍中佐山下海軍中佐を始め、領事館員居留人諸

氏の喜びは一通りでありませんで、サテ三十三十四の兩日は、唯だ義和團が耶蘇教會堂を焼いたとか、教民を殺したとか人心恟々として騒がしいばかりでありましたが、十五日の午前の事で島村大佐、青木中佐、鄭領事等が額を鳩めて類りに御協議最中の所へ、慌だしく駆込んで来た人がある、見ると國聞報館の館主西村博君であつて、目頭沈着なる同君も、今日は頗る促込んで、顔色も變じ、額から汗をボク／＼垂らして、何ぞ尋常ならぬ、様子である、鄭領事は「君、如何したのぢや」と問ふた「如何したと云ふて、モウ貴官方落付いては居られませんで」中佐「何故」西村「さア北京から直隸總督へ上諭が下りましたぞ、爾も外人打撃の上諭が」ナニ、打撃の上諭がッ」と鄭領事は思はず叫んだ、島村大佐は「アハ……ッ」と高く笑つて西村君に向ひ「如何して君が知つたのぢや」と尋ねました、「夫は吾社の探訪長(支那人)が探り知つたです、北京から西太后の密旨を……鐵道が破壊し、電信が斷切れて居るから、早馬で持つて来たさうです、其の密旨は恠々です」と前に講演してある事を詳細に語つたのであります、島村大佐は兩眼を閉ぢて聞いて居られたが、「フム、爾か、夫は旨い事を探知して来たね、では清政府、爾々外人に抗敵する心算ぢやな」中佐「彼を知り己れを知らぬ愚も亦甚だしいですな、併し白河口へ水雷を敷設し、鐵道を破壊して、太沽砲臺の守備を嚴にされては、各國は容易に兵を揚げる事が出来なくて、北京天津間に在る外人は、如何とも仕方がないですな」島村「爾ぢや、先んじて太沽砲臺を占領するのぢや……無論、爾して太沽と此地の聯絡を絶たれぬ様にするのぢや」鄭領「では各國領事に早く通知して」と、是から急使を馳せて英米獨佛露埃伊等の各領事へ通知すると同時に、太沽沖の軍艦へも報知したのであります、未だ此時塘沽と天津の流車電信は共に通じて居たから、是が誠に好都合がムいしましたが、此事を聞出した居留人は皆驚いて領事館に集つて參ります、其人々には國會議員も居れば、銀行員も居る、商人も有れば書生さんもあり、随分混雑を



致したのです、鄭領事は濱子夫人を一望に呼んで此の事情を語り「此の先、如何いふ事になるかも知れぬから、確乎して呉れなくては不可ん、お前に未練な舉動があると、他の婦人までが困るからの」阿郎、大丈夫です、いよく戦になれば、妾も男の様に鐵砲を持つて敵を打つ事は出来ませんが、女だけの天職は屹度為ります、傷をお受けになつた方の看護を及ぶだけして、若しも防ぎ切れなくなれば、阿郎と共に肩く死にます、それは阿郎、日本の女ですもの、オホ、ハ、ハ」と激しく答へたのは流石に領事夫人です、黒猿は領事にお目に懸つたばかりで、奥さんにはお会い申しませんが、代議士高津雅雄君は、此の濱子夫人の事を大層賛めて私へお話がありましたから夫で私しは領事館のお人々に委しく尋ねて、天津龍城中の同夫人の舉動を知つたので、此の濱子夫人が「看護を及ぶだけして」云々の一語は天晴れ婦人の天職を知り得て居るのであつて、私し如き無識な人間でも此事を聞いた時は誠に感心を致しました、黒猿又候生意氣に理窟を並べて相済みませんが、此所で少々言ひ止めて戴きたい事がある、併し是は黒猿の考へから云ふのではなく、實は軍醫總監男爵石黒忠直閣下が教へて下さつた事を、其通りお取次するのだから、諸賢は微々たる一藝人の黒猿如き者の講演だと思ひ召さないで、貴族社會の洒落家石黒男爵の名言と思つてお讀み下さる様に、サテ看護と云ふ事は、天が婦人に授けた職務と云つても宜しい、婦人に鐵砲を擔いで戦に出ると云つても、夫が出来ない事である、板垣や巴の如き稀代の女丈夫ならばイザ知らず、普通の婦女をして、砲煙彈雨の中に立つて男兒と共に戦闘に従事せしめんとするも、是は實際に行り得るものではない、然りと雖も女も亦た人であつて見れば、社會に對して人たるだけの義務は多少盡さんければならぬのである、若し一朝他國と紛擾を醸して、其の極途に戦争と云ふ事になり、サア國の安きと危きと、亡ぶると存するとは、賭けて此の一擧にありと云ふので、男は各い鐵砲を持つて、雨より稠き彈の中を奔走し、或は傷き、或は戦死すると

云ふ場合に臨むも、婦女子は恬として痛いも痒いも相聞はらないと云ふ如き有様にて「妾們は女だから戦なんか知らないわ、鐵砲なんか見てもソツとするよ、戦の話なんか聞いたつて、面白くないから、それよりか歌舞伎座にでも行つて榮ちやんの顔が見たいわ」なんかんと勝手な熱を吹いて、芝居へ行つたり、情郎と巫山戯らして居る様な、そんなお多福は寧ろ人たるものゝ義務を知らない人類以外の動物と見做して宜しい併し是は國家の安危存亡に關する一大事の起つた時の事を云ふので、國家太平の時には、夏なら温泉へも行くと、芝居も見ると、好きな男と巫山戯もするべし、寄席などへも最も来るべし、イヤ是はソレ餘計な事を云つて相済みませんが、何しろ婦人も亦た男兒と共に社會に對する義務を盡さんければならぬのである、夫で此の看護と云ふ事は婦人に取つては適當の任務である、何故であるかと云ふと、婦人の特性として、男兒よりは神經が過敏だと云ふのか、何だか知らんが心が緻密で、細微な所へ行渡る、譬へば病人の顔へ蠅が群ると、其人が顔を擦める、看病者が婦人だと直に氣が就いて「ア、お五月蠅でせう、ね」と云つて追つて呉れる、是が若し男だと直に氣が附かない「如何した、何處か痛いか、ナニ痛くない、マ、何故顔を擦める、何だと蠅が何處に、ム、成程眼の下に群つて居たな、僕は黒子だと思つた」など、恚う云つたやうな有様だから、看護の婦人に限る、仕事で取分け重症患者の取扱ひなどは、最も手を盡して、痒い所へ手の達く様に注意して呉れるから少しも申分がないのです、黒猿は赤十字社の弘濟丸へ乗せて戴いて清國へ行つたから、看護婦方の舉動は能く注意して觀て置いたつて、夫は實に感心なものであつて、看護の方法は至れり盡せりと云つて宜しい、傷病兵を劬り愛する状態は、自分の女房でも彼程には出来まいと思ふ、或人は看護婦の傷兵を取扱ふ所を見て「ア、已も一時間ばかり傷兵になつて、彼の美しい看護婦におんな親切な介抱を受けて見たい」と云つて笑つた事があります、此の看護婦の事に就ては、種々面白い話も澤山にあるか



ら、夫は赤十字事業の講談の所で充分演ずる事に致しますが何しろ領事夫人が傷者の看護をすると言はれたのは、眞に感心な事志して、天下の婦人は皆此の瀧子夫人の心を以て心として戴きたいのである、長たらく餘事を演べて相済みませんから、這邊で措いて、いよく本文の太浩砲臺乗取りと云ふ壯快な事實談に取掛る事に致しませう、

(三十二)

時は維れ明治三十四年六月十五日の午後、太浩沖碇泊の各國軍艦艦長は、露國軍艦ラシーヤ艦に集つて評議を開きました、日本からは笠置艦長永峯大佐が御出席になつて、夫で此の議長は露の海軍中將ホルデブラン下君である、是れは同君が先任將官なるがゆゑでありまして、ホルデブラン中將は一同に向ひ「諸君も定めし天津領事より夫々報告がありましたらうが、清國政府は義和團匪と一致して列國に敵抗せんとする事明かてわつて、已に約二千の清兵は塘沽停車場占領、及び鐵道破壊の目的を以て、天津方面より襲來する事實あるのみならず、白河口に水雷を敷設して外國人の上陸を妨げんとす、故に我々は速かに是に對するの計畫を爲さんければならぬのである、諸君の御意見を充分に吐露して戴きたい」と演べられたので第一に英國の指揮官が進み出て「今我々海軍の兵のみを以て、攻勢を取ると云ふ事は勿論出来ないのである、故に先づ若干の陸戰隊を上げて以て、守勢的に停車場を保護し、若し清兵と義和團とが強て停車場を占領せんとせば、其時は力を極めて撃退し且つ砲臺をも攻撃して之を占領せなければならぬのである、併し今の場合、我軍より進んで攻むると云ふ事は、暫く見合せた方が得策と思ふ」と云はれました、ホルデブラン中將は之を聞いて「お説の通り、今暫くは攻勢を執らず平穩に停車場と列車とを守らるゝことにして、夫で此の停車場の

守備は、幸ひ日本海兵が着された様じやから、日本兵に」と云ひつゝ永峯大佐の方に向ひ、微笑を含みながら「如何か停車場の衛戍を務めて戴きたい」と言はれたので永峯大佐もニコリ打笑ひまして永峯承知しました、幸ひに我海兵三百餘着しましたから、是を以て停車場の衛戍に任じませう」と引受になつたのは、此日服部海軍中佐が佐世保海兵團の兵士三百名を率ゐて、太浩沖へ到着になつたからであります、各國將校は尙種々御評議の上、各國ともに陸戰隊を上げて塘沽附近に守備し、彌々と云ふ時には、背面より砲臺を攻撃するの計畫であつて、各國軍艦ともに此の十五日の夕景より十六日の午前にかけて上陸致しました、其の兵數を擧ぐれば、露國二百名、英と獨逸と合せて三百八十名、であつて、日本は十六日の午前九時から上陸を始めました、然るところ同十時に又露國軍艦ラシーヤ艦よりホルデブラン中將の名にて、至急に評議致したい事があると云つて來たので、永峯大佐光孝君は直ちに御出席になりました、各國の指揮官も已に集つて居られて、ホルデブラン中將は各指揮官に向ひ「昨日來砲臺に在る清兵の舉動を眼ふに、戰團準備をしつゝ居るもの、如く、彼等に敵意の在る事は最早や争ふべからざる事である、故に我々聯合軍は、斷然兵力を以て砲臺占領に決することを得策と思はる」と斯く發議されたので、各國指揮官は無論賛成をされ、尙種々御評議の上の如くに決せられたのであります、即ち其の決議書は

事變の初期より聯合列國は、拳匪の名を以て知られたる反徒に對し、其の外交官、及び國民を保護せんがため、異議なく分遣隊を陸上に派遣せり

最初清帝國政府は、其の義務を了解したるもの、如く、安撫秩序の回復を表面的勉めたるもの、如し、然れども現今彼等は白河河口に水雷を布設せんとし、鐵道線路に向ふて軍隊を進め、攘夷黨に際然同情を表するものなり、此等の行動は清國政府の外國人に對し、公正なる約定を忘却したる事を證するものなり



而して聯合軍各指揮官は、陸上に在る分遣隊と絶へず聯絡を保持すべき職責あるを以て、諾否の如何に拘はらず、太沽砲臺を暫時占領する事に決せり  
 聯合軍の兵力に訴ふべき最後の時間は同十七日午前二時とす  
 右は直隸總督及び砲臺司令官に通知せらるべし

各國指揮軍の署名

此決議書は、直ちに白河の中に碇泊して居る露國の砲艦ボーブル艦長ドプロボルスキー君に通報したのであります。夫は何故かと云ふと、白河の中に各國の砲艦、少ざい軍艦が數艘進入して居りますが、其の中で露のボーブル艦長が先任官なるを以て、總て作戦計畫は同艦長に通報すべき事になつて居るからであります。夫て作戦計畫はといふと申すまでもなく、白河の中にある、各國砲艦から牽制的に砲臺を砲撃して、そうして背面から陸戦隊が突ツ込んで占領しようとするのである、が困ることには太沽沖は遠淺であつて、笠置や須磨の如き大きな軍艦は、砲臺を去る事入哩と云ふから、四里足らずも隔つて沖中に在つて近寄ることが出来ず、砲臺からは船の在る所は少しも見えず、船からは南砲臺の頭が僅かにチヨボツと雲霞の如く見ゆるのみで、それも晴天の日でなくては見えないのである、だから此太沽砲臺を占領せんとせば、如何しても砲臺近く、即ち白河の中へ這入れる小さな砲艦で砲撃をさせて置いて、背面から突進して乗取るより外に策はないのである、サテ聯合艦隊は砲臺攻撃と決する事は決したのであるが、併し一應は砲臺引渡しの際の談判を試みて、夫て砲臺司令官が承諾して故障なく聯合軍へ明渡せば好し、拒めば無論兵力を以て乗取ると云ふ決議であるから、此の談判は露國の海軍大尉で、ヒルデブランド中將の副官たるオーゴレツプ君が決議書を携へて行く事になり、同大尉は通譯官一名と從卒とを從へ、端艇に乗じて十六日の午後、南砲臺を指して漕ぎ行きました。

したが、其の跡に各國指揮官は評議區々であります。「如何でせう直に承諾して引渡しませうか」「彼等の事じやから、何とも解らんですな、意外に臆病な先生們ぢやからね」「イヤ爾でない、そう侮つたものでないです、吾輩仄かに聞くに、此の太沽砲臺の司令官は蘭某と云つて、中々聞かぬ奴ぢやそうです」など、各自思ひ／＼に話になつて居られますと、此方はオーゴレツプ大尉が、午後五時過ぎ南砲臺の下へ舟を着けて砲臺の門前に清兵の歩哨が立って居るから、通譯官をして云はしむるには、吾輩は露國海軍大尉オーゴレツプである、列國聯合艦長の決議に依り、砲臺司令官に談判の儀があつて来たから、此の旨申告ありたし」と告げたのであります、歩哨は直に取次だに見えて、大尉の一行を上陸させましたが、併し砲臺内へは入れませぬで、砲臺の入口には無論門があつて、其の門から二十間ばかり前に堀があり、夫に橋が架つて居る、其の橋と門の間へ椅子を持出して、大尉と通譯官とを夫へ凭けさせて、待間程なく砲臺司令官蘭細怒は、副官と云つたやうな者と、書記の如き者とを從へて、出来りました、彼は年齡四十五六にて、てつぶり肥つた色の薄黒い、中々人品の好い人物だ先づ互に挨拶があつて後、オーゴレツプ大尉は徐ろに口を開きました「サテ小官が參つたのは他の儀でもないです、御存知の如く北京と天津間の鐵道電信が、共に義和團匪の破壊する所となつて、交通の道が絶えて了つたのである、各國は已に御承知であらうが、軍隊を北京へ送つてある、然るに斯の如く交通を絶たれる時は、陸へ送つてある軍隊と沖に在る軍艦と聯絡を取る事が出来ぬ、そこで我々各國は、此の聯絡を附けるため、一時太沽砲臺を明渡して貰はなければならぬのである」と斯く演へまして、彼の決議書を出し示したのである、勿論此の決議書は漢文に譯してあつたそうですが、蘭細怒はそれを探つて讀み終るや否や、傲然として答へた「我は直隸總督の命に依つて當砲臺を守備するのである、故に直隸總督の命に非ざれば明渡す事は出来ぬのである」「それは成程一應御道理ではあるが、



直隸總督へは列國より天津領事官を以て談判させる筈であるから、總督よりも貴官へ必ず其命が下るに違ひない。然らば明渡と雖も貴官の失策落度にはならぬのである。」「イヤ其の様な筈は無い、此の太沽砲臺は堅牢なる事東洋に比なく、北京天津第一の要害にして、我が大清國の帝都たる北京は此の鎖鑰に依つて以て固いのである、我が愛新覺羅氏の子孫たる帝王萬世の偉業は、只だ是れあるが故に安いののである。我が直隸總督裕祿閣下、妄りに此の要所を外人に明渡せと命ずるの理はない。」「我々列國は北京に在る各國公使及び其居留人民の安全を謀り、又大陸上の軍隊と連絡を取る爲には、是非明渡して貰はんければならぬ、我々列國に明渡すべき正當の理由があるのである。」「是は怪しからん、明渡すべき正當の理由があるとは何事です、我が大清國帝都第一の要害たる此の砲臺を、外人の分際として明渡さすべき理由ありとは、暴言も亦た甚だし、我が總督裕祿閣下、多くの武辯中より特に我を擡んで以て、此の要害を守らしむ、我れ命のあらん限りは斷じて明渡すことは出来ん」と彼は斷乎として頑強に拒んだのであります、オーゴンツン大尉は固より斯くあらんと豫期したのです、如何に清國軍人とは云へ、此の要地の司令官たるもの爾くなくてはならぬのである、故に大尉は莞然笑つて、「貴官は、失敬ながら見上げ申したものです、吾曹一個人として云へば武辨たる者業より爾うなくてはならぬです、併し是は貴官も善闘も等しく武士であるから、其の情を以て一言御忠告するのであるが、情願貴官は篤と御考慮ありたいです、二時までは列國艦隊は、決して武力に訴へる様な事はしないですから」と懇ろに忠告したさうですが、彼は黙して一言も答へなかつたさうであります、オーゴンツン大尉は暇を告げて立上ると、蘭司令官は橋上まで見送り「誠に御苦勞でありました、貴官が折角お出下すつて要領を得ないで返らるゝのは、貴官に對しては氣の毒じやが、亦た止むを得ない譯で、貴官願くは下官の哀情をお察し下さい」と叮嚀に申したさうであります、オーゴンツン大尉も「お察

し申す」と云つて船に乗り、二三丁漕出した時、弗と砲臺を見れば、彼れ蘭司令官は臺上の高さ處に登り、双眼鏡を採つて白河の中に碇泊して居る各國砲艦の所在と砲臺との距離を測量して居る、大尉も心中に「ハ、ア、此分では彼奴から撃出すわい」と思ひつゝ、砲艦の上かくと中將に復命しましたから、中將は直ちに是を各國艦長に報じて、いよく戦鬪の準備に取掛りましたが、此前に日本の陸戦隊が塘沽の停車場へ上陸し終るや、英獨露の將校は交も來つて挨拶を爲し、如何も貴軍の最後に上陸した兵員は餘程危険でした、我々は皆手に汗を握つたです。」「日本士官「ハハ爾でしたか、敵が打出しそつてしたか」外國士官「過刻、西太后の密使が砲臺に來たやうで、夫て其の諭書には太沽へ上陸せんとする外國軍は何國の軍を問はず撃破すべしとありたるは確かな報です、故に砲臺内は先刻から其の準備に多忙な様です、此時に乗じて貴軍は上陸したのじやから、實に危機一髪でしたなア」日本士官「爾でありませんか、夫は危険でした」と是から種々御協議の上、砲臺と開戦に至るとするも、午前三時までは砲撃せざる豫定でありますから、塘沽停車場守備の我が陸戦隊は日没後哨兵を配置し、守備を最も嚴重に致しました

(二十三)

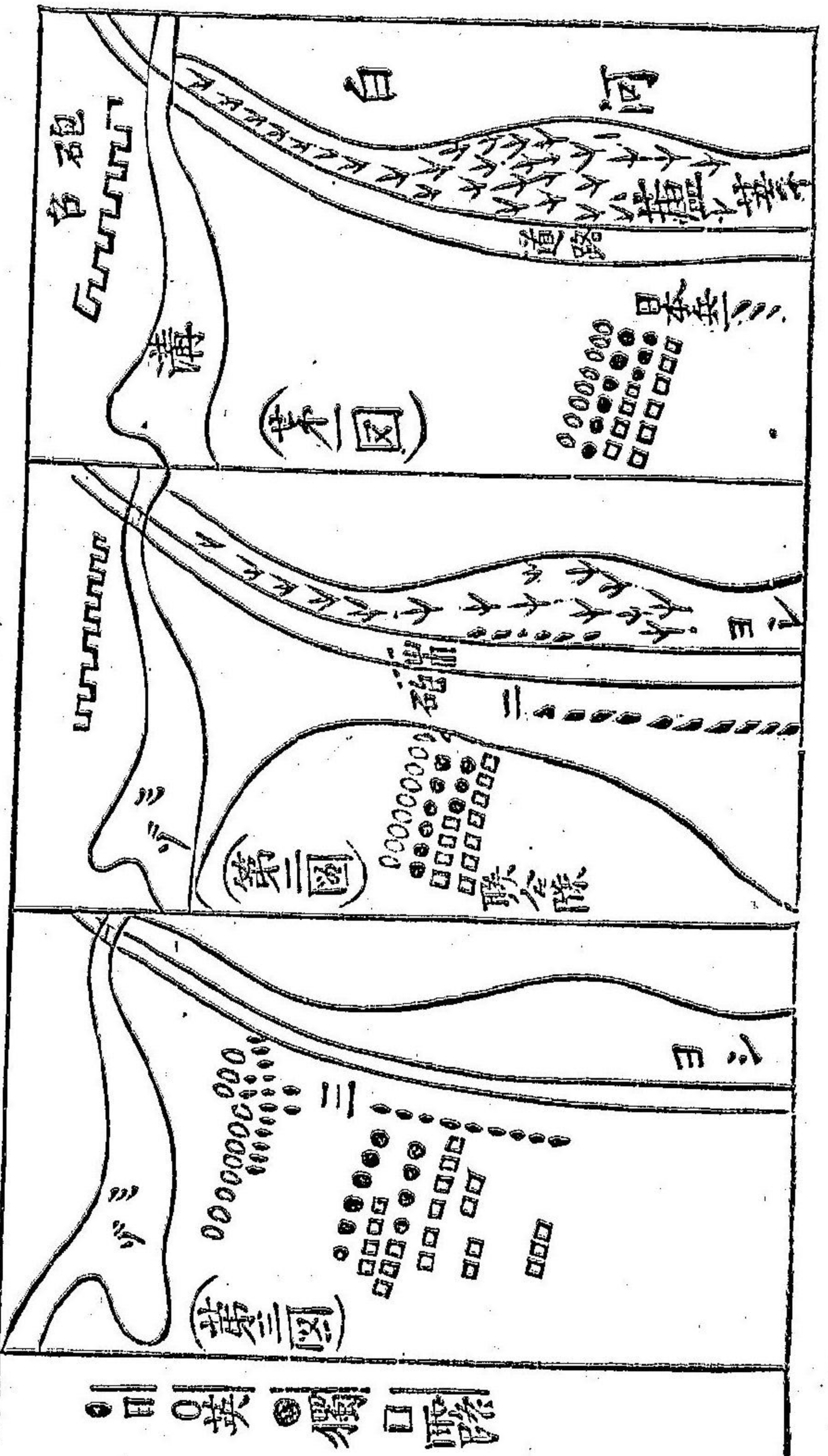
是と同時に白河中に碇泊の各國砲艦々々長會議を開きまして、其の結果我が愛宕艦と米艦モノカシー號とは共に居留民保護及び塘沽守備の任務を受け、停車場から少し下手に碇泊する事となりましたが、是は何故かと云ふに、愛宕も米艦も共に吃水深くして河中の運轉自由ならず、それが爲め戦鬪に加はらない事に決したのであります、サテ各國陸戦隊は、第二北砲臺と太沽停車場との中間に幕營を張り、戦備は充分整へてあるゆゑ、唯ウカリとして其の攻撃時刻を待ち居たり、然るに午前零時五十分、第二北砲臺より轟然一發暗



を破つて打出すと、是に續いて起れる砲聲は、宛かも雷の如く、河中に碇泊せる各國砲艦よりも殆んど同時に砲臺目撃して撃ち出したるゆゑ、敵味方双方より交る／＼發射する彈丸の響は、海鳴り河應へ、天震の地轟き、實に百雷の同時に落下するかと怪むばかりであります。此の戦闘に加はつた艦艇は何々であるか、上流から順次に列記しますると、露艦キリヤツク、同ポール、同コレイツ、次に佛艦リオン、獨艦イルチス英艦アルゼリン號にして其の當時の諸新聞にもありし如く非常の激戦であつて、英艦アルゼリン及び露の三砲艦は砲臺より精密に照準せられて居ましたから、敵弾は存外に各艦近く落下して甚だしく損害を蒙つたをうてあります。此の戦ひの始まりし時、副官足立大尉は直に服部中佐の許に到り「中佐殿、中々やり居りますな」服部、意外に激戦になつたな」「思つたより早く撃ち出したな」「爾ぢや、彼等も中々狡猾ぢや陸上からは夜の明けぬ中は進撃出来ぬからそこで夜の中に軍艦の方を打沈めて了ふて、爾して夜が明けてからは陸戦隊一方へ掛らうと云ふ計畫じやらう」「左様でありませう、中々生意氣な奴等です唯残念なのは彼の砲聲の中に我が帝國軍艦が混つて居ないの何より遺憾ですな、笠置や須磨の如き大軍艦は、淺瀬で近寄ることは出来ず、愛宕は停車場及び居留民の保護に任じて居ますし」「ム、遺憾じやなア併し我が帝國軍艦の砲聲は此方でも聴く事が出来なくても、此方から突貫する我が陸戦隊の聲は、各國の軍艦にも響き渡る程最も盛んにやりたいものぢや」など種々お話になつて居ります所へ、參謀勝木大尉も出になりまして「中佐殿、モウ一時半であります、如何です行進をお始めになりましては」服部「ム、宜しからう、... オイ渡邊大尉を呼べ」第三中隊長大尉渡邊眞吾君をお呼びになりまして「渡邊大尉、君の隊は此の停車場を守備するやう」服部「ハイ承知しました」服部「云々迄もないが、始終斥候を出して東北方を能く警戒する様に」とお命じになりまして、茲に始めて行進の命令を第一中隊長大尉白石渡江君にお下しになつたのであります

が、是より前、各隊の水兵諸軍は評議區々でありまして、或水兵の如きは「ア、残念だ」と頻りに叫びて居るので益田兵曹が「貴様何故そんなに残念がるのぢや」と尋ねになつたら、其の水兵が「兵曹殿、残念では無いせんか、英獨露の三國兵が前に進んで居て、我日本軍は自から豫備隊の如き隊形になつて居ます、是では砲臺乗取りの先登は外國兵にやられます、夫が遺憾です」と云ふと他の水兵も「實に口惜しい如何か我が日本軍が先登して、日帝國海軍の名譽を世界に輝かしたいですが、是では容易に先登は出来ません」と云ふと、又一人の水兵は「英獨露が負けて逃せば好いなア、爾すれば我軍で乗取つて了ふから」と云つて居る、其の言方が如何にも勇ましく、負嫌ひの日本人固有の特性を露して居るから「遠がは皇國の水兵である、實に頼母しい」と益田兵曹も心中に喜んださうであります、サア第一中隊長白石大尉は、指揮官服部中佐より行進の命令下るや、直ちに其部下に對して「前へ」の號令を發したり、時しも六月十七日午前一時半の頃でありますが、恰も舊曆五月廿一日に當るので半月船として已に中空にあつて、北清の平野は一而に薄明るく、夜風は蕭々と白河の水を吹いて肌自から冷かに、軍容肅々光景轉た凄凉たりとも云ひませうか... 日本軍隊はそれから少しく進むと、獨逸の陸戦隊が居ますので、是と共に進んで此度は英露と相前後して、砲臺を去る二千米突と云ふから、半道位迄の所まで進んだのである、此時先頭たりし英の陸戦隊はハヤ己に散開戦闘の隊形を取つたのであるが、それが恰度午前三時、少し前の事である、此時刻に至るも砲臺と白河中に在る各國砲艦との交戦は未だ止まず、敵の砲火は益々強く熾んするのである、ズット後方に在る我軍の指揮官服部中佐は「意外に頑固ぢやなア」と思はず云れたさうです勝木參謀が「實に意外ですモウ沈黙しそふなものです」足立副官「此分では未だ中々突ッ込みませんな、先頭の英兵も散開はしたが弱つて居る様です」是は何故かと云ふと、今無暗に前進すると味方の彈で打れる事になるし、且つ砲艦の砲





て各國指揮官の評議をお開きになつて、そこで其の戦線の順序を定められたのであります、其の順序は即ち英の陸戦隊が第一線、第二線は獨陸戦隊の大部分にして、相他獨の小部分と露軍と我日軍は援軍の如き隊

撃て敵に所謂大打撃を與へて、殆んど撃ち奪めて置いて、爾して陸戦隊が脊面から突進するの計畫であるゆゑ、それで止むを得ず一先づ退却をする事になつて、約四百米突と云ふから三丁半ばかりも退いて、さうし

形を取ることになりましたので各將校も兵士も憤慨されたが、如何も致し方がなかつたのです、此時第一中隊長白石大尉は部下の兵士を整列せしめて置いて「汝等能く聴け、今更云ふ迄もなく、今回は列國海軍將率と共に戦ふのぢやから、若し汝等の舉動にして外國人の笑を受ける様な事があつては、我が帝國末代までの耻辱である、日頃汝等に充分戦争の時の事は訓練してあるから、今日改めて云ふもがなだが、併し列國軍隊環視の中ぢやと云ふ事は忘るゝな、日本海軍の名譽を世界萬國に輝すは、今日此の晴れの舞臺に在るのぢや、誓つて帝國の名を揚げ、我が大君の稜威を天地に振はせ奉らんければならぬのぢや、今の場合、我軍は援軍の如く豫備隊の如くなつて居る、我軍に取つては頗る陣形が不利益であるが、彌々と云ふ時は吾輩は如何しても英獨露の三國陸戦隊を駆抜けて、我が日本軍が先登の名譽を博したのである、否、必ず先登する、誓つて爲る：日本武士の魂は即ち茲に在るのぢやぞ、汝等も皆其の決心で居れッ」と激越熱沸の語を以て部下の兵士を鼓舞したのである、爲に其の部下はいづれも奮勵して、是非先登の功は日本軍にて美事是を成し遂げ、我が海軍の名譽を列國環視の中に揚げられんと意氣組み奮んで居るのであります、時に三時三十分、更に前進の命下つたるを以て「前へ」の號令は再び各隊長の口より發せられたり、待ちに待つたる我が海兵諸士は、ワレと勇み進んで砲臺を去ること約一千四百メートル、即ち十二丁半ばかりの所まで進行すると、英と獨との陸兩戦隊は英を第一線、獨を第二線として道路より左方の半地、即ち乾燥せる鹽田（此邊に鹽田が澤山ある）に散開しました、散開とは隊長が「散れッ」と號令を掛けると、是に随つて散り廣がつて、砲臺を攻撃するのであります、此時獨の小部分と露の陸戦隊全部は、自ら第三線に散開隊次を取つたのである、故に我が日本軍は此の圖中にある（一）即ち英の第一線より四百メートルと云ふから、三丁半ばかり後の方の道路に沿つて、側面縱隊なる行進隊形の儘、傍觀しなくてはならない事になりました、サア是か



ら日本軍隊が始めて固有の日本魂を奮ふことになるのですから、何卒讀者諸賢は精神を入れて観て戴きたいのであります。面倒な所ゆへ地圖を添へて置きます。此圖と本文と能くお見較べ下さると詳細にお解りにならうと考へます。

(二十四)

前に演べる如く英獨の陸戦隊は已に道路の左手に散開すると雖も、我軍は道路巾約一丈、高さ三尺三寸ばかりのズツと後ろの方にあつて散開したくも、右は殆んど海水の満ちたる濕潤地にして、左は他國陸戦隊の已に第三線まで散開して居るので、道路と道路の左の方に僅かにある隙間より外、我軍は取つては一の進路がないのであります。何と諸君、此時の我指揮官服部中佐の憤慨は如何ばかりでありませうか、連も中佐の心の中は我々如きものには演じ難くないのであります。が、中佐は唯だ『残念ぢや〜』と口續けに言れたさうである。其中に英の散兵線は着々進んで、前回に掲げました第二圖の所まで達すると、獨兵も亦た是に續いて進んだのである。足立副官は是を見て『中佐殿、英の散兵線は已に彼所まで進みましたが』  
服部「ム、オイ、副官」  
足立「ハイ」  
服部「野砲を彼の英の散兵線と同一の右側道路上へ進めて砲撃させて見い」  
足立「承知しましたッ」と是から直に野砲一門を道路上第二圖の英の散兵線と殆んど同一の右側に、即ち圖中木の所まで進め、爰に始めて我軍の第一砲火を開いて砲臺を撃始めたのである。是を見るや、我が將校も兵士も勇氣は以前に數倍して參りましたから、服部指揮官は此機逸すべからずと隙さず大聲にて『前へ』の號令を下しました。我前兵の第一中隊長白石大尉は、是と殆んど同時に激しく『駆足ッ』と號令して、全軍等しく駆足の歩調を以て、英の第二圖散兵線を去る約百米突、即ち五十二三間の一まで進んだのである。然れども

未だ兵を散り廣げるの餘地なく、依然として側面縦隊の隊形を保つてはならぬのである。側面縦隊の隊形は圖を御覽下さい。時恰も四時二十分頃でした。此時已に我野砲は道路上の第二圖木の符號のある所から數發を放ち居たりしに、忽ちにして打撃を止めたる故、後方にある指揮官始め、參謀副官等皆不審に堪へず『何故砲火を中止したのぢやなア』  
服部「何處か故障でも出来ましたか」  
服部「或は爾かも知れぬ」  
足立「地勢が頗る不利ですからなア」など、頻りに御心配なされて居る折柄、一兵士は疾風の如くに馳せ來つた。服部中佐の前に立止まつて姿勢を正したのは、流石に武名を以て世界に鳴る我日本帝國の武士であつて、斯る激戦の最中にも己れの上官に對する敬禮の秋毫も亂れず、平日と異なるなきは、日頃の訓練に依りませうか、否な訓練ばかりではない、即ち固有の日本武士的精神の致す所と思はなくてはならない。彼の兵士は息をも吐かず『指揮官殿、砲の尾栓に故障を生じましたから、止むを得ず砲火を中止致しました』  
服部「エッ仕方が無い…砲を道路上に置いては行進の妨害ぢやから、側へ寄せて置け」  
兵士「ハイ宜しうムいます」  
言ひ終るや一體して又馳せ行きました。サテ今や砲臺の砲聲は力稍や衰へて參りましたが、小銃彈の發射は益々猛烈にして、雨霰れの如くボン〜バラ〜ヒユウ〜ヒユウ〜と或は遠く或は近く、遠きものは頭上を掠め去り、近きものは脚下に落ち、掩蔽物と言つて身體を寄せ躲すべきものは一もなく、攻撃各軍の困難は實に名状すべからざるの状態である。然れども流石は第一線にある英の陸戦隊だけに少しも屈する色なく愈よ直進して、第三圖の地に至り、最早や砲臺との距離は僅かに約五百米突即ち四丁半ばかりとなり、已に砲臺目懸けて突貫せんとするの形勢でありましたが、敵の抵抗益々頑強にして容易に進み兼ねるの有様でした。爰に我が日本軍の幸ひとなつたといふのは、獨の散兵線及び獨獨混交の散兵線は、敵の銃火の烈しき爲に少しく躊躇して、英の散兵線に續く事が出来な爲に、英と獨との間が稍遠さかつて隙間を生じました



事で、ソノ時我が前兵第一中隊長大尉白石霞江君は是を見るより思はず『占めたッ』と呼び、自ら真先に駆けて部下を顧み『乃公に續けッ』と章駄天の如くに走り出せば、是に續いて我が陸戦隊第一中隊は、側面縦隊の儘急行前進して、英獨散兵線の間に飛び入ッたり、白石大尉は『散れッ』と一聲高く號令するや、部下の兵士は直に散開して、英兵の背後より砲臺目撃して最も激しく一齊に打出した、スルと今が今まで援軍豫備隊の如く隊形となつて、無念殘念と堪へて切齒をして居た我兵が、日頃餘り感情の好くない獨露の兵を駆抜けて、今や目指す敵の砲臺を撃始めたのであるから、其の勇氣は忽ち百倍なし、兵士等は皆『ヤイ見ろ、日本男兒の胸前を見ろッ』と云んばかりに、打ッた打ッた、打出した、其の烈しい事といふものは、譬へ様もない程であつたとうです、黒猿は此の實戰談を海軍のお人に其地を見ながら承ッた時、こんな無氣力の人間でも思はず膝を打ッて快哉を叫んだ位でありますから、其時の實戰に臨まれた方は、何位御愉快であつたらうか、迎も想像も及ぶて所はありません、併し英兵は驚いたとうです、不意に後へ我兵が散開して打出したのだから、振り回ッて何かへろへろ云ッたとうですが、多分彼等は後から彈の來るのが恐ろしかつたであらうと云ふ噂さです……、此時敵の銃火は益々猛烈にいたして、殊に野砲彈の頭上を通過する勢ひは實に凄じいものだ、そうして砲臺を去る事已に僅か五百米突、即ち四丁半ばかりの所まで進んで居て、況んや前方の中間にて溝渠の障礙物が横たはつて居るので、應戦して直ちに敵を屈服せしむる事は迎も出來ないのである勢ひ已に爰に至る、唯夫れ一の突貫あるのみです、茲に於て第一中隊長白石大尉は大聲に集合突貫を號令するや、自ら真先に立ッて道路上に躍り來て、宛も獅子奮迅の勢ひを以て雨霞れの如く飛來る銃彈を事ともせず、河口に沿ふたる第二北砲臺の正門に向ッて突進した、是に續いて我第一中隊の一部分はワツと喊を擧げて突貫する其の勇ましき事、迎も形容し盡せないであります、各國陸戦隊も是

に勢ひを得て續いて突撃馳走する其聲は宛ら雷の如くてムいました、今其突貫行進の順序を擧げて見ますれば左の如くでありますが何卒これへ掲げた圖を御覽下さい

第一、先驅者白石大尉(霞江)

第三、指揮官服部中佐(雄吉)

第五、副官足立大尉(六藏)

第二、日本陸戦隊員約二十名

第四、日本陸戦隊員三名

第六、各國陸戦隊(將卒の區別なし)

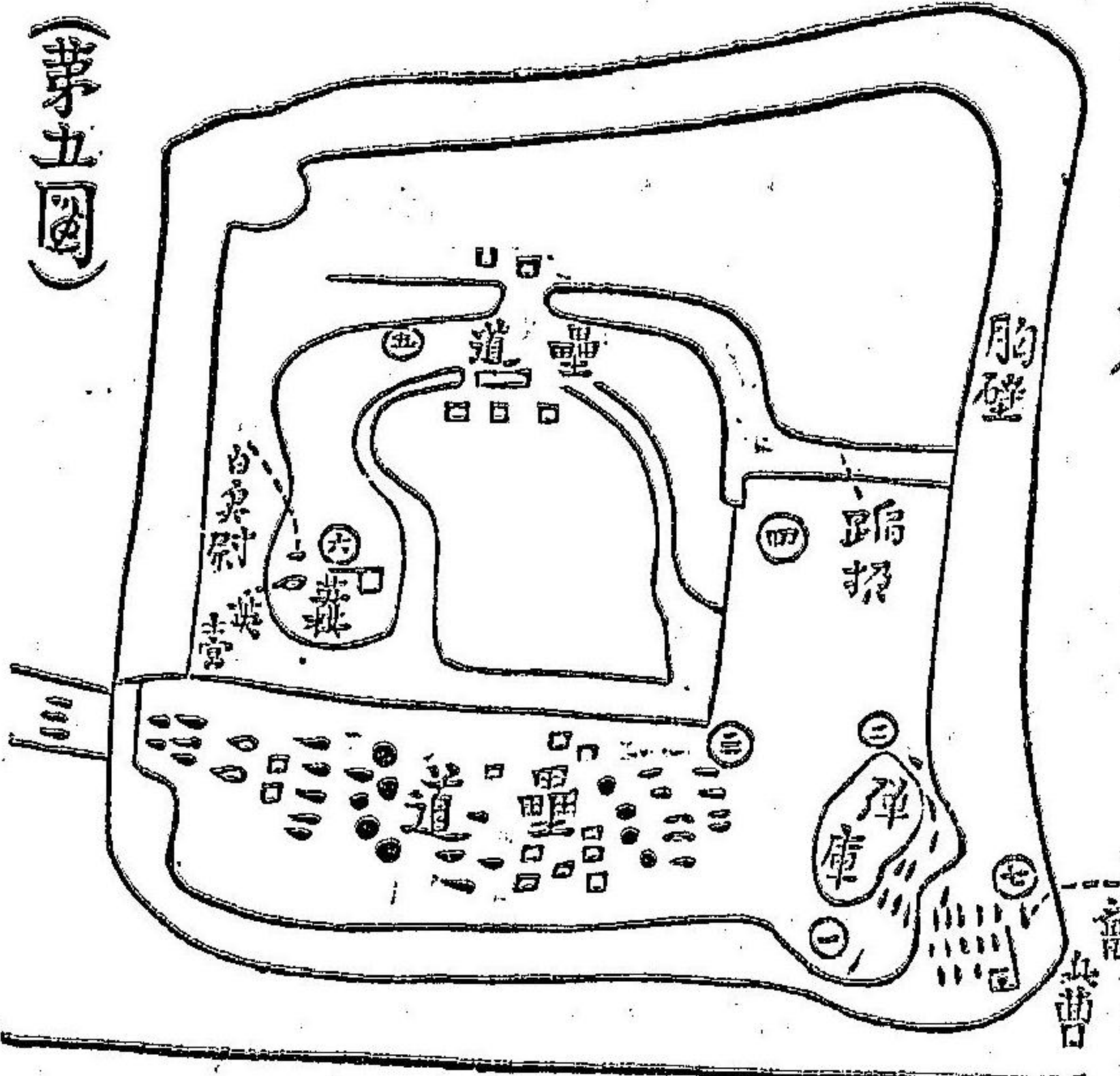
是より前、我が陸戦隊の指揮官たる服部中佐は、後方に在ッて白石大尉の最も勇ましき突貫を見るや、大いに喜ばれて『ソレッ第一中隊は他國陸戦隊を駆抜けて突撃したぞッ、日本海軍の名譽ぢや第一中隊に續けッ』と大聲に部下を勵ましたつ、自ら真先に立ッて道路上を突進したから、英兵を乗抜けて右の如き順序となつたのであります、白石大尉が已に砲臺前の橋を馳せ過ぎんとせし頃は、服部中佐も橋梁を去る僅かに四十五六間の所まで近づいて來たのである、中佐は益々勇を鼓して奮進せんとしたる時、ヒユッと飛次來ッたる敵の彈丸……嗚呼此の敵の彈丸……此の好武官の胸に中ッたから、何かは以て堪るべき、中佐は撞と其場に倒れました、スルト三米突ばかり後ろに進んで居たる足立副官は、かくと見るより馳せ來ッて扶け起し、二名の兵と共に抱きかへて道路の右側蘆葦の生えた所と道との間に降立ッて、先づ傷所を檢めて見ると、なか／＼の重傷だから、アツと驚いたが、故意とさならぬ體で『指揮官殿些細な疵です、微かな負傷です、御安心なさい』服部『ム、殘念々々……まだ砲臺は領れぬか……白石は如何した』副官『モウ領れました、中佐殿砲臺を乗取ましたぞッ、爾も我が日本兵が先登です……、此時は未だ砲臺が領れなかつたのであるか、副官は中佐の氣を引立てる爲め、故意と已に領れたと云ッたのである、スルト中佐は苦しうに息を吐いて『水・水』と云ふから、足立副官は水筒に残ッた少し許の水を中佐の口へ注ぎ入れると、一口ゴツクリと飲



んで、又た息を吹き「副官……は、は、砲臺は傾れたか」副官「傾れました、日本兵が先登です」と中佐の耳元に口を寄せて大聲で云ふと、中佐は「ゆ……ゆ愉快ぢや……て、天皇陛下萬歳……ば、ば、萬歳……」と叫ぶ聲さへも細りゆく、玉の緒綱を續ぎ留めんよし盛繁き唐土の、荒野が原の朝露と、消ゆる身よりも残る名は、末の代までも芳ばしき、花は櫻に人は武士、譽れも高き戰場の明け行く空と諸共に、天皇陛下萬歳の一語を遺す際とき戦死は、實にも軍人の龜鑑と云ふて宜しかろうと思ひます、そこで足立副官は二名の水兵に命じ、中佐の死體を道路の右側に沿ふて行進せる列外部隊に送つて（前回の地圖をお覽下さい）置いて、其身は直ちに奮進しました是より前に白石大尉は、指揮官たる服部中佐の重傷を負ふて遂に戦死を遂げられた事を知らず、無二無三に突撃奮進して橋梁を駆抜け、砲臺の第一門に迫つて見ると、堅く閉ておつてなかく突入することが出来ません、遺の白石大尉も茲に於て少しく躊躇致しましたが、併し此所は最早死角内であるから、敵陣の中る憂はなないのである、此の死角内と云ふのは素人には一寸解らない語であつて、軍學上の軍隊語です、即ち城にせよ、砲臺にせよ、已に其の直ぐ下に近づいて了へば、敵の打出す彈は皆頭の上を飛越えて行くから、決して其身の撃たれる氣遣ひはない、故に是を軍人の學問上、死角内に入ると云ふのであるそうです……白石大尉は已に其の死角内に入ると雖も、砲臺には容易に還入る事が出来なから、如何なさんかと四邊を見ると、フト眼に入つたのは、砲門に對する左側の胸壁に、多分砲彈の爲めに破壊されたのであらうが、恰ど足を掛けるだけ位の塊れ目がある、大尉は思はず「占めつた」と叫ぶと同時に、左の片足は已に其の破壊部に懸つたのである、見る／＼大尉の軀は胸壁頂面に現れ、大聲に「大日本陸隊先登」と疾呼して、續いて又た「日本の水兵早く上れつ、門を開けつ」と呼びつゝ、胸壁の上を急進したるが、此時已に三四の日本水兵は白石大尉の登つた所から猿の如くに身軽く飛んで上つた、是

第二比砲臺

に續いて日英の兩陸隊混合して續々と攀ぢ登り、門内に降りて内より砲門を開かんとしたるが中から大きな石をゴロ／＼と押附けてあるから急に開く事が出来ません、白石大尉は是を見まして「石を除けんければ不可ん、石を／＼と指揮したんで、日英兩兵が寄つて集つて石を敢除け様と、各々曳々聲を擧げて、大石の取除方に掛つて居る中に外よりは日本陸隊と各國兵と共に力を合せてグイ／＼押開けましたから、難なく開く事を得ました、門の開くや否や、各國兵の潮の如くに壘道に向つて突進しました、是より前白石大尉は、大石取除方を命じて置いて、自分は亦もや胸壁頂を急進して、圖中(第一)の所に下るや、左側の陥塚から清兵が頻りに發砲いたしますゆゑ、止むを得ず此の圖中に在る彈藥庫と記した遮蔽物の後方に廻り、暫し此處に敵彈を避けて居たのであります、此時已に壘道を突進して來た各國陸隊は(三)の所に參つたが、猛烈なる敵彈に辟易して誰一人前進するものがない、白石大尉は大聲に「日本の水兵／＼と連呼しましたから、敵の銃火の稍沈まる毎に突進し來て、約十三四名となつた、そこで大尉は是を卒めて(二)の所に出、彼處の敵を打てつ」と命じて相對抗せしめ、自分は(三)の所に至つて、日本兵及び英兵約十名ばかりと



第五圖



共に亦もや突進して(四)の所に至り、大尉は自身構門(極粗末な構門)の隙間から這入って門を開けた、茲に於て日英兩兵バラバラと突入して、(六)の所に到りました、此の圖中に在る(四)より(六)に至る間は坂の様なダラダラ路で(六)は其の高所である、白石大尉は此處で早くも日本國旗を擧げんとした所が、生憎自分のポツケツとに國旗がない、それで流石の大尉も少しく慌て、大勢に「オイ日本の水兵々々、國旗く、日章の國旗を早く持つて来い、早く」と追き立てたが、折悪く近い所に國旗を携帶せる日本水兵が居ないから、いよゝゝ蹶つて居る所へ、斯くと見て疾風の如くに馳せ來つた英國の一士官は、傍若無人にも己れのポツケツトから英國國旗を取出して、今まで清國を旗の翻つて居た其の旗竿へ吊して手取早く掲げ様とした、此處際どい所

(二十五)

白石大尉は是を見て何賦すべき、手を振つて英の士官を制し「貴官、貴國の旗を先へ掲げると云ふ法はありませぬ、砲臺先登者は我が日本の陸戰隊です、先づ日本國旗を掲げて然る後英國國旗をお掲げなさい」英士官「イヤ英國は他國に先んじて砲臺へ這入りました、先へ旗を掲げるが當然です」白石「夫は貴官の思ひ違ひです、我日本が先登です、而も小官が第一に砲臺の胸壁へ登つた者です、貴國の將卒の中にも必ず見て居た人があるに違ひありません」と互に眞紅になつての争ひはいつ果すべきとも見えません、折柄砲臺の胸壁西南の隅に當つて一片の日章旗はヒラヒラと朝日に映じて高く翻つたのである、即ち前回に掲げました圖中(七)の所でありませぬ、かくと見たる白石大尉は思はず「愉快、萬歳」と叫んだ「オヤツ」と呆れたのが、英の士官である、白石大尉は莞爾と笑つて英の士官に向ひ「貴官モリ争ひは無益です、日本の先登は彼が何よ

りの證據です」と言ひ捨て、駈降りました、其後に英の士官は誰々圖中(六)の所へ英國國旗を掲げたのです、此(七)の所へ日章旗を翻したのは何人であるかと云ふと、是れ別人ならず益田兵曹である、是より先き益田兵曹は第一中隊の第二小隊幾部分を率ゐて、白石中隊長の猛進せる胸壁を追進して第七の所に至り、敵の放棄したる大砲を檢するに尾栓の活動充分なり依つて散在せる用具を集めて之を利用するを勉め、傍ら國旗の揚方を勉めて、爾して國旗を掲揚し終ると同時に、敵砲を利用せる我が第一彈は南砲臺へ向つて發せられたのであります、此の利用砲は發射彈數約五十餘個にして、南砲臺の火藥庫に火災が起つたと見え、其の破裂の音は雷の如く、炎焔天に漲り、清兵の逃走する有様蜘蛛の子を散らすに異ならず、かくて午後六時二十分の頃全く沈黙してしまひました、そこで各國陸戰隊は南砲臺へ這入つたのであります、我陸戰隊は集合して天皇陛下萬歳を三呼びしたが、此時指揮官服部中佐の居られぬので、始めて其の戦死されたことを知つた人が多かつたさうであります、サテ聯合陸戰隊は、南北兩砲臺を占領し直つて、各國それく國旗を掲げまして、即ち次の如くしてゐます一ツの砲臺に二旗以上掲げて居る所は、左の方から順々に數へます

(南砲臺)獨、獨、露、英、

(第一北砲臺)英、

(第二北砲臺)日、英、

日本國旗は十八日の午前八時、砲臺守備の第一中隊(陸戰隊には陸軍の隊名を用ゐます)と我が陸戰隊を交代するまでの間は、英國の國旗を以て代へて居りました、十八日の午後、各國々旗も次の如く變更しました

(南砲臺)英國、獨國、露國、  
 (第一北砲臺)日本、日本、



(第二北砲臺)英國

そうして新砲臺は何國の國旗も掲揚せられて居りません、サア是から沽塘停車場を露國に占領せられて了つた事實談に移りますから、諸君願はくは此所に三思を加へてよく讀んで戴きたいのである全體此の鐵道は世人の知らるゝ如く、清國政府から英國へ抵當に這入つて居たのである、夫て砲臺攻撃の前から我日本の陸戦隊が守備して居たのであるから、我軍隊は宜しく英國に交渉して、此の停車場及び鐵道を日本が占領すべき道理である、占領して決して他國から苦情を云はれる譯はないのである、故に砲臺乗取りの後も、第三中隊長渡邊大尉が此の停車場は守備して居たのであります、然るに十八日の午後、爾も日暮に垂んとする頃、露國の一士官は、憐れしく日本陸戦隊守備舎營本部に参りまして「渡邊大尉に面會しまして、唯今新河を去る北約一湮ばかりの方向に當り、清兵凡三千位、來襲の模様があります、内一名は騎馬の様です」と報告した、渡邊大尉は斯くと聞いて大きに心配なし、夫は容易ならんてすな、併し我軍は堅く此の停車場を守りたいてすから、貴軍も協力して戴きたいです」と云ふと、露國の士官は暫く首を傾けて考へて居たが、良わつて「如何も地形が頗る不利ですから、優勢の敵に襲來されると固るです、寧ろ一端此の守備を放棄して砲臺に入り、各國砲臺に據つて防禦した方が宜しからうと思ふです、是は我が指揮官からの忠告です」と慫慂言ひ置ひて返りました、そこで渡邊大尉は白石中隊長勝木參謀と評議を致しました「如何したものぢやらうね、此の停車場を棄放して了ふのは、如何にも残念ぢやが」勝木參謀は併し全く露人の齷らしたる情報の如く、優勢の敵であつて見れば、此所で死守するのは決して策の得たるものでない」白石大尉「一ツ偵察して見よう、我輩自行かう」勝木參謀「では白石君に偵察に行つて貰ふ事にして、吾輩は愛宕艦長に協議しよう」と、爰に於て白石大尉は兵五名を率ゐて敵情偵察に出掛けました、勝木參謀は臨時指揮官になつて居らるゝ愛宕艦長、

中佐竹内平太郎君の許に赴きて協議致されしました勝木大尉が返らぬければ確としたことは解らんですが果して露人の情報が事實とすれば、一先づ引揚げて砲臺を固守した方が得策と思ふですが」竹内中佐は暫く考へて居られたが「残念ぢやが、兵が少くないから仕方がない、爾しやう」と云はれたさうです、勝木參謀は元の守備方面へ返ると、間もなく白石大尉も歸營した「如何ぢやね」白石大尉「何しろ幕方で確とは見分がつかんが、敵らしいものが行進して居る事は認めなす」勝木大尉「では撤回しよう、愛宕艦長も同意ぢや」と是から直に撤回を令して引揚方に掛り、一時間ばかりにして整備したから、出發して第一北砲臺に向ひました續いて愛宕艦も河口へ向つて航行し、第一北砲臺の下へ碇泊したのであります、砲臺内の陸戦隊は警戒を最も嚴にして、終夜マンツリともしないで居たが、更に敵の來襲する様子がない唯偶に英軍の守備して居る第三北砲臺から、人影を認めて發砲するのみである、翌十九日の早朝から露國は約三百の海兵を上陸せしめ停車場の附近に舎營したばかりなら未だ可いが、米庫氷庫停車場等へ自分の國の國旗を遠慮會釋もなく押立て、爾して爾後二十一日まで露國は最も多數の兵を揚げ、(約三千)英國も亦た是に次ぐの兵を上陸させたのである、夫て日本は遂に空しく第一北砲臺内に止まつて了つて、此の要所たる停車場と鐵道が、戰爭には一番樂境に立って居た、一番愈けて猪く遊んでゐた露國人の手に落ちて了つたは、何と諸君、憤慨千萬ではないか、黒猿の如き無氣力な人間でも、此要地を見て露國人の狡猾なる手段の事實談を聞いた、時はチエー一殘念千萬と地面を踏んでも追付かない、或人が云ふには白石大尉が偵察に出られた時は日暮であつたし、敵兵らしいと視て返つて來たのは或は敵では無かつたかも知れぬと云ふ事です、又其の人は憚いふ話を僕に聞かして呉れた、日本軍隊が停車場を引揚げて砲臺内に這入つた其の翌朝、露の參謀は英の守つて居る砲臺に來り、英の指揮官に面會して云ふには、鐵道は全體清國政府から貴國へ抵當に這入つて居るさうであるが



一時我が露國が是を引受けて修復しませう、中々破壊が大きくて、修復に餘程困難らしいが、併し我が露國は旅順港に鐵道隊が在りますから、是を呼んで修復すれば數日にして、出来るのです、云ふまでもなく一刻も早く鐵道を天津へ連絡させるのは目下の急務でありますから、爾うしませう、其方が列國の利益ですから」と云つたやうである、英の指揮官も其方が早く出来ると思つたのか、異議なく承諾したです、サアそこで露人は奇計成れりと云ふので前に演べるが如く勝手自儘に國旗を所々に掲げ、續々と兵を揚げて此邊をスツかり占領して了つた實に此の所爲たるや、日本などは眼中に措かないと云ふ傍若無人言語同斷の舉動です、日本の占領して這入つた第一北砲臺は、各國の物と比べて最も大きいけれども、備砲は一として破壊されぬものはない、小銃はあれども先込の舊式だから利用する事が出来ない、併し支那兵も廿七八年の戰役に較べると餘程進歩した、逃げる時に砲の要所を破壊して撃つ事の出来ないやうにして行つたのは、支那兵としては大出来である、黒嶺は此の第一北砲臺の中へ一夜宿泊して、通譯官松浦綱治君に種々な事を聞いたり見せて貰つたりしたが、役に立たない大砲が砲臺の所々に備へ付けてあつた、何でもこんな用ゐられない物が備へ附けてあるだらうと聞いた、夫はホンの嚇しに備へて置いたのだらうと云つた、彈も胡桃子位の丸い彈が鐵葉の鏢へ入れて澤山あつた、僕は牛肉の鏢詰かと思つて開けて見たら、鐵砲玉であつた、夫は砲臺の中は廻りが長家の様になつて、清兵が此處に住んで居たのであるが、随分お粗末なもので穢ないので、併し約千二百名位は合點せしむることが出来る、殘して行つた糊食は米ばかりで約二千俵もあつた、うだ、探海燈はあつたがブラスン(發電機)に欠損部があつて用ゐられない、砲臺の傾いたばかりの頃、最も困難を感じたのは飲料水で、愛宕艦の供給に依つて僅かに渴を醫するの有様であつた、附近は濕地と砂地と相半して風の強い時は砂と塵りか飛揚して眼や口に入り、是に向つて行進するのは甚だ困難である、河岸

に沿ふた大建築物、殊に各倉庫は重に露國の國旗を建て、あり、白河内の小蒸汽船(タケホート)(ライター)等は、悉く各國々旗或は軍旗を揚げ、我日本も愛宕に小蒸汽二隻を取つたが、船渠は露國の占領する所となつて、入渠中の清國砲艦も亦た露に奪れたげな、そうして露人は此頃からボツ／＼暴行を働き始めた、先づ白河沿岸の清國人の家屋へドシ／＼放火して焼き立てたのである、尤も露人の言草は、鐵道線路を保全するに此邊の家屋を焼けて仕舞はないと、義和團や敗兵が潜んで居て、線路を破壊する、夫ゆゑ潜伏出来ないやうに焼立てると吐かしくさつたが、これで口實が立つにもせよ、彼等は財を奪ひ無辜の人民を殺し、婦人と見れば新增でも年増でも、小供でも、婆さんでも一向顧着なく矢庭に引捕へて強姦をしたのである、黒嶺が北砲臺へ宿泊した時、通譯官松浦綱治君に使はれて居る十四五の愛らしい色の白い美少年があつて茶を汲んで出したり、給仕をしたり、誠に忠實に働いて居る、夫は何處となく品格があつて書も好く書くゆゑ、何者の見ですと云つて聴いたら、松浦君が「彼の美少年は眞に可哀そうな者だ彼は塘沽の可なりな財産ある人の伴であるが、家は六月廿一日に露兵の爲に焼かれて了ひ、露兵は彼の父を縛り上げて置いて、其の眼前に彼の母と姉とを輪姦したのだ、即ち十人ばかりで代る代る強姦したのである、夫で母は良人に對して申譯がないと云つて自害したから、姉も結縁の男に濟まぬと云つて首を縊つて死んだので、彼の父も悲憤の餘り氣が狂つて白河へ飛込んで死んで了つた何と君、戰敗國の民程隣れむきものはあるまい」と云つて話された事がある、其の外露佛兩國兵の暴行と云つたら一朝一夕のお話には違も仕盡せないのである、僕も北京通州、馬頭、揚村などで屢々實地を見た事があるから、夫は退々講演しますが、露兵が此の塘沽で蠻行をやらかした事を云つたら大變なもので、現に第二北砲臺から約十丁ばかり上流白河の左、モツ岸へ着かうと云ふ所に一艘の支那船が沈んで、帆柱ばかりが出て居る如何したのかと聞いて見ると、露兵が塘沽で蠻行を



やらかして殺した男女數百人、其の暴行をかくすが爲めに船に積んで石油を濺ぎかけ、焼沈めて了つたのだげな、是を以て推量して見ると、塘沽の民家を焼拂つたのも、財を奪つた其の跡を濁す爲にした事だろうと思はれるが、何しろ戦に敗けて敵に其國內へ攻め入られる位めなら、國民擧つて戦死して了つた方が好いのである、我日本は幸ひにして國人に一種異なつた氣象があつて、夫て海陸軍は歳毎に擴張を加へて、兵備は充分に整備した様だから、假令露と戦はうが、獨逸と戦はうが、それこそといつてもこいつても負ける心配は無しと思ふ、併し萬々が一、不幸にして敗れる様な事が在るにせよ、決して國內へ一歩たりとも敵を踏込ます様な事はあるまい、若し敵に踏込まれる様な事ありとすれば、僕等の如き無氣力な人間でも、決して甘んじて見て居ない、敵中へ斬込んで潔く死んで了ふ覺悟だ、支那人の如く家を焼かれ、財を奪はれ其の妻や娘を辱しめられ、おまけに己れは人夫に召上げられて、泣々敵國の兵士に使役されるなど云ふ様なそんなチヤンの精神のものは苟くも日本人たる者には一人もあるまいと思ふ、餘計な屁理屈を並べて濟みませんが、僕は實地實際に戦敗國の人民の惨れな有様を見て、爾う感じたから、一寸所懐を述べたのでありませぬ……サテ前に戦死を遂げられたる指揮官服部中佐雄吉君は文久三年のお生れであつて三十八歳でありました死體は白河の岸にあつたる獨逸のボートを以て、太沽沖なる我軍艦隊に送られ、十九日肥後丸に搭じて太沽沖を出帆致しました、其の際列國艦隊は一齊に吊旗を掲げて此の名譽の戦死者の弔意を表したのであります、海上無事に通過して廿二日の拂曉に佐世保軍港に這入りましたから、佐世保海軍港務部長内田海軍少將、其他二三の將校と末元子とは小舟に乗じて、肥後丸へ出迎を致しました、此時の元子夫人が凛然としたる風姿は、天晴れ海軍々人の夫人として耻かしからぬものであります、最初中佐が佐世保港を勇しく首途する時には立派な軍艦に乗られて威風堂々と出たのであるが、其の歸るや小さな商船の乗せられて

爾もその遺骸は船門の内部昇降口の個所に安置されてある、棺は白木造りて寝棺で、堅く西木綿で包み上には、旭日章を染抜いた白の覆布が掛けて座います、是ぞ中佐が太沽砲臺の下に逝らしたる鮮血を以て染出したるかと思はるはばかり、見るも潔よと思ひがいたします、頓て船長の案内に連て、一同は棺の傍へ通ると、風でもつて日章旗の覆布がフワリと動く、宛然靈あるが如しだ、そこで一同は肅然として其前に立つた、内田少將閣下は服部中佐の未亡人に向ひ「ア實に名譽の御戦死でした、惜い事をしましたなア、けれども是も是非ない事です……マア能く御對面なさい、御戦死の委しい様子は何れ實地に臨んだ人から申上げるとせうが、必ず立派な最期であつたに違ひないです、世界列國が見て居る晴れの舞臺で、美事な名譽の最期をなされたです、軍人たる者病の爲に死するのは此上もない不幸で、戦ひに死すのは本懐です、貴女も此の名譽を云ふ事を以て聊か慰めるに足るじやろうと思ふですが」と花も實もある内田少將の言葉に、元子夫人は一層氣を引立て、「ハイ良人は武官たる任務を盡して其の職に盡しましたのでありますから、妾も武士の妻たる覺悟を致しまして、他人様の御目から御覽下されましても、見苦しくない様に致したい心掛でムいます」と現在良人の死體を前に置いて、それ一滴の涙も見せません、軍人の妻たるもの、素より斯くあるべき善ながら、連れ添ふ良人が勇ましき首途の笑顔と、今變り果てたる、死相で見ると云ふ其の場合に、少しも取亂した様子のないのは、流石に中佐の未亡人でありませぬ内田閣下も元子夫人の雄々しき舉動に感じ是ならば良人の死體を見せても未練な振舞はるまいと思つて、徐に上の覆布を取去り、やをら棺を開いた此時元子夫人は血涙の迸らんとするを非常の堪忍力で喰止て、とうとう泣顔を見せず變り果てたる良人の死體に對して恭々しく拜禮をした、ア、此の刹那に於ける元子夫人の心地は如何でしたらうか、察して見ると實に可哀想な事てムいます……服部中佐の御性質は平生誠に温厚であつて、酒は召上らなかつたさう



てす、他にお娯樂はなかつたが、唯だ暇ある時は御自分で機織を揚へて寫眞を撮るか、夫でなければ銃を控つて山野に獵をするのみで、些細な事には頓着なさるのがお嫌ひ、日常往復の書状などは多く元子夫人に代筆をなさした位で、尤も奥さんも頗るお名筆だそうである、中佐が軍艦内よりお發しになる書面は、極めて簡潔にして、唯だ要點のみを記してあるさうです、嘗て黃海の戦争後に元子夫人へお寄越になつた御書面の全文は

十七日支那にて大海戦我軍大勝利築山及び小生も無事  
十九日 雄吉

右の、手紙を見ても中佐の御氣質は知れるのである、爾して平生は至極温和の方であるが、一度奮激する時は傲岸不屈、それこそ水火の中へ飛込む事も躊躇しない、眞に軍人の好摸型、此の好武官にして此の夫人ありて、誠に好一對の御夫婦であつたですが、惜い事を致しました、併し未亡人は必ずや終生孤園を守つて中佐の亡き魂を慰め、中佐の名譽を萬歳の後までも傳へしめるであらう、無論爾しなくてはならないのである

- 即死 海軍中佐 服部 雄吉  
一等水兵 北田 久吉  
二等水兵 末廣平 四郎  
三等水兵 前川 喜治  
負傷後 一等水兵 松本 熊吉  
死亡 一等水兵

重傷 一等兵曹 手島 種吉  
他に輕傷者三名、是等の事は戦争當時の新聞にも載せてはあつたが、併し名譽の死傷をなされたのだから、一寸演べて置きます、戦ひの激烈なりし割合に死傷の少なかつたのは、日本の幸福でございました、サア是で太古戦争は結局であるから、是より愈々福島少將の乗出しに取掛るのでございますが、其前にシーモア中將の率ゆる救援隊の事と、天津居留地の状況とを少し演べて置いて、それから臨時派遣隊司令官、即ち福島少將閣下が日英米獨露佛埃伊の列國軍隊を率ゐる鬼神の踏踏を奪ふと云ふ維烈快活なお嘶に取掛る事に致しませ

《二十六》

ズット前にシーモア中將の率ゆる北京救援隊が六月十日に、天津を出發して、途中鐵路の破壊と團匪の抗拒、加ふるに董福祥の公然敵對となりたるため、頗る困苦を嘗めて進退谷まつた所まで演じて置きました、是から又た其の續きに移りますゆゑ其の思召で御愛讀を願ひたいのである、サア六月十八日、丁度太沽砲臺の領れたる日に、シーモア中將の率ゆる救援隊は天津と北京の中間に於て董福祥の兵と戦つたが、此時は獨逸の陸戦隊が非常の働きて突貫したので、遂に敵を退けて了つたが獨逸兵が突貫の仕方は中々勇ましかつたさうであつて、敵は六十名も死骸を残して退却し、我軍の即死は英獨にて十名、負傷は獨の士官二名、露の士官一名、英獨の下士卒四十餘名、日本は幸ひにして一人も死傷がなかつたさうであります、午後六時になつて、郎坊と云ふ所から揚村に來り、シーモア中將は會議を開き、各國指揮官に向て云ふには「昨日來鐵道の破損を調べるに、全部大破壊して、逆も修覆の見込なく、加之今や董福祥の兵北方に在つて我軍に



抗し、轟士成の兵は南方天津の附近に在りて、共に我が聯合軍を圍み打たんとする様子、斯の如く局面一變せる以上は、一度天津に歸つて彼地に滞在の兵と合し、其上に進退を決するに如しと思はる、諸士の意見如何」と云はれたので、各指揮官皆是に賛同した、日本指揮官森中佐も引歸すのは如何にも残念なれども、負傷はあり董福祥自ら出て來つて我軍の進行を妨ぐる様では容易に北京に入ることは出来ぬを北京の事甚だ心に懸ると雖も、止むを得ず賛成しまして、シーモア中將に向つて云ふに、「天津に引返すとしても、鐵道が破壊して居て見れば、陸を歩行するか、船で白河を下らなくてはならぬ、四十餘名の傷兵を乗せるだけの船にてもあれば幸ひですが」「夫は御心配に及ばん、兵を河筋に出して船を捜させた所が、大形の船四隻を發見しました、依て諸士に御異存なくば、負傷者及び彈藥糧食を船に乗せ、我々軍隊は白河の岸を歩行して天津に入るの考へてす」と云れたので、各指揮官も是に同意しましたそこで又シーモア中將は「斯く決したる上は明十九日出發と定め、各自歩行するには各々荷物がある、是を携へて行くこと云ふ事は迎も出來ない、依つて悉皆捨て去る事に致したいと思ふが如何でせう」各々亦た賛成した、翌十九日死者を埋め傷者と彈藥糧食は船に乗せ所有品は汽車中に置き捨てにする、兵士の中には「惜いなア」と云ふ者もあれば「仕方がない、併し一品位は持つて行つても宜しからう」如何せ持つて行くなら自分の物よりシーモア中將の敷いて居た毛皮を持つて行きたい」など云ふ者も外國兵の中にはあつたそうだが、サテ仕度には時間がかつて午後三時半に漸く同地を出發して頗て一里ばかり來ると日がトツプリと暮れて了つた、是は如何いふ譯かといふと、白河の流れは水勢緩かなる爲め舟行遅々として抄取らず、且つ陸軍の兵と違ひ、常に多くは軍艦内に起臥して居た人々だから歩行に慣れず、殊にシーモア中將は餘程贅澤に生活して居た人ゆゑ、忽ち足に足を痛めて了りました「モシ此邊に露營しやうぢやないか」とガツカリした様子だから、中將

の副官が「閣下が露營なさるのは餘りお痛はしいから、何處か人家を見附けまして舎營なされた方が宜しうムいませう」「イヤ構はん、モリ足が痛んで一歩も歩行することが出来ん」と云つて玉蜀黍畑の片隅の草の上へゴロリと寝て了りました、そこで一同も止むを得ず露營と決したが、海兵が露營と云ふ事は例なきこととてあつて、陸軍には演習の時にも是等の事は日常慣れとしてあるが、海軍のお人達は此の如き事があらふとは思はなかつたゆゑ、其の困難一方ならず、殊に歐米人は前にも演べる如く、日本軍人と比ぶれば贅澤に暮して居つて、シーモア中將などは殆んど日本の大華族の如き生活をして居るから、尙一層困難を感じた様子、傍から見ても誠に氣の毒であつたさうです「夜露が大層降りる、ア、淋漓になつた」「甚い夜露で、全然雨のやうで佐」全體北清地方は露の餘り降りぬ所ですが、今晚の夜露は非常です」などと話して居るとや、北方に火事があると、叫んだ兵がある、一同皆北方を見ると、成程火の光は炎々として天を焦し、煙は空に漲つて幾條の火焰ヒラ／＼立駈るありさま、毒蛇の舌かと怪しむばかりでありませう「火の燃える所は、此處から一里位の所ぢや」字佐川「左様です、確かに一里位は隔て、居ませう、恁いふ原野ですから近く見えます」「是は多分團匪と董福祥の兵とが、我々の置去りした汽車と荷物を焼くのであらう」「ア、爾てせう憤慨千萬です」と云つて皆々切齒扼腕して見て居たが仕方がない、其夜は歩哨を立て、警戒を嚴にし此の畑中に露營しました、翌廿日は又負傷者三名が死亡したから、是を埋葬して午前六時に出發した、森中佐は中將に向ひ「河の向岸にも澤山家があります、敵が家の中に居て不意に撃出されると固りますから、一方だけてなく、向側にも兵をやつて兩側を進行した方が宜しからうと思ふですが」「成程、爾ぢや、アハ君が部下を率ゐて向側に行つて貰ひたい」と云はれたので、森中佐は直ちに日本兵五十餘名を率ゐて、向岸へ渡り、負傷兵を掩護しつつ進行しました、少し進むと左岸のシーモア中將の方から「前面に敵が見ゆる、



本隊に合して呉れ』と呼ばりますので、森中佐は「ソレ向ふに敵が居ると云ふから本隊へ返れ」と命令して東岸へ返りました。此時敵は約三千米突と云ふから廿六七丁の前方より野砲をズドンと打出した。此敵は義和團と官兵と相合したるものにして、數百に過ぎないのだ。我軍全隊力を懸けて對戦したるに、敵は忽ち潰れ走つて難なく其村を占領する。此處を蒲口村と申します。尚進んで下蒲口村を占領しました。此時敵は前面のレイイ王庄兩村に潜み、頻りと發砲致しますので、我軍は米兵を左翼に、英軍を右翼とし、日本は中央に在つて、英の大砲二門を以て砲撃したが敵は村内に潜んで居て撃つたから、我軍の砲は少しも功力がないです。森中佐は米國の士官に向ひ「敵は掩蔽物に據つて居るから少しも砲の功がありません。如何です一ツ突貫しやうではありませんか」米士官「同意です、行りませう」森中佐「では我が日本兵を尖兵にさせよう」とシーモア中將に申しますると、大いに喜んだ。そこで日英米の三軍を合し約五百ばかりにて突貫する事に決しました。森中佐「オイ宇佐川少尉、サア突貫しやぞ、前日獨兵は突貫して非常な名譽を博した。今日の突貫に日軍の名譽を傷くる様な事があつては困るぞ、其の心算で確乎とやれ」宇佐川「宜しうござります、突貫は我日本兵の長所ですから、必らず甘く行ります、サア突貫しやぞ、而も我軍が先頭ぢやア確乎行れ」兵「イヨ待つてた」眞逆待つてたとも云ふまいが、宇佐川少尉は直に突貫の號令を下しました。我が日兵五十餘名は眞先に立つてウツワア、賊聲凄しく突撃したり、是に續いて英米の兵も同じく闘を作つて突貫致します。流石に廿七八年役以來、突貫を以て世界に知られたる日本兵だけあつて、其の勇ましきが、狼狽して白河へ落入つたものも澤山あつたさうです。味方は勝に乗じて追撃をする、其の勇ましく愉快なるは想像の及ぶところではありません。是で難なく敵の陣地を占領して了ひました。日本兵が奮闘突撃した

ので、シーモア中將は非常に喜ばれ、「ヤアお手柄、日本兵の突貫は勇壯ぢやと聞いて居たが、今日始めて其の實を見て感心しました。成程日本の突貫は別ぢや、突貫は日本風に限る」と云つて頻りに稱揚したさうです。全く日本兵の突貫は他國兵の突貫に比すれば、其の賊聲の揚工合から頗る鋭くして勇ましいのである獨逸の士官が「日本兵の勇壯は各國人の認むる所であるから、今日より日本兵は前兵となつて貰ひたい」と言出したので、シーモア中將も「是非日本に前兵になつて下さい」と願ひ、そこで森中佐が「では我が日本兵を前兵としませうが、船中に在る病兵傷兵、是は充分に保護しなくてはなりませんから、片岸ばかりでなく兩岸を進む事にしたいです、即ち全軍を二分して兩側に別れ、船に載せてある傷病者糧食弾藥を中に挟んで、保護しつつ行進したいです」シーモア中將も是を聞いて、道理と思はれ「爾ぢや、夫ては兩岸を進むとして、日本兵には右側隊の前兵となつて貰ふ」斯く決して其夜は河岸に露營なし、廿一日に全軍を二分し、日露獨逸の四國兵は河の右手、英米佛伊の各軍は其の左岸を前進する事になり、さうして我が日軍は右岸軍の尖兵である、進んで北倉に近付くと敵兵は北倉の村端れから又もやドン／＼撃出したから、我兵は各國齊しく原野に展開して打合ひましたが、一時間ばかりにして敵を退け、北倉は手もなく占領したが、南倉から亦た撃出した。此敵は中々頑強にして容易に退かない、對戦數時間、午後六時になつて最早や日暮に近く、地理不分明なるを以て砲撃を止めた所が、敵も亦止めたから、森中佐はシーモア中將の方は如何であらうかと心懸りゆゑ、左岸へ渡つて行つて見ると、案に違はず非常な激戦であつて、英國の參謀長(大佐)が負傷して、其他死傷頗る多く、此敵は轟士成にして意外に強いのです。そこで先づ評議を開きました。シーモア中將は一同に向ひ「斯の如き状況では、益々敵が抵抗して、天津へ引返すのは中々容易のことでない、味方は日々に死傷が殖えるばかり、甚だ困難であるが、何とか好い策はないでせう



かど』言れて、流石英の東洋艦隊司令官たるシーモア中将閣下も、頗る策に窮せられたやうである、スルと森中佐義太郎君が進み出られ「總指揮官閣下の言るゝ如く、憊う云ふ有様では、我々の目的は何時達せられるや分らず、前途甚だ心懸りです、今更云ふまでもなく、我々の目的は北京に在る人々を救援するに在るにも係はらず、何時までも憊して居るのは我々の本意でない、一時も早く天津に返り、充分準備をして成るべく速かに北京救援の事を果したいのである、就ては今夜々半に此地を出發して敵の目を避けつゝ、天津に引返す様にしたら宜しかろうと思ふですが、斯く發議されたので、各指揮官共に皆此の說を賛同せられ、いよいよ夜半十二時に出發して夜明までには天津に歸着する考へてあつたのです、だが中々計畫通り十二時には出發は出来ないのである、それで廿二日の午前一時過に出發し、足音を窺ひ様にして進みました森中佐は此時足を痛めたから、如何にも致方なく、傷者を乗せて在る般に乗つて寝て居たさうです、此の夜は左岸のみ進んで右岸には一兵も渡さず、約一里ばかり進みますると、忽ち向岸から不意にバラ／＼と撃出した、我軍皆齊しく土手下へ這入つて弾を避けて居ますと、森中佐は船から陸へ飛び揚つて同じく土手下へ這入つたが、船中に在る傷病者が心配でならない、スルと爰に奇態な事の在つたのは前日王庄レツにて突貫したる時、日本兵の突撃の仕方がウワアーツと鯨波の聲を揚げて、如何にも勇ましく鋭かつた、て今度突貫する時には、彼の様にやろうと外國人が齊しく憊う思つて居たと見え、言合さねども千人ばかり一齊にバラ／＼と土手の上へ露れ出てウワツ／＼と喊聲を揚げました、其聲天地に震つて恰かも數萬の大軍勢の居るもの如く、如何にも勇ましくあつたから、敵は驚いて逃出してつた、去れば味方は唯鯨波の聲をウワアーツと揚げたのみで、一彈も費さずに敵を追拂つたのであります、眞に馬鹿々々しい様な話だが、全く實際の事て決して黒猿の作り事ではありません、それゆゑ陸軍隊諸君は大笑ひをして「今夜のは空突貫だ

と／＼云つて面白がつたさうである、尙前進する、其中に夜は明け来て来る、丁字沽と云ふ村落の對岸を経て、四時三十分西沽の對岸にかゝつて來たのである、スルと此の西沽に武庫があつて、保甲局と稱し、天津の要害になつて居るのである、黒猿が船で此の白河を下る時は、燒跡の煉瓦の壁のみ残つて居て、其壁に西沽武庫と横に記してあつたのは確かに見ました、兩側に人家は澤山にあり、サテ此時米兵が前兵で、英日佛露獨伊埃の順序を以て前進すると、向ふ岸の武庫の前に支那衛兵が四五人立つて見て居ながら「彌々來々と」云つて手招きをして桃弄つたさうです、此方等も矢張り手招きをして笑ひながら進む、恰ど日本兵が中間であつて傷病者を載たる四艘の病院船は、日本兵の直ぐ真下の河中を漕ぎ行きつゝあつたさうです、今や既に武庫の對岸を出はすれんとする一刹那、多數の清兵は壁内の銃眼の所に露はれて、一齊に烈しく撃出したのである、味方は不意撃をされたので、大いに驚いたが直に隊形を變じて應戦をした、唯心配なのは河中にある病院船である、此邊白河の河中は僅かに二十間内外であつて、敵彈は病院船に集中するから、森中佐等は大いに焦立つて「船を疾く進め、早く漕去れ」と號令したが、中々思ふ様に行かない

(二十七)

一寸此處で申演べく置くのは、白河と云ふと日本のお人達は大層大河の様に思召して居るが、河中は餘り廣くない、太沽沖から河へ這入つて約三里位までは隅田川程の巾であつても、それから上手は狭くなつて、三十間内外になる天津へ行つて又廣くなつて、天津から少し上手へ行くと再び狭くなる、水は何處まで行つても黄色な濁つた泥水で、それを曲折が頗る多いのです、戰爭當時の諸新聞にて曲折が九十九で、百に一つ足りないから、百の頭の「一」の字を取去つて白河と名づけたのだとしてあつたが、中々九十九曲り位ではない



太沽から天津までの曲りが三十一で、天津から河西務までの曲りが二十七、河西務から通州までの曲りが二十四である、是で已に入十一曲りである、通州から上陸して北京へ入るのだから、其の上陸は僕は知らないが、樺木少佐に聞いて見たら、通州より白河の源まで日本の里數で二百里もあつて、夫て未だ曲りは澤山にあるさうだ、シテ見ると九十九曲りだから、百の頭を一を去つて白河と名付けたなどは、日本人の附會説であらう、さうして餘り深くない、天津までは小蒸気が通ふが、其の蒸気が時々干潮に遇つて途中へ引掛つて仕舞ふ事があり、それでも川底は泥だから決して船底を傷けないのである、イヤ是は長たらしい河の講談で讀者諸君は御迷惑千萬であらませうが、サア慙う云ふ河であるのだから、對岸の武庫から擧出されては船中に居る傷病兵が堪らない、夫に敵は壁内即ち堅固なる陰蔽物に據つて打つのであつて、是と應戰するは頗る我軍の不利益である、戰情已に斯の如くであつて見れば、例の突貫より外策はないのである、爰に於て獨逸の指揮官は大聲疾呼突貫を令するや、獨兵は眞先に河中へ飛入つた、宇佐川少尉は是を見るや、宇佐川「サア此方も行れッ」と自ら第一番にボンと飛込んだから日本水兵五十餘名、我先にとドボク飛込だ、是に次で英米露佛埃伊の海兵、皆一齊に川を渡つて武庫の南北兩側からドツクと城を擧げて突貫した、スルと敵は又も支へかねて遂にバラバラと逃出してたから、聯合軍は難なく武庫に入つて、とうとう此所を占領してしまひました、そこで武庫中を檢するに野砲機砲は百數十門、小銃は獨式米式の二種數萬挺、彈丸も又た是に副うて備はり、白米も五噸を蓄へてあつたから、我が聯合軍隊は何れも彈藥糧食 缺乏の際に、此の武庫を占領したのは望外の僥倖でありました、さうして此武庫は廣袤二町四方もあつて、壁内の庫數は三十餘もあるのである、そこで先づ評議を開き、シーモア中将は各指揮官に向ひ、諸士の御盡力に依つて是まで引返したのみならず、此の西沽の武庫を占領したのは意外の幸福でありました、然し爰に一ツの難儀と云ふ

ふのは、傷病兵の運搬である、モリ是から先船では無論行けないのである、云ふまでもなく天津へ這入れは河の兩岸に敵は澤山居るし、且ツ左右に砲臺はあるし、進も船で下ると云ふ事は出来ないのである、と云つて陸を運搬するとすれば、一人の傷病者に四人掛つて擔架で運ばなくてはならない、病傷者は二百名以上もあるから是を運搬する者八百名以上を要するのである、シテ見れば半以上の戰鬪員を失ふて爾して手に足らぬ兵を夫を保護しつゝ進まなくてはならぬので、是は實際行り得べき事でないと思はる、諸士の意見は如何ですか、森中佐「では進も病傷者を保護しつゝ進むと云ふ事は出来ないのである、依つて此の武庫に籠城して固く是を死守し、人を天津へ出して此地の状況を告げたら、天津には我々が出發以來何國かの軍隊が到着したらうから、必ず援軍を送つて呉れるだらうと思ふてすが」吾輩も亦た斯く思ふのぢや、依つて簡城と決し、其の準備として、使者を天津に出さう」と是から英が連れて來た支那人數十名ある其の中から、心利きかる者二人を擇み出した、是は威海衛から連れて來た支那人數十名ある其のツて丁寧反覆使者の赴きを告げ諭して、書面を渡し「貴様等此の書を在天津の我英領事に手渡しせよ、此の使者の任務を果せば、賞與は必ず澤山にあるべし」と吩咐けたので、彼等の喜びは一通りではなから、支那人は好々多謝、必ず誓つて務め果します、通譯「ム、必ず果せ、併し若し萬が一清兵に怪しまれ疑られたら、書面を早く隠して仕舞へ、書面を敵に奪られると、我軍に取つて頗る不利益ばかりか、貴様は必ず殺されて了ふぞ」支那人「宜しう申します、若し疑られる様なら、書面は丸めて吞んで了ひます、ハイ吞んで爾して天津へ着いてから、大便をして、出たら領事へ差上げます」汚いことを云ふ奴等ぢやと云つて笑つたさうです、そこで、兩名の支那人は出立致しましたが、暫くすると、敵は慙う云ふ要所を奪られ、敵に取つては頗る不利益ゆゑ、是非此の武庫を取返さうと云ふ心算と見え、占領して間もなく白河の右岸前面、即ち天津方面と、又



河の左岸、鐵道方面と兩方から約五千位の敵兵は、頻りに大砲小銃を發射して攻撃し來り、次第に武庫近くへ道つて參りました。聯合軍は何れも皆必死になつて是を防ぎ、分取つたる壘内の敵砲を利用して、攻撃し來る敵を激しく砲撃するのである、されども敵は中々屈するの色なく、如何しても武庫を取返さうと云ふ決心と見え、約一千ばかりの敵兵は騎兵を眞先に立て、一千米突即ち九丁位の所まで進んで來ました。が、更に五丁ばかりの近距離まで押寄せ來り、今にもハヤ白河を渡つて突撃し來らんとするの有様であるから、各國指揮官等は何れも皆決心なし「サア皆な確乎やれ、敵が假令突撃し來るとも、此の武庫を敵に取戻されては仕方がないぞ、如何しても堅く此所を守つて、天津から援軍の來るまで籠城せんければならぬぞ」と各自互ひに勵まし合つて必死に防いだから、とふく敵を退けたのであります。此時森中佐は各兵の擡へ居る銃丸を檢するに、一人前モウ僅か二十發位あつたしかなかい。是では不可ん、土藏を開けて彈を出せ」と武庫の中にある土藏から小銃彈を出し、一人に百發づゝ擡帶なましめたさうです、スルト兵士等は「チャンの彈を奪つてチャンを撃つとは愉快々々」と云つて喜んで居る、廿三日は朝から烈しく攻撃して來たが、矢張り必死に防いで討ち退けた、さうして夜に入つて評議を開きました「密書を持たせてやつた支那人も還つて來ぬ所を見ると、敵の爲に捕へられたかも知れぬ、それとも或は途中から氣が變つて逃げて了つたかも知れぬ」とシーモア中將が云うた、中將の副官は「閣下、慙したら如何でありませう、士官を一人選んで、さうして兵若干を率ゐさせ、敵狀を偵察なましめながら、我が軍の情況を天津へ報告せしめたら」と云々と中將も「宜しからう」と云はれて、スターイン大尉に是を命じました、大尉は快活なる士官ですから喜んで領承し、選抜兵百名を率ゐて行く事になりましたが、先づ大尉は其の兵士を數列なましめて置いて、一場の演説を始めました「貴様等能く聽け、今更改めて言ふまでもないが、我々聯合軍は北

京救援の目的を達する能はずして空しく引返すのみならず、今や我々も亦た此の地に籠城して天津よりの救ひを待つとは、勢ひ止むを得ないとは云ふもの、實に不面目である、此上もない不名譽である、若し我々が徒らに引返したるため、在北京の各國人が清兵と團匪との應殺する所とならば、我々は世界列國に對して何の辭かあらんだ、未代までの耻辱である、世界の歴史に汚點を残さなければならぬのである、思つて此處に至れば我輩は實に慚愧に堪へぬのである、依つては如何しても今夜貴様等と共に敵情を探りつゝ、天津に聯絡を取り、十分に準備をして、一日も早く北京を救はんければならぬのである、爾等選ばれて此の任務を盡すものは、汝等の名譽である、サア確乎やれ」と慙々勵ましたから、兵士等も皆大尉の語に稱激して、假令數萬の敵に出會ふも、必ずや撃退けて天津聯絡の任務を全うせんと、各自心に誓つたのであります、スターイン大尉も大いに喜んで其夜八時頃勇ましく出行了きました、中將始め一同は如何かスターイン大尉が首尾能く天津へ着して呉れば好いかと心配して居られますと、大尉の一隊が凡そ一里位も行つたらうかと思ふ頃、ボン／＼バラ／＼銃聲が聞え出しました、シーモア中將は是を聽いて「ア、衝突したな……衝突しては天津に達する事に難いぞやらう」と言へ、一同も心配して居ると、一時間ばかり経て果して英兵は退却して參りました、特に隊長たるスターイン大尉は負傷して居る、爾も重傷で殆んど人事を辨じない位であつて、其部下の少尉は中將の前に出で「閣下、誠に憤慨の至りです、鐵道線路の附近まで進みますと、敵の爲めに發覺されて、而も優勢の敵にです、大尉殿は如何にもして一方を打破つて天津に達したいと、我々部下も亦た必死になつて戦りましたが、如何も目的を遂げる事が出来ません、加之大尉殿が負傷されたので、止むを得ず退却して參りました、實に遺憾でムイマス」「フム、夫れ残念じやつたのう……死者は何人あつた」「即死四名、負傷は大尉殿とも八名あります」中將は是れを聽いて頭を暫く傾けて居られたが、



稍るつて「シテ見ると敵は餘程強ぢや、爾ういふ有様では天津も定めし危殆の状況に陥つて居るぢやろう。……では今一度支那人を遣つて見よう」と言れて又も二名の清人を擧げ、別々の道を取らせて天津へ遣しましたさうして、中將の率ゆる聯合軍隊は、天津より救ひの来るまで此の西沽の武庫に籠城と決しました、サア恠ういふ有様であるから、北京にて籠城があり、天津にも居留地の籠城があり、此の西沽の武庫にも亦た籠城が出来た、北京は即ち大籠城、天津は中籠城、西沽は小籠城である、そこで一寸天津の中籠城の光景を演べて置いて、夫から福島少將の乗出しに掛らう

(二十八)

天津へ義和團の這入つて来たのは六月の始めてあつて前にも數々述べたる如く、官兵と團匪と相通して居る事が分り清國政府から列國を相手に戦ふとの上諭の出でたる事が全く知れたのは六月の十五日である、其前日十四日の夜から彼れ團匪等はモツ耶蘇教會堂を焼き始め、救民信徒を殺し出したのである、彼等が放火する時は先づ石油を濺ぎかけて置いて、爾して支那線光のポツポと松明の様に燃えるのを投付けけるから、夫で直ぐに燃えつくのである、彼等は「是が神仙より授かつた秘法である」と吹立て、居たさうだ……十五日の夜になると團匪等は手にく炬火を揚げて隊を組み、殆んど松明隊とも云ふべき有様で放火して歩くので、各國人は此前より評議の上警戒を最も嚴にいたし、團匪をして一歩たりとも居留地へ踏込ませじと、各自受持の場所を定めて堅固に守つて居るのである、日本は笠置と須磨の陸戦隊で三井物産會社支店と正金銀行とを守り梁園門の所にある大學堂へも若手の兵を出して、獨逸と共に此所を守備して居たのである、其他英米佛埃伊の各國、夫々兵を出して居留地全體を取捲いて守備して居ました、抑も天津は塘沽より十三里三

十町の地に在つて市街は白河の西岸に立連なり、獨逸租界は其入口にあり、之に次いで英租界、日本專管居留地は此隣りに在つて、何れも白河に浴ふて居ます、日本領事館は英租界の内に在つて近年の新築です、敷地三千坪建坪も之に適ひ、是れ一旦事ありて北京と交通断絶したる場合の用に供せんと欲するものであつて、居留本邦人は凡そ六十餘名、三井支店、正金銀行及び其他の雜貨商等は佛租界に在ります、日本領事館と日本專管居留地とは、英租界佛租界を隔て、十町餘此の附近一帯の地を紫竹林と稱します、竹紫林から天津の城までは、日本の里數で一里餘もあつて日本領事館はゴルドン公園に連り、アストルハウスに接して居て、公園内に大館があります、是をゴルドンホールと云ひ、商業會議所に充てある天津の附近に在つては白河の幅が一町ばかりにて小さな砲艦を碇泊せしむることが出来、停車場は佛租界の向ふ岸にあり、汽車は是より北京と相往來して居るので、是を東京に喩へて見ると、白河を墨田川として、淺草觀音を水師營の砲臺とし其の西手から上野公園あたりを天津の城を見做して宜しい、日本の領事館は淺草福井町邊に在つて三井は鹿橋の西岸の所に川に向つて居るのである、さうして其の向岸が即ち停車場であり、イヤ餘り長たらしく地勢なども演べて居ると、讀者諸君の御退屈を來すから、此邊で本文に入つて天津居留地の籠城奇談に掛りませう、前にも述べたる如く、六月十五日に至りては團匪の勢益々猖獗を極め、何れも大群をなして、潮の如く天津市中に入込み來り、先づ城外なる支那街に火を放つて暴行を恣にするに、白晝白刃を打振つて大道を横行し、外國人に關係ある支那人と見れば、有無をも言はず斬殺し、是が爲め毒刃に觸れて倒るゝもの數知れず、泣叫ぶ聲巷に満ちて血腥き風は滿街を吹渡り、其の慘狀言はん方なく、昨日まで北京に次いで清國の大都會として繁華比ぶべきなき全都は、忽ちにして西風吹き、血雨降るの一大修羅場と化し、住民は如何になり行くらんかと店を開ぎ、商賣を休止して四方凄涼のありさま、實に名狀すべからざるに至







を行なつたるに不思議なるかな、一人として倒るゝものなし、團匪等は此處ぞ我拳法の靈驗なるところと言はぬばかりに進み参ります、我が陸戦隊諸士は是を見て「ハテ不思議ぢやなア、今の一齣射撃で一人として倒れないのは、如何いふものぢやらうと一人が云へば、又一人の兵は「彼等の所謂拳法果して靈驗あるかなア」武光少尉は是を聞いて「馬鹿を云ふな、拳法の靈驗などと云ふ事があつて堪るか、モット近寄せて置いて撃てツ…未だ…可し、サア撃てツ」と云ふ號令と殆んど同時に、バラ／＼と一齣射撃を致しますると、先に立つたる匪徒十二三名、バタリ／＼と將基倒しに斃れて了つた、義和團等はモウ逃出すだらうと思ふと、中々逃げないで其中より眞先に立現はれたる一人の大男、一丈餘りの青龍刀を打振りながら、喚き叫んで我が陸戦隊を自懸け突撃して参ります、是に次てウワアツツと賊聲を揚げながら突撃して来る其勢ひ、實に凄じく、流石の我が日本陸戦隊も小勢の事ですから餘程困難したです、武光少尉は彼等が此所まで進撃して来れば、モウ夫まで決心して「サア貴様等覺悟しろ、大日本帝國の兵士たるものが頑愚なる匪徒の爲に突撃されて逃げたと言はれては、帝國未代までの汚辱を遺さんければならん、假令我々一人残らず戦死するも一歩も退くな」と激ましたから、兵士は皆決心して一層烈しく撃出しましたけれども彼等は少しも屈せず、多勢を頼みにして倒るゝ死傷を踏越へ乗越へ、益々圍を造つて近附いて参ります、中にも彼の眞先に立つたる頭目らしき大男は、大口を開いて何か頻りに號令しながら、宛然阿修羅王の猛り狂ふが如く、獅子奮隊の勢ひを以て突進し来る其の光景、怖ろしくも亦勇ましく、敵とは云へ實に其大膽なる男です武光少尉は大聲に「ソレツ彼奴を狙ひ撃て／＼」と號令した、兵士等は銃口を揃へて彼を狙撃すると雖も中々命中らない、已に武光少尉の一隊は危く見えたる所へ、福田少尉の一隊が駆附け来りまして、匪徒等の側面より烈しく射撃したので、是が爲に彼等大いに狼狽なし、最早や拳法も破れたりと思ひしや何れも見

苦しき状態にてバラ／＼と退散致しました、併し此時の武光少尉の一隊は、幸ひにして死傷はなかつたが、餘程危くいたして、福田少尉の一隊が救援に赴かなかつたならば、團匪の多勢に突貫されて、如何なる状態に陥つたかも知れなかつたさうです。

(二十九)

此時天津に在りたる各國の兵數は如何程であるかと云ふと

露國約	二千	英國約	三百	獨逸	百五十
佛國	六十	米國	四十	澳國	四十
伊國	二十				

て、我が日本は笠置須磨の兩陸戦隊を合して百三十二名ですから、各國合して兵ばかりでは三千もないのである、故に居留地籠城の人々は、唯今太沽方面より救援軍の来るを待ちつゝ居るのであつて、若し今清兵大舉して居留地に襲来せば、逆も長くは持堪ゆる事が出来なかつたです、それであるから島村海軍大佐は、十七日の午後二時頃、領事館の二階に在つて、種々お考へになつて居らるゝところへ、野村大尉が登つて來られて「大佐殿、大沽砲臺はモウ占領したらうと思ひますが」大佐「どうぢや、モウ聯合軍の手に落ちたらう、併しシモア中將の率ゆる救援隊は、如何したぢやらうか、北京及び救援隊の状況は香として少しも分らぬには困る」と云つてる所へ青木中佐が上つて來て「今獨逸の方から報知があつたには清兵が約千ばかり南門を出で、海光門から土壁の外を廻つて、居留地へ迫り来る模様があると云ふですが」「報ずる言葉も終らぬ中に、ズドンバリ／＼／＼と恐ろしい音がして、領事館の屋上數丈の上を通過して遙かに南方



へ落下したのは、正しく是れ大砲の弾丸だ、此時下から慌たしく駈登つて来たのは小村俊太郎君だ「大佐殿、た、た、大砲を撃出しました、大砲」を大佐は従容として「騒ぐな、大砲が何が恐ろしいか、大砲の弾などは中るものぢやない、アハハハ」哄然とお笑ひになつて居る、青木中佐は小村君に向ひ「君等から騒ぎ出すと婦人が困るから、静かに務めて平氣を装ふて居て呉れないと不可ん、戦争になつた以上は大砲を打出すは知れて居る事ぢや」小村「夫は、モウ爾ですが、併し是迄は大砲は打たなかつたから、我々は驚いたです」青木「それは軍人外の人ぢやから無理もないが併し非軍人でも日本男兒は日本男兒らしくして居なくては不可ん、銃丸などは坐禪豆ぢやと思ふて居るが好い」小村「小銃弾を坐禪豆と思つたら、大砲弾は何と思ふです」島村「大砲弾は牡丹銃と思へッ」眞逆に牡丹餅とも思へますまい、スルと砲丸は益々烈しく来る様であるから、島村大佐、青木中佐、山下中佐等各々双眼鏡を取つて、例の支關の上なる四層塔に登つて見ると、其後から鄭領事小栗代議士、依田伊三次君なども登つて参りました「大佐殿、いよく始まりましたが、何處から打ちますな」島村「水師營の砲臺から打ち居る、ム、中々壯んにやり居るワイ」と云ふ中にストロンと来たのが、アストムハッスの眞向にある公園へ落ちて破裂したが、バラ／＼と土石を飛ばし、暫しが間は四邊濺々として薄暗くなりました、依田君は是を見て「是は驚いた、僕は砲弾には始めて目見え奉るか知らなかつたが、是は砲弾の落ちる側に居ると、中らなくとも土石を飛ばされて負傷位はしますな」青木中佐は笑ひながら依田君を顧みて、砲弾は前に落ちれば滅多に負傷はしない、背後に落ちると危険ぢや」依田「ヘエ、何故ですな」青木「何故と云ふて君考へて見い、砲弾と云ふ物は慙う眞直には落ちまい、直下はしやせぬ、前方から飛んで来るのぢやから、慙う斜めにズーンと来るぢやらう、爾ぢやらう、依田「ハイ、爾です、夫はモウ被仰る通り、斜めに落下するです」青木「サア夫ぢやから、慙うドシン／＼と地上に落つつかつた時、破裂した其の破片はバラ／＼と前に飛ぶ、ソラ考へて見い、前に破片が飛び散るか、前の弾が落れば向ふへ飛んで仕舞ふ故に、滅多に負傷はせぬ、サア土煙を浴る位なものぢや、其代り背後へ後ちられたらそれこそ堪らないぢや」依田「成程さういふ理合ですなと云つて居る所へ、ズーン／＼と砲弾が風を切つて頭上遙かに飛過ぎます、頭の上を大砲の弾が飛んで行つては、餘り好い心地ではないと見えて、鄭領事、小栗代議士、依田伊三次君など、皆ヒヨイ／＼と首を窺めるので、是を見た島村大佐はカラ／＼と笑ひになり「君等、首を窺めても不可んよ、中る時は窺めても中る、中らん時には伸上つて居ても中らぬ、ナニ大丈夫ぢや」中栗「君方は軍人でなくとも、日東帝國の男兒ぢやないか、オイ依田君、君は日頃柔術自慢ぢやが流石の自稱的柔術屋先生も砲弾には閉口したと見えるな」と少し冷笑して云ふと、依田君は負け嫌ひの氣質だから、ナニ今のは脊中が痒いから、手で搔くのが面倒だと思つて、チヨイと着物で摩つたのです、夫て他から見ると首を窺めた様に見えたりす」慙う遁げのけた、青木中佐は「フッ、爾か、爾ぢやらう、日頃豪傑を以て自ら任じて居る君ぢやから、砲弾位に辟易はしまい」依田「爾です、全く背中が痒かつたです、なアニ阿官、砲弾位の何と思ひますものか」と云ふ言葉も未だ全く終らざる中に、又もやズーン、今度は先よりも近くを通過すると、依田君は思はずヒヨイト首を窺めたから、一坐大笑ひとなつた、依田君は平氣で「ア、馬鹿に脊中が痒い日だワイ」尙も見て居る中に、凄まじき音して、一ツの大砲丸は我日本領事館中の裏手なる割烹居室へ落ちてガラ／＼と破裂致しました、數人駈け行いて火を消したから大事にならず済んだのは、何より幸ひであつたです、そこで鄭領事は日本居留民を殘らず領事館へ集めて評議を開きました、此時我が日本人にして天津に居たる人々は、軍人と領事館員の外に、國會議員、商店員、新聞記者、留學生、職人等も居られました、是等の人々皆領事館に集り來つて評議を開いたのであり

上落つつかつた時、破裂した其の破片はバラ／＼と前に飛ぶ、ソラ考へて見い、前に破片が飛び散るか、前の弾が落れば向ふへ飛んで仕舞ふ故に、滅多に負傷はせぬ、サア土煙を浴る位なものぢや、其代り背後へ後ちられたらそれこそ堪らないぢや」依田「成程さういふ理合ですなと云つて居る所へ、ズーン／＼と砲弾が風を切つて頭上遙かに飛過ぎます、頭の上を大砲の弾が飛んで行つては、餘り好い心地ではないと見えて、鄭領事、小栗代議士、依田伊三次君など、皆ヒヨイ／＼と首を窺めるので、是を見た島村大佐はカラ／＼と笑ひになり「君等、首を窺めても不可んよ、中る時は窺めても中る、中らん時には伸上つて居ても中らぬ、ナニ大丈夫ぢや」中栗「君方は軍人でなくとも、日東帝國の男兒ぢやないか、オイ依田君、君は日頃柔術自慢ぢやが流石の自稱的柔術屋先生も砲弾には閉口したと見えるな」と少し冷笑して云ふと、依田君は負け嫌ひの氣質だから、ナニ今のは脊中が痒いから、手で搔くのが面倒だと思つて、チヨイと着物で摩つたのです、夫て他から見ると首を窺めた様に見えたりす」慙う遁げのけた、青木中佐は「フッ、爾か、爾ぢやらう、日頃豪傑を以て自ら任じて居る君ぢやから、砲弾位に辟易はしまい」依田「爾です、全く背中が痒かつたです、なアニ阿官、砲弾位の何と思ひますものか」と云ふ言葉も未だ全く終らざる中に、又もやズーン、今度は先よりも近くを通過すると、依田君は思はずヒヨイト首を窺めたから、一坐大笑ひとなつた、依田君は平氣で「ア、馬鹿に脊中が痒い日だワイ」尙も見て居る中に、凄まじき音して、一ツの大砲丸は我日本領事館中の裏手なる割烹居室へ落ちてガラ／＼と破裂致しました、數人駈け行いて火を消したから大事にならず済んだのは、何より幸ひであつたです、そこで鄭領事は日本居留民を殘らず領事館へ集めて評議を開きました、此時我が日本人にして天津に居たる人々は、軍人と領事館員の外に、國會議員、商店員、新聞記者、留學生、職人等も居られました、是等の人々皆領事館に集り來つて評議を開いたのであり



まず、時に領事は一同に向ひ「今更云ふまでもなく、最早清兵と義和團と方を合せて迫り来る事は顯然として疑ふべからず、依ては我々も是に對するの方針を確と定めて置いて、爾して諸士と共に進退存亡を決したいと思ふです、諸君は意見のある所を充分に演べて頂きたい」と、慙う言われました、ヌルと真先に進み出た小村俊太郎君は、最も勇壯なる面色で「諸君如何です、我々は非軍人なりと雖も各々大和魂を有して居るのである、故に此の魂を振つて斬つて出て、戦鬪力の續く限り斬つて／＼斬り捲つて一方の圍を破り、塘沽方面へ引揚げやうではありませんか、爾すれば太沽砲臺は己に占領されて居るだらうと思から、それが得策と考へるです」と其の語氣は頗る活潑だつたさうである、之を聞いて國聞報館主の西村博君が、小村君のお説は至極勇壯であつて、我々日本人たるもの、是非慙云ふ武勇的思想があくてならぬです、吾々は實に小村君の勇敢に感ずるものである、併しながら又一方から考へて見ると茲に一ツ心に懸るのは、些と失敬な言ではあるが、足手纏ひの婦人小兒である、此の婦人達が若しも敵の擒と爲つて頑愚なる團匪や、野蠻極まる清兵の爲に辱しめを受ける様な事が在つたなら、末代迄日本國の耻辱です、それより先づ當居留地に籠城して救援隊の来るを待ち、若し萬一防戦盡きたなら仕方がない、婦人は皆男兒の手を以て殺害し、我々は我が軍隊と敵と戦つて居る横合から切入つて潔く戦死しようではありませんか、僕は是より外策はないと思ふ」と云ふ中には「日本領事館よりモツと堅固な他の領事館へ引揚げた方が宜しかろう」と云ふ人も出て来て、議論紛として決しません、島村海軍大佐は始終満面に笑を含んで聞いて居られたが、例の如く先づ「アハハ、」と高く笑つて、それから徐ろに口を開き、諸君は種々議論がある様ぢやが、何もそんなに議論するには及ばない、生る事が出来なくなつたら、死すと慙ふ覺悟して居たら夫で好いぢやないか、他の領事館へ移らうなんて、そんな事を爲すに及ばん此所防げぬものなら他へ行つても同じぢや、愈々防ぎきれぬば、一同

枕を並べて立派に死んで爾して本國の人々に流石は日本人ぢや、深く死んだと譽められようぢやないか、所謂死なば諸共ぢや弱くて自分で死ぬぬ者は吾輩が幾人でも首を斬つてやる……、オイ安藤さん、君の首などは細くて斬れよとぢややせ」と云つてアハハ、と又笑つた、如何にも快活なる大佐の一語に、一同耻入つたと見えて、それから一人として卑怯なる事を云ふ者はなくなりました、青木中佐が「そこで愈々爾うと決した以上は、兎に角諸君も皆武器を携帶しなくてはならない、一人て深山持つて居る人もある様だし、又無い人もある様だから、刀と銃砲を持つて居る人は、刀を人に貸し、ピストルと仕込杖を持つて居る人は仕込杖の無い人に貸すと云ふ事にしたいものぢや」と云れると、中には「至極御道理である、吾輩ピストルと仕込杖があるからピストルを貸さう」武器の無い人は「では僕に貸し玉へ、だがピストルを借りては濟まぬ、仕込杖とピストルでは誰しもピストルの方が好いから好い方を借りるのは氣の毒ぢや」と遠慮して云つたら、「なアに君構はん、好い方を貸さう、己れが好い方を取つて、他人に悪い方を貸すなんて、僕はそんな義侠心のない男ではない、ピストルを貸さう」と云ふ有様、如何にも義侠の眞心が面に現れて居る「では君、濟まないがピストルを貸して呉れ玉へ、實は僕はピストルなら扱つた事もあるが仕込杖では撃劍を知らないから仕方がない、ピストルなら有難い」と押戴いて大層喜びつゝ見て居ましたが「君、是は好いピストルだね、餘程高價だつたらう、慙ういふ好武器があれば敵の三人や五人は美事打殺して見せるね……併し君彈も序に拜借したいね、と云つたら、貸した人が「アハハ、」と笑つて、彈がないから貸すのだ」と言つたから一應思はず失笑したさうです







攻立られ、前面からは外國兵に攻撃され、進退谷まつて逃出すものあり、官兵と一ツになつて外國軍に抗するものあり、其の混雜一方ならず、中には「最早我が大清國亡滅の時來れるなり、生きて國の亡ぶるを見んより、死して安樂淨土に歸するに若かず」と云つて自盡した者もあるやうです、日本の領事館へ來た彼の三人の青年も多分死したらうと云ふ鄭領事の語であるが、何しろ憐むべき事であつてどうして此時彼の火藥庫へ火が這入つて破裂したから、凄まじい響かして、學堂一面の火となつたのであります、僕などの行つた時は中の建築物は焼いて了つて見られなかつたが、煉瓦の圍だけは残つて居て、それへ横に武備學堂と記してあつた、サテ此時に當つて、清兵と義和團とは合力して停車場方面へ押寄せ來り、頗る猛烈に攻撃したのであります、此日の敵の攻撃は殆んど清兵とは思へない位であつたやうで、彼等は是非とも停車場を占領して、居留地へ攻め入らうとしたのである、聯合軍は何れも皆一生懸命になつて是れを防ぎどうく撃退して了つたのであるが、此時の働きは全く露兵である、露兵は我日本兵に比ぶれば戦には弱いてあつて、日本の兵士は何れも皆露兵の事を狡猾兵だの、暴行兵だの、蠻行兵だの、弱兵だのと云つて居た位である、なれども此頃は日本兵は至つて少數で、露兵が大多數であつたから、夫ゆゑ露の力に退けたのである、讀者諸君よ、露兵は又々生意氣なる理窟を演べ出して相濟みませんが、我が日本軍は露軍と戦つても決して負けないのである、露兵は日本兵と比ぶると、無教育である、従つて野蠻的思想であるから廉耻を知らない、それに幹格は大きく立派であるが、少し頑強なる敵に遇へば忽ちに退却して了ふ、そこへ行くと我が日本の兵士は、味方が斃るれば斃れるほど憤慨して進むのである、私し如き者の考へても、今日日本は露と戦つて決して負けないと思ふ、僕が徴々たる藝人の分際として、僅かに數ヶ月清國へ行つて、各國陸軍の表面を見た位で、此様な事を吐すのは、些と此頃ボカ／＼暖かに(此講演は明治三十四年夏の始め)なつて來たから、逆上

したのだらうと思召す方もありませうが、縦令私しは瘋癲的動物的人間にもせよ、一寸此頃或る確かなる人から聞いた事があるから、そこで一理窟を慰みに供せんと欲するのであるが、我國の陸軍は無論露と戦つて負けないとして、然らば海軍は如何かと云へば、是も亦決して恐るゝに足らないのである、我國の海軍は日清戦争の前と後と如何いふ懸隔があるかと云ふに、其の排水量を以て云ふと、戦争前には約六萬三千噸で、世界十二番目の海軍であつた、其一番は云ふまでもなく英國で、二番が佛國、三番が露國、四番が伊太利、五番が北米合衆國、六番が獨逸で、是だけを世界の六大海軍國と稱し、其餘の國々の海軍は、所謂十把一からけに小海軍國と云つたのである、併し噸數に依つて順序をつけて見ると、獨逸の次が西班牙で、其次が澳太利、其次が土耳其、其次が和蘭、其次が支那で、支那の次が日本であつたのだ、所が二十七八年の戦勝の結果、支那の鎮遠、濟遠、平遠等の軍艦、其他六隻の砲艦を分捕つたるに加へて、富士、八島、摩須、明石、和泉、龍田、宮古等が殖え、又第一期第二期計畫の大擴張があつたので、其の製造中のものを加へて、新舊残らずを總計すると、軍艦が二十六萬二千噸、驅逐航と水雷艇が五千噸餘で、現今では實に世界七番目の海軍となつて、數年前から世界各國が日本を加へて七大海軍國と云ふ事を言出したのであるから、海軍の方でも決して恐るゝに足らないのであるが、唯些と心配なのは金がないのと、モウ一ツは責任を負うてフン張つてやらうと云ふ大々的豪傑に乏しいのと、此二ツに困るやうだが、ナアに行つて見れば案ずるより産が安いだ、今日の場合、恐露病に罹つて此の豆の様な豪傑たる一小島國を後生大事と守つて居る様な事では、我々日本人たるもの幾百世を重ねると雖も、頭の擧る時がないのである、此所一番固有の大和魂を奮ひ、勇斷果決を以て行へば、ナニ若し萬が一負けたら四千萬の同胞が残らず枕を駢べて死ぬまで、今日の場合、命の惜い様な奴は共に語るに足らないのである、イヤ是は長たらしい屁理屈



を演べて甚だ相濟みません、サテ此時獨逸の守備して居る梁園門の方へも、優勢の敵が来たと云ふ急報がわつたので、領事館に居た笠置の陸戦隊二分隊、即ち十三名を遣つて、獨逸と力を競せて防いだから、とよく是をも打退けて了ひました、此邊の所戦は、グツと演べて置いて、後で福島少將が乗出してからの戦闘を詳細に演ずる事に致しませうが、此日は午後六時になつて漸く清兵の砲撃が止んだのであります、サア此夜から領事館へ寝る人達が多くなつたので、應接の間と、其隣室の大廣間それから、食堂へも寝る事になりました「枕が無い」と云ふ人があれば「此の戦争の中で枕などが要るものか、手枕で澤山だ」と云ふ人もあり「諸君好い枕がある、此の絨氈を捲いて枕とし、そうして大勢並んで衣物を掛けて寝やうではないか」と云出した人があつて、是に決する人達もあれば、椅子を三ツ並べて其上へ横になる人もあり、又二脚の椅子を向ひ合せて一ツに凭りかゝつて、一方へ足を出して寝込む者もある、青木中佐は勿論軍服に靴を穿いたまゝ、軍刀の柄を左の手に握つて椅子に凭りかゝりながらウツラウツラとして居たが、二時過になつては、全くグツと高野でも睡眠になつたさうであつて夜の明けたも知らずに寝込んで了つたのである、スルと又もヤズドンガラ／＼と凄じい音がしたので、正に砲弾の附近に落下して破裂した音に違ひない、流石の青木中佐も喫驚して眼を覺して、瓦破とはかりに起き揚がったが側の見る目を思召して、亦もや椅子へ凭りかゝり、グ／＼と空射を聞いて居られたさうであります、隊長になると怪う云ふ所まで心を配つて、心中には吃驚なすつても、それを面に露はさず居なくてはならぬさうです、夫てないと部下の勇氣が沮喪して仕方がないさうであります、スルと外の人達も此の物音に眼を覺して飛起るもあり、慌てて駆出した人も軍人外には有つたさうだ、中には空寝入をして居る中佐の傍へ来て、頻りと起して居る人がある、中佐殿中佐殿、能く寝入つて居られるな、ア、中佐殿」と一層大きい聲で起したら、稍やく中佐が「ムニヤ／＼

「アアアツ」と大欠伸をして眼を開きまして「何ぢや、喧ましい」と言れながら「今砲弾が落ちました、爾も凄まじい音がして、直立關先で破裂した様ですが、中佐殿には聞えませんでしたか」と云ふと、中佐は眞面目な顔で「爾か、ム、何か音がしたやうだが、己は現で聞いて居た、砲弾の破裂した音だつたか、爾か、己は又た誰かの寢屁だと思つた」と被仰つて、それで笑ひもしないで、眞髪を捨擲して居たさうです、サアいよいよ是からが菅海軍大尉の名譽なる御戦死にかゝるのである、夫には一寸話頭が一轉却をする様になりませんが、前にも演べ置きました通り、菅海軍大尉は須摩艦の分隊長であつて、艦長島村大佐に従つて太沽より上陸し、天津に着きましたのは六月十二日で、モウ此頃は領事及び先任將校の評議に依つて、義和團の襲來に備ゆる爲め哨兵線を張つて居留地周囲に哨兵を設置する事」と決して居て、天津に入るや、直ちに佛租界と正金銀行支店の前方に當る約二丁半ばかりの區域内にて、哨兵線を張る事に決したのであります、故に菅大尉(文三)は自分の中隊本部(陸戦隊)から中隊(云々)は領事館に置き、時々同所に參つて、武光少尉福田少尉等を指揮して戦つたり、又領事館へ歸つて戦況を報告したりして、晝夜少しも怠りなく御熱心に軍務を勵んで居られるのであります、然るに十八日の早朝の事、大尉は島村大佐の許に來り「大佐殿今日も亦敵は烈しく襲來しさうでありますな」島村大佐「ム、相變らず來るぢやらう、併しモウ不日に救援隊が着くぢやらうから、こゝ一兩日の辛抱ぢや」菅大尉「ハイもう太沽砲臺は取れたてであります、援軍は不日に來るは來ませうが、何しろ我が日本兵は少數ですから、十分に腕を奮ふ事の出來ないのが、何より残念であります」島村大佐、夫はお互ひに残念ぢやが、併し各國皆日本陸戦隊の働き振を見て感心して居るやうぢや、昨日の戦ひに其の大尉が日本兵の勇敢なのを見て、日本人は軀軀の短小なのに、如何して彼箇に勇猛ぢやらう、あれは思ふに膽力が大きいぢやらうと云つて、顔りと賞て居たげな、まア何しろ日本の名譽ぢやから喜ぶ



《三十一》

「が可い」と被仰つて慰めたら、菅大尉はさも嬉しうに莞爾と笑つても喜びになつて、爾して出で行かれたさうですが、此の笑顔が島村大佐殿と御訣別の笑顔だつたさうであり升

大尉は領事館を出て見ると、停車場の方に當つてポン／＼バラ／＼烈しく銃聲が聞えるので、殆んど駈足の歩調を以て武光少尉の舎營して居る三井物産會社支店の所々に到りますと、少尉は「中隊長殿、今清兵が四五百米突前方に潜伏して居ると云ふ報知がありましたから、是から行って撃退しようと思ひますが」大尉「ム、宜しかろう、自分も行かう」と言つて、武光少尉に小隊を率ゐさせ、自分は其後から勇み進んで行かれたさうである、スルと白河の向側に山の如くに積んである鹽置場の蔭から、敵は烈しく撃ち出したのであります、此の白河の左岸にある鹽と云つたら中々大變なもので、長さ殆んど一里ばかりの間、家根位の高さに積んであつて、其の形は浪の如く高低して居るのである、それ以上にアンペラの如きものが掩蔽になつてゐる所もあるが、まア多くは何も掛けてない、遠くから見れば宛然雪の降り積りたる如くである、それで雨が降つても少しも溶けない、さうであるが思ふに日本の鹽とは餘程性質が違ふだらう、手に取つて見るとザラ／＼として砂を掴む様で、舐めて見たら其の鹽辛さ事日本の鹽よりモツとツツと甚く苦辣いのである、サア斯ういふ鹽山の蔭から撃出したのだから、味方に取つては頗る不利である、そののみならず、我が兵は地點が狭くて思ふやうに展開することが出来ないから、止むを得ず兵を四列横隊となしたが、敵の愚狀が能く分らないゆゑ、菅中隊長は「待て／＼、無暗に打つては不可ん、此方が打たずに居れば、彼奴等は屹と澤山出て来る、十分誘ひ出して近附けて置いて打つ、貴重な弾だ、成るだけ節儉せんけりや不可んまア暫く見て

居れ／＼、見物も中々愉快なものぢや」と是が眼前に敵を叩へながら、悠然として言放つた大尉の言葉である、大尉は満面に笑を含み、長劍を掲げて戦列を濶歩して居る、其の有様は實に古英雄の風があつたと此時戰場に臨んだ須摩の水兵諸君は黒猿へお話になりました、大尉は又もや双眼鏡を把つて柳の樹の前に進み、脊を柳に寄せ掛けつゝ、屹と向岸を御覽になり「モウ、そろ／＼出て来ようぢやア、ム、出て来るぞ／＼、能く狙つて撃つて、やア皆馬鹿面をして居るワイ」と云つて左の手に例の如く長劍の柄を握り、右の手で眼鏡を取つて笑ひつゝ見て居る武光少尉は、中隊長殿の身を氣遣ひ「大尉殿、弾が大分来ますから少しも退きになりましては如何で」と云つたら大尉は「ム、大分来る様ぢや、ナニ幾等来てもチャン的銃丸ぢやもの、アハ、ハ、ハ、」と高く笑つて「可しそろ／＼撃出せよ」と軽く言れたさうだ、武光少尉は大尉の命令に従つて今や將に一齊射撃を令せんとする一刹那、ヒューツと風を切つて飛來つた一丸は、菅大尉の前額を射貫いて頭の頂邊へ抜けた、何かは以て堪るべき「残念ツ」と叫んで背中を柳に當てたなり、ドン／＼ト尻餅を搦いた、武光少尉は駈寄つて抱き起しながら「大尉殿／＼」と呼ぶと、大尉は苦しみながらも「ウ、打つ、ウ、打つ」と幽かな聲で未だ號令を掛け居る、武光少尉は切齒をなし「残念ぢや／＼、コラ大尉殿が臨終の際の御命令ぢやぞ、シ、確乎打テツ」と叫んだ、嗚呼武光少尉が此一言の號令には千萬無量の意味を含んで居るのである、部下の兵士は此の状態に驚き悲むと雖ども、勇氣は決して挫けない、却つて奮然として「あのれツ、中隊長殿の仇敵、一人残らず殺してやれツ」と今まで耐へて耐へて撃出さずに居た村田銃、武光小隊長が大尉の死を悲んで瀧み瀧みなる號令の下に、切つて放つた一齊射撃、何かは以て堪るべき、敵は一支へも支へ得せず、見苦しくもバラ／＼と逃げて了つたが、間もなく菅大尉は擔架に乗せられて領事館へ送られて参りました、島村大佐は領事館の二階に居るを水兵が登つて来て「大佐殿、菅大



尉殿が重傷を負ふて送られて来たした。『島村』サニ、昔が重傷をツツと驚いて二階から駈下りて御覧になると、最早や人事を辨じない、爾も前額から腦蓋骨を打貫いてゐる、大佐は癡平と大尉の面を御見詰になり、『菅大尉、名譽ぢやぞ』と言れた切り兩眼を閉ぢられたさうである、それは大佐とて同じ人類だもの、部下の士官、爾も日頃最も信用されて居る菅大尉が今面前に此の有様、是が如何して悲すずに居られませう、英雄は却つて涙脆きものである、大佐の心緒は亂れて宛かも糸の如くであつたらう、なれども身は天晴帝國の軍人として、須磨艦の艦長として、爾も帝國陸戰隊の總司令官として、衆人の前にあれば、險に一滴の涙も堪へず、唯黙して愁然たる哀容は、殊さらに傷ましいのであつたさうだ、菅大尉の傳記は戰爭當時の諸新聞へ載せてあつたから、今此所では演べませんが、非常な御孝心であつて、御兩親を御大切にされた事は中々通常の人の及ぶ所でなかつたさうであります、六月十四日即ち大尉が名譽の御戦死を遂げらるゝ四日前に、天津から御兩親へ送られた書面を見ると、其の御氣象の如何に快活勇壯にして、御孝心に深きかを知るに足りず、其の御書面の終りに

結局は如何に相成候やら偏へに外交家の腕に有之事なるが須磨艦歸朝の如きは今日の所に於て判然は致さず候も可成は北京入城の後に於て招還を受度ものと希望罷在候就ては御病中のお母上には御心に御掛け遊ばされず候様父上様よりよく御話し置被成下度偏へに御願申置候云々

サテ間もなく息を引取られました、是に次て又負傷者を三名擔ぎ込んで参りました、領事館にては負傷者收容の準備が十分整ひて居ないから、急に負傷者を擔ぎ込まれて、其の混雑は名状すべからざるほどである、先づ取敢へず入口の左方にある内廊下を治療所にして、其の隣りにある部屋を病室に先て、其所へ負傷者を收容する事になつたが、幸ひに疊を布てゐる、日本風の寢室が幾個もある夫を負傷者の寢室にしたのは

大に便利であつて、此の負傷者が互に相親しむの情は又た格別なもので、その人々は須磨の三等兵曹田中榮造君、同艦の二等水兵泥谷今朝松君、同四等水兵郡辰五郎君の三人であるが、皆正金銀行に合營して居ても、氣性は確かです兵曹「オイ郡、泥谷、如何ぢや貴様等の傷は兵曹「我々は左程ではありませんが、兵曹殿は如何でいます兵曹「己か、己も左程ではない兵曹「併し兵曹殿は砲術の名人で居るのに陸戦で負傷されたのは、定めて残念でいます兵曹「ム、能く云つて呉れた、己も陸戦で負傷したのが何より残念ぢや、殊に己が残念なのはチャンの彈丸に當つて不具になるのが何より口惜しい、如何せ、己は皇國の爲に命を捨てるのは、軍人となつた其當時早く己に覺悟したが、己は他日露國と戦ふ時に其の海戦で日頃訓練の腕を充分見せて死にたかつた、怨重なる露の軍船を打沈めて置いて死にたかつた、ア、口惜しい兵曹「兵曹殿、露國と我軍とは如何せ一度は行きませうね兵曹「そりやア貴様、早晚必ず行らなくてはならぬぢやないか、貴様等も知る如く廿七八年の役に、我が日本國民が幾多の人を殺し、幾多の人を傷け、血を流し財を費して取つた遼東半島を、彼等は彼等の慣用する狡猾的手段を以て、樹取りをしてアツたてはないか、彼等は我が日本帝國を馬鹿にしたぢやないか、我日本國は彼等の爲に云ふべからざる耻辱を受けたぢやないか、畏れ多き事なれども、其當時の陛下の教諭を想像し奉れば、我々日本國民たるもの腸も裂ける様な思ひがするぢやないか己は實に教諭を察し上げた奉る』と田中兵曹は勤王愛國の志し最も深き軍人であるから、ボロ／＼涙を流して、熱心の餘り傷所の痛みも打忘れて説かるので、二水兵も大いに感して共に涙にかきくれたさうである、ア、皆是れ須磨艦の乗組員であるが、艦長島村大佐其人にして此の部下あり、實に我日本帝國海軍の美談であります、サテ領事館に於ては又もや御會議をお開きになりました時、小粟代議士は先づ水兵の忠勇を譽めて



云ふには吾輩は始め海軍の陸戦隊を河童が陸へ揚つたも同様かと思つて居たが、實地を見ると恐れ入つたもので、列國軍と一所になつて敵と戦ふ所を見るに、我が日本陸戦隊は何時も最先に進んで、外國人に舌を捲かした有様は實に勇敢なものにて、日本の名譽を揚げました吾輩、幸ひにして一命が助かつて國へ無事に歸ることを得た日には、十分日本海軍の進歩した事を國民に吹聴させよう』と云ふと島村大佐が『小栗君の云ふ如く、日本の人は是まで比較的軍事思想に乏しくて、海軍の事などは全然知らぬ人が多いから困るのぢや、小栗君は我が海兵の實地の働きを見て、始めて其實力の進歩を知つたと云れるが、眞に爾うぢやらう、小栗君の如き衆議院議員にして、社會の上流に位する人でさへ爾うぢやから、多數の國民は其善である、我國柄として如何しても海軍と云ふものが主働の武力たればならぬのである、是は地形上から論じても識者を俟たずして明かなことであるが、憾むべきは古き應神天皇の御宇より、陸を親しみ海を疎んじ、内を尊み外を卑しむを以て本旨となす所の漢學が入來つて、それが深く人の心に浸込んだのと、モウツは徳川幕府二百有餘年間の鎖國政略とは、我が海國民をして軍事に産業に陸あることを知つて海ある事を知らず、即ち海軍よりも陸軍商工業より農業に戀々たらしめだのである、爲めに開國以來已に五十年に垂んとする今日、尙未だ始息にも陸軍を以て主働の兵力とし、天賦に背いた事をして居るのである……イヤ是は長たらしい演説めいた事を言出して失敬ぢやつたが、何卒我が日本國民の海事思想を養成したいものぢや』と被仰つて、斯る激戦の中にも日頃の所懐を循々としてお述べになるのは、實に大膽なものです時に鄭領事は一同に向ひ『諸君、今領事館に居る人人を數へましたら、婦人と小兒を除いて、館員と居留人とで五十二名あります、勿論軍人は別にして、それで此の五十四人を四組に分けて一組を十三名とし、是を三時間づゝの交代にて巡回、庶務等の任務に當ることに定めたいと思ふ、そうして一組だけは順番に休息すると云ふ事にした

い、諸君の御意見は如何です』と云ふと、一同無論賛成をなさいました、そう決したのである、巡回は云ふまでもなく銃を肩にして、夜中でもないでも始終怠りなく領事館の内外を巡つて警戒を嚴にし、庶務は糧食其他の種々なる事を取扱ひ、看護は瀧子夫人がなさると雄々しく被仰るが、婦人ばかりでは進む行り切れないから、男兒が爲す事になつたです、特志の友人達は、看護の番でなく休息の時でも御親切に手厚く看病してぢやんなさいます其人々は國聞報館の西村博君、安藤虎雄君、有信銀行の牧原一郎君、西時雄君、依田伊三次君、小村俊太郎君、代議士小栗貞雄君等の人々でありまして、眞に御親切なものです、負傷者も氣の毒に思ふと見えて『如何も貴君方お氣の毒です、我々の汚穢物まで掃除をして、萬事萬端お世話なすつて下さるとは、我々に取ては眞に有難いですが、併し定めし御迷惑をムいませう』者『如何して』決して迷惑所ではない、我々は又國家の爲に負傷した名譽の負傷者を看護するのは、願つても出来ない事だ、我々は好んでするのでから、決して氣の毒だなどと思つて遠慮し玉ふな』爾う被仰られると痛み入りますなア、ア、實は先刻から大便が出たのですが、便所へ行くに足が痛んで……』人『好しく、虎子を持つて來て遣るから待つて居玉へ』と云て虎子を持つて参りまして『さア、僕が體を憐れ抱いてるから寛々やり玉へ』有難う、貴君方堂々たる衆議院議員方や、立派な學者方に此様御世話までして戴いては濟みませんなア』人『ナニ濟まん事があるものか、前に言ふ通りだ、決して遠慮はない、爾遠慮するから不可ん、ドンドン威張てやり玉へ』併し臭いでせう』人『なアに、臭かアない、ム、國家に忠義を盡した人達の何だから、臭い所か、好い香だ、ム、宛も麝香の様な薫りがするよ』と云ふと傷兵は笑ふ、其笑ふ間も苦を忘れさせやうと云ふ看護する人達の御親切は又格別なものでムいます、茲に日本領事館だけの籠城の有様を一寸演べますれば、館内にある限りの麥酒又は正宗などの空壇を集めて、是へ水を入れて、四方の塀(煉瓦)